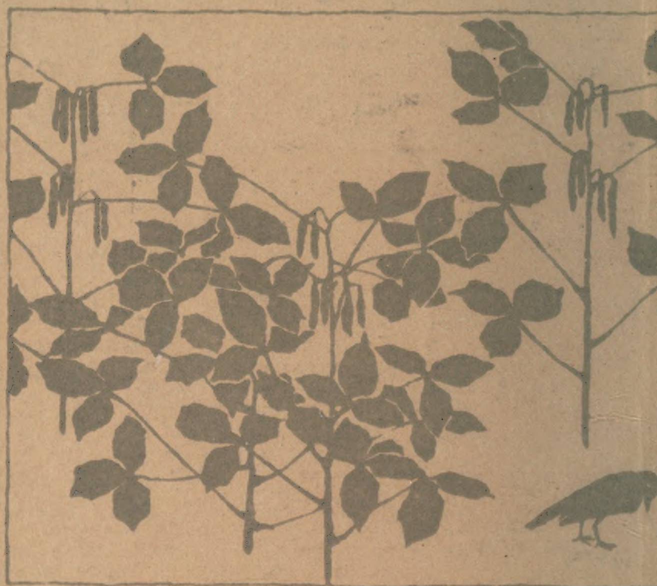
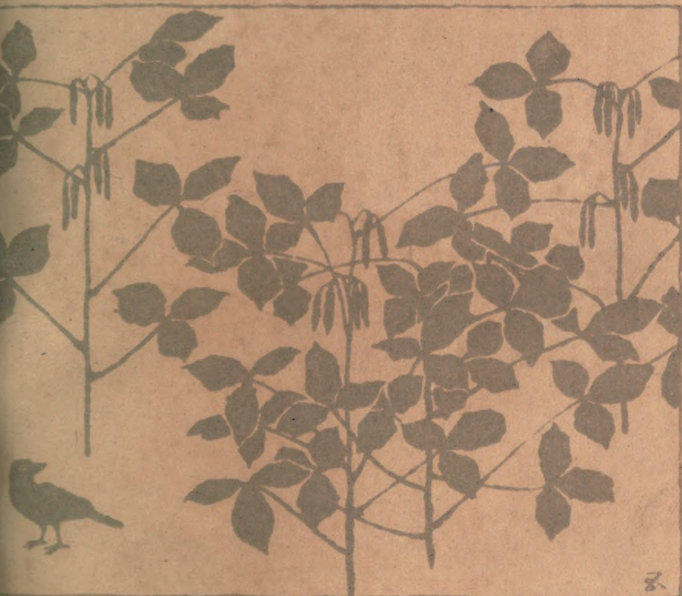

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03042 9096







（岡山製本）

大正四年七月二十日印刷
大正四年七月廿三日發行

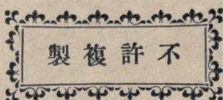
有朋堂文庫
八文字舍本五種（非賣品）

東京市神田區錦町一丁目十九番地
編輯兼發行者　三浦理

東京市本所區番場町四番地
印刷者　平井登

東京市本所區番場町四番地
印刷所　凸版印刷株式會社分工場

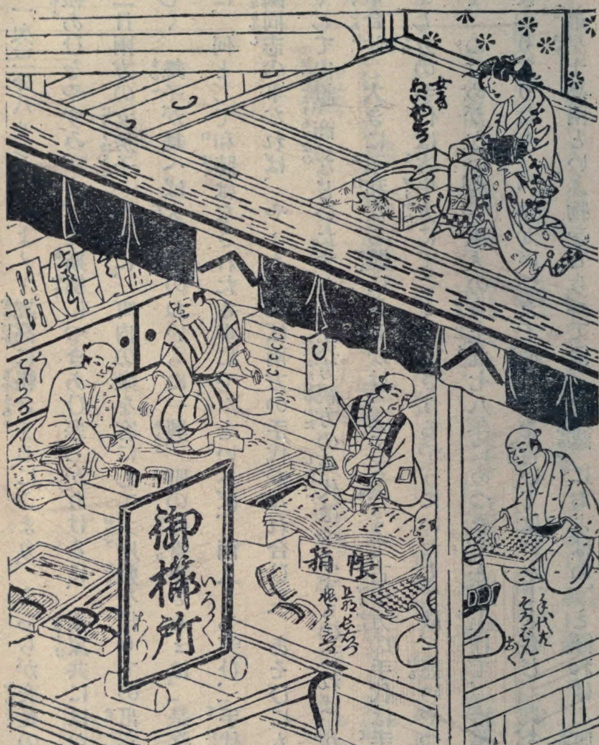
東京市神田區錦町一丁目十九番地
發行所　有朋堂書店



八文字舍本五種　終

共いづれもよこ手を打つて感じ入りけり。これより兩家次第ににぎはひ、藏に藏をたてならべ、隣同志の兩長者、櫛の齒のほそき商も、商人は仕廻しひとつにて、兩家ともに家名をあらため、子供にゆづりて長右衛門方は大黒屋の槌右衛門、古牛方は戎屋の鯛兵衛とて寶をうち出すと、金をつり寄するとに隙なし。只今もつぱら繁昌いたす」由、五郎丸申上げられければ、君御感なゝめならず。よはひは長き鶴が岡光をみがく鎌倉の、をさまる時を祝せし話談、いづれも御褒美くだされて、御簾ふかく入り給へば、いさみよろこび退出ある、春心こそ目出度けれ。

「八匁六分五リン十一匁三分八リン」といよ〱嵩高に帳合するにこまり、こちらが夜食の段になれば、あちらも帳あひをやすみ、すべて斯様につきあひ悪しかりけるに、兩家共にはかに中直りして、當正月二日兩方の女房子一門共に、町内の衆を客にして大座敷を借りての出ぶるまひ、酒宴おびたゞしく、舞子が舞へば大鼓笛のねいらぬ一興、町の年寄申さるゝは、「是迄ほど互に中の悪かりしに、何として和睦はなされたる事にや」といへば、兩人うち笑ひ、「手代おほくつかふ身上に、隣同志の事なれば、やゝもすれば兩方の手代がなれ合ひて、あそびにもまゐり、また主人にかくして内證商などいたすから、大方親方の身代はつぶすものなれば、かねて古牛と此長右衛門申合せ、大きに不和なる體に見せかけ、そしり合うて古牛方の手代は手前にてこゝろみ、わたくし方の手代は古牛方にてこゝろみさするやうにいたしした故、悪いやつとよひものが段〱知れて、ぬけめがない故、兩人の身上此七八年にめつきりと仕上げて、拾萬兩以上の身上と、互にまかりなりたり。いつがいつまで面むきを背いてはいかゞと存じ、只今うちあけてお話し申す。最早十萬兩といふ物をとらへては、此謀におよばぬ」と語れば、町の者


御櫛所
帳箱



るに、火をすつて出會もうとく、兩方の女房も懇なりしが、そしり合ふを仕事のやうに疎みあひたる故、長右衛門方にて主人にうらみのある手代は、古牛が方へ來りて、腹一ぱい長右衛門身上をそしり、古牛かたの丁稚下女も氣にいらぬ事あれば、長右衛門かたへ行きて主を惡しくいふ事、下々にあるならひ、是は敎へても敎へとゞけがたき物にて、勿論兩方ともその下々のいふ、あへんどうにのりて譏りける程に、後は女房娘子までさし出て、隣同志をそしれども、下々のゆきゝする事は互にとゞめず。町中寄りて中直させんとすれども、「長右衛門がやうな重欲心な男と膝をくむが無念にござる」と得心せねば、又長右衛門が口をむしれば、「古牛とは何の事で御座りまするぞ。櫛屋ならば櫛屋相應の名を附いたがよい。中直の事は御免」と、いすの櫛より高くかぶりを振れば、町の年寄もせんかたなくてぞ過しける。或時古牛連歌の友達を會し、一順すみて裏うつりに及ぶころ、座敷の塀先は長右衛門が小座敷、「二匁壹分五厘、三匁貳分二厘五毛、拾六匁八分七匁壹分、しめて壹貫六百八拾六匁壹分五厘」と、十路盤おく音、しかも意地わるいかしましうおきたてるほどに、連歌のつきと成りて、執筆はり上げて句を吟ずる程、

ん」

三　連歌師の櫛商賣ひいてみる友達

「船は白象となりつゝ、白雲に打乘りて、西の空に行かれても、あとに金子を置いて行かれねば有がたからぬ利勝かな。今の世にも風雅とやらんになづみて、數代の櫛問屋しながら連歌師と成りたる古牛といへるは、生質優美にして、雪月花にのみ心ありて、商賣の筋はなはだ疎く、朝夕附句のさしあひぐしをのみくりて、少しにても風流な事をすきぐしなりけるが、次第に門弟ひろまり、名もたかく聞えし、隣に烏羽屋の長右衛門というて、同商賣なれども、是はまた風雅といふ事は貧乏になるまじなひの事かとおぼえて、渡世の軍配かしこく、櫛の齒をひく樣に手代をまはし、もたへにくい所をも幾度かもたへて、おして行く氣象、古牛とはうらはらにて、長右衛門は古牛が商賣中に、連歌師になつて何にすると笑へば、古牛は長右衛門が欲顏つよくゆかぬ身代をはつて通るは、氣のやめる業とあざけり、互に中惡しく、昔はをさな友達なりけ

じめ、諸國の出店同日に商をはじめけるに、たとへ能書の通りに蠅がとれてからが、金壹分に誰が買ふぞと沙汰もせねば、國々の手代どもせいて來て、「方々から蠅を取りよせ見世中へちらし、豆を其中へころばせて取らせて見せたらば、思ひつく事もやと、近在の牛馬おほき所へたのみ、蠅の二三石づつもいけ取にしてまきかけ、扨かの蠅とり豆を見世へ人の寄る時蒔いて見れ共、豆もはしり歩かねば蠅は其豆の上へあがりてぶう〳〵といふ聲、近所からは、あたきたない、人のいやがる蠅をわざ〳〵取寄せて町中へ飛びありき、不屆な商賣ぢやと腹たてゝつきあはねば、買人のないと人の惡み出したとに、身代跡へも先へも行かず、いかゞはせんと思ひける時、さすがは繪師の果とて、或寺の開帳に不動の繪像を見てよこ手を打ち、「明王でも火にやけてござれば、凡夫の內證に火のふるは無理でない」と發明して、本店出見世こと〴〵く仕まひ、大津へ宿がへして、鬼に衣瓢簞で鯰のぬらくらしたる世わたり、袷時にも裏につける木綿に事を缺き、古かたびらをつけて、是は袷かと思へばかたびら、かたびらかと見れば袷にて、どちらへも附かぬ物なればとて、前かどのすばりを思ひ出し、あはびらと名附けて著歩きしとな

こらず入れて、何でも大あたりの胸算用。そも〳〵此工夫といふは、四國には犬神といふ物ありて、犬に美食を見せながら數日くはせず、ころしたる靈をまつりて人につかす事とかや。それより思ひつけて、捕蠅虎一疋箱の内へ入れて、其中へ白豆二三十粒入れおき、かたく蓋をして置く時、彼はへとりぐも食物なき故、此豆を食はん〳〵とあせれども堅き物にて力およばず。日數ふるうちに蜘蛛は死するなり。其蜘蛛の一念その豆へいつて、此豆おのづから蠅を見れば、走りまはつて蠅にあたる。其氣にあたりたる蠅こと〴〵く死するなるべしと、工夫はして見たれども、ついにして見たる事もなく、肩から大見世のくはだて、其上やすく賣つては人の信仰がないと、一包にはひとり豆三粒入れて唐紙につゝみ、一流神法捕蠅豆、洛陽分德軒製と朱唐紙にておし、代金百疋、四つゝみ金壹兩とさだめ、家々になくてはかなはぬ物なれば、四十萬軒で拾萬兩とつもり、扨日本國中へひろめる段に成りては、金の置きどころあるべからずと、見まぐ〳〵に才覺して、借藏をすること八十三所、サアといふ段に成つては間にあふまじきと、世出さぬ先から金藏を借置く、藏しきおびたゝしき事にて、四月五日といふに、京の本居をは

下され樣な物でござれば、向後大看板をいだし、小山判官樣御免、須波利流繪所と、隨分世間へも臂をはりませうと、有がたうこそ存ずれ、よろしく御禮仰上げられ下さるべし」といへば、此侍もてあぐみて、「それは主人の名が出て迷惑な。無用のいたり」といふほど、「お大名よりくだされたる名、何の內證ですましませう」と合點せぬゆゑ、繪代は銀拾枚の約束なれども、段々付上げて金子三十兩にて、すばり流といふ看板を出さゝぬやうにあつかひて歸れば、茂信繪にては所詮渡世ゆきがたく、ちつとなりとも我かいた繪に批難いふ人あれば、夫をとりこにかゝつてねだり取にしける程に、身上めつきりと仕直し、殘髮に成つて狩野の分德と名をあらため、京へのぼり、繪は次にして蠅取豆の傳授といふ事を工夫仕出し、夏になれば大舖を張つて、かやうの物を沽るには舖附あしくては位がないと、奧の間まで見えすくやうに仕立て、金襖銀襖かざり立て、萬一此仕方手代などよりもれて、外に贋がつくまいものでもない、切角身共が三四年かゝつて枕をわつてあみ出したことを、人々に仕てとられてはたゝぬと、國々のこる所なく出店を出しける。此物入かぎりもなき事なれ共、すばりの格にて仕ためける金銀の

者が先月まかりこして御たのみ申したる所、出來たりとて昨日もたせつかはされし故、旦那へ披露いたせし所に、花鳥の繪いづれもまぎらはしく、牡丹の葉に芥子の花の咲いたもござり、芥子の葉に石竹の花のあるのも見えまする。其上アノ竹の繪にある鳥は、雀のやうにも見え雲雀の樣にも見えて、どちらへもかたづかぬ故、旦那もをかしがりまして、是はすばりといふ鳥でがなあらうと、いつその事に笑ひになつてはしまひましたれども、迷惑は拙者でござる。其許を上手かと存じて旦那へすゝめこんでの儀なれば、申譯これなし。あれ程の赤下手で、何とて仰山な名を號け、繪師で候と看板はうたれしぞ。すばりぢやと旦那が申されし時は、冷汗をかいた事でおぢやる。これによつて右の繪さし返し申す上は、繪代つかはすべき樣なし。以來をたしなみめされ」といへば、茂信すこしも驚かず、「わたくしの繪は、一段上を畫いた物でござりまする。世上でよい繪と申すは、みな繪の本意には叶ひませぬ。能の狂言などにても、よく似せて面白うするは、歌舞々々というてきらふ事で御座るを、御存じなければ是非なし。又雀と雲雀とをとりちがへるとて、すばりとおつけ下さるゝは、近頃もつて忝し。お大名より一流の名を

二　繪師の下手は襖に恥をかく山

結城の七郎朝まさ打笑ひ、「御物語おもしろくこそ存ずれ。某もひとつ話しつかまつり、御なぐさみにも致しませう。此まへ結城郡の内に、狩野茂信といふ繪師あり。是はそれなる工藤殿などの御一家、狩野介茂光の弟子にて、隨分と精を出し畫いてみても、兎角墨色さつぱりとゆかず。山をかけば枯木のやうになり、梅をかけば枝ぶり桃にまぎれて、こちからは掛物にさするつもりに、大かた立に畫いて朱印をおして人にやれども、先さまではもみくしやにして取つて置き、半紙なれば紙屑になりとなるにと、引裂いて棄てらるゝとも知らず、名からさきへ號いたる心から、自分には上手ぢやと心得て居れ共、畫名日々にひくかりけり。或時おもての方に案内して、歴々の侍、御目にかゝりたいとの儀、茂信、「これは〳〵先もつて御息才めでたく存じまする」といへば、件の侍、「御存じの通り、手前事は小山判官家來でござるが、旦那下屋敷を建てましたについて、近所の事ゆゑ御自分へふすまへ張る繪を、何なりともすなはち拙

座りませう。したが此御判の墨色をかんがへまするに、長命はなされぬ所がござる。是は五大力明王の法を修して邪氣をしりぞけたれば、長壽はおぼしめす儘」といふに、始すさまじうあうたる物ゆゑ、「しからば罷り歸つて主人へ申しきかせませうが、その御修法にはお物入などもある事か」と問ふに、「かるい事ですみまする。金子三百兩程ではとゝのひます」といふに、「大名のいのち、三百兩は論はござらぬ。さだめてお賴み申さるゝで御座らう」とて罷りかへりぬ。法印手を打つて、「サア何でもよい鳥がかゝつた。鴨のいり鳥でもして御客をもてなせ」とよろこべば、腰元ども酒の燗してもつて來るに、日扇船右衞門一圓合點ゆかず、「あれはどうして考へられし物ぞ」といへば、法印あざわらひ、「あれほどの侍が、我判なればこゝへ來て直に書くはずなるに、大事さうに挾箱へ入れて來たからは、主の判であらうと存じたれども、念のために向へなげて見たれば、主人の判故びつくりせしつらつき、そこへ附込んで、其上は辯舌次第の所」といへば、船右衞門も大笑して歸りし由、主人の與一物語にて承りたる」とぞ申されける。

い事が有つてまゐりし」との儀、すなはち玄關より通せば、腰もと共がうしろ帶長々と結びさげて、煙草盆御茶とはこぶ體たらく、かやうの渡世もかざりがおもと見えたる内に、件の侍、「外の儀でもおりない、書判が見てもらひましたい」と、はさん箱に入れさせ來りしを取出させ、奉書の紙に書きて、上を大直紙にてつゝみたるを出せり。法印是を手に取上げて、見てむかふへ投げすてゝ立ちければ、侍あわてゝ取納めける時、法印は手水して、「只今の御判いま一度是へ」と受取りおしいたゞき、「最前麁相にうけとりましたが、これはたいていの墨色ではございませぬ。高位高官さては大名の御判と見ました。御自分の判ならば、今日中に大名に御なりなさるゝ墨色」と、おしいたゞき〱敬へば、侍大きに肝をけし、「さて〱承りおよびしよりは不思議の御名人かな。何をかくしませうぞ、わたくし事は念井の大夫が家來でござるが、主人太夫儀近頃病氣おもく、さま〲に藥祈禱しるしなきゆゑ、書判を見せて來る樣にと申附けられましたれども、大名の判とあつては沙汰もいかゞぢやほどに、その方が判のやうにいたして見せて來いとの儀でござるに、おどろき入りましてこそござれ」といへば、「左樣で御

口辯舌にまかせトひける程に、運やつよかりけん、工面やよかりけん、門前に市を那須の與一家來日扇船右衞門とは、わかい時分より懇なるゆゑか、或時船右衞門法印方へたづねて久々にて對面して、「其方事は若い時よりかやうの事を知らぬといふ事は、それがしよく存じたり。何として俄にうらなひの名人にはなられたる事ぞ。尤三日向顔せざれば、其心はかりがたしとは申せ共、近頃もつて不審に存ずる」といへば、「御不審もつともにて候。第一賢い者がうらなひを頼みに來るものには有らず。釋迦でも孔子でも、たのむ心で此方の門口踏みこゆると否や、手前よりは五歩通りも阿房になるは知れた事なり。嫁取家屋敷もとむる事などのよい事は、あの方より氣色がちがうて、わつさりとして來るに、その外來るほどの人仕合よくて、うらなひを頼みに來るは一人もなきものなり。座敷へあがると否や、御自分にはよろしからぬ事にて御出と見請けたとかけるに、十人に十人ながらあたる物にて、それからはのりが來るゆゑ、いか樣にも問ひおとしてうらなふ事なり」といふ所へ、ものもう嚴重に、裏つけの上下著たる四十歳ばかりの侍、若黨二人道具持挾箱にて來り、「去方の家來で御座るが、ちとお頼み申した

一　山伏の墨色を見事な賴人

大江廣元すゝみ出でて、「おの〳〵先刻よりの話、すでに時をうつせり。我君にも御退屈あそばさるべし。今日の物語はこれまでにて然るべし」と申されければ、賴朝卿きこしめされ、「廣元申さるゝ條さる事なれ共、いまだ其方話を致さず、御所望」の由なりければ、謹んで、「御退屈さへなさられずば、はゞかりながら物語一つ仕るべし。これは各へ對して申す間、御聞候へ」と諸大名方へむかひて、「前かど拙者いまだ京都にまかりありし時分、名譽法印といふ山伏事の外はやり、生不動のやうに取沙汰いたしたる所、此法印のなりたちを尋ぬるに、最初は町人の手代なりしが、ふとしたる思ひつきにて浪人ぶんと立てて、侍にはなりしか共、差しつけぬ刀のとりさばき、よそへ行きて座敷へ直るにも、刀を拔くすべを知らず。是は芝居にては、大殿のお前も家老が刀をさいて行くを見て來て、拔かぬ物と心得しより、侍はつゝぱつてわるい物とおぼえ、人にすゝめ込まれて山伏となりけるが、修驗の道はもとより不案內なれども、

氣のきかぬ筆さきをかけ物とは

第三　連歌師の櫛商賣ひいてみる友達

はかりごとの不和は福貴のもとゐ
隣と隣の二人長者は鎌倉の繁昌競
研上げた千秋萬歳萬々歳

鎌倉

諸藝袖日記　巻之五

目録

第一　山伏の墨色を見事な頼人
閾をはひるからが手の下の在所あしらひ
能加減に問ひおこすが自然の功者
十二燈の上は鼻毛の延び次第の一封

第二　繪師の下手は襖に恥をかく山
狩野の分徳が捕蠅豆はたくみ過ぎた
舗つきあはせとかたびらの間を

別して病氣づかれぬ時の筆なれば、ふるひ氣がなうて、目出度物故、三千兩とも存ずれ共、只今の事なれば、思ひ切つて千五百兩に賣りたうござる」との儀、先請取つて、出入の表具屋をよんで直打させみれば、「いかにしても念の入りたる紙でござりまする。金泥と砂子にも金壹兩が所はござれ共、瑾物でござれば、墨が拔けませう物ならば壹歩位は致しませう。あつたら紙に物が書いて有つて氣毒な」といふ故、三左衛門もほつとしてゐる内に、一角見せて置いたる先から、「此鯨の蟬骨は、錢で廿八文ならば貰ひたうござる」と言うてきたるに返答なく、二色ながら左平次方へ持つて行き、「世界の者が皆盲で埒が明きませぬ」と云うて戻せば、左平次は佛書も少し讀たる人にや、「エヽ緣なき衆生は度しがたきぢやナア」というて濟んだる由承りし」と申されける。

ました時見ましたが、さる法華寺の石塔の内に、亡者の戒名のわきに、保元元年三月吉日と書いてござつた。其當座には、死んだ日を吉日とはめつたな書様ぢやとをかしう存じましたが、世にない物が重寶ならば、是を船廻しにて取寄せて、茶人の庭かざりに致したらばよう御座りませう。又難波天神の近所に、產前產後の藥といふ看板を、しかも能い手にて、彦前彦後の藥とあつたかと覺えました。是を待合の額に掛けたいた物で御座る」と、扨一角をあづかり、「正眞の證據は、水へけづりて入るれば、きり〳〵と廻ひまする」と、熊膽と取ちがへたる挨拶にて賣りつけて見るに、正眞のうにかうる、三四十双にては何程も有る由、藥屋どもが邪魔に成りて、百五拾目にも賣れねば、三貫六百目よりはまけぬといふ物を、さながら其樣には言はれず、「まづそれは其分にしておいて、外に何ぞよい物は御座らぬか」といへば、左平次つゞらより卷物取出し、「是は小野の道風の筆にまぎれなき故、古筆所二三人へも見せたれば、御家やうぢやと申して、極札を出しませぬ、古筆目利も當にならぬものでござるは。是は小野の道風の中風せられぬ以前に書かれた物でござる。中風より後の物計取あつかひつけて、片手打な事計申す。





三貫六百目が所」と見すれば、三左衛門ついに一角をみたる事もなく相場も知らねば、「象牙に似てちと色にあぶらの見ゆる物ぢやが、さて〳〵高直な物でござる」と取まはして見、「わたくし肝煎て賣つて進じませう」といへば、「是を賣つてさへ下されば、御禮として古筆共見えず、新筆共見えぬ狀が一通ござる、掛物になされたらば隨分やすう取つて、金でならば十七八兩、銀でならば壹貫目あまりが所はたしかに御座る、是を進じませう」と取出すを見れば、煤けたれ共、文字あきらかに王羲之とあり。是は結構な物といたゞき、猶奧をひらいて見れば、「平野屋の七兵衞これをうつす」と書いてあるにぞ、三左衛門も力をおとしければ、左平次眼玉をむいて、「ハテ扨貴樣には道具のすぢが不案内と見えました。王羲之が筆は又も世にあるべし。平野屋の七兵衞といふ古筆はついに古筆鑑にも載らず、聞きおよんだる事もないに、此樣な惡筆で、此結構な紙に王羲之の書かれた物をうつして置くといふのぶとい所は、又と有るまじき名物。すべて道具は世に稀なるを以て重寶とするにあらずや。嫌ならばよしにめされ」と腹をたつるゆゑ、いへばさうでもあるかと、三左衛門慇懃にあやまり入り、「先年越前の敦賀へまゐり

より思ひまうけたる事なれ共、梶原殿は聞ゆる馬乘、既に乘り勝たれさうな所を、馬のはるびがのび候、鞍かへされて怪我あるなと、たばかつて乘りかつたり。其今御はなしなさるゝ遠江屋の清六が樣なるものに、前かたに近附にも成りたらば、鎌倉をたゝぬ内に梶原殿へ入りこませ置いて、サア今日が宇治川といふ朝、梶原殿出かけらるゝ所へ御見廻申させ、長噺をさせて、京から難波へ行くに船から河内が見えまする、それについて河内の山のうしろは大和でござりますと、わき道へかゝる内に、先陣をすまして仕まはうがよい道理ぢやものを」と笑はれければ、堀藤次まかり出でて、「夫でちやうど思ひあたつた事がござりまする。拙者が存じた浪人に高楊枝左平次と申すがござるが、手習子を取つても六七人に過ぎず、ありつくべきいひ立は大食朝寢、すこしづつ療治して、自分に風でもひけば、手療治の藥煎じかくる所へ、鹿谷三左衞門といふ友達が來て、「御自身の藥をまるるは、自害を被成るゝ道理でこざるに、御無用」といへば、笑ひながら、「今時身共ほどに道具の目利するものは又外にござらぬ。それゆゑ方々から頼みにまるる」と、一角の根附を出し、かけ目三匁七分あり、千貳百雙がへにまけて、およそ

とは言はぬやうに成りましてござる。それゆゑ次第に金がたまりまして、皆よろこんで下され いは、去冬も仕まひしまうて、銀が貳貫三百貳拾三匁貳分五厘のこりました。其外に一歩も三つか、錢も四貫八百廿一文かのびに成りました。是と申すも亭主の發明と不發明とでちがふ所でござる。かやうに申してもいづれも噓であらうかと思しめせばわるい、ちよと歸つて金を取つて來て見せませうか」と、是は又身上を持自慢なれ共、「夜中と申し餘程間もござるに、誰疑ふものは御座らぬ。ひらに御無用」と止めけるとなん。されば唐土の孟嘗君といへる人は、一藝さへあれば、いか樣なる輕き藝にても、お客分とて格式よくあひしらひ、扶持して置かれしゆゑ、函谷の關を通る時、鷄の鳴く眞似をする者、召連れし内にありて、高き木へのぼり一聲鳴きければ、誠の庭鳥も聲々啼きつたへて、關をあけよるゆゑ、あとより追手のかゝらぬ内に、なんなく關をのがれ通られしとかや。此ともがらの自慢はのけおいて、召しかゝへ置かば、何ぞの用には立つべき者共なり」とぞ語られける。左の座にひかへたる佐々木の高綱横手を打つて、「扨々左樣な者共の有るといふ事を存じたらば、宇治川の先陣はかねて鎌倉を立ちける時

くしが心をつくして彫りました。ナンと今の世にもわたくし程の名人の出來るは不思議では御座らぬか。昔から日本に三人とは御座らぬ」といふ故、ほかから褒めたうても、其のほめやうなく、又「左樣に自身に御ほめなさるゝ人も、むかしから多くはござるまい」といへば、遠江屋の清六取つて見て、「見事々々、扨是には大事がござる。わたくしの古主景淸申附けられまして、六波羅後藤にほらされましたと同じ形でござる。卒爾ながら御脇指の身を見ませう」とすこし拔きかけ、「あつぱれ見事、これは備前物と見ました。もしは澤瀉守光ではござらぬか」といへば、「驚き入りました。其子の嶺光でござる」といふに、淸六一座へ、「何とお聞きなれたか。鯉口を放すかはなさぬで見わくる事はならぬ事でござる。自體わたくしを芝居茶屋させて置くは惜い事ぢやと申すけにござる」との詞に、其座に居あはせし笹屋の平七といへる茶器商人こらへかねて、「外の鋪で三分に沽る茶杓も、手前の鋪では貳匁づつにはゆきます。それをなぜにといふに、手前が店へさへ出てゐれば、口上に感じ、ひとつは手前が人品のよいのに恥ぢて、まけよ

中まじくら話しあかすに、藏之丞我がさいて來りし脇指の小柄を人々に見せて、「此木柄をわた

三　細工の上手自慢を謂ひ勝ちの座敷

「只今土肥殿の仰せらるゝ通り、醫術にかぎらず、過不及があつて、よい加減と申すがすくない物でござる」と、畠山の重忠語られけるは、「此まへ拙者在所秩夫にて、能芝居などのありし時分、芝居茶屋に遠江屋の清六と聞えしは、元來平家の侍大將惡七兵衛景清が家老なりしが、前かど隙を取つて後、二君に仕へずと、一向身をおとして、今の商賣なれ共自然と男つき侍めきて色白く、二割丁錢の木戸の歩をわるにも、軍中兵粮四六の算を用ひたがり、鳥貝賣が腰かけて升つたをぶ躾者としかり、「ヤア始つた〳〵。今が上の出端はじまつた」といふ表木戸を、「扨々不作法な物のいひ樣、はじまりましてござる、只今が上の出端でござりまする、御來入なされませいというたがよい。男は詞が大事ぞ」と、理屈はつもる山鳥の尾の長口上も、昔をわすれぬ故なるべし。又その近所に、脇前藏之丞といふ彫物の上手ありて、我細工を自稱にする事、人の口をまたず。正月二十三夜待とて、松宇軒といふ茶人の所へまねかれ、五六輩女

らぎ、立居もなれ共、用心のため八百山菜安を呼べば、しりがるに飛んで來り、「おもくれた療治ではまゐるまい。たしなみに覺えてゐます程に、針一本いたして進ぜう」と、くわつちく〳〵打つはりの槌の音はよかりしが、此針引いてもしやくつても拔けねば、菜安せかるゝ程拔けず、外に一本たてゝ又たてたれば、それも拔けず。又一本たてゝ三本を一所に引いてみれば、病人こたへかねて、そろ〳〵色がはりがする故、內儀も手代も、「是は菜安殿、手前の旦那をば何とめさるゝ」と、ちと詞に角を立つれば、菜安すこしもせく氣色なく、「食椀一つと元結一把に、編笠杖錐一本出さるべし。拔きやうあり」との事ゆゑ、心得ずながらこれを出せば、菜安もつともらしく、飯の椀の兩はたを錐にてもみ、それへ元結を兩方より通し、よき加減に切つて、此椀を病人の腹なる針の上へおほひ、背中へ元結をまはしてむすび、扨立たせて帶をさせ、編笠をきせ杖をつかせければ、家內きもをつぶし、「是で針が拔けるとは合點が參らぬ」といへば、病人の手を引きて、「針を習うたる師匠の許へ拔きにもらひに行く。サアござれ」というたる由、話を承はつたる」と、土肥の次郎物語いたされける。





か打撲のいたみつよき故、「ヤレ此中引越してござつた醫者殿、近所ぢやに呼んで來い」と、北川佐仲をまねき、「打撲の藥を下されませい」といへば、しばらく考へ、「時是春分陽氣すゝんで滓陰しづむ」とひとり言いうて居るゆゑ、家内は「申し御醫者樣、八卦のやうな事仰せられませずと、うちみの藥」とせけば、病人は腰のつがひしたゝか打ちくぢきて痛みながら、醫者の高上ばるに負けまじきと、「毎日屋根へあがる事三十一度、四分度の一度もおちた事は御座りませぬに、いつも十二けたの梯子をさしまするに、手代共が取違へて、十三階の閏月の階子をかけました故、算用のあまる所を踏みはづしました。あいたゝゝ」といへば、佐仲脈をとりて、「皆の衆是見さつしやれい。いづれも當分の事とおぼしめさうが、此うちみは梯子をのぼしやれぬ先から催した事ぢや。是餘程むづかしひ症なれば、表療をしてはすむまい。内證から仕かけませう」と匕おつ取り、「七十八の難に曰く」といふを、手代共あきれはてゝ、「いかにもつたいを附けるとて、屋根から落ちたを、梯子のぼらぬ先からもよほした事とはあまりな事ぢや」病人を座敷へかいて行き、のまさぬ心で藥はもらうて歸しける内、おのづから痛みもやは

心で、綱目としておいた物さうなを、無理に讀まうとは皆のみこみ違と存ずる」と、賢さうにしやべれば、病家にて、「しからばお前は學問なしに御療治なされますか」といへば、「手前はいささか子細あつて、天竺にて釋迦如來の合醫者耆婆といへる名醫の、自筆の療治本を持つて居るゆゑ、中々學問におよばぬ。斯樣なものは拜んでおかれたがよい」と、藥箱より取出すを見れば、中條流の平假名の本なり。人々おどろき、「天竺では梵字と申すを用ひますると承りましたが、是はどういたした事でござる」と不審がれば、「その筈〳〵。これは耆婆の娘子へかたみに書いてやられた本ゆゑ假字でござる」と、につこり共せずいふに、興もあすも醒井どほり五條邊に、春雨屋の諸助といふかくれなき大酒屋の旦那、町人のいらざる事と、人のとむるをも用ひず、天文を見ならひ曆數を考へおぼえ、誰がいうてきかしたか、曆のはじめに書いてある玉の樣な物は世界の圖にて、世界も此世界を出て外から見れば、あの玉のやうなものに見ゆれ共、いづれも世界のうちに居るゆゑ、見えがたしと聞きて、何とぞ世界の外へ出て見たい物ぢやがと、毎日面屋の大屋根へあがつて空を考へ、踏みはづして飛石の上へどうと落ち、したゝ

今の療治は本草にうといの、萬病回春はあつちでのあまい療治本ぢやのと賣りかけてみる程、あのやうに理屈にかゝはらしやつては心もとないと呼人のないに、こちらからも行かれず。北白川は京を去る事まぢかき所なれども、學問ばかりではゆかぬ世上を知らぬ故なり。此機轉がなければ、薬もまはるべきにあらず。すこしの風にもさわぐ故、藪醫者と名のりかけても、のみてのあるが上手なるべし。おなじ町内に八百山栄安とて、醫道重寶記も讀めかね、薬師如來を信仰して、霍亂もはくらんとおぼえ、人がにはとりのたまごを鷄卵といふを聞きて、あひるのたまごは、あひるらんと言うて、仔細らしく病家での自慢には、「今時の醫者、學問のなんのといふ事を、近年こしらへ、本草綱目とやら申す書物を、あそこへもこゝへも寄合うて讀んでゐられます故、わたくしが若い時は、根からはやらなんだ物でござれども、見ておいたがよいと存じて、本屋で損料借にいたして取寄せましたれば、何やら御經の様な字をならべて、日本人の讀めぬ事ばかり、さらば繪の所を見ようと開いて見ましたが、あれはたしかあつちの植木屋か魚屋の手帳さうにござる。其上綱目と申すはめくらの事なれば、誰が讀んでも讀めぬといふ

探り、延喜式の典藥寮の篇を見ては、むかしつかひし藥物の眞僞、今日におよばざりし事を考へ、素問靈樞は漢儒の手に出たる物などと、高上なる論をたてゝ、拟なぐさみに近所の病人を診て藥をあたふるに、あなたは學者ぢやと藥より先へのみこむ故か、其しるしいちぢるく、はやる程に乘る程に、京中へ出て療治せんと、白川の屋敷三十八貫目に賣りはらひ、京都はどふぶくらの紗綾の小路廣町通上ル所に大玄關、朝脈は夜の内から取込むつもりにて、掛行燈もたしかなるを張りたて、代脉にありかせる心得にて、弟子三人六尺六人、腰元下女下男上下十八人、在所ではやつた格に京中から呼びに來ては、朝は五つに出で、晩は七つに歸り、暮れてからは急病の外は出まじきとのあらかじめにて、藥も大抵ではおはれんと、藥盤五面まで用意し、兩手のきざみ庖丁さへ五六本かざりたてゝ、今や呼びに來ると待てども、頼みませうの聲なく、たまく\かるい所から頼みに來ても、始めが大事ぞと、六枚肩で乘りちらして行くゆゑ、たいさうな醫者殿ぢやと後をこはがり、身を持つた家からは、飲みつけぬ藥は急にはのまぬ物ゆゑ、折角のつて出ても、淸水北野の繪馬はおろか、森の松の數、三年坂の石の數明細におぼえて、

るれば、「是は唐人口ではござりませぬ。おやぢ様も長崎へござつて、お聞きなされてごらうじませい」と、口ごたへして寢たる由。上方のあきんどが話しました」と、庵原左衛門語られける。

二　醫者は療治より詞の匕加減

「心肝腎肺脾迷惑なは、下手共知らで乘物とりんずの小袖をたのみに、飮むや否や腹内がうねくりまはつて、ヤレ藥毒を消すには大根のしほり汁がよいと、大根とりにやれば、手代がのみこみ過ぎて、蕎麥切ともにあつらへて來るもをかしかりき。爰にみやこ北白川に、廣文屋鋪といふ大借屋あり。是は賴光樣の御代に、それにござる加藤五殿の先祖、加藤兵衞殿の娘子をかどはしたれ共、かへつて加藤兵衞殿と中を直り、一家と成り申され、大切なる劍を賴光樣へさし上げたる仔細は、賴光樣大江山へ御出の時分の御日記に見えたる通りにて、その子孫へ大屋鋪を下され、子々孫々家賃とつて樂々とくらし、廣文五代目只今北川佐仲とて、身代何にくらき事なけれども、稟質いて療治をこのみ、本草の吟味にくはしく、比叡伊吹にわけいつて藥草を

皆唐音にて、夜食ひとつ出すも唐物ばかり買ひあつめ、しつぽくとやら申して、一つの鍋で煮た物を、そう〳〵が箸をいれて喰ひあひ、店にかけておく大福帳と書きたりし表書をも、招牌簿と書きあらため、どこの國にか御客様方買物取次帳といふを、海客買價錄と書いて、下に朱印をおしておくゆゑ、船人衆はもつたいない眞言寺の御札さうなが、帳の表紙には何として御かけなされたと拜む衆もござるに、その客衆を無文的の漢と、友達とさゝやいてあざける故、次第にさびしう成りて、氣毒に御座るが、惣じて狸狐のついたは、いのり加持でおつる事もあれ共、唐音つかうて、我居る日本を文盲な國ぢやなどと高ぶる樣なやまひは、大抵の事ではいえますまい」と、涙をながされける折節、夜もやゝ更けて四つの鐘のなる頃、隣の門口まで、いよやいや〳〵何のあなたがまけ給はん、ハア淨瑠璃があまつたれ共と、表をぐわら〳〵とあけて、はいる音はたしかに親共でござりまする。もうおいとま申しますると、太郎八かへりしに間もなく、いねんゆうこういねんちゆん。へついざいぢんぺついぢんと、歌うてもどるは忰めならんと、内へはいるや否や、「たきゞ問屋の分際で、唐人ことば聞きたうない」と叱ら

代此かなたの薪問屋ゆゑ、土佐阿波くまの方々より船がついて、荷主と申すは船人衆でござる。御覧の通り家藏も人にまけぬくらし、腰もとも七八人つかふ程の暮でござれども、女房や嫁が直に荷主衆へ給仕もする程にあいしらはねば、勝手な商も出來ず、むつかしいあしらひ致せば、はさみいつて逗留が窮屈になる故、問屋をかへて荷をつけられませぬ。それ故手まへの家では、むかしから茶湯ばなし歌ばなし、酒の上でも小うたひ、かたく法度にいたしおいて、もしや客がいれば、淨瑠璃の道行か、をどりくどきでなければまゐらず。そこもとの親御太郎右衞門殿を、こちの養子に致せば、大分客のつく事でござるに、氣毒なは忰八右衞門、すこしばかり論語のはしでもおぼえるといなや、詩をつくりならひ、禪坊達と出合ひ、あれがつきあひは撫つけか斬切か、まつすぐな頭は一人もなく、荷をおくる國々から便船してのぼる醫者や出家衆を見ると、詩をつくりかけ、即席の和韻をこふゆゑ、詩をつくる事のならぬ衆は、ふたたびこちの内へはいらず、たま〳〵和韻せらるゝ衆があれば、何やら口の内で、ふんくわんてるけやんちんなどと、ぼち〳〵言うてみて、是はうたはれぬと恥をかゝせ、友だちの寄合は

らぬか。サウ文盲では人づきあひも心もとない。そんな益にもたゝぬ事いふ手間で孝行を思ふならば、黒繻子を裏がへして縫ひたて、四寸五歩幅にして、眞には毛氈を入れた帶を一筋してくれい」と、羽織引かけ出かけられける故、いろ〲と氣のあうた浮氣おやぢどもを頼み、踊物眞似をわびごとしければ、「しからば年より相應に淨瑠璃に致さう」と、朝のよるから御いたはしや蟬丸は、何のむくいか浮世のやみにと、うがひしながらも語り、是もこうじて來て、床へ上つてやつて見たい心になり、養子聟にかくし、こちらから銀三百目出して、座摩の社内である稽古淨瑠璃へ毎日々々かよひ、二段目の切をうけ取つて語るたのしみ、入のない日は、此おやぢから錢壹貫文づつ出させて、おもての歩にわりつけ、出來かぬる宮地の人形芝居も、此おやぢにさへ語らすれば、肩に三十貫文がづつは取かへて出す故、銀本年太夫と呼んで重寶しけるを、養子聟とかく迷惑がり、隣の隱居入齋老へ、「おまへ樣は御實體なおやご樣で、さぞ御子息樣の安堵なさるゝで御座りませう」といへば、「イヤ〲苦は色かゆるでござる。手前はまた忰が實體すぎて商がうすく、代々の得意ものいて迷惑いたす。其子細と申すは、手前は四五

らひもえせず、面白かるべきやうもなくて、五年目か三年目には、えてはあのやうな理屈のくだらぬお客があるものぢやと、あきらめてほめて通せば、「茶屋でさへほめた。としまかりよつたれ共、男は隠藝がなうては恥かく物ぢや。マア十年も年が若ければ、此物眞似で、一座のおなご共もひた〳〵となびけて見せるに」といへば、茶屋の娘共が、「今でもぢやわいな」といふたは、たしかに曲ることばとは聞きながら、どこやら底心にかゝつて、そのあくる日より、七味匂齒みがきを買うて來て、六七枚のこりし齒をみがき、はげ果てゝなき鬢髪に、床髪結たのみて、かけがみをかけ、役者の襟後につてを求めて、かしらに塗る青黛のこしらへ方をならひて、をどり、物眞似で色をとる氣にて、めつきりと金をつかひ出し、夜どまり日どまり身上不相應のおごり一門一家もてあつかひ、たび〳〵異見しても得心せず。跡つぎの養子聟、太郎八もこまり入つて、「夫婦して金をおつかひ被成るゝ事は申しませぬが、おとしにこそよりました物なれ、せめて踊と物眞似はやめに爲されて下されませい。子供が門を通れば、踊孫共ぢやと人が指ざしいたしまする」と、しみ〴〵と口説けば、「不粋々々、雀は百に成つても踊わすれぬといふ詞を知

んくんばんもんつんてんこんいん、ひやろにうきやらいなど言うて暮し、朝から晩まで禪寺の念經聞くやうに、近所からも寢言の八右衞門と異名せらるゝほどなるに、其隣は紅屋の太郎右衞門と云うて、年つもつて七十三歲、おやまの鏡にうつる所を看板に出して、おやま紅屋と名だかく、身上もよしのうるしのかたい金の六七百兩もたくはへ、娘に養子聟取つて孫も二人、宗領孫にははや五つになる曾孫もあれば、一家一門の鹽土の翁とうやまはれながら、生れついて踊好にて、盆になれば白髮を塗り、若やぎ打ぞめいて、夜の明くるまで、そつこでせい、まかせてせいコレやあとなアをしやべり步き、町の參會に出ても、今時のわかい衆はをどりの手がのびぬ故、見ぐるしいとあざけり、いづれも酒がしゆんで仕舞小うたひが始まれば、「待つた待つた待たうぞ。わしは大和國源九郎が家來、青葉半之助、さいた刀は宇多の國宗、門をあけい。イヤあけいと言ふにあけぬか」と、扇をかざして聲はり上げ、大むかしの役者のせりふ、自身には似せると思はるれ共、四五十歲までの人は聞いた事もなく、ことに拔けたる齒よりすり〳〵いうて、きちがひが異見する樣で興をさませば、大茶屋にての參會なる故、仲居むすめ共はわ

一　淨瑠璃物眞似も年功のいひ立

「神樂歌は神代の古風をうたひ物にしたる物にて、深山にはあられふるらし外山なる、まさきの蔓長き御代をいはひたる物が、一轉して催馬樂となり、今樣朗詠しをり、萩の雅なる章韻も、變ればかはる物にて、信濃前司とかやが作りたる平家物語に節をつけて、望一といへる坂東座頭が、なまりちらして語り初めしより、ところ〴〵は喉につまるやうなるを、傳事とさだめ候ひけるぞやの、やの字辰巳あがりに、ひずみたる琵琶の撥音、ばらりん〳〵と、是を此世のたのしみと、かなりがけに食物のある隱居もあれば、萬日の大鉦うけ取りて、ぬわひだァの聲を自慢し、年よつても同じ年ばへな禪門たち四五人、稱名鉦はり講と名づけて、大きなるたゝき鉦を臺へかけて、クワン〳〵と調子にかけ、拍子をあらそふ仲間もあり。世はさま〴〵の内に、難波の北に大灘屋の入齋、あとめ八右衛門といへるは、年いまだ三十一二歳、いつの頃よりか唐音を稽古し、よき若衆を見ては好童子、よき女を見ては好女子、さんけんのんかんがん、よ

かなめ石とは違うてぬけぬがめいわく

第三　細工の上手は自慢を言勝の座敷

長口上をくりかへす平家さぶらひ
刀の目利と古筆のきはめ札は
大かたに鑓もたせた身のうへ

鎌倉

諸藝袖日記　卷之四

目錄

第一　淨瑠璃物眞似も年功のいひ立
踊の手拍子を内輪どしの異見
きかぬ異國のことば遣ちんぷん
かんじんの商賣をとらやあく
第二　醫者は療治より詞の匕加減
菩婆より娘へやられたる醫書は
かなはぬ醫者ぼんのうちばりとても

さけでござる」と泪をこぼせば、「只今ぶち放さんといきほひ切つたる僧傳も、あきれ果てゝ勢ぬけ、こなたもよい加減な事がよい。ふたしなみ人」といへば、「イヤ〳〵隨分夜夜中のこともある物と存じ、冬むきになれば晝はいたさねども、夜は寢どころ近所ははなしませぬ」と、まだ上塗をいふゆゑ、僧傳も愛想つきて、「こなたと仕合するは勝つても恥なれば、堪忍するではない、料簡していんで下され」といへば、大きに勇み立つて、「是もひとへに日比下帶せざる冥加にて、あまの命を拾ひし、また詞のかはらぬ内に」と逃げ歸り、それより子供を一間へまねきて、「子々孫々迄下帶いたすべからず。但夏も餘所へ行くときは、女のゆもじをば借つていたすべし。是すはといふ時、はたしあはぬ命の親にて、兵法の奥の手なり」と申傳へしとかや。何といづれも世上にはいろ〳〵の事の有るものでは御座りませぬか」イヅレモハヽヽハヽヽハヽヽヽヽ

ろは有つたものではない。ナゼこなたのやうな名武士のつはものを、浪人させて置く事ぞいの。さうおかゝりなされた、左の膝にも千石、右の手にも貳千石、ひつぱつて御座るおいきほひが三千石、しづんで油斷なされぬ所が四千石、おつ取つて一萬石やそこらは惜しうないお侍、當つてくだけいぢや、お心持もさぞ慈悲ぶかいでござりませう」と、じり〳〵あとじさりすれば、「是太郎兵衞殿、それは何事を仰せらるゝ事で御座るぞ。泣いても笑うても、もはやのがれぬ場ぢや。むだ事いはず共サアぶちかけませうか。拔かつしやろうか」とつめ寄るいきほひ、のがれつべうも見えざりければ、「もはや是非がない。然らば御相手にまかり成りませう。エヽ無念な、斯樣の事を存じたらば、覺悟して來ることがたつた一色あつた物を、油斷して口惜しい、かばねの後の恥ならん」と齒ぎしみする故、「打はたすは格別、御用意とは遠慮のない事、いか樣の事でござるぞ。書置ならば料紙硯を進じませうか」といへば、「イヤ〳〵左樣の筋ではござらぬ。只今敵味方となる中では、ちか頃無念千萬な儀でござれ共、今日は常の樣に存じて、下帶かゝずにまゐつた。打はたした跡の爲でもござる程に、洗ひがへを一筋借してくだされ。武士のな


兵法の師
兵法の師

に錠をおろし、「サア御聞きなさるゝ通り、手前覺悟はようござる。貴殿も一流の先生なれば、手前弟子大藤内が儀、よもや御存じないと申す事はござるまい。それはよし御知被成ても御知なされいでも、世上の風聞のがれがたければ、さしむかひの勝負を相待ちまかりありし上は、どう仰せられても今日はかへし申さぬにきはめ申した。サアそれからお打ちかけなさるゝか」と、刀をとりまはせば、太郎兵衛色がはりして胴はふるへ共、ゆすりであらうも知れぬものと、わざと強みを出して、「鑄刀も腰に挾むからは、今此場に成つて、たとへ知らぬ事でも知らぬとは申さぬ。身不肖ながらお相手にまかり成りませう」と刀とり上げ目釘食ひしめし、身づくろひすれ共、拔かば打込まんつらだましひ、ゆすりでない所あらはれたれば、にはかにぐんにやりと成つて、「よう料簡しても御覽じませい。先日互に申分のないとて別れしに、大藤内殿の事とやらは、わたくしゆめ〳〵存ぜず。それとも御堪忍のなりがたき筋もあらば、わたくし弟子の内吟味いたして、萬一大藤内殿へ指でもさいた者がござらば、早速人をつけて指こしませう程に、御存分になされませい。ハツアあつぱれ武士かな。さう居合腰になつて構へてござるとこ

びたひにぬき上げ、鬼神も拉ぐべきいかつさ、道行く人も見かへる風體、いかなる用事にてや、供をも連れず只一人、僧傳の門前とも知らず通りけるを、見つくると否や、是究竟の事よと、人を走らせ呼入れければ、「其邊にちかづきは持たぬが」といひながら、立歸りみれば、思ひがけなき僧傳、門口まで出でむかへ、「是へ」といふにびつくりしたれ共、今さら逃げられもせず。「久しう御目にかゝりませなんだ、御堅固で珍重に存ずる」と言ひすてゝ行かんとするを、「イヤ密々に御目にかゝらねばかなはぬ儀これあり」と、内へ招じ入れ座敷へ通し、女房妹などを呼び出し、「身どもことは只今太郎兵衛殿と打果して相果つる。尤太郎兵衛殿に遺恨あつての事にはあらねども、世上の取沙汰、是非におよばぬ場にいたつた。しかれば太郎兵衛殿は、名だかい劍術の名人、さだめて身が討たるゝであらう。もし運にかなひ、太郎兵衛殿を身が打つたり共、立退く料簡にはあらず、當座に切腹するなれば、手前一流花牛若之丞を妹にめあはせて相續すべし。武藝指南の身は、常が此覺悟なれば、今さらおどろくべからず。用はない程に、一人も覗くな」と次へやつて、相の戸に栓をさし、尻ざしをかためて庭に下り、露路の戸

て下されな」と鹽合よき時分、弟子もろ共立歸れば、「手前とても其通り」と、僧傳もわかれて宿所に歸りける。然るに誰いふともなく、朝霧が崎にて八幡太郎兵衛と鞍馬山僧傳と劍術の論あつて、太郎兵衛さん〴〵に負けたるといふ噂、鎌倉中に滿ちければ、太郎兵衛無念なる事と思ひ、安倍宗右衛門にいひわたし、大かた是は大藤内めが所爲なるべしとて、大藤内遊君あまたあげて、竹が谷の庵室へあそびに行きたる歸りを、二十人ばかり待伏して、いづれも目ばかり出づる黒き巾頭にて、遊君もろ共くらがりまぎれにばた〳〵と取りこめ、たゝくやら踏むやら、這々の日にあはせて歸り、僧傳が弟子を太郎兵衛門弟が大きなめにあはせたと、かくれなく取はやしければ、堪忍なりがたき事なれ共、時節もこそあらめと、僧傳せかず見合せ居ける内に、日々此沙汰やまざりければ、最早是非におよばぬ場なり、さりながら兩方の弟子がまじはり居ては、それがしと太郎兵衛、直に勝負に妨やあるべき、何卒只兩人余の人まぜずに立合ひ、眞劍の上にて、いづれが勝れたるを極むれば、弟子中の面目なるべしと覺悟をきはめ、よい場もあれかしと待つとは知らず、太郎兵衛太刀作の大小ぼつ込み、大島の茶字の騎袴、とうけん

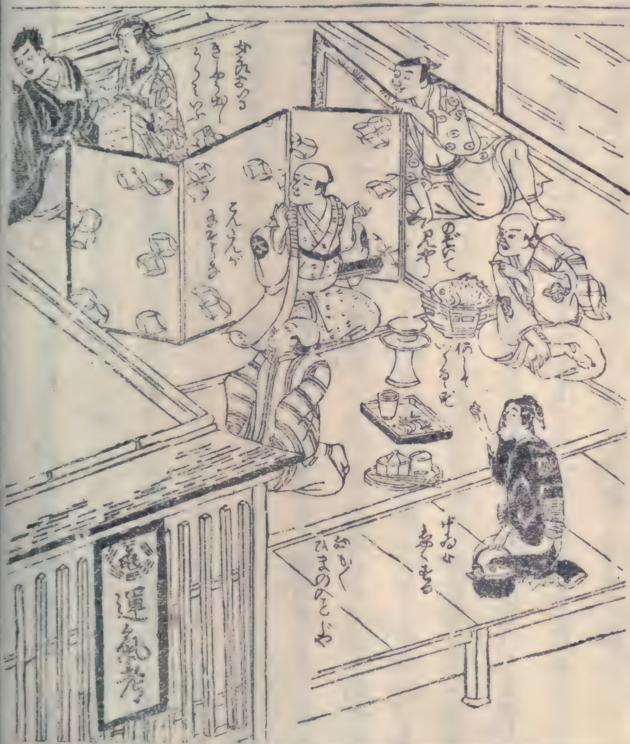
る劒術者住みけり。ある時八幡太郎兵衛弟子二三人つれだち、朝霧が崎へ小竹筒などもたせ、毛氈しかせて樂みの最中、鞍馬山僧傳も弟子すこしいざなひ、是も海邊見物の心にて出でけるが、僧傳弟子に花牛若之丞といふ十七八なる男と、八幡太郎兵衛弟子の安倍の宗右衛門ちかづきにて、目禮しけるが緣となつて、僧傳と太郎兵衛ちかづきに成り、互に盃事などしける。然るに僧傳弟子備前の禰宜大藤内といふ男、ちと遠慮のない生れ付にて、「太郎兵衛殿御弟子あまたあれども、手前師匠が弟子數には及ぶべからず」と、いらざる廣言が物いひの始となり、兩方の弟子たがひに流儀の論におよび、すでに立合うて仕合をもさせねばならぬ所を、僧傳物ごとに無骨ならぬもの故、よきに取りをさめ、かへつて大藤内をしかり、「互にその一理あればこそ一流も立つことなれ。いはれざる取沙汰未熟のなすわざなり。そのうへ此方流儀は鞍馬流とて、所詮外から手ざしのならぬは知れた事を」とまけぬ挨拶、太郎兵衛耳にかゝりたれども、僧傳が劒術およばぬ所ありと見込んだれば、よい加減に聞流し、「イヤハヤわかい衆は、得ては斯樣の取沙汰いたしたがられまして、氣毒に存ずる。互に遺恨のなき儀、お心にばしさへられ

三　劍術の達者二流のあらそひ

「さあ〳〵梶原殿にも、ちとお話しなされよ」とせつかれて迷惑がり、「御存じの通宇治川にて、それに居らるゝ佐々木殿と先陣をあらそひし時、馬の腹帶が伸びたとたばかられ、弓の弦をくはへたる時、糸切齒をしたゝかそこなひ、折々今にいたみ候。今日も事の外いたみ候へば御免」といふを、「それにては巡斬がやぶるゝ」とせりつめられ、「然らば不調法ながらお話し申しませう。平家ほろびて後、お咎めなさるゝ程にもなき浪人、方々に流浪いたし居申す中にも、能登守教經の足輕に、倉田八八と申せしもの、劍術指南を申したてゝ、萩が谷に借宅して、折々は軍學などもさしまじへて、平家の世盛には、千石も取つた者の果のやうにいひなし、流儀は八幡太郎殿の流義とて、自身も名をあらため、八幡太郎兵衞とつき、その弟子には安倍の宗右衞門と名のらせ、弟子どりしけるに、店さへ張れば相應にあきなひは有るならひにて、二三人ばかりも門弟と稱して、稽古日をさだめけるに、その隣町に鞍馬山僧傳というて、天狗流と稱す

にてこそふすべよと申付けたるに」と、叱つてみんにも、いひつけやうに念が足らざりしかば、屹度しかつてからが埒のあかぬ事と、翌早天に右の腕を持たせ、樺之進方へ行きて、「ノウおそろしや。夜前鰻の思はしきがなかりし故、ハテ明日の事とのばし置きし所に、丑三頃一人の女、身が寢間の戸を押明けてはいり、腕を返しくれよと言うて、爰元の搏風はどこにござるぞと、ひつたもの天井の方へ目をつけて、身共へ飛びかゝりし故、刀をぬいて切りはらうたれば、身よりくわつ／＼と火を出して寄付がたく、此腕を奪ひとらんとしては、又搏風の事をたづね、その内火焔にこがれて、斯樣には燒けたれ共、つひには切拂ひ腕は此方にとゞめました」と、スウ／＼いうて、黒燒にしたるいひわけを、嘘八百にやつてのけければ、律義者の樺之進大きに感じ入り、「さて／＼お手前樣には、むかしの綱よりつよいお人」と、すなはち此旨をば縁起に書きのせ、右の腕と一所に蒔繪の箱にをさめ、今に傳はる由、大方諸方に不思議の有る縁起は此格なるべし」と語られければ、一座どつと笑れける。




運氣考

之進を名だいにたてんばかりにからくみたる事なれば、置いて歸れには困りはてゝ、「是非とも持つて往なう」といふに、「此方行力にて得たる腕を、むりに欲しがるは其意得ず。然らば上野の國へ拙者が立超え、その方たちが主人黄瀬戸の長次郎に直に決談せん」といふに、元來黄瀬戸といふ所も、長次郎とゆふ主人もない事なれば、いひ上るほど尻よわく成りて、のちには品により、御代官所へ訴へてなどと出る故底氣味わるく、逃げぼえにして歸りける。それより此腕を由比が濱の開帳へさし加へてをがませけるに、おびたゞしき群集にて、賽錢五十貫文を、開帳場と二つわけにして後、樺之進念頃なる浪人、戸田治部八といへるに賴みけるは、「斯樣のけだものの腕には、蟲のつく物なれば、鰻のやく煙にて薫べておけば、蟲つかずと申傳ふ。しかるに拙者うまれついて、鰻の匂ひあしく、つひに內にて燒きたる事なし。御世話ながら其もとにてふすべさせて下されまいか」とあるを、心得たりと件の腕を受けとり、十五六なる青二才の二三郎といふに言ひつけて、「鰻でふすべておけ」とて渡し、外へあそびに出でけるが、二三郎はこゝを大事と鐵橋にかけて眞黑にやきたて置きたり。治部八立歸り是を見て肝をつぶし、「煙

儀も次第に達者に心づよくなり、夜ぜん七日にあたれば、大事の所と存じ、劍を夜著の内へ入れて寢申し候ところに、くだんの化女窓を蹴破り内へ飛び入つて、長次郎を引つたてんとする所に、アヽラ不思議や、にはかにどろ〳〵といふや否や、此劍おのれと夜著の内よりぬけ出で、倶利伽羅のごとく不動のごとく、火焔をはいて、件の化女が右の腕をづつぱと切つておとしたり。それより長次郎は夢のさめたる樣にて、今日はつねにかはる事御座なく候。一兩日中に御禮には參上つかまつり候はんが、先とりあへず御禮申上ぐる。是がすなはち化物の腕にてござりまする」とさし出すを見れば、たぬきの手の然も乾干たるにて、血の氣は見えず。樺之進横手を打つて、「是ひとへに我等が行力のいたる所、その腕在家にさしおかれては、渡部の伯母ぢやというて、取返しに來まい物でない。行力にて得たれば、此方の寶物ともまかりなる物、此方において歸られよ」とあるに、三人は仰天して、本より此三人は見物芝居へかよる者どもにて、此狸の手、つい見せては錢にならぬ故に、龜浦樺之進殿の行力によつてと言立にして、件の化物話を看板にかよせて、由比が濱の大開帳に、錢の五六百貫もしてやる分別、名の高い樺

夜とぎの者共は其形を見ず。或時は長次郎を中につりあげて引立て行く體ゆゑ、家内の者共あれよ〳〵といへどもせん方なく、毎夜の事ゆゑ長次郎勢根もつきはて、今日にて大方十七八日になり申すにより、名だかき御札まもり申すにおよばず、さま〴〵の御祈禱をも頼めども其甲斐なく候。そこもと樣には各別の御神術も御座候と承りて參上申したる間、何卒御加持たのみ奉る」と、金三百疋に加賀絹一疋そへて出せば、元よりいつはりなく眞直ものの樺之進なれば、「しからば明日御出候へ」と三人をかへし、それより壇をかざり百燈をかゝげ、泰山府君の祕法を修しけるに、翌朝早々昨日の三人きたりける時、壇上に立てたる劍一振をさづけ、「是を本人の枕に立ておかるべし。是は斬魔切邪の劍とて、七十二符を切りこめたる劍なり」とて、渡しつかはしける後も、いよ〳〵怠らず丹精をぬきんで修法ありけるに、七日滿ずる朝、三人の手代いそ〳〵して來り、白臺にまき物二卷、鯛二枚白銀三枚、五升樽と共にまき舌にて禮にきたる體とは、名のらぬさきに見えて、かの貸しつかはせし劍をうや〳〵しく返納して申すやうは、「此御劍枕に立ておきしより、かのあやしき女窓よりのぞけ共内へはいらず。それ故長次郎

二　陰陽師の律義は見物の妨

「世界には似た事があるものでこそござれ」と、伊豆の十郎膝たてなほして話さるゝは、「手前領分下野の國粟が畑と申す所に、龜浦樺之進と申す陰陽師がござるが、生得律義にして師傳をまもり、祈禱すれば皆きくものと、その身からが先へ信じて、取あつかふゆゑ、しるし無きにしもあらず。人のもちひも厚かりけるに、或夕暮に、年ばい恰好いかにも人物らしき男三人きたりて、「わたくし共は上野の國黄瀬戸村、長次郎と申す大百姓の手代共でござりまするが、主人長次郎茶碗を慰みにやいて、樂とせられまするが、同國車坂と申す所の土よろしく、隙にまかせて掘らせて見に行かれし夜より、夢ともなくうつゝともなく、二十二三なる美しき女一人、長次郎枕もとへ、何方から來るともなく入來たつて、われは是車坂の主なり、汝我住める土をうがち取らんとはかる、我あに汝をゆるさんや、連れゆきて土にうづみ、ながく土を盜むものの見せしめにせんと、長次が小腕取るとおほゆる時、左の臂折るゝかと長次郎が目には見ゆれ共、

んしてござんせぬは、氣毒にこそ思へ、疑はうやうはないと思うてゐるに、お十に寺山の町で逢はんすと聞いて、よもやと思うたに、又宿屋をかへて今日はこゝへござんしたは、起請の罰でわしが見つけた」といふを、「ハテマアシ井〳〵シ井〳〵」と、座敷へ聞ゆるをしづむるは、馬頭觀音にはあらずして、馬子の身持とぞ見えにける。座敷にひかへし四人も呆れはてゝ、「是坊樣いつそ酒にしませうか」と襖ひらけば、「モウ此上は是非がない。おの〳〵へかたい樣に見せかけしも、口入衆と聞いたれば、何ぞの時たしかに思はせて、金かつてもらはう爲ばかり、樣子は今聞かるゝ通ぢや。ちと買旬のはづされぬ物があるほどに、五百兩ばかり入れこんで下され。本堂本尊内佛まで書きいれて借りたい」と、小聲にて申さるれば、四人は大きに違ひたるあての槌で、庭掃いたるが損と成りて、一向はらたて仕廻に成りける由。しかれば斯樣の驗者も、藝の一つかと存ずる」と、宇都の宮彌三郎かさねて話されけり。

といふ大茶屋へともなひ、時齋と名づけて夕飯こしらへさせけれ共、どこやらに苦みのある客ぶり、料理の仕樣でうまい目にあひさうな旦那と、四人が蕗の薹あしらひにする折節、小便にたゝんとて輪袈裟をはづし、人を呼んで、「此衣桁は淸淨なか」と問うてから掛けおき、次の間へたゝれけるに、中二階の客へ呼ばれて來て居る丸屋のおいわといふ白拍子が、階子おりかゝつて見附け、走り寄つて、「これ律さん、ヨウお前はわしにわけも立てずに、あふみ屋のお十さんには逢はんすノウ」としがみつけば、「あちらの間へ聞える。大きな聲してくれな」と手を合さるゝ比丘をうごかさず、「コレこの起請は何のために書かんした。佛祖冥理かけてとは嘘でござんすか。そなたに逢はうばかりに、文珠のじやうど へ行くというて居つゞけに來たの、補陀落へ參るというて泊りがけに出かけたのと、わしを大切さうに言はんしたは皆いつはりか。エヱ腹のたつ、そのうへ此中の文には、少々内證あきなひしたが、工面がちがうて大ぶんの損がある故、小芝居の上がしにかゝつてみようか、菜種の買置せうかと、たくみし事も無になつた故、とりこみで急には行かれぬというてくさんした故、ハテどうで一度はそふ物、ぬしの損さ

をして、「是は芝居と申す物でござりまする」といふに、「其芝居には何としてあのやうに繪馬はかけてござるぞ」との不審。「あれは繪馬ではござりませぬ。狂言の看板と申す物」といへば、「アヽ氣毒やなさけなや。アノ赤い顔なでつけ男を、りつぱな侍がころして居るは、假にも殺生戒がやぶるゝ。扨わけもない物を見せられた」と機嫌あしければ、「はゞかりながらアレは、悪人の家老が家國をみだすゆゑ、善人の家老がころして、太平にをさむるを書いた物でござりまする」「ムヽ扨はそれなれば勸善懲悪と申して、地獄極樂の道理。さて〳〵芝居と申す物は、煩惱を勸むる所と計おぼえて、只今まで見なんだは此愚僧があやまり、ナント見まいか」とは天の與と、四人の者ども、そのころ星月夜芝居茶屋にては、名題の間違屋へいひつけて、にはかの三軒つゞき、すゝめ込む迄は精進料理に男の給仕、附舞臺から出かくる女形、ヨイヤ〳〵のかけ聲しづまりて後、比丘氣毒さうに、「アノ女は何として頭に紫衣をゆるされて著いたするぞ」との儀、「アレは帽子と申すものにて、まことの女にはあらず」と、やがて棧敷へかつて見せければ、「女面似菩薩と申すが、男面にも菩薩はありけり」との言葉がはしに成つて、直に吉筒屋

アノ坊様を水邊へうつしこんで、金さばきのみ事な大臣にせずばおくまい」と、仲間のふらすこの五郎八、五歩下の彌兵衛など呼びよせ、酒買うてのみ、二三日過ぎて又白銀貳枚に念の入りたる菓子箱一つ、十兵衛八兵衛に彌兵衛五郎八までさそうて、「一家共ゆゑあまり有りがたさに、いづれも御禮申上げまする。不思議や御札をばいたゞかせまするも、早速熱もさめ、昨日までに夢のさめたるやうに本復仕りし」と、それより信仰ぶんに成つて、手にはやりくりの珠數つまぐり、口には手管の名號を唱へ、さい〳〵のさんけい鹽目のよい祈禱も、二つ三つ取次ぎければ、比丘も心とけて何事も打まかせて相談し、「俗用はことの外不案内なれば、萬事おの〳〵をたのむ」との一言、サアしてやつてた物ぢやと、いよ〳〵口車に乘せんとのたくみ、殊勝一ぺんの比丘、世にならびなき旦那衆とぞもてなされける。よい時節を見あはせ、「紅葉が谷に千部の經がござりまするが、お參りなされませぬか」とすゝめ、前鬼後鬼のやうに、四人が比丘をとりこめて供し、先星月夜河原の芝居側を通りければ、「ヤア始つた〳〵。是ぢや〳〵上のはじまり〳〵」と呼ばはる聲に、比丘はおどろき、「市と申すが是でござるか」とあれば、八兵衛もみ手

だし、口錢歩割の外に、借方よりしたゝ、の禮物を取りおぼえ、第一に寺方の祠堂銀を心がけて、かり出す調錬に妙を得たる事、あたかも天狗のごとく成りけるが、兩人ひそかに談合しけるは、「當時方々より金子の事申しきたれ共、借人は澤山にて貸人のすくなき世の中。われつくづく思ふに、快禪律師ほど大分の金を仕籠溜めたる人はあるまじ。何卒あの金共をさらへ出して、通用さする謀事こそ肝要なれ」と、額をつき合せて、「何をいうても時齋のかたくな坊、中々大抵の事ではとり出しがたかるべし。何とぞ色氣へすゝめおとしての上の事にしたい物ぢやが」と、八兵衛がしかつべらしういへば、十兵衛もうなづき、「肩から女色へとは行きにくからう、まづ若衆ごとから引入れるこそ口入道の傳授ごとなれ」と、うなづきあひ、わざと白銀一枚に、干瓢一箱こしらへて、上下を著し、たのみませうをかうて、納所雲然坊にあうて、「比丘様の御法力うけたまはり及び、病人の儀御頼み申し上げたさに參りたり」といひければ、やがて比丘も立出で、馳走のうへ樣子を聞きとゞけ、唵摩耶底蓮の符をきりて、此札水にうつしていたゞかさるべしとの儀、兩人は謹んでいたゞき立歸り、「何でも水にうつすとは吉相成るべし。

たのみ奉りける。頃は文治二年の事かとよ。「われいまだ觀音の淨土に至らず。それ觀音の淨土を普陀落伽と號して佛界に近き所なるに、日本の僧惠蕚といふ人海上に是を摸して、今普陀山と名づけ、萬國爰を觀音の淨土に擬へて參詣する事なれども、我は實の普陀にいたらん事をいのりしに、觀世音菩薩は三十三身の應化とて、三十三體に分身して衆生を濟度なされ共、皆集一體彌陀如來と說きおかれたれば、たゞ〳〵阿彌陀を信ずべし、三十三身の內、馬頭觀音の果を得さすべき由、ありがたき靈夢をかうぶりたり」と披露して、三七日が間大法事を執行はれければ、近きものは入りつどひ、遠きものは聞きつたへに參りかさなり、「生きながら馬頭觀音にならせらるゝ比丘樣へ結緣申せ」といふ程こそあれ、蟻の熊野まゐりする程、どやつきけるほどに、庫裏も方丈も錢の山高く聳え、齋米の峯ふかく積みたり。さらば寺再興の望もなく、錢は賣つて千餘兩となり、米は俵に直して四百五十石、法事首尾よくをさまりてからは、凡夫の眼にこそ見えね、もはや馬頭觀音にならせられて御座ると、滅多にうやまひ信じける。こゝに那落十兵衞まかせの八兵衞というて、ならびなき金口入のこなれ者あり。いか樣なむつかしき金も借りい

一　比丘の五百戒は芝居の看板

「雲ならば嬉しからまじ假初の浮世にそむる紫の袖」とは、枯默上人に紫衣ゆるされし時の詠歌となん。官位高き出家は、名聞になづみて德をうしなふと、世のまじはりを好まず、利害の界をはなれて、布の衣の破れたるをきらはず、本より袈裟は佛在世の糞雜衣と心得、つぎ〴〵の木綿つゞれ、つゝしまざれ共法驗つよく、當時鎌倉にかくれなき、五百戒をたもつ大比丘快禪律師と聞えしは、辭しても許さゞる祈禱の謝物納戸に充ちてや、外から中づもりにしても、およそ四五千兩はたしかなる内證。時齋の正食に物入すくなく、納所房の雲然に、小僧三人下男二人、何するとなく富みさかえ、折々は佛すでにみづから鉢をさゝげて人をすゝめ給へり、我も錫をとばして行脚せんと、小僧の一人も連れざれば、まして下男とてはおもひもよらず。五日六日づつ歩きては寺へ歸り、われこの頃文珠の淨土にいたりしなど、其淨土のありさまを說いてきかさるゝ故、信仰の寄旦那次第にまして、生佛と

くひちがうた牙で新渡部のをば御前

第三　劍術の達者二流のあらそひ

すさまじい名を月夜に釜のたぎらぬ
兵法の奧意は迯口にこそあれと
恥はかいてもかゝぬ武士の下帶

鎌倉

諸藝袖日記　巻之三

目録

第一　比丘の五百戒は芝居の看板

觀音の淨土は普陀落山なれども

今は自堕落借錢檀那の信心

さめてくやしき飲酒戒の沙汰

第二　陰陽師の律義は見せ物の坊

長次郎が茶碗わつていはれぬ女の化物

祈禱にしづまるたくみの段々

ぢや」と、くはしく語らるれば、無右衛門はじめて大きに愛想つきて、此世の事は皆無の見ですませば腹もたゝずと昔にかへり、一向武士をもやめて、傾城の誠と座頭の物ぐひのよいのは無いにきはまりしと發明して、無一軒とあらため、隱遁仕り度との願、主人荏柄へ申して相かなひ、そのふるまひとて、主人筋の面々迄のこらず申入れたるとの儀、何といづれもかはつたる振舞ではござりませぬか」

も書きませう」と、かぶろに髪剃取りにやれば、瀧右衛門にはかにかはゆう成つてきて、「そなたのその楓のやうな手の指は切らされまい。ハテどこぞに相應な血はあるまいか」と見廻し、「よい所に血こそあれ」と、猪口一つとり寄せて小伊勢に受けさせ、炬燵に夢に成つて寐てゐる文庵が足のおやゆび、つめよりむかふをずかと切つて血をしぼれば、文庵はおびえたるやうに足をびり〳〵とさせて、とろつへきの沉醉、炬燵の火のつよさに、疵はいえて血もおのづから止りにけり。此血の内へ糊を入れて、文を巧にこのみて書かせ、思はずよいめにあうて、火燵にての添寐、あかつき方に醫者の文庵をゆりおこし、同道して歸れば、門口の橋わたる頃ちんばを引きて、「何としたか終にない爪あかぎれがきれた」といふて、つぶやき〳〵立歸りぬ。それより此血文にて無右衛門をうれしがらせ、連立ち行きては、ぬすみての逢瀬、小伊勢は一生つれ添はんとの男は外にあれども、勤のつとめと、無右衛門と瀧右衛門、この手がしはの二おもて、心苦勞しけるうちに、誰か告げけん、醫者の文庵へ足の血の事もれ聞え、もつての外に腹をたてゝ無右衛門に合ひ、「瀧右衛門と申す人は、人の血をとりめさるゝ昔話のやうなお人

て來たる櫻谷瀧右衞門、穗長文庵といへる醫者諸共、宵の大酒に行きついて、火燵にふんぞりかいて目のあかぬ內、無右衞門は駕籠にも乘らず歸りけり。小伊勢はどうもつまらず、瀧右衞門が醉ひつぶれて寐て居る蒲團の內へはいり、「申し〳〵」とゆり起し、「わしはとうからお前に心があれ共、無右衞門樣へ對して」といふを、むつくと起上つて、「皆まで言ふまい、最前から寐入つた顏して委細はよう知つてゐる。それに今おれに惚れたとは、おれを喜ばせて、又中直の世話かゝする手管か。おれが方から疾うから鼻毛なれ共、無右衞門へたてゝ逢うてはくれまいと、さし控へた證據には、是迄外に女郎を呼ばず、こなたに密夫があつても、己がまことさへ屆いたらば、こつちへしてやらぬといふ事は有るまい。いかにも無右衞門との中は、おれが取持つて、金は無右衞門につかはせて、しのび逢ふ夜のたのしみ、それさへ合點ならば受込んだ」といふに、「粹なこな樣にいつはりは申すまい」と、此粹といふ字に、大かたの智惠者も、ふかみへ行く意味をこめたる挨拶なれ共、買うて逢ふとはちがひ、味なはりあひにて、無精にのぼりかゝり、「一旦起請で納得させた物なれば、今度は起請ぐらゐではゆくまい。血文なりと

一つも心がけけるが、小伊勢に身代ありたけと打込み、おもはれたがる程いやみの有るものにて、アタ舌たるい客とは思ひながら、物日をたのむに嫌といはず、金くれる、芝居見せる、枯木も山のかざりの段にはあらず、六條の判官殿にはあらね共、爲よしの客なれば、大事にかけぶんのつとめなりしに、此女郎に密夫ある事を聞出し、サウ水くさうてはをかしからずと、無右衛門此女郎をのいて、外の女郎を誰かかれかと物ずく折節、無右衛門が友だち櫻谷瀧右衛門、思ひかけずもあそびに行きけるを、小伊勢とらへて、「尤かし。わしが惡けれ共、今さら無右衛門樣にのがれては濟まぬ我身、どうぞつき合せて下さんせ」となげけば、瀧右衛門ものがれがたく、「それならば起請書いておこさつしやれ」と、起請書かせて歸り、無右衛門をもとの如くとりもちて、中よく出合せけるに、無右衛門いよ〱さへ返りてのぼりつめ、來る正月は肩三日より十五日までを、揚げづめの約束、節季の內證拂、受けこんでしてやる筈なるに、此女郎いまに密夫をのかず、あまつさへ無右衛門が出かけてゐる揚屋の階子の下での逢瀨を見附け、大きに立腹しておこりちらしけるを、幇頭仲居がいろ〱に止めてもとまらず、連に成つ

衛門と申す者方へ、振廻にまねかれ、只今まかり歸りたり。扨世の中にはさまぐ〵の人がらある物でこそござれ。今日の合客、結城七郎朝政にもきかるゝ通、亭主無右衛門古今の異人にて、儒をあざけり佛をわらひ、神道ををかしがり、天地にたゞ無の見より外には無いとすましきつて、儒者の講釋するは、下手な藥のいひたてよりは劣れりと心得、名僧の談義も、傾城のくぜつ程には方便がゆくまいと高をくゝり、色氣なければ後生氣なく、女房持つたれば子は二三人ありうちの物と雷がなれば柱によつて笑うて居、地震がすれば天地のひざぶるひと、おとしつけて騷がず、世界を三文とも思はぬ侍なりけるが、去年三月桐が谷の花見の歸るさ、傍輩二三人にいざなはれ、扇が谷の新地へ立寄り、古市屋の小伊勢といふ女郎に、あひ初めし夜は、例の無の見なりしが、上手者に仕こなされ、宿へかへりてもおもかげ身に添ひ、はじめの間は人も心づかぬ程の男なりしか共、後はたゞ事ならずと、女房も悋氣心つき、近所の取沙汰つのりければ、通路もしのびぐ〵の戀といふ物になりて、無の見にては此心さばけず、遂にあそびつけぬ男のにはか粹、紅裏めつたに著かけて、仲居小めろに金やるすべもおぼえ、はやり歌の

三味線、樂のしらべともろ共に、酒の石橋の上手にもられ、一座いづれも足もとはよろ〳〵とよろうたるかざり屏風、つり夜著名香寢屋の春風、遂に夫婦となり給ひぬ。民部左衞門次第に女ずきになり、妾ばかりが十八人、ふるき友だちが出あひて、「若衆はいやか」と問へば、「辛風呂も年よる程精の毒でござる」との返答。男の子が八人、女の子が六人、あまり子が多いとて、三男を出家させて、是界坊と名づけしをも、眞言寺にはよき大地ありけれ共、こりはてゝ法性寺の修行、俊寛の跡目にするゑて妻帶にきはめ、「たとへ硫黄が島から有王丸がもどつたと、由斷すなと申付けて、入院させし由承りし」と申上げられける。

三　無に落つる見識は色の水上

關山月落ちて分坡遠く、瓢水獨淸む仙術の家と、晉の雪川が作りしも、實さる事にや。諸歴々の話時移りて、日闌なる頃、和田義盛出仕あれば、「何とて御出仕おそかりしぞ」と、人々問はれけるに、「さればの事、今日は同苗の內、荏柄の平太方に召しつかふ譜代の侍、三界無右

と親とのとりむすび、お前とわしはシテワキの中にきはまりしに、男色に御心そまりていつ輿入ともなく、さびしき閨は班女が扇のかなめ、しめくゝりのよい此お家の執權熊坂松左衛門と、手前の家老黒塚鬼太夫申しあはせ、みづからを若衆に仕立てて今日の次第、二世かけて替るまいとの御誓言忝うござんす」と聞いて、「ソリヤ若衆かと思うての誓言」と逃げんとするを、「いか樣なびつくりなさるゝ事があらう共と、言葉をつめましたは爰の事」と、取りつき給ふ内に、一家中兼てしめし合せたる事なれば、千秋萬歳をうたひかけて、熊坂松左衛門島臺を捧げ出づれば、次の家老田村鈴鹿之丞おさへをさゝげ、女中頭玉かづらが本銚子の長柄、井筒がくわへのひさげにかざる陰蝶陽蝶の三々九度、芭蕉の間より木賊の間、夕顔の間段々居ならぶ一家中の面々、「三國一ぢや。嫁になりすまいた。ざつと御祝言は角田川、是迄兩家の家老中いか計のかんたんをくだかれし事なるに、やがて玉津島のやうな若殿樣も出來て、御家は萬々歳の鶴龜」と悦べば、いやおうなしに御さかづきごと、雜煎の望月高盛の海老のしら髭、ながき日もはや呉羽、男舞ばかりすかれし民部左衛門、女中とあふは序の舞にて、次の間にきほふ琴

ませう様がない。モウおいとま申上げまする」と、立たんとするねたみの顔色、又あつた物でなければ、「サウもぎどうに言うた物でもない」と、取止めても張のつよい若衆、いよ〳〵おもしろみが乘つて來て詫言するうち、あまりつよく腹をやたてけん、つかへを起して目をまはしければ、民部左衞門さま〴〵に介抱するに、やう〳〵人心地つきて、じりゝと見たるおもかげ、命とりとめ抱きつくを、「お好の能をお止めなされませいと申すも無理、然らばたとへ我身にいかやうなお驚きびつくりなさるゝ事あり共、肌と肌とを合せて、いつ迄もかはるまいとの御言葉さへきゝましたらば、いかにも能の時はお山になりとも楊貴妃になりとも、いなとは申しますまい」といふを喜び、「いかやうな變つた事があらうとも變るまい。此段ふたゝび禁停致す」と、此度は先祖代々をいひ立て、跡へも先へも動きのとれぬかためを爲しけるうへ、「此約束をそむいたらば、武士の冥理につき果てん」と、牛王に血判すゑてわたしければ、「うれしやソレならば今から夫婦でござんすぞへ」と、ぴつたりと抱きついて、「はづかしながらわしは高砂尾上之丞が娘、龍田姫でござんす。お前のおやご老松梅軒様より、此六年以前に結納を下され、親

停すれば、「うれしう御座んす。それならば今日の能は、何をおつとめ爲されまするぞ」と問ハば、「今日は三輪と百萬を勤むる」と聞きて、「尤かし、三輪は明神様の事ではあれ共、是は三輪の山本に住む女との出端、其うへ夜ならでかよひ給はぬはと言ふくせ舞、是が御誓言がやぶれいで何といたしませうぞ。百萬は子を失うたる女の所作、惣じて悋氣嫉妬をはじめとして、たとへ山姥でからが女には紛なし。能といふ物十番に七番迄は女の面をかけて戀の情あり。羅生門籠の類でも跡先には女の事をはさんで、其中へ挾まりたるあだいやらしい事共、扨又狂言といふ物は、傳授事が花子というて、鍋も釜もぶち割りかねぬ女房を持ちながら、夫が悪性ぐるひするきぬ〴〵の別の歸るさ、小歌ぶしの色ばなし、扨は枕物狂といふは、九十にも餘りし老ぼれが、おとごぜといふ女を、年にこそよつた物なれ、あた舌だるい惚れやう、何をおつとめなされても、一座もせぬと禁停なされしとは相違のわざ藝、今日もやります事はならぬ」と取りつけば、弓矢八幡と誓言たてしにのつ引なりがたく、「ゆかねば筈にはまつた今日の役目、ハテ氣毒や」といへば、「ヨウござんす。サウお言葉のちがふ無心中なお方様のお心にしたがひ

の生えぎはは水仙に白梅あしらひたる水ぎはより奇麗に、手に鷹もすゑず藤の花もふりかたげざれ共、古風なる仕出は男色のたゞ中。民部左衞門やよめに成つて、「お若衆名は何と申すぞ。いづ方よりの來臨ぞ」と問はれて、「わたくし儀は小春林彌と申して河津殿につとめました所に、河津殿なくならせ給ひて後浪人いたし、何卒能を仕覺え、能太夫になつて一生をくらしたきのぞみ、こなた樣にはお能の上手と承り、人頼みにてもいたし弟子入のぞみなれ共、いつそおまへ樣へ慮外をかへりみず、不屆な奴ぢやとて御手打にあはゞ、ハテおまへ故とあきらめて參りました」と、につたりと笑めるに、民部左衞門うつゝと成つて手を取り、「扨も〳〵器用な手の筋、覺えただけは皆教へてやりませうが、合點でおぢやるか」と、しなだれかゝるをヒンとして、「おまへ樣のかはゆがつて下さんすが眞事ならば、女の事はふつ〳〵に口にかけて下さんすまいとの御誓言が聞きましたい。ハテ其上はどうなりとも、お前にまかす私が身」と、民部左衞門にもたれかゝれば、「ソリヤもとより此方にすきの事、弓矢八幡も御照覽ましませ、女の事はかりにも舌へかけて申すまじ。又女の事のある所へは一座もいたすまい」と、刀を拔いて禁

上男色ずきにて、女の手のさはりたる衣服を著せず、大名なれば小姓あまた召しおくべきに、しはきが上のさよ衣、素袍のしめさへ汚れなりの物にかまはぬ性質。傍輩出會の間に新冠あれば念がけ、事缺けには五六十歳の隱居おやぢものがさず、舞と男色にうき身をやつしろの、紙子同前にて繼目のはなれぬ代々の家筋なれば、あまたの家老の異見諫言、「御跡目なくては御先祖への御不孝、何卒奥方樣を入れたき」由申す程勝にのつて、「それ女は第一油くさく、心根かだましくて、すはといふ時の足手まとひ、士たる者の持つまじきは妻なり。昔より妻にひかれて忠義を缺きたるためし少からず」と、かぶりを振りかゝりの事にて、或時廣岩といふ所にて仕舞囃子の有りけるに、三番目を頼まれ、小袖大小かざりたてゝ出かくる所へ、取次の侍日彌次郎罷出でて、「見なれぬ若衆一人お玄關へまゐり、憚りながらお上へ直に貴意得たきよし願ひ申す」との事、若衆と聞いて急な出所をやめ、それこなたへと招かするに、年は二八ばかりの大振袖、一條院時代の若衆ぶりにて當世めかず、茶宇の裏つけ袴立派におり付けたる、飛驒の工が百日かよつて天王寺の塔をたてる晝休ごとに、ほつておいたる太秦八景の一印籠、髪

ませずに、麁抹な足を進じまして」というて、袱紗をさばくもをこがましかりき。相客共、是が茶の湯でなくば、踏んだの踏まれたのと喧嘩にも成るべき所を、茶の湯の德にて互に慇懃なるおれそれと、醫者が藥ちがへにて殺しながら藥代取る格に心得、俄慇懃の有りたけつくして、其日の茶席は相すみけり。佛法に外儀の莊嚴をいましめられしはかゝる事にや。茶をすかば、人の見ぬ所が猶大事なるべし。上下著て出でし人の丸裸は、後に茶を調つる時も思出して、客方いか計笑しからん」と、咄の冗をぞさゝれける。

二　能囃子を好額の若衆盛

江間の小四郎「只今同名申されし通り、惣じて藝術はおもてより、内々の心がけこそ專一にて候へ。此まへ拙者在所伊豆國邊にて、殊外猿樂の能ばやしはやり申したる時分は、歷々の諸士大名まで、是を習ひてたのしみけるに、隣國の大名にてありし老松民部左衞門、此道にふかくなづみ、明けても暮れても扇の手に工夫をこらし、鎌倉へ出ては辻能まで見ぬといふ事なく、其

内よりふんばる力足と、外から押すいきほひにはずみて、にじり上りの戸ぐわつたりとんどはづれ、亭主は裸に越中ふんどしのさがり長く、花生持ちながらすとんと倒るれば、名物とうれしがりし花生は、微塵にくだけて、戸より外へ足をぬつとふみ出しけるに、妙禪寺の上人のひたへ踏みつけて、上人は眞あふのけに飛ばされ、手水鉢の角にてほんのくぼをしたゝか打ちて、やれ氣附けよ、打身の藥とさわげば、取違へて初昔といふ濃茶の挽だめを持つて來てのますに、上人くるしき息の下よりも、「結構な御茶」と申さるゝに、扨は正氣がついたとよろこぶ内、亭主は腰をいため、頭を床柱にぶちあてたる故、流るゝ血おびたゞしかりしを、でつち手代共が、布切もつて來てふかんとすれば、袱紗さばきがさうでないと、痛い頭かゝへながら、しかり叱り戸を立直させ、花生取りかへて上下を著し、しらせを打ちければ、上人も起きあがつて、頭をもみ〳〵、法のごとくに戸をあけ、三人ながら座につけば、亭主子細らしく罷出で辭宜しけるに、正客も挨拶なくてはと、「最前は珍らしい足をいたゞきまして、御馳走忝い」といへば、亭主ももみ手をして、「ふといたしたる儀で、兼て心がけませなんだ故に、足袋さへ履き

ら入つて座につきしが、ふと心づき、南無三寶とそとへ脇差を抜かんばかりにはひ出でけるに、妙禪寺、さては爰にて一邊はうて出づる物かと、大事さうに這ひ出でられける。辨之進は脇差をば物蔭へかけて又はひれば、妙禪寺もおなじくはひ入る。ぐる〳〵まはる體をのぞきゐる亭主の心ぞをかしけれ。酢屋の道順は中にても功者ぶんにて、三人づめに二疊臺目、料理もすみて中だちしけるが、三人の客待合に知らせを待ちゐける折節、何にて有りけるや、くわんど物をおとしたる音を、正客の妙禪寺、「たしかにあれは知らせならん、いざ行かん」といふを、のこる兩人とゞめて、「知らせの銅鑼にては有るべからず。物を墮したる樣な音でありし」といへども聞入れず。妙禪寺にじり上りへかゝりて戸をあけんとするに、亭主は丸裸に成りて越中犢鼻褌ひとつの體、花をいけんと床へかゝつて居る最中、明けられては叶はじと、左の手には古備前の花生、右に萩薄持ちながら壁へかゝつてゐて、右の足にてはにじり上りの戸をふまへ、左にてはふんばり居る共知らばこそ、正客の妙禪寺、無理無體に戸を明けんと手をかけてこぢて見れ共、力足つよくふみつけたればあかり難きを、南無妙法蓮力を出して押してみければ、

つて、つねに參る醫者の事ゆゑ、手前へたのまれて參りし」と聞きて、「扨それは御深切に忝うこそ存ずれ。たしなみませうと存じても、又してはもや〳〵と短氣がおこりまして、思はず知らず客へぶしつけになる事ともかへりみず、手代共をきめました段、あやまり入りましてござる。向後は屹度相つゝしみませう程に、よろしく賴入る」とのうけに、隆泉も「その通り申してすゝめ申さん」と立歸りし跡にて、座敷まはりへかゝる手代童奴をのこらず呼びならべ、「料理の不加減給仕の手ちがひ、その外機轉のきかぬ事どもあれば、一度々々にしかり附けて腹のいた癖を、お客がたより座敷にて、家來をしからば參るまじきとの難題、察するにおのれ等がしからるゝを迷惑がりて、手をまはし賴んだ物であらう。此上は叱るまいと申してやつたれば、氣にいらぬ事があれば、次の間へ立つて手へなり共肩へなり共嚙ひつく程に、聲をたてな」とのいひ付、困り入つてぞ見えにける。客既に案內して、妙禪寺の上人より、手水してにじり上りより上られたれ共、此上人ついに茶に行きたる事なく、始めての會席心もとなきを、やう〳〵ならうたまゝにて床の掛物を見る内に、つぎの客能太夫辨之進麁相ものにて、わきざし指しなが

して、二一天作の五厘三厘でも、つもれば山となる」と、異見すれば、「かり初の物も袱紗さばきしてふいて用ゆる清淨の業藝、夏はいけ花の水際に心をのべ、冬は爐邊のあたゝかさに、うきをわするゝ水さしの底意なき出會、また有つた物ではござらぬ」とうけがはねば、市郎右衞門機嫌あしく、すきの道とて十露盤のつぶやき奥に入りにける。伊右衞門は手代善五郎を呼びよせ、「今宵は隣村の妙禪寺の上人を正客にて、能太夫松山辨之進、酢屋の道順老を茶にて招く約束、申附けおいた通り、それ〴〵の用意せしか」とあれば、「御夜食の拵ことく〴〵く出來てござりまする」「ソレおもての掃除に念入れさせ、露次を隨分きれいに掃かしや」と自身は數寄屋にはりへかゝりける折節、勝手の方より、「英倉隆泉樣の急にお目にかゝりたいとて御出」といへば、「これへ通しませい」と、「何の御用」と問へば、隆泉、「されば餘の事ではござらぬ、貴樣には客のある度ごとに、料理の加減がわるいの、煙管のなほしやうが斯うではないのと、とかく目に角菱たてゝ家來衆をお叱りなるゝ故、參つても座敷にゐる心もせぬ故、其おしかりなさるゝ事がやみませずば、いづれも今宵はえ參りますまいとの儀、客方からは申しにくいと有

只今廻しますといぅて、中にほり上げて渡せば、次の人受取りたりといぅて中にて受け、指の先にてくる〳〵〳〵と廻して見る樣な事なれば、中々大體の稽古では參らぬゆゑ、此道の數寄人澤山にはなき道理なれ共、茶杓ひとつ下に置くとても、そつと大事さうに置く手つきのにぶさ、茶碗へ茶をうつす手元は、南京人形が太刀に手をかくるがごとく、にじりあがりを上つて、我はいた草履を取つて立てかけ置き、其手もあらはずに會席につき、飯を喰ひ酒をしてやり、日頃はどうせい斷ぅせいといふ程心やすき友だち同士も、にはか慇懃に成つて、炮樂の缺けた所が面白いと、心にも思はぬ追從たら〳〵、客のどじめする樣な料理の盛りかた、大食は腹にみてず、小食はのこす事のならぬに腹をそこなひ、炭がよく出來ましたなどと譽むる事、無益な藝ぞと見込んだか、脇眼から見れば、恥しうもなうて能くもあの樣な事がいはるゝ事ぞと、氣毒におもふに、中立の後に成つては、どこの乞食がのんだやら、齒拔のおやぢがしらいで、一生茶漬茶碗にしたやら知れぬ古茶碗を、かいで見たりひねくりまはしたり、入齒の落ちさうな人とひと口で飲んでまはすも、あまりさつぱりとしたる業にはあらず。ひらに茶湯をやめに

一　茶人の俄慇懃丸裸の亭主

時政は御座の左にひかへられしが、「只今朝比奈申さるゝ通、その和尙の弟は、蜂房屋の伊右衞門とて、攝州池田邊近くに住みて、有德なる町人なるが、茶をすいて明けても暮れても釜のたぎる音に千年をのぶると心得、雪に月に薰物くゆらせ、炭は所がらとて香ひわたらせてのたしみ、此男生れついて潔癖つよく、かりそめの事にも手を數十邊あらひ、障子ふすまも自身明たてする事、何とやらんきたなくおぼえ、召しつかふ奴童にあけさする程なるに、其兄に市郎右衞門といふは、第一茶湯ぎらひの天秤好にて、根が正直なれば、熊手迄はゆかね共、こまざらへぐらひは慥なる生れつき、或時弟の伊右衞門を招き、「其方萬事さしおいて茶湯いたす事心得がたし、某よく思案してみるに、茶湯といふ物は至極の無器用もののする事にて、あの藝が少にても器用になければならぬといふ物ならば、世界に茶人も少かるべきに、三つ子がしてもなる事ゆゑの繁昌なり。其譯といふは代金の百兩もする樣な結構な茶碗を次へ見てまはすにも、

子寶はんじやうの家のおきて

第三　無に落つる見識の色の水上

小伊勢がなさけの淵はふかい心

眞夫にまぶをかさねての御馳走

ゆびの血は醫者坊のさじ加減

鎌倉

諸藝袖日記　巻之二

目録

第一　茶人の俄慇懃丸裸の亭主
無器用な者のする業と此道ぎらひが
誹謗るは茶碗と茶碗のあたつて
くだけし古備前の花生

第二　能囃子を好額の若衆盛
祝言の盃をさしもの女ぎらひも
とりあげ婆のかず〳〵かさなる

見て、さしも信仰の又右衛門も肝つぶし、「扨は和尚様には此相撲までお好か」と、見限果てよぞ歸りしと申す噺を承りし」と申上げられける。

無體な仰付けられ故、佛菩薩を斯樣におちびれさせて置くべき樣なし。幸丹波の笹山と申す所に宜しき空院有つて、私と同じはたご屋に其旦那衆が登つてゐて、相應なお住持を尋ぬるとの物語、少しの物入は私が呑込み入院させませう」といへば、「近頃嬉しき志、旦那衆ならばこそ。然らば其寺へすわりませうが、折々すまふは取らせてくれらるゝ樣に、肝入衆へ頼んで置いて下され。始にきはめぬ事は跡でいぢむぢが出來て濟まぬ物でござる」と、まだ懲りもせぬ相撲の執著、それより宿もとへ同道しければ、底のないはしりにみぞ板をあてゝ、菜刀より外に庖丁は見えず、ふな〳〵する樣な古疊の角に、丸の内にろの三と燒印のすわりたるは、何ぞ芝居の拂疊にやとをかしく、「サア和尚樣御出」といへば、さすがは昔わすれず、誰にもらうて置かれけるにや、布の破衣取出し、「疊の緣にと存ぜしに、昔に歸る錦の衣」と引きかけたれ共、あたまはいまだ角前髮、おしもんでぞり〳〵いはせ、火宅の門を出んとすれば、女房衣に取附きて、「おまへはどこへ行かしやんす」「おれは丹波の笹山へ」「わたしも連れて行かしやんせ」「女連は邪魔になる」「胴欲な和尚樣ぢや」と、わつと泣くに心ひかされ、「それなら來い」と手を引かるゝを

に人の山をなして、評判もつよかりけるが、和尚は鬼が崎とあらためて、かせぐにも寺に居しとはちがひ、色事も遠慮内儀をもたれけるが、抑此内儀と申すは、海に千年山に千年、川に千年苦界を勤め、誘ふ水あらばいなんとぞ思へ共、つれて行人のない濕やみの果共しらず、ふと鼻聲な所に、かはゆらしいと思ふ心がおこりて、ひとり相撲がついふたり相撲に成つて、鼻の色はうつりにけりな、あつたら男にかざりがなくなれ共、夫角力は四十八手と申せ共、取分けて十二手を四つにからみと言ひたてゝ、ドツコイマカセナと都の町々取歩きけるに、むかし和尚様とかしづきける時、理も非もわかず、此和尚をいき如來と心得てゐる正直屋又右衞門といふ扇子屋、本寺參して序に洛中見物しけるに、辻中に人だかり有りて賑しければ、立寄りて見るに、姿は替れ共和尚に紛なし。是はと珠數取出しけるが、マテしばし、和尚にはたしか鼻があつたかとおほえしが、卽身卽佛と兼て說法に仰せられたが、佛に其まゝ御成りなさるゝ故、五體が所々替つて行くかも知らずと、思ひ切つて、「もし和尚樣ではござりませぬか」といへば、「是は是は又右殿か、恥かしい對面いたします」とあるに、「お恥かしい事はござりませぬ。北條樣が

神書にこそ心を用ゆべきに、それを次にして、弓矢の道ばかりか、相撲を好む事不相應の致しかた、兩人共に改易」との御沙汰、力なく〳〵兩人は方屋々々引かんとするを、「放蕩なる出家社人のみごらしのため、此まゝ裸にて追ひはらへ」と時政殿の下知によつて、ふんどし一つのままにて和尚には鬘をとらせ、神主はなでつけ頭にての丸裸、たとへん方なき姿なれ共、泣く泣く木戸口へ出でにける。念佛講中は和尚のふんどしにすがり、「又いつ御目にかゝるべきも知らず。お十念をさづけ給はれ」といへば、はだか身にて珠數を手にかけ、「南無あみだ〳〵南無あみだ」と門なかにて唱ふるも、興がるわざにぞ有りける。大々講中は神主にむかひ、「思ひもよらぬ相撲より神やらひにやらはれ給ふ」と、しで程な泪をながせば、和尚も神主も、「加樣に成り申す上は兩人中よくいたし、共挊に致すべし」とて、連だち所を立退き、男ははだか百貫が一文もなければ、兩人申あはせ、京大坂へたてわかつてひとり角力を取りありきける。か程の變にあうても好の道とて、兩人ながら角前髮に成つて、神主は岩戸傳十郎とあらため、方々とかせぎけるが、世はもとしのびとやらんにて、神道の辻講釋、めつたに佛法をたゝきくだく辯舌

た事なれ共、最前の袈裟がけの足どり、左の方のういたる所を踏みもなほさず入れて投げられたれば、勝負は其時にあつて、勝負の後の投なれば勝には成りがたし」といふに、かけ右衛門も面目をすゝぎ、「生肴も得食はぬ形をして、神力のかゝつた身共に勝たんとはおろか〳〵」と、身についたる土をはらひ〳〵いへば、南無右衛門もはやこらへかね、大にせいて、「生肴食ふやら食はぬやら内證の事をそちが知つたか。世間の人もぼん様とはいへど禰宜様とはいはず。禰宜殿といふがせいさいの事なれば、格式からが違うてある。緋の衣まで著する一寺の闘取になめ過ぎた言分、ま一言はき出さば、たふとい所へすゝめ込んでくれん」と、額に筋をはつて小ぶしをにぎり怒らるれば、見物の内に、此和尚信仰の旦那講中十四人居あはせ、皆々土俵へかけ上りて、「是は和尚様の御教化が御尤と存ずる」と取巻けば、大々講中二十人ばかり人溜より飛び出で〳〵、神主をかこうて「くそ坊主め」と悪口すれば、「かす禰宜め」と返答し、すでに喧嘩に及ぶべき所に、北條殿の棧敷より御使たち、「一寺の住職として裸に成つての力わざ、一社の神主に似合はざる腕だて、相撲は武藝の一つといへ共、社人は社職をつとめ、神事をきはめ、

俵へ上り、ちから足をどう〳〵とふまるれば、東の方より中村山の神主中臣内藏權頭、是も隱れなき相撲ずきにて、下禰宜一家衆のとゞむるをもかまはず、名のりを千はやかま右衛門と、しかつべらしうとん〳〵と四股をふめば、行司すりこぎ義太夫唐團扇をあげて、「東は千はやかけ右衛門、西は十念南無右衛門、やつ」と合せけるに、南無右衛門はあみだがけにすくうて投げんと、攝取不捨につきかくれば、かけ右衛門榊おとしに卷きおとさんと柏手打ちかけ、組ん〳〵とまはるといへ共、四十八手は四十八願、第十七八の願でころりとしてやらうと、袈裟がけに足をまとへば、かけ右衛門も、「よる所をはらへ給へ」と、飛ばさんと打つ手を、ほとけ倒におとされて、かたやの隅へとほかみゑみためらひ難く、どうと倒るれば、南無右衛門は自慢おもてにあらはれたる所に、行事義太夫團扇を東へあげて、かけ右衛門とさだめければ、南無右衛門大に腹を立て、「眼前に投げられたるかけ右衛門を勝とは其意得ぬ」と、はだか身にて附髮なで上げぎしみければ、相撲のならひとて、よりかたの角力共皆々立上り、「コリヤ行司まなこ玉がとんだか。南無右衛門勝にきはまつた」とどしめく時、行司驚かず、「成程投げられたは見え

十四五間の家屋敷は、棒にふりかねはさつしやるまい。あつぱれよき弟子」と、それより盃をいだし、師弟の約束をぞかためける。此閑才が傾城の人どもをあつめて、はりぬきにしたる老子の像、今に京都櫻の辻に御座ある」由御はなし申上げられけり。

三　和尚の相撲好は四十八願の手取

朝比奈三郎打笑ひて、「扨々をかしき御噺共、君にもさぞ御一興におぼしめさん。此義秀も順能でござる程に、聞きおきました噺を申上げませう。前角鎌倉中のわかい衆相撲はやり、それなる保野殿をはじめとして、由比が濱にて勸進相撲の寄かたへ出られし頃、梅が谷の蓮臺寺の住持天外和尚、年四十二三なるが、生れついての相撲ずきにて、若い時より在相撲と聞いては、缺かさず附髪のすみまかづらかけて、名のりを十念南無右衞門といひけるが、頃は建久元年八月二日、星月夜の觀音堂修覆の勸進相撲、勸進元よりおびたゞしき小屋をかけて、諸大名へ棧敷をあてける故、繁昌しきりなるに、西のかたより件の和尚、紋白のまはし三重に引しめ、土

かたい物に成るまい物ではない。こゝがそゝり上の大三重ぢや」と、太夫に血起請書かせて、ころりさんしやう味噌、あへ物に成りて財布のいかのぼり、行きたうても行かれず、鎌倉の家は家質へながして仕廻ふ、後には佐左衞門共不和に成り、すべき商賣はなし。傾城買のら指南所と看板を出し、子息弟子などの粹に成る樣に教へけるこそをかしけれ。おもての方に、「物もう、粹になりやう御相傳賴み奉る」と、二十四五なるきれいな若い男、黑羽二重の引かへしの羽織小袖、下に淺黃がのこに黑い襟かけたる紅うらに、脇指に金目見えて鬢あつく、役者の樣に髮さききやうとうなるが、手をつかへて弟子に成りたき望。閑才打笑み、「商賣は何をなさる」と問へば、「親共は唐物を致しまして、さや縮緬類の取あつかひをいたし、手代も五人ござりまする」といふを、「ムヽそれはよい御商買でござる。してよい八ひろくらゐの縮緬は何程いたしまする」といへば、「左樣な直段はわたくしは存じませぬ」といふ。閑才大によろこび、「手代の四人や五人つかふ唐物屋で、その惣領がちりめんの直段を知らぬとは、先以我一流をもつぐべき仕出し。隨分精出し給へ。おつつけ上達なされ、稽古の功によりて力もつき、十間口や

曙といふ太夫にさだめて、愛は實の愛にあらずとあれば、一通りの愛は理外なりと、ふとかはゆがり初めて、いふ程な事が皆道にかなふやうにおぼえ、傾城に實梨子地にふたつ紋附けた香合こしらへておいて、太夫がくれた時の嬉しさ。鎌倉にゐる母者人や女共に誠をつくすは常の道なり、道の道とすべきは常の道にあらずとは爰の事なりと、喰しばつて見るほど裏に入りたるたのしみ、世の人の心惑すは外の色にあらざればなりと、一向高ぐくりして、本より物にかゝはらぬを道と心得たる教より、人のそしり世の嘲をかへりみばこそ、通ひける程に行きける程に、鎌倉より取寄する金の緒もきれて、呼びにくれ共故郷に歸らず。鎌倉の弟子共は師命をまもり、出家に物かさねば、おのづからさびしく、高弟は閑才が女房と密通して金千兩ひつかたげ取りて走れば、お袋は七十三にて息子の性根の入れかはりたるを病として死んでしまはれ、内人の者共とりじまりなく、身代ばら〳〵に成るをもかまはず、親の死目をも何とも思はぬ、無爲の心得そこなひながら、母の死なれたと聞いてすこし陰氣に成りしより、元のかたくろしい心に成りそうな所を、佐左衛門末社共に下知して、「もえ杌には火がつきよい、又もとの

ひて、閑才が文盲な故と此家に疵つけな」と、かたく申付けて、懇なる布屋佐左衞門といへる町人に同學ありけるをさそひ、物入共に引受けて都へ著きける。頃は睦月の二十日あまり、四方の茶屋々々雪どけして、附嵩まさるかの大場、東の岸には祇園石垣すきまもなく、びらついたる色五六人、客がのぼらば仕落さんと、眉尻つくつて待ちかけたり。西は六條三筋町、やなぎ櫻をこきまぜて、都ぞ春の錦とは爰の事なるべし。さらば心みに愛の理をほどこし見んと、末廣屋の織右衞門といふ揚屋へ、宿屋が案内にて鳴込めば、亭主織右衞門夫婦、こは有難し福神の御來迎、我等がためには掘り出す鎌倉の戎客、おかねをくわつと星月夜、大夫樣は御物ずき次第、おなじみがかゝつては少と間夫をもきりが谷、二階の口でついちよこ〳〵とあふぎが谷、戀の奴と此亭主め、召つかはれ下されかしと、はやりかくる太夫天職、連の佐左衞門は元より色事にて三度迄身を打ちたる男なれ共、近年不勝手より遊興をやめて、ぜひなく學問で暮してゐたる下地の器用はだゝ泉といふ天職に眼がついて是にきはむれば、閑才はどれなりともと言ふを、とてもの事にお物ずきをと、よつてこてすゝめ立てられ、家都が三味線にのせられ、

書指南いたし、少々づつは講釋いたして暮す物でござるが、恥かしながら左樣の事は存じませぬ。向後は御弟子になされて下され」といふ所へ、禪僧一人侍者二三人づれで、「聞及んだ講釋師は是ぢや、始つたらば聞きたい」と腰をかくれば、「異端を學ぶ浮屠に聞かす講習ではない。一切經といふて册數の多き程うその數もおほく、うそをあきなふ此閑才ではおぢやらぬ」と叱り付くれば、出家もむつとして、「さう言ふそちが宗旨は何宗ぞ」と問はれて、返答にこまり、宗旨がないとは言はれず、唐音にて、「ヒンカンテン。ヒヤアプアンプアン」といひければ、此禪僧もとより不學にて唐音にうとく、知らぬとはいはれず、合點いかぬながら御尤千萬といふてぞ歸りける。くだんの四方髮も是をしほにて、「其うち弟子入いたしませう」と立歸る。あとにて閑才弟子共にむかひ、「そち達もよう心得たがよい。無爲の深き道は孔子も釋迦もおよぶ所にあらず。志を卑くしては塵のために身をおかさるゝ物なり。寶は瓦におなじく、居宅は草芝にひとし。愛するは愛にあらず、愛せざるを以て愛とすとあれば、心がその場へ行たか行かぬか心みんと、俄に都へのぼるにつけ、留守中とても佛くさい書物、假名がきの類とりあつか

柳子厚より上ゆく心の高ぶりは、親のゆづりの數萬卷の書を貯へ、隙に任せ讀みたればとて、學力自慢に高く成るべき鼻より、其鼻の下の長き故とぞ知られける。ある時四方髮の侍、年のころ六十計と見えて、「ちと御尋ね申度事有り」といひ入れけるに、折節弟子共は讀書に取りこみいそがしきにまかせ、亭主閑才罷出で、「お尋は何でござりまする」といへば、「論語の片かな抄は役に立つ書でござりますか」といひけるを、「扨々御人體共存ぜぬ。日本の人が假名書にいたしたる物が何の益に立ちませうぞ。點のある本さへ人品のそこねる物でござるに、左樣な文盲な書物を、とりなやむ拙者とおぼしめすか」と、眼玉ひつくりかへして叱り付くれば、其はたに日頃したしき醫者一人、のり物立てさせて、假名づきの衆方規矩か醫方口決を借らんと、待ちてゐられけるが、此言葉にびつくりして、ものをも言はずかへれば、四方髮の侍も手も ち悪しく、去端なくもぢくくすれば、「アヽ笑止や。形は君子にして心は小人なるかな。唐本を讀むには直合倒合偏合奇合とて四つの手びきあり。是をさへ合點すれば、たとへ新渡の讀みにくい物でもよめぬといふ事なし。御所望ならば教へて進ぜう」といへば、「有やうは手前も讀

二　腐儒の智惠自慢校合の違うた身代

次に比企判官まかり出でて、「いかにも土肥殿申さるゝ通に、儒學と申す物は、五倫をわかちて人の人たる道を教へたる物なれば、上もないよき教にて、めい〳〵の家業を第一にして、其家業のたつが道と心得候へばよけれ共、惡しくすれば人參が人を殺し、佛たのんで地獄へ墮つるやうな事あるべし。此境をさへ知れば、聖人の教身にしみ〴〵とためになるべき所に、近き頃鎌倉桐が谷邊に、風閑といへる儒醫の息子閑才といへる者ありて、學問をこのみ、次第に長じて莊子に耽り、莊子もまだ前めなる見識ありとて、老子經に心をゆだねて、道の道とすべきは常の道にあらずと、めつたに高上なる事ばかりいうて、商賣がらとて、何見ようとまゝなる唐本に博くわたりて、詩文は盛唐の風でなければと、今の文をいやしめ、日本古來は白樂天を用ゐて手本とせしゆゑ、詩文が俗なとと、世上の學文を三文もせぬ樣に見くだし、すこしにても我にまさる學者あればいみ嫌ひて、顚倒がちなる文に作りてそしるを學問と心得、自分には韓退之

から感じいりたるかけ聲、所詮獅子に似た似ぬは褒められまじければ、舞臺であがくあがき樣のよいのを褒むるばかり成るべし。舜を學べば卽ち舜と申候間、かやうの眞似はふつ〳〵御やめ遊ばされ然るべし」と、少し膝を直して、柴崎がかりにて撥をしやに構へて申しければ、彌三郎大に立腹して、「うぬ人のなぐさめにこそ呼びたれ、其上うぬが藝をせぬのみならず、其身にもかまはぬ謠の難論一座へ慮外、それ程小歌淨瑠璃が心にかなはずば、人の座敷へ招く共來ぬがよい。御客がたへの無禮、此過怠として鎌倉中をかまふ」と、座敷をほい立てければ、まだへらず口にて、「三度いさめて聽かざれば去る」と、はふ〳〵玄關へはひ出で宿へは歸りたれ共、鎌倉中に住む事かなはず。まことに座頭の杖をうしなうたるに、如くの字のいらぬ身のはて、食ふ事のならぬ段に成つて、一端活然と合點がゆき、小歌のだんか、池のどんがめならばずほんほぼんほへを唄ひて、在々の門に立ちて、「過つて改めたる目くらに、一錢下りませい」と申し步きたる由承り候」と申上げられける。

姥が山めぐりするぞ苦しきと申しまするが、夫程くるしくば、人の頼みもせぬに肩をかさいでも大事ない事、その上山姥は生所も知れず宿もなしとの事なれば、そのまねを各様がなさるるは以の外不吉な事と存じまする。然ればばけ物か幽靈か、子を失うたきちがひか、扨は道理もつまぬ軍物語か、木曾殿の跡をとぶらひに出でて、兼平が事計聞いて埒明けて仕廻ふ大だはけのまねが、隨分傳授事と申すが、悋氣深いめらうがあつて、鐘の供養に參るとて、石壇でじだんだ踏む所を、いきづみまはつて鼓打つを、よいや〳〵と褒むるも舞ふもかたはらいたし。猩々といふけだ物が酒にくらひ醉うてひよろつくまねを、みだれと名附けて、足もとはよろよろと弱りはてたる枕のゆめの、さむると思へば泉はそのまゝ、つきせぬ宿こそ久しけれとは、さりとてはいやな事でござりまする。禮記に猩々よく物いへ共禽獸をはなれずと見えたるさへあるに、渇しても盜泉の水を飲まずと申すとちがひ、畜生に酒をもらうて飲むをよい事と覺えたるは、にが〳〵しき業かな。其上が石橋とやらん申して獅子の狂ふ體、高で昔から日本にない物なれば、どの樣にほだへても、あれが獅子のくるふ體かと、鼻毛ぬかずにおく衆が、棧敷

數取出してつまぐるもあれば、亭主彌三郎氣毒がり、「さらばわつさりと一さし舞ひませう」と立上り、「寺はかつらの橋柱、立出でて峯の雲」とうたへば、一座同音に地をつけて舞ひをさめし時、勾當しがみ顏にて、「此謠も大悲應護のうす櫻と申す文句がいやでござりまする。あつたら櫻を虚無寂滅の異端へおとして、佛ぐさいつくり樣、第一地獄極樂はない事でござれば、末末の人でさへ小學問あればとりあへぬ事を、申しても御身がら不相應の文句にて御舞ひなさるるは、外聞もいかゞと存じ奉りまする。惣じて謠と申す物は、おとなしき人の口にかけて、仔細らしう謠ひませう物ではござりませぬ。高砂の類は松のばけ物でござりまする。兼平や箙は、此をさまれる時に戰鬪をして何になる事とおぼしめすぞ。賴政がまかり出られて、しかつべらしう自身の高名を語らるゝ事かと聞いてゐれば、田原の又太郎が手がらばなしを、我事かなんその樣にいきほひ猛にかたり、ついまけて仕廻うた所が、あはれなりけりとの事、死んでも敵は敵ならずや。其かたきの軍勢から手がらしたゆゑ、味方が負けたの物語は、自身の恥をならべる樣な物と存じまする。又山姥と申す謠は、やすむ重荷に肩をかしなどいうて、跡では、山

艶鶴と彌三郎がつれ節にて、「吉野の山を雪かと見れば、雪ではなうてノウ。花のふゞきでヤア是のう」と、はりかけて見れ共勾當一圓うかず、「ヨウ思うても御らうじませい、雪が降ればつめたいに、花の春めけるとは格別の所をわきまへぬは、よく〳〵の大だはけの所爲と存じまする。尤かく古歌にも空に知られぬ雪ぞ降りけると、花の散るをよみたれ共、高で戀歌が本になる敷島沙汰は論ずるに及ばぬ儀と存じまする。ハテ氣の毒や。神樂歌催馬樂かと存ずれ共、是は三味線にはのりがたし。論語に節つけてうたふ時節もあれかし。せめて平家を語らんと思へ共、句切々々が喉につまる樣ななまり言葉、いかに座頭に成り果てたればとて、鼾かいてうなるやうな事を、大事さうに語りませうやうも御座りませぬ。此頃承れば、わしはお前に引きわかれ、片時いきて居られうかなどと申す淨瑠璃もござりますれ共、鄭聲の雅樂をみだる事をにくむと孔子も仰せおかれたれば、口のはに懸くるも氣毒に存ずれ共、只今三味線にて黃鐘の三の端を彈いておなぐさめ申しませう」と、さわぎ立ちたる中へ、一締しめて爰を大事と彈きければ、一座皆々、是は當麻のねり供養に參つた樣なと後生心に成りて來て、ふところより珠

るが、上座より香久山一曲との所望、三味線ついで調子あはする内に、宇都宮はや唄ひかけて、きぬ〴〵の曙の睦言いまさらにと、はり上げてやれば、勾當撥をやめて、「おそれながら彌三郎様は、申してもかるからぬ御身、何ぞやその小歌は、男と女が寢てるてのわかれ様をつくりたる文句、夫婦別ありとこそ申すに、先は御一座へも無仕附なる唱歌と存じたてまつれば、三味線は御免ねがひ奉る」と申すに、虎も龜菊も興をさまして、「それならば色氣のない事うたひやんしよ」と、「アレみさいナア、筑波の山の横雲、横雲がナア、夜の間に近くなれかし」と唄へば、勾當かぶりをふり、「雲は地氣の蒸してのぼる物なれば、造化の功なる事誰か知らざらん。然るにそれを、夜の間にちかくなれと願うたり共ちかくなるべきや。人意何ぞ造化にかたんや。かた〴〵無理なるいひぶん、聖人の心にはかなふまじき」と不機嫌なれば、一座酒の醉もさめて、是はく〳〵畢竟盲目先生を招いて、御講談承る樣な物と、欠たら〴〵なるに、梶原平次さゝやきて、「キャツたしかに三味線を得彈かざる故、人々の小歌に難を附けてのがるゝ成るべし吉野山は三味線の初入なれば、よもや知らぬといふ事はあるまじ、誰そうたひ給へ」とあるに、

御白拍子少々召しよせ置きたり。打混じで、底意なきしるしに、大礒化粧坂へ申しつかはし、いづれもへ無禮にならぬやうに、盃の酌とらせ申さん」と、斯樣の事も武門のつきあひはかたくろしく、名題の遊君あらぬやうに、ことわりてのうへに呼出せば、手越龜菊、大礒虎をはじめとして、また、柳があゆめば花が物いふ座敷のざはい、さいたおさへたあいきやう有りてぞさゞめきける。中にも著背河の艶鶴といへる十八九なる當世姿。舞の上手隱れなしとて、客方より一さし所望仕りければ、「何ぞやはらかなる歌事をまひ候はん」といふに、工藤は鼓の上手、下河邊庄司は横笛の名人なれ共、三味線の彈人に事を香久山勾當、呼んでこいとはしらず、使は大名の勢ひ、間もなく勾當參上して、いづれもへ御目見と、行儀よろしくむざとは笑はず、座頭には實面なる取なり、元來此座頭は谷崎睡顏といへる偏屈儒者の子にて、七歲の時庖瘡にて盲となりたれ共、幼少より儒書の講釋數年聞きなれ、およそ儒門のいきかた覺えながら、親のあはれみにて後の渡世とて、琴三味線を敎へさせ置きける故、勾當にまではなりたれ共、三綱領八條目の敎心にわすれず。ちと固必の質なれ共、うそつかず大酒せぬを取得に、歷々へも招かれけ

一 座頭は杖より三味線を引事過ぎた儒學

偉なる哉武德、凶徒西海に亡びて後、天下の威鎌倉に一統して靡かぬ草木もなかりければ、御大將源二位頼朝卿、諸大名をめされ、「夫治れる時には文藝を以て伎冠とし、亂れる時には武術を以て功楓とせり。今四海波靜なるに當りて、鎌倉中の谷々において、一藝に名ある輩を書きしるし指上げよ」と仰出されければ、因幡介大江廣元、「謹んで仰かしこまり奉りて候。諸藝の妙手あまた御座候といへども、藝を業とするものは、やゝもすれば一癖ある物にて候。ひとつは御慰の爲、一座の面々聞きおよばれし中にも、一興あるべき物語もあらば、申上げられ然るべし」と申されければ、土肥の次郎實衡すゝみ出でて、「是は御尤なる趣向、先某が承りたる噺より申上ぐべし」と、思ひ出して申されしは、「此まへ宇都宮の彌三郎かたへ、工藤一臈左衛門尉、和田新左衛門尉など十七八人、拙者ともに招かれ、終日の饗應美つくしたる上、暮懸りたれば、亭主實衡、「めでたき出會、本膳も相すみたれば、懇友のまじはりなれば、今宵は

出して戻りにくい色道の悟
粋に成樣を指南車の積をしらぬ唐物商

第三　和尙の相撲ずきは四十八願の手取

行司の團には依怙のないうき足
水鳥のやうな身の上追立てられても
こりはてぬ獨相撲がつい二人ずまふ

鎌倉

諸藝袖日記 巻之一

目録

第一 座頭は杖より三味線を引事過ぎた儒學
賴朝卿の御まへは諸藝の鏡臺
掛合の世間咄に長言の退屈欠
千里あなたの古語をくりじめの二上り
第二 腐儒の智惠自慢校合の違うた身代
唐音での返答につまる禪僧のくわらかけ

序

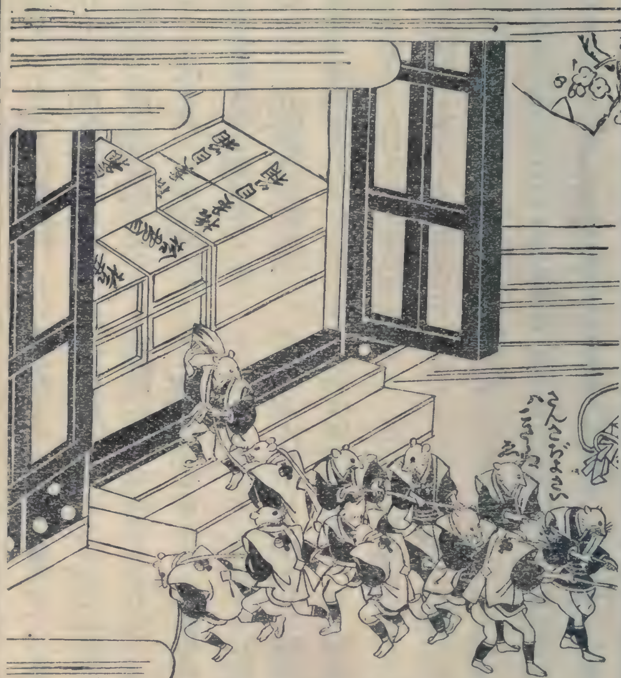
往昔の淨瑠璃に、鎌倉袖日記とかやおもひ出でて、諸藝の風骨を、及ばぬ筆に書分ちて、いつゝの卷の笑ぐさとは成しぬ。才おろかに文拙きは、これも亦作者の風骨と見許し給へかし。恐惶謹言。

寛保三つの春亥正月二日　　作者

ざりければ、貧乏神もたゞ住居の成難くて、夜の間に紙屑籠より這出で、此家を迯げ去りぬ。是より彌富貴にして二代長者と仰がれ、藏に藏を立てならべて、都一番に大福人と成りて、豐なる御代にいつ迄も變らず住めるこそたのしけれ。

點でござるが、人の子の事を外から申すは惡う御座れど、お仕合も此方一代切と見えまする。此中御自分の名代に御子息町振舞に出られ、東山にて取持の體を見るに、中々座持にて酒合萬事公儀ぶり、酒宴に長じて三味線おつ取り一節の淨瑠璃小歌聞き事にて、御子息一人で色を上げ、町中の評判、天晴親父にまさりたる利發者との事なれ共、身どもが氣には一つも入りませぬ。金挊ぎ盛の若き身を持ち、外の事にあれ程心が移りては、肝心の商賣の道に疎う、帳の附落し請取物の失念、五匁七匁の銀の事はきたなびれず、あの調子では始末する氣も出ぬもの、紅裏の下著延紙も滅多遣へば、貧乏神が皮肉の間に入りて狂はすと存ずれば、末々迄家相續させうと思召すならば、息子が貧乏病の養生の仕時今なれば、江戸の大商人の方へ手代奉公にやられて、嚴しき主取をさせて、身に取附いた貧乏神を拂うて退ける御思案」と云はれけるを、此親父惡うは聞かれず、近比の御異見と、十八になる息子を二萬貫目持つ身として、江戸の三井とやらんの店へ、若い者奉公に出され、五年過ぎて取戻し見世を捌かせられしに、儲けにくい金銀と云ふ事を好く學問して歸りければ、商に油斷なく精を出し、費なる事にむざと金銀を使は

に地を謳ひて慰まれしに、今一人の銀持は、若い時から今に一寸内を離れず、目鏡をかけて自分大分の請拂ひをして、片時も隙のなきを我と悲み、樂せらるゝ福人の方にゆきて、「此方と我は若い時から同じ拵手で、同じ樣に銀を儲け、今は隣町にも肩を竝ぶる者もなく、互に負けず劣らずの身上なるに、貴殿は十二三年以前から、晝は物見遊山に出られ、夜は相應の友集して樂まれ共、商事を始め萬事に違ふ事もなさゝうに見えまするに、我等は今に苦勞やまず、一日談義參さへいたさず、不斷世話を燒きまするが、此方はどうした仕廻して樂をなさるゝ事ぞ。ちと其樂になる程の指南を受けたい」とあれば、「それは此方にまさつて、身共は果報な所がござる。其果報と申すは、よい手代共を數多持合せて、それ〴〵に器量を見立てて、商事を始内外の用向迄をさばかします遊人、自身いたさうことがなさに、自ら遊散に出て、心を慰みます。此方は以前から奉公人緣なく、今迄によい手代と云ふが見えませぬ。御自分でござるゆゑにお世話計りで濟みます。うろたへた主なれば、何の昔に身代は若い者に潰されさしやる事ぢや。身共娘一人持ちてござれば、是を重手代宇兵衛と夫婦に致し、家を讓り彌樂をいたす合





分儲け溜めて死ぬべし、黄泉の便にはならねども、殘して子供が鼻を高うさせて、今日は御親父樣の御命日ぢやと、町振舞も年寄が氣をつけて、延ばさす樣にしておくべし。子は親の時よりも挊ぎ出して、身上格別仕上げ、隣の家を買ひたし、年忌〳〵の佛事を丁寧に勤むべし。諸藝に達し其身いか程利發でも、無藝無能鈍き男の、銀持にはたてづかれず、脇から尤もにして、貧者の道理は聞く者なし。是を思うて不斷渡世に油斷する事なかれ。世に身をひとつ過ぎんとて、寺方へ魚料理してかくし賣の肴屋あり、婦人血塊の療治と名を付けて子をおろして廻る醫者有り、持齋する道心者が、竹の串を削りて鰻屋へ賣るなど、偶〳〵生を受けて世を送れる甲斐なし。活計は草の種の色品かへて世間にかはらぬ商賣多ければ、何をしてなり共生活に過ぎてゆくべし。たとへ利を得るとても、道に背きし事にかゝつて、儲け溜めたる人の末の續きし例なし。爰に中京の商人二人、若き時より挊ぎて萬貫目といふ銀を仕出來せしに、一人の福者に四十計から樂に身を持ち、每朝誓願寺へ日參して、それから直に四條の芝居を見物、夜は碁友達を集め、又は囃子を興行して、同音揃はねど我内の思出は、拍子が合ふが合ふまいが、心儘

月花を樂み捨てて、世事を捨てて、一人使うて世事を捨てて、

を求め、殘る金にて田地を買ひ、我に劣らぬ律氣なる男一人使うて世事を捨てて、月花を樂み
老を養うて、豐に八十餘歲迄くらされしとかや言傳へ侍りぬ。

繁昌の盛り花の都に二代の長者

梅椿も室咲はかじけて面白からず、時節と春の梢自ら詠もよし。柳に去年の水仙を活けまぜて、釣釜のたぎりを聞く樂何かあるべし。此心侘數寄を好しといへど、根から事たらずして樂なし、世を心の儘なる人の茶事は、不自由なる體にしかけたるこそよけれ、平生の事は猶更なり、分限者の雪の朝の紙子、肩當火打も紬の茶色面白し。貧者の紙子物好に仕てからさうは見えず、肩當の淺黃緞子、氣を張つてせられてから、刀袋の貰物と見立てられ口惜し、たとへば地薄き似せ八丈を著て、絹被ふかくお物師腰元、手代久三を連れられたる內儀のは、絹屋が見ても本八丈と見做し、供なしの奉公人女、奥樣の著落しの本八丈を著て通りても、似せと落しつけていへり。兎に角昔も今も銀持たぬ身は、萬事につけて無念なる事數々なり。親は隨

な佛又右衞門も呆れて顔を眺め、「さりとては無體なる云分、尤も此方が拾はれしに紛れはなけれど、身どもが留めねば元の川へはめらるゝ筈なり。然れば婆の禮金は、我等が手から此方へ直に渡さう道理曾てなし。其時に此又右衞門が留めずに川へ再び箝められて、今又拾ひ上げると思うて、金が欲しくば、婆を拾はれし元の川迄大義ながら御出で有るべし。我等金を持つて參りて、其川へ捨て申さん。其上は水入なり共して御勝手次第に、川でお取りなさるべし。是が又元へ戻す了簡といふもの」といへば、元より傳兵衞水練の達者なれば、「いかにも一段の了簡、いざ是から直に行くべし、金を持つて來られよ」といひける程に、又右衞門佛壇の下なる小判を財布に入れて懷中し、以前拾ひし川の邊へゆきて、財布ぐるみに打込めば、傳兵衞心得たりと丸裸に成つて水中へ飛び入り、あなたこなたと水底を探す處に、何かは知らず傳兵衞が兩足取つて引込み、是はくともがけど離さず、終に底へ引込まれて、魚の餌食と成つて失せけり。又右衞門は眞の金は其儘御前に置きて、叩鐘を財布に入れて傳兵衞に一ぱい水を呑ましぬ。其後此三百兩の金にて身もくろみ、墨染の里を立退き、都の中も物喧しとて、嵯峨に小家

になれば、いかな〳〵一錢にても申請ける事はせじ」と押返して、茶の下燒付け空嘯いてゐたりければ、文五太夫感心し、「誠に今の世の聖人とは貴公の事なり、さりながら孔子子路の牛を受け給ひしを賞美あつて、子路が牛を受けしは、子貢が金を取らざるより遙に優りたり、子路に習ひて今より後水に溺るゝ者を、救ふ人多からんと仰せける由、然れば只今此金を受納あつて給はらば、又貴殿にならひて人の命を救うて、禮物を取らうと存じ助くる人多かるべし。此道理を聞き分け、是非に納めて給はれ」といへば、又右衞門打諾き、「いかにも〳〵至極なる御詞、なるほど請けん」と釣佛壇の下に入るれば、文五太夫悅び母を駕籠に乘せ申し、又右に暇乞して籠の里へ立歸りぬ。家主の邪慢の傳兵衞此事を聞いて、こりやよいねだりものと大脇指を差して、「又右内にか」とつつと入り、「誠や其方は川流の婆のかはりに、大分の金をとられしと聞きしが、何とて身どもには默つて納めておかるゝぞ。根元婆の拾主といふは我なり。然る上は其方其金を壹兩でも取らるゝ道はあるまじ。只今殘らず渡さるべし。日比は佛の又右衞門と思うてゐるに、格好より橫道な人ぢや、早く出されよ」とむつかしい顏して云ひければ、いか

る由、是諸佛神の御加護とありがたく覺え、「先御在所さへ知れぬる上は安堵せり、一先是より私宅に歸り、妻子にもいひきかせて心を休めさせん」と舟押戻し家に歸れば、日比高く建てたる屋敷なれば、余所よりは床の上なる水も引きて、妻子家來相集り、旦那の身上如何と安き心もなかりし所へ、文五太門口迄船にてかへり、「諸佛神の御惠によつて、母妙曼は伏見の佛又右衛門といふ人引上げられて、介抱して給はり恙なくおはするぞ。譬へ藏々の金銀諸道具は殘りても、母を失ひては生きてゐる所存にてなかりしに、是ほど嬉しき事はなし。然れば片時も早く迎にゆくべし。扨又右衛門へは何程の禮を勤めても飽き足らねば、先當座の禮として金三百兩遣すべし」と、金藏より取出し、財布に入れ首にかけ、母の著替を持たせて悦び勇み出でけるが、次第に水も落ちてさのみ道にて難儀なる目にも逢はず、墨染の里につき、佛又右衛門方を尋ね安堵して内に入れば、又右衛門は我母に仕ゆるごとく中々情ある振舞、文五太夫感涙を流し、偏に母が命の親と、數々禮を申して後、件の三百兩を出し、「是は私母を拾ひました祝でござる」と差置けば、又右衛門顏色變り、「我此禮を受け納めては仁の道に違ひ、欲ゆゑの情

時に利を得しも、此節は人々に錢の用意あるまじければと推量して、價に何なりともそれほどの替りをとつて遣るといふ頓智より事起れり。熊手をもつて川流の物をたゞ取るよりは、人の飢を助けて其身も德をとる事、是ぞ眞の儲け成るべし。然るに山城久世郡綴喜郡の在々は、大方和藥を作る所なり。其内當皈地黄多ければ、此大水にては皆流れて廢たるべしと、其翌日當皈地黄を買込み、餘程のあがりをうけて是にて又儲込み、近年の出來分限者となりぬ。さる程に笠置の麓里、櫟村文五太夫は孝行第一の男なれば、水づくを見ると等しく、妻子家財を打捨てて、先隱居へ駈けつけ、母を新しき長持に入れまゐらせ、究強の男二人に舁かせ、笠置の山へ退け申せしに、次第に水增して二人の男は終に道にて沈みはて、長持計りは其儘に何處ともなく流れ行き、母の行衞の知れざれば、文五太夫は小船一艘才覺仕出し、是に艫を二挺たて、下人とともに三人乘り浪を押切り、彼武文が松浦を追ひし勢のごとく、飛ぶより早く近在はいふに及ばず、木津川迄尋ねゆきしに、流石親子の緣盡きず、佛又右衞門が流したる所書の屋根板、何十枚か流れ來るを、不思議さに手を延して拾ひあげて見るに、伏見の墨染に堅固にておはす

勝のごとく、時の間に三石のつくね飯を賣切り、價に取りし濡米、其外色々の荒具は早二艘に積み餘りぬ。權九郎固より心積りして用意せし事なれば、舟の中の大釜三つを焼立てさせ、替りに取りし濡米の中にて、白米どもをあらましに撰分け、兼て船中に汲込み置きし清き水にてすゝがせ、飯にたかせて又右のごとくつくねさせしに、隣在所から聞傳へに水を渡りて、濡米又は手元に有合の道具を持ち寄りて、是を買つて飢を助かり、悦ぶ事大方ならず。賣手の幸買手の悦びとはかゝる事にや。元來權九郎情ある商人にて、十五文に當らぬ程の物を持來る人にも、心よく替へてやれば、主のしれぬ牛を引きて來て、是に替へてくれといふに困りはて、「是よりは目前に流れて來る道具を拾うてござれ。何にはよらぬ替へて進ぜう」といふに心附きて、思ひ〳〵に古蚊帳古布子、又は古木戸障子、さま〴〵の物の流れ寄るを拾ひ來て、替へに遣し取りて歸れば、何十石焼きても暫時の中に賣切れ、價に取りし濡米道具共は、四艘の船に足の入るほど溜れば、いざ一歸り歸らんと、夫より押し戻し宿に著きて、件の替りに取りし物共を船より上げさせ十露盤して見るに、半日餘に大分の儲け、急な事に才覺なる仕出して、暫

銀儲けの勢大水より出てくる思案

河邊の村里は大方水つき、親は子を尋ね、子は親を見失ひ、妻は夫の行衛を知らず、泣き悲む有樣、目も當てられぬ次第なり。爰に世渡に油斷なく、儲ける事には人より先に鳥羽の里に權九郎とて、商人半分の百姓ありしが、在々に大水つきしと聞くより早く伏見に來て、大船四五艘借り出し、手前の男二人の外に三人の雇人して、俄に米三石食にたかせ、飯椀を合にして一盃を一つ宛に束ねさせ、一艘の船に大半切を幾個もならべ此中へ入れさせ、扨香物桶五つに大釜竈ともに三つ迄入れて、艫の間に薪を積せ、殘る四艘の空船も、此船と一所に押させ、近在を廻り、「つくね飯一つ拾五文づつなり、錢の持合なき人は、水につかりてほとびたる米壹升と替へて參らすべし。米も流して持たぬ人は、鋤鍬又は薄刃菜刀、桶傘何によらず、流れ残りの荒道具と直打を合せて、それ程數を進ぜう」といひければ、何が昨日の晝から煙草の火さへなくて、今に湯だに呑まぬ人のみなれば、是は天の助けと悦び、爰へ五つ彼處へ七つと、奪取

十里ある所なり共、私送りて參らせん」と情深く申しければ、此婆手を合せて拜まれ、「佛といふは其方なり、我子は近在に匿れなき大孝行の者なれば、三日共行衛知れずば、悲みに堪へて續いて水に入つて死すべし、若い忰が命のほどを思ひやられて不便にござれば、とても御情に、無事で爰の世話になつて居るといふ事を、急に在所へ知らせて下され。妾が所は笠置の麓里に、櫟村文五太夫といふ大庄屋の母妙曼と申す」とあれば、又右衞門具に聞屆け、「早速に御在所へ御知らせ申したき物なれども、舟路も陸もひとつになりて往來絶えぬれば、今日明日などには中々飛脚も參らじ。何卒急に御無事の樣子を知らする思案も有るべし」と、暫く工夫し屋根屋へゆきて、屋根板五束買つて來り、先の名所我所名と書附け、無事に我方におはする由を、彼屋根板一枚々々に書きしるし、濱側へもち行き、二枚宛分けて五束共に殘らず川へ流して歸りけり。

其迄はのけたれ共、今朝から働き疲れ果てて動かしがたし。言兼ねたれども手傳うてたもれ。其賃には今年中の宿代を遣るぞ」と、己が心に引比べて、さもしい事を云ふ奴と思ひながら、家主なれば嫌ともいはれず、裾まくりして飛込み、彼長持を手がきにして、傳兵衛が宿まで持ちて遣れば、傳兵衛宿へかへりて重きを悦び、先内忍ばしく長持の蓋を取れば、七十ばかりのお婆玉子色の袷かたびら著て、半分は死にたる心地にて、口の中にて念佛のみ微に聞えぬ。傳兵衛大きに腹を立て、「死損ひめにかゝつて、可惜骨を折りし事の悔し。己も定めて嫁に嫌がらる老耄ならん、婆婆ふさげなれば此度を幸に、元の水へ投げ込んでやるべし」と、長持より情なくも引出し、引かたげて行かんとするを、又右衛門袖に縋り、「道具と思ひ拾はれしに、人間の命を拾うてやり給ふ事、千萬兩の金にまさる大善根、平に介抱して先樣の所を聞いて、送り屆けてやりたまへ」と、いろ〳〵といへども、「人を助けんとて、錢もとらぬ事に辛勞するものか、助けて善根にならば、其方に遣るぞ」と婆を引立て渡しければ、名さへ佛又右衛門、是は滿足と彼のお婆をかき抱き、我内へ歸り粥を炊きまるらせ、「名所を仰せられよ、誓へ十里二





切れかゝり、里人太鼓打續き、末々の枝川諸木も葉つきの筏を流し、元より濡を商賣にする色茶屋の島も床の上五六尺水上り、泊客も寐耳に水是はと驚き、勤女も自ら流れの身と成り、分知自慢の大臣も、泳ぎかゝりてするが川へ穽りぬ。近所の家々は立ながら御座船の如く流れ寄り、諸道具川中に夜市を見るがごとく、銀箱は浮き沈み、皮財布蟇の泳ぐに等しく、日比は自由を達する金銀も、今の急なる命のかはりにはならず、欲人も肌つけ金を捨てゝ、少しも身輕にして水に沈まぬ迯思案、一壺も千金なるとは此時の事なるべし。子をさかさまに老たるも若きも、手に〳〵桶持つて内へ入來る水をかいだし、寐衣脫ぎ捨て、皆裸百貫の男山も浪の中にたゞよせられ、末は一面に海のごとく、親妻子の生死も知らねば、さまざまの物が流れ來れど、誰が目をやる者もなきに、彼邪慢の傳兵衛下帶ひとつに成つて、己が心の熊手をひつさげ、川流は拾德、長者になるは今ぞと、新敷き長持の流れけるに目をかけ、立泳して熊手引かけ難なく淺瀨へ引上げ、是より我宿へ持つてゆかんとするに、獨して叶はず、いかがはすべきと思ふ所に、借屋の佛又右衛門、濱川へ水見舞に行くを見かけ聲をかけて、「親類共が道具を是

一生の中人の物を負はぬやうにと、朝夕の買物も其日拂にして、内證は掃切つたるごとく竹箒の細工をして、いまだ妻ももたず獨身の暮し、出家よりましに墨染といふ伏見の片里に、貧賤にしても樂みて世を渡る男あり。此家主は邪慢の傳兵衛とて、一身欲で堅め茶屋方への女奉公人の肝煎をし、又筒持せの亭主分に雇はれ、人をねだりて迷惑がらする事の名人、兎角地道なる商の分にては、急に大銀持には成難しと、邪なる事にのみ眼を付けて、あはれ向ひの赤犬めに角が生えがし、四條の見世物芝居へ貳拾兩には賣る事と、不斷只取る樣な事をのみ心懸けしに、烏の頭も白うはならず、黒き雲俄に重り大風吹き來て、年々八百屋へ渡して大錢取りし裏の大和柹、青梨子早桃の木どもを、宵の内に根を打かへしぬ。夫より次第に雨交りに風強くなり、夜舟も出ねば旅人も問屋旅籠屋へ立歸り、京橋の川端には人ぎれなくて、蕎麥切賣も溫置の分捨たるが悲しく、身上りして喰うてしまひ、倒れ次手に燗した酒を買つて呑み、我物喰うて大家殿の屋根のまくれる所に、把木をおいてやり、思はぬ骨を折りける。夜明けて風は靜まれ共、水は盛に、日馴れぬ家ほどの浪かさなりて、岸根の崩るゝを嘆くに、水嵩さまりて堤の

川流れの道具に目を掛くる熊手性

それ倹約といへると、吝嗇といへると二つの差別あり。倹約といへるは道に叶ひて奢を省き、成すべき事には財を惜まずして、費なる事をば曾てせぬ事なり。吝嗇といへるは使ふべき事にも財を惜み、貯へ積まん事のみを願ひて、欲ふかく嗇き事なり。されば世間の分限者に品々あり、其身相應の衣類を著て、朝夕も折節の魚鳥を味ひ、貧なる親類を取立て下々を憐み、神を祭り佛の道を願ひ、親に樂を與へ他人の義理を缺かず、妻子の身持を輕く、乘物に乘せず費なる奢をやめて、萬事直にして富貴なるは、天の惠深く人の本意なり。世の有樣を見るに、斯る福者は稀にして、金銀溜める事の面白さに、倹約といへる名を借り、二親の外仕來りし先祖又は兄弟の齋米を止めにし、小者が仕著の近江布の袖下を短く裁りて、其切を取りて茶袋にするなど、何程金が出來ればとて、淺猿しき心底ぞかし。殊更道理に外れし德を得るもの、當分榮えても滅亡するに程なし。爰に佛又右衛門とて生得律儀にして、應ぜぬ分限を願はず、ただ

叩鉦を小判と見て大水を呑む欲人

繁昌の盛花の都に二代長者

言合して排出した二人の福人

身の樂は息子と手代が性次第

福神達の守りめに貧乏神の欠落

商人軍配團 卷之五

目録

川流れの道具に目を掛ける熊手性

内證ははきちぎつた竹箒の細工人

浮に浮いて來る色茶屋の小座敷

川流れは拾徳の長持に大はまり

銀儲の勢大水より出てくる思案

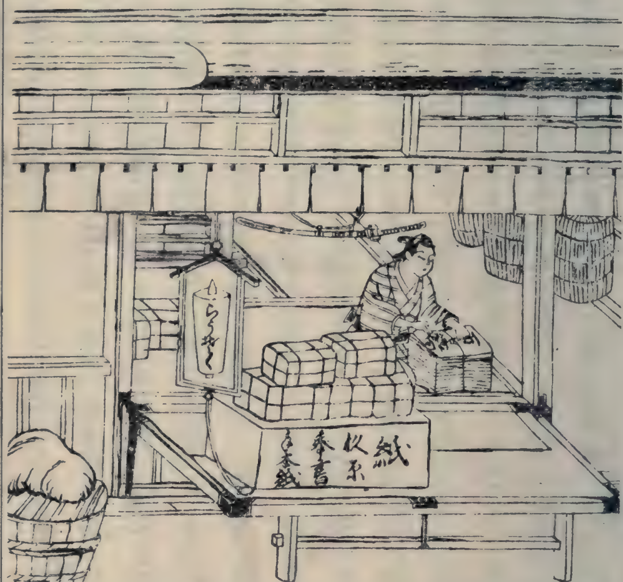
腹一ぱい儲込む飯屋の仕合

次第に水が増してうたてい地黄畠

の手厚き身代と、人皆羨み、善き商人の手本紙と申し侍りぬ。

く者は爰にて求めぬ。其後婚禮の有る所へは、知らぬ家へも小腰屈めて御見舞申し、「ため紙の御用仰せ付けられ下さるべし、御取込の中なれば、五折づつ水引かけ、附尉斗して、お手のかからぬ樣に仕り進ずべし」と、あぢまやかに申す程に、「なるほどそれならば、見つきのよい紙を二〆許り持つて來て、五折づつに分けてたもれ」と、つい請取つて五折で百五拾ぶんと申す所へ、二百折持ちゆくに、是程はいらぬといふ。「お家がらなれば、思召の外のもの。若又いらねば損ねますものではなし、何ほどなりともお戻しなされませ」と、置いて歸りしに、追つかけはいうて來れど、返す家は稀也。是よりさま〴〵氣をつけ、寺々の開帳所、萬日の回向、扨は十夜の米袋の入口を聞出し、袋の書付の板行ぐるみに袋に仕立てて、千で何程と、納所坊主又は念佛講中の世話やきより請取り仕立てて渡しぬ。此才覺にて、後は先々から書出紙も拾枚繼何十本と誂へて、二季の際は隙なく、前から山のごとく繼ぎ立てゝ、小商する者迄も、二卷三卷買つて歸り、次第々〳〵に富貴の身となり、卅年埃かづきし貧乏紙を、よいみの紙の内證に漉破れなく、京で一番の紙問屋と成つて、三條通に棟高く、子孫續きて根強き礎、其堅き事岩國

すみまへがみ
角前髪の小者を一人呼び寄せ、三百目計が紙を品々調へ、始めて宿を持ちしに、向の木綿屋世話燒きて、「すゝぎ洗濯朝夕の拵も、男の身にては成るまじ。幸ひ新町の漆屋の、お物師を」と肝煎かゝりしに、忠兵衛一圓合點せず、「世間に女房から拵へて宿這入せしものに、立身せし人少し。妻子を育むべき儲のほども知らずして、頭から女房穿鑿して、儲のない時去んでくれとはいはれまじ。必ず下人なしの女夫過は、あひやい夜着のあたゝまりより、好まぬ忰子が多く出來るものなれば、先づ私は此紙屋の門柱の根を踏堅めるまでは、無妻の合點」と、小者には安半紙塵紙を荷賣に出し、其身は見世にゐて、昔旦那方にての一目知る人にも、お寄りなされませいと詞をかけしに、元より古き紙店なれば、折節半切紙の直段を尋ねに來りしに、「百枚に付一匁六七分、隨分お負け仕る、其上お忙しきお家で、是を五百枚共、まだら〳〵と繼いでござるは面倒な物、隙で見世守いたしてをる片手に、千枚でも續立てゝ進じませう」といふに、何が所は室町近くの世知賢き所なれば、是は幸ひ、然らば二十枚繼ぎたして千枚誂へ、調法なる事と、此噂を聞


紙
杉原
奉書
手本紙


紙
いろ〳〵
有

貸しなさるゝならば、一年に宿代四百目宛進ずべし。則ち御入用の六百目は、今から一年半分の宿代、先渡に親子の判で人知れず渡し申さん。然る時は家書入れて町中の判形お頼み被成ず、御外聞も宜しき事」と申せば、親子は飛付く様に嬉しがり、其通りに究めて其月の半より、彼の忠兵衛に紙見世ぐるみに跡を貸して、息子が立退き様に捨てるが有れば拾ふ紙見世、三十年以來苔の生へし商店、元手減らさうなら天晴見事な所ぢやと心笑敷く、己が自慢の思付の商、第一所を見立てず、新見世出して見たきが心一ぱいにて、明いたる借屋の有るを幸に、五條の御影堂前にて扇子屋をいだせしを、忠兵衛聞いて、「萬あれなればこそ、腹の内より都の水を呑み、諸人の賢きを聞馴れし、身過は何しても五人七人は世を渡るべき事成るに、漸う親子三人根附に仕さうな丁稚一人使うて、うぢ〳〵と暮す事軍配の惡きより事起れり。日本に聞えし扇子の名物、御影堂前へ、僅なる扇子店骨折るほどが損にして、終には身代の要走りてばら〳〵になるべし。喩へば日蓮宗へ撞木屋がお出入申し、野郎屋へ子下婆が見廻りに行く様なものぞかし。我埃まぶれの紙見世を望みしは、惣じて店は年數を經て古きが家督なり、不繁昌は其身商

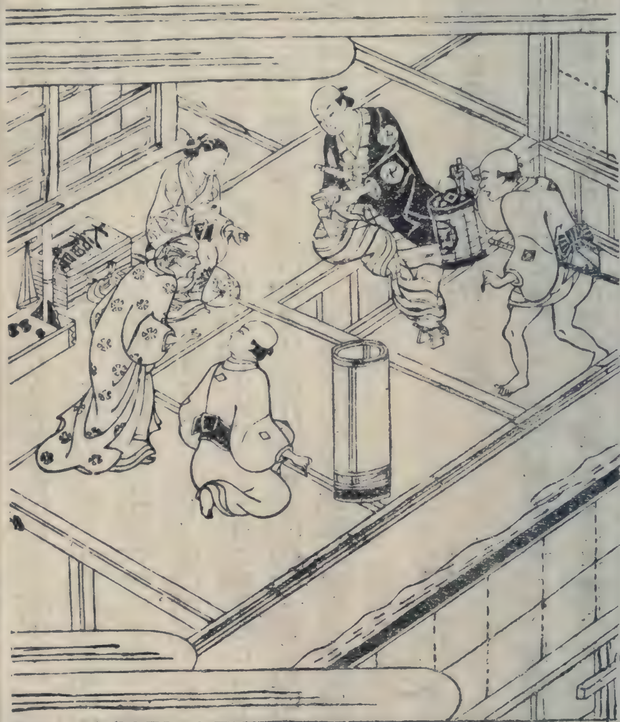
る事と思へば、此紙屋、洗物屋の娘が親分になりて、西國大名の御家老衆へ妾に遣しけるに、本妻になほりてより、親分なれば、一年に拾石宛の御養で、吉野紙の見え透くやうな身代を、厚紙のごとく張つてゆく事と笑ひぬ。彼紙屋の一子當年廿二歲、血氣に逸る若い者なれば、埃まぶれの紙商賣を疎み、親に申しけるは、「御國から拾石宛拜領して、年中空腹目をせぬといふ計りにて、何時さつぱりと正月布子仕た事なく、花の三月にも東山には幕が有るやら、萬日の回向場には鯖の鮨の有る事をも知らず。年中夢で暮す事、人間の甲斐はなし。此二間口の家を書入れ、銀六百目借りて給れ。我思付の商あれば仕てみたし」と、何ぞ儲も見えたる樣に頻にせがみける程に、律氣なる親仁も子に浮されて、貧乏地に生合せし身の上を知らず、「商人は其の氣の出るが仕合の瑞相、六百目が壹貫目にても、古家ながら慥に貸手あれば、思付の商を目論め」と悅ばれけるを、向の木綿屋に衣棚の絹布屋に手代せし忠兵衛と云ふ男、主人倒れられて分散し、生國丹波へ引越され、思ひもよらぬ浪人して、少しの知音有つて此木綿屋に懸人となつて居たりしが、此紙屋の樣子を聞き、竊に行きて親子に對面して、「此紙見世を直にお

し。商人も其如く、内證に腹の立つ事があらうとも、顔つきを莞爾やかに拵へ、賣物を安くつけてけなす者にも、むつと氣な振を見せず、上手をいうて面白可笑く賣りつけるが商上手といへり。武士方出家衆、町人百姓それ〴〵の氣に應ずるやうにもつて參り、僅なる物に度々足を運ばすとも、すこしもふしやうらしき顔をせず、心ながく仕似せれば、自ら招かぬに買人の寄るは知れた事なり。今時現銀見世と大看板出せし所にも、二季の際には大分の書出賦りて、懸乞に廻すも、きつしくなる氣を嗜むゆゑに、初め二三度は現銀に賣渡せど、後にはお乳母殿の若子抱いて來て、紅の襟裏とつて歸り品に、「代銀は祇園參の次手に持つて來ませう」といふに、「いや〳〵現銀店なれば、懸けます事は」と嚴しく言はんとすれど、跡あとの商の事を思ひやりて、「餘處へは懸けませねど、内方の事ぢやもの、成程取つてござりませ」と、是が積りて現銀が終に際銀になる事ぞかし。爰に所も商神の名にしおふ、夷川通にちひさき紙屋ありしが、半紙二〆塵紙一〆、西洞院漉の半切三百枚、合羽の立外の丈長三曲、三十年以來埃がついて、何時一折賣りたる體を見ず、あれで親子三人小者共に四人口は、能くも過ぎらる

牛は己が力にて作れる五穀なれば、喰物あまるほどあるべき筈なれども、明日食ふべき食物もありかね、倉の中の棲む鼠は盗み喰ひする悪しきものなれども、多くの米の中に匿れ居りて、食物自由なれば、人の身上も分々定りたる事なれば、何程に救ひたう引立つるやうに思召しても、親の力にても參らぬ事なれば、强ひて悲しみ嘆きたまふな」と、母に得心させ申す所へ、表を頻に叩く者あり、誰にやと開くれば、甚吉元結を拂ひ、五百目の銀落したる事を懺悔して、「今は世を立つる心にあらず、衣ひとつの外望みなければ、兄弟の好に」と、思切つて申すほどに、甚九郎聞届け本庄邊に庵を求めて、一代樂に養ひぬ。是ぞ世に捨てられ坊主とは此男の事なめり。

正直の頭にやどる紙屋の仕合

商人は遊女のごとく心を持たでは、今時口は過ぎられず。勤女は商賣とて、朝夕風俗を作り顔を琢き、心に合はぬ事にも笑を作り、數萬の同じからぬ氣を夫々に取りて、世を渡る事ぞか





通絶ゆるほどの夜なれ共、茶碗に三ツにて正體もなく、氷の降るも知らず戻り道は夢ぞかし。
甚九郎は夜振舞より歸るに、山のごとくに積りし雪の上を、高足駄にてそろ〳〵立歸り、内に入つて、扨も近年の大雪、足駄の歯に溜りて、既に横投に倒れんとせしが、此杖ついたばかりに危い所を助かりしと、足駄の歯に踏込みし雪、沓ぬぎにて叩き落せしに、雪とともに不思議や石より堅き音して、一間計り向ふへ飛びしを、頓て取上げよく〳〵見れば、今日晝母へ參らせたる勘四郎包の五百目の銀なり。是はと肝を潰し、母に逢ひて、「此銀は今日お前へ進ぜましたる銀子なるが、何方へ遣はれしぞ。私の足駄の歯に雪と共にはさまり、思はぬ銀を拾ひました」と、母の前にさし置けば、母ははら〳〵と泪を流し、「今は何をか隱すべき、誠は兄の甚吉に合力したり」と次第を語り、「同じ兄弟にても、斯迄貧福の違あるものか、無うて貰ひに來る兄は落して行き、有りて遣る弟は拾うて歸る事、前世の宿業とはいひながら、さりとは兄が淺猿しき身の行末を思ひやらるゝ」と、むせかへりて泣かれければ、甚九郎樣子を聞いて、「是皆天命なり、朱文公の詩に、耕牛宿食なく、倉鼠餘糧ありと作りたまへるも、旦暮田を耕す

うて、手形がなくとも借してたもれ」とあれば、弟は固より至孝の者なれば、大方行所は推しぬれども、是を調べず、「何がさてお前の御用ならば」と、兩替の封付の五百目包一個取出して參らせたり。比は霜月始頃にて、寒風嚴しく臺所の火燵を離れねば、母は此銀兄に早く渡したくは思はれぬれ共、弟が前を憚り見合さるゝ内に、程なく日は暮れ、さぞや甚吉が左右するを待ち兼ねつらんと、心も心ならざるに、近所より夜咄にお出でと甚九郎を呼に來れば、あらましに用を仕舞ひて出でゆきぬ。母は嬉しく甚吉を呼に遣し、五百目包を渡し、「是を元手として向後は蓮葉なる事をやめ、どうぞ仕續き重ねて合力受けに來ぬやうにいたすべし。定めて萬事不自由にて、日頃好なる酒も呑むまじ。今宵は殊更風嚴しく、暮れてより雪も降り出づれば、遙遙歸るに寒かるべし」と、下女迄が機嫌を取りて、「おすぎむつかしくと、甚九郎の取つて置の好い酒を燗して、甚吉に呑ましてたもれ」と、親の慈悲とて手づから肴鉢出して、茶碗にて呑まされけるに、甚吉久しう呑まぬよい酒、舌打して三盃呑み、忝いを二三百申して、件の銀を懐中し、「夜もはや更けて候へばお假申す」と好機嫌にて立歸る。夥多敷く大雪降つて通筋、人馬の

ありて、家まで賣つて立退きぬ。世に斯かる呆痴もあるものかな、弟は世の人の讃草となり、兄は笑種に成つて、厄體なしの引事になる奴、末々の語り句にそいつが頬を一目見たい事」といへば、其顏爰にあるものと恥しく、破笠傾け漸う弟が家に來ぬれど、心から敷居が高く、重手代の長兵衞が大黑柱に凭れかゝり、臺所の差引してゐるを門口から招けば、是はと肝を潰し、「幸ひ旦那留主なれば」と先内へ入れ申し、母御に斯くと申せば、母は立出で涙ながら、「家來共の手前も恥ぢず、晝中に男の顏を出して來苦い所へ來たるは、よく〳〵内證苦しきものならん。何卒弟が機嫌を見合せ、少しの事はとうぞ貰うてとらすべし。今にも甚九郎歸られては不首尾なり、晚程夜に入り竊に來れ、先づ夫迄は長兵衞を賴みて、二階になりとも匿れてゐて、母が左右を待つべし」とありければ、さながら二階へとも申し難くて、長兵衞近所の念比なる人の方へ人を添へて甚吉を遣しぬ。弟の甚九郎は町内に用あつて出でけるが、程なく歸るを母は待請け、流石兄の甚吉とは云難くて、「寺參友達の方から餘儀なく賴まれ、何共引くに引かれぬ仕合なれば、一月二月銀五百目借してたもれ。先樣は我呑込みてゐるなれば、此母に借したと思

止めて嘆いて貰ひ出さるゝが勝なり。されば假令に向ふ猪には矢が立たぬとて、直に嘆けば、鬼のやうな者も心の角を折るものなり。殊に母の親はたらしよく泪もろいものぞ」と、近所の者念比にいひやうの品迄敎へて、酒買うて口祝して遣れば、「是は近頃忝し、然らば參りて一廉嘆き出して取つて歸り、各へもくはつと見事に御下配申さう」と、貰はぬ先からはや大氣を申して出でぬ。此の心からは、壹萬兩ありても皆になるは道理〳〵。

過去の惡業身に積る雪の夜の酒機嫌

寒空に甚吉は安部川紙子一くわんで駿河町を通り、我も昔は男山、八幡榮えし時もありしにと、懷しさに我元の家を見るに、人手に賣替りて兩替屋せし天秤の響絕えて、今は軒口に味噌の看板かけしなど、口惜しく執心深う眺め入つたる眼ざしに、味噌屋の下男がうさんらしう氣をつけて、門口に出て目をつくれば、何とやらん氣味惡さに、「此所に兩替屋の甚右衞門といへる人のありしが」とつぶやくを、下男が聞きて、「夫は卽ち此家の主なりしが、其子に甚吉とて奢者の仕果

地道に細い道を怪我せぬやうに渡られよと、異見して遣はされよ」と、貳百兩取出して渡しければ、母は我が貰うたるよりは嬉しく、兄甚吉へ渡されぬ。其後一年も經たぬうちに彼の貳百兩を、何にか仕けんさらりと皆になして、既に回向の金のない段になつて、佛の顏も三度といへど、せう事なさに讀めば泪の溢るゝやうな文を認め、母の方へ遣せば、親の習とて不便には思ひながら、一札まで取りて遣し、取次もせまいと、いかに子なればとて、老年の口から慥に請合ひ、今更何といはるゝものぞと、珠數袋の寺參銀の小粒を、返事に封じ入れ、決してならぬといひやり給へば、此返事を開き見て、自己が仕果はいはずして、咎なき弟を恨み、「人の情も世にあるうちぢや。駿河町の昔のごとく世を張つて居るならば、朔日十五日は禮に參つて、頭もあげまじきに、一人ある兄に少しの合力仕兼ね、今の間は己乞食になつて、親兄弟の頰を汚してやらうぞ」と、ひだるい腹を立てけるを、隣家の親仁ども聞きつけ、「兎角長きものにはまかるゝ世界、兄振り給ひても其の暮では巾が利かず、譬へ一道理があるにしてから、今其の身にて腹立しての言分は、皆強談事に聞えて、人も蔑しき心底と讚をつくるものなれば、その我を

れながら、似合の家に相應の道具を拵へ、妻子を安樂に過す事ぞかし。然らば兄氣に此度は少しの合力を止めて、一度に金子貳百兩參らせん。其替りに此以後は一錢の無心もいふまい、又甚吉がどれ程泣言いはうと、合力の取次はせまいと、勿體ない事ながら母者人の加判で、一札をして取りまするが、何と兄氣は書いて越されませうか」とあれば、「何が扨てそれほど遣つてたもるなら、一札が二札にても書かすべし。今迄は親の讓られた銀を、皆にしたるを口惜しく思ひ、何卒此金で是を買置して、立身をせうぞ〳〵と思うては損をしく〳〵、人には今も惡狂でもしてあの體かと、痛うもない腹を探られ、其方の前も面目ないと、それは〳〵迷惑がつてゐるが、此樣子を聞きたらば、さぞ滿足に思ふべし」と、取做をいはれければ、甚九郎聞いて、「先それからが無分別と存じます。親父は運の好い生附にて、仕合の拍子に乘つて來ての福、損のゆきさうな買置物も俄あがりがして、思はぬ利を得られし事度々なり。それを運の惡い兄氣が、親の上運を定規にして、萬事に太く出られては、損をせられいで叶はぬ筈、合力いたすからは、此金海へ持つてゆき、捨てられうとも構ひはいたさぬが、兎角大氣を止めて、

合力しぬる上なれば、兄ながら何共今は言兼ね、人頼して母の方へ、内證より泣言をいひければ、親の身なれば貧なる兄を猶しも不便がりて、子ながらも甚九郎に口を萎めて、兄が方への合力無心申されけるに、甚九郎聞きて中々承引せずして申しけるは、「他人の事をさへ世話いたす私なれば、況て箸おりかゝみの兄弟の儀、金銀を惜みて申すにあらず、年々五拾兩三拾兩いはるゝに任せ、十年以來凡千兩餘合力いたせども、更に其甲斐も見えず、何時ゆるりと年を取られたる體を聞かず。然れば我等を頼みにして、ない時には何時行きて合力請けて來うと儘と、此甚九郎を當にして暮さるゝゆゑ、金は這りながら其功見えず、年中不自由なる目を仕給ふは、根心に駈込む所があるゆゑなれば、是は合力して進ぜるほど、却つて兄氣の爲ならず。惣じて世間に歷々の親類をもち、慥なる後立有る人程、身上を持ち堅めず、又一門への無心々々の重るは、頼みに思うて平生拵の忽せなるがゆゑに、詰まる所が算用合はず。又一門もなき駕籠舁風情の悴子は、一日油斷すれば明日の喰物無き事を、眞底から骨身に染んで合點して居れば、少しも心を緩めず、張弓のごとく差手引手に儲ける事のみ心がけて一心に拵ぐゆゑ、丸裸で生

石臼もとばすぐらゐに風が吹くぞと、吹かぬ先から騰貴を得たる心地にて、徳のゆく十露盤計り彈きて、是樂にして、心は大船を乘りたるごとく、二挺だてにて吉原へおさせ、太夫をつかんで諸事大たばに出て騷ぎぬ。自己一人が利を得ん計に、萬民の迷惑を顧みず、空を眺めて雲の脚が早ければ悅び、晴天なれば胸を痛める惡人、譬へ一旦利を得る事があればとて、行末のよかるべきや。終には天の咎にて、吉原通と買置の損に大分の跡を潰し、貧乏をするが町の家を人の物になし、今は金椙邊に御札配の願人坊が、袋かたげと相住して微なる暮、米の買置する奴等に、好い見せしめと知るも知らぬも悅びぬ。弟の甚九郎は親の讓りの隱居跡を踏まへ、俵の數を藏に積みて、俵物の商地道にして慥なる方へ預銀、數多の手代共に金袋かたげさせて、いふ事に槌のきくも、大黑殿よりはほうろく頭巾をかたぶけて、日比異見をいはれし親父の御影、過分至極と母を兄の仕果より請取り、奇麗なる小座敷を建てゝ是に入參らせ、朝暮孝行を盡しければ、人皆是を感じけり。兄の甚吉誰異見いはねど獨り色事は止みぬれど、皆になしての上なれば、好い分別が出でてから十年遲し、次第に內證苦しけれど、弟甚九郎今迄大分

貧福の花咲分の兄弟が身代

死生命あり富貴天にありとは、孔子の語なり。然りとて面々の所作家業をも勤めず、我身上の貧福は天にありと云ひ居らば、人の生死は命なりとて、平生婬酒の二つに身をなし、毒魚と知つて河豚汁を好み、さしあふ合點で蕎麥に西瓜の喰合して、死ぬるがごとくなるべし。色々拵ぎて見ても思ふ程に銀の出來ぬを、天命とはいふべけれ。所は武藏野の廣き心の親父、仕合の時を得て、千里一はねの買置物より大分の銀を溜め、二人の子供に讓り分けて此世を去られぬ。兄甚吉には壹萬兩光り輝く、昔小判の駿河町の本宅につけて、仕似世の兩替見世を讓られ、弟甚九郎には貳百貫目、人手に渡らぬ吹出の白銀町の、家に添へてとらされけり。然るに兄の甚吉は大氣に生れつきて、親父の時を得て買置物に騰貴を請け、どか儲せられし事を心地よき事に思ひ、自己が運の親ほどに生れつかぬ肩をしらず、錢小判扨は米を買置きて、此夏の怪しからぬ暑熱のいきりは、どうしても風でなければ醒めず、なんでも當秋は貳百十日放生會には、

我から倦じて出世を思ひ切る髻

正直の頭にやどる紙屋の仕合

賣りたい氣から掛けてやる現銀見世

身代たゝむ扇屋骨折甲斐のない產業

才覺から儲けこむ商人の手本紙

商人軍配團　卷之四

目録

貧福の花咲分の兄弟が身代
天秤に蜘の巣かける兩替見世
一厘二厘はもどかしい買置のどか損
身につかぬ合力金鹽で淵辛き世渡り
過去の惡業身に積る雪の夜の酒機嫌
霜先の火燵あたゝかな内證よし
生れつかぬ果報は親の力では叶はぬ浮世

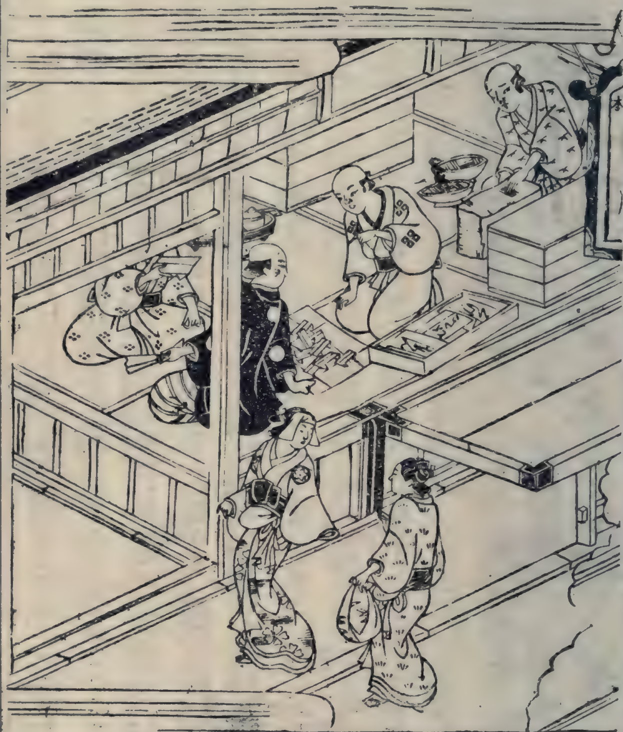
婦ばかり夜の著物さへなくて明しぬ。母親は齒切して、「是程に内證のなり下る迄、知らずに居るといふ事があるものか」と、娘を捕へて叱らるゝを、親父聞きて、「可愛さうに妹が知つた事にはあらず。まだ人を倒さず借銀のないが、兼ての見立の外の仕合と思へば、此度銀十貫目聟に合力して、其替りに妹をもどしてたもれ」と、斷いひて取返し、直に御公家方の御前樣へ御奉公に出されぬ。件の聟は貰ひし拾貫目に家迄添へて打込み、せう事なさに淀堤に出で澁紙を敷きて、曲物に一から十五迄の木札を入れ、右の手に錐を持ちて、よい事がましう鼻高うして、天狗賴母子と名附け、道行人をたらせしを、古手屋へ行かれし姉娘、今年二十五の厄參とて、八幡への參詣、乘物の内から見て、我祝言の時分輕い所へ緣につけらるゝと、心中に父親を恨みしが、今の有難さ親の御影、連合の影と滿足して下向せられぬ。

是は舅役に世話にして救うて遣つてからが、心易く仕よい事なり。其方が好む棟の高い聟が、さあ倒れるといふてからは、大家はそれ程の風が吹いて、中々三百貫目や五百貫目の出入ではないもの、さある時は借金高が大分ぢやとて、俄に娘も取返されまじく、又儘よとてかまはずに居る事も、世間があれば仕惡し。分別して見るほど我より下目なる聟は、盆正月の祝義物迄氣がはらねば、兎角輕い方の六ヶ敷うない袖の古手屋へ、姉のぬいは遣すべし。妹のふさは其方が思入次第に、隨分棟の高いよい聟を聞立て撰つてとるべし。夫婦の中で何れが無分別ぞ、聟比べを末でいたさう」と、姉に銀拾貫目つけて、當世の模様物の小袖ばかりつけて、古手屋へ送られぬ。妹は母の偕上ばりし心から、名題の器量よしの諸藝に器用な聟を取られしに、五年經たぬうちに姉聟は、室町に家を求めて絹布屋をすれば、妹聟は小鼓と博奕に打揚げ、大きな家ばかり賣殘して、内藏は虚大名といひたてられ、互に貸借ならず、懷手して呆れて空を眺めてゐれば、下々も見限り隙貰ひ捨てて、季時を待たず出でて行けば、伽藍のごとくなる屋敷に、夫婦五年の中に身代しもつれ倒れてから、はゞへなければ高二三拾貫目の出入ならん。

てもあるまい。町人の分際に相應せぬ榮耀な風俗、どんなよい所へ緣につけても、世帶ろくに持つ術は知らず、終には冥加に盡きて、隱居も仕さうな入まい時に、此方が昔の祝言した時分よりは不自由になつて、其時は榮花に育てゝやつた、親々を恨むものぞ。男の器量がようて鼻が高いとて、錢の足にはならず、諸藝が器用なとて商の邪魔にはなれど、助にはならぬもの也。十萬兩持つても儲ける道をしらぬ者は皆にする事早し。當分金銀もたぬとても、儲の道を知つて渡世を大事にかけ、油斷なく挊ぐ者は、千貫目持よりは末賴母し。惣じて金銀儲ける事、壹匁の銀が百目になる間は、中々とけしなく氣の盡きるものぞがし。百目が壹貫目になるは早く、壹貫目が十貫目になるは間のないものぞ。儲け口さへ開いて來れば、銀ほど早く溜るものはなし。京中の分限者も、抑産れ出でし時は裸なれ共、それ〴〵の家業に油斷なく、長者鑑にも入りぬ。殊更商人は後立といふもの有つて、商賣手廣く成るぞかし。然れば今の古手屋、胸に千金を貯へしといへる一言、儲ける道をよく鍛練したる男と見えたり。是に娘を遣つて金銀を取替へ遣らば、恐らく四五年の中には、我等が分限には追つつくべし。若し此目鏡違ひ、四

あんな所へ遣りはしませせぬ。まづ世間の外聞下々の所思を思うて見られたがよい」と、疊を叩いて叫かれければ、親父打笑ひ、「暑さ忘れば影忘るゝとは其方の事ぢや。我は親から一錢も貰はずして、大津の池の川といふ針屋に從弟ありて、九つの時何になりとも使うてくれと、在所から木綿の單衣一つ著せて、親が連れて來て置いて去なれてより、さまぐの艱難を經て、二十一の年三條白川に片見世借りて、よい針屋の下仕事して、獨身で六年暮し、七年目の二月日も忘れぬが涅槃の日、其方を東町の棒屋の嬶が肝煎られて、女房に持つた時の事を思ひ出して見やれ。丸盆に二ツ盃、石皿に鰑さき入れて、口の缺けたる德利に小半入れて、隣から糊屋の嬶がわせて取持たれ、其方に向いて、兎角身過が大事ぢや、中ようして明日から精を出さしやれ、井戸は遠けれ共淺し、酢醬油割松が入れば筋向ひにあり、今夜は宵から寢さしやれと、燈心減して去なれた時は、世に是程嬉しい有難い事はない、涅槃の荒も其方の夜著持つておぢやつたによつて、寒い目もせぬと、糊の强い木綿夜著を、今の緞子よりは結構に思うて、二人一つに寢た事は、まだ四十年にはならぬぞや。それに今の娘共が育てやうは、御公家樣方の御息女と

兩程の身上になつてから願はしやれと、憎さに申したれば、今藏に積んで置く一萬兩より、自己が胸に貯へた金が根强うて、息のある間は盡きる事がない。今日あつて明日ないは金、今日なうて明日溜るは金、我等が金は當分用心が惡さに、十年ばかり世界へ預けておいたと、氣違のやうな事をぬかし居つて」と、內方を引く心から、物憎さうに語るを、隱居の親仁雪隱にて聞かるゝより早く出でて、彼出入嗅を呼びて、「今の咄の丸屋の借家を借つて居る古手屋は、年は幾歲ばかりぞ」とあれば、「當年二十四五でも御座りませうが、鬢に油をつけたる事もなくて、嗜がないゆゑに、一寸見には三十計に見えます」と申す。「何と身共が娘をやらば、彌貰うても呉れられうか、問うて見て同心でもあらば、其方仲人して首尾させてくれ」とあれば、出入の嗅肝を潰し、「けうこつや勿體ない事、そもや內方の聟樣に、あんな輕い人が取合ふものでござりますぞ」と眞にせざれば、內儀は顏の色を變へ、「こなたは酒が過ぎたか老に耄れたか、大勢もある事か只二人の娘を、緣につけ兼ねたやうに、人の片家借りてる借家の所へ花のやうな娘を遣らうとは、本氣では言はしやるまい。五度七度離別れて戾つた捨物にする娘でも、




みそや
畫物

よい商に心を移さず、一向一心に斧を針にする心をもつて、細き事に氣をつかさず、一代の中に八百貫目といふ銀を延し、惣領傳右衛門に母屋を渡し、夫婦は別に家を求め、二人の娘を連れて隱居せられしが、兄弟の娘何れも緣附比にて、殊更器量もよく手のものとて針手もきゝ、内證宜しければ、兼ねて手道具は高蒔繪に美を盡し、衣裳は親父に好加減に申して祕しての拵、惣鹿子織紋縫紋、算用なしに調へ、上京の歴々に使れし、女の仕附方覺えし奉公人を抱へて、萬事花車に身をもたせ、今は誰殿の嫁御にも恐らくはと、母親低き鼻を高くして、我身代より棟高き聟を擇み、其上男付よく諸藝勝れて、京でも人の見覺え、當世の大臣といはるゝやうな、子息の方でなくば遣るまじと、今に定る緣もなかりしに、出入の嬶が水風呂貰ひましに參り、下女に脊中流して貰ひながら咄すは、「こちの向ひの丸屋殿の借家に居らるゝ、古手屋の安兵衛といふ人、針屋の姉なら貰うて女房にもせうかと、借屋づれにて内方のお娘子を、近比ふとい事をいふわろと思ひまして、上下京の大名貸する銀持屋衆から、貰ひたがつてさまぐ〵手を入れ給ふさへ、お主の聟殿には今少し身代が不足なとて、取合せられぬ、此方も欲しくば、十萬

先に、早く恥を捨てて、所を去つて身代の模様を替へ、二度稼ぎ出し、女房子にも錦を飾らせ、悲しき暮しの時を、昔物語にするこそ人間の本望なれ。

取附は細き針が積つて金の山

細き事とて仕似せ置きたる商賣を、改めて立身したる人少し。心永くたまかにすれば仕合の風吹きつけて、扇子の要して一萬兩の金を溜めし人もあれば、兎角それ〴〵の仕附けし事を、後生大事と脇目も振らず、晝夜に精を出せば、金銀の溜るには違ひなし。三ケ津の福人共の先祖のなりたてを聞くに、纔なる事より仕出して、大分の身上になりたる家多し。誠に泰山の雨滴石を穿つ、殫極の綆幹を斷つといへり。水は石の鑽にあらず、索は木の鋸にあらず、只久しく功を積みて自らなるの道理、鐵を延して、細き物縫針にして、針を藏に積んでみすやの何某とよばれ、今榮えて棟高く、姉小路に名を顯し、多くの弟子共をそれ〴〵に仕附け、我方の下仕事をさせて、主從共に朝夕豊に暮せし、此根本の亭主抑は僅の片屋を借りて、外の

此俵共を人をかけてふるはせけるに、六十貫目餘の俵より、米高六斗七升八合ふるひ出し、俵計りを張物屋の灰汁の灰に燒くため何程も買ふよし、此入口へ元直にして賣拂ひ、其中にて好き俵を撰拔いて、俄雨の時分、街道の草鞋出しておく見世先に立寄せておけば、合羽持たぬ旅人十二三文宛に買ひて通りぬ。かく萬事に心をつけ、拔目のなきやうに挊ぎける程に、次第次第に金銀仕出來し、一萬兩餘になりて悅の帆を揚げ、再度都へ立歸り、東洞院の昔の家を五貫目つけ增して買戻し、中絕したる金屋といへる暖簾を飜し、妻子諸共樂しく暮しけれ共、一度零落れ、樣々の艱難をせし事不斷忘れず、奢を省き渡世を大事にかけて、たまかに挊ぎけるあひだ、愈夜に增し日に增し、金銀內藏に滿ちて、子供四人もそれ〴〵に棟を竝べ、金屋一黨と中京に誰知らぬものもなく、町人の鑑となる事、しもつれし時分可愛き妻子を捨て、離れ難き町所を立出で、他國を經て再び立身せし所、人たるものゝ本望と感じぬ。總じて人間も廻り合せにて、其家疊むほどに貧乏になれば、愈心遲れ氣勢なく、妻子に心引かれて其所を得離れず、人に指を指されながら、同じ所に微なる住居するは人間にあらず、借銀の嵩高にならぬ

中の書附の十貫目に點をうたるれば、千貫目になる事を知らずや」とありければ、喜六あつと感じて、「追附大福者となつて、再び故郷へ立歸り、其時屹度御禮申上げん」と、それより先播州姫路の御城下に知れる人の有りしを思ひつけて、爰に便り一、日暮しに日を重ねて、商の種を工夫する折から、隣の米屋の男が來て、下女を相手に咄すを聞けば、「今の世は鳥類迄が昔と變りて、喰はぬものを喰ひまする。こちの裏へ來る雀共は、梅干をしてやる」といふ程に、下女聞いて、「輕忽な事を久七殿はいはしやる人ぢや。雀が梅干喰ふものか」といへば、「僞ならば今でもこちの裏へ來て、干してある梅を見給へ。數十羽群りて喰うてゐる」といふ。喜六聞いて、是は不思議と氣をつけ、かの男に近づき、「其梅干は何に入れて干してござるぞ」と問へば、「俵解いて筵にいたし、それに乾しておきます」といふを聞濟し、扨は此米屋の旦那、細なる所迄は心つかず、下々任せにさするゆゑに、俵共なまぶるひにて、俵の目に米の殘りて、是を喰ひに雀の集る事と推し、宿の亭主を頼み、隣の米屋の俵共、あり次第買ひたき由、壹匁に俵目七貫五百目に定め、六拾八貫五百目買取り、それより片脇の宿料安き裏の廣き借屋を借り、

て硯ともならず、水入は一代水入にて茶碗ともならず。人といふものはこれに異り、天地の間に勝れて貴く、靈妙なる德を備へたる物なれば、昨日迄は盜跖がごとき惡人も、過を悔い、志を勵みて善に移れば、今日は頓て舜の德にも化するものなれば、其如く吉凶禍福も變化して、定りありとはいふべからず。今其方も此道理を觀念して挊ぎ給はゞ、十貫目には限るべからず、萬貫目持にもならるべし。我は是醫を家業にして、人の病を治すが挊なり。重病を見ては療るまじきとて、藥を盛つて見ぬ時は、療治といふものはなし。萬死一生の病人、藥力屆き兼て救ひ難きと思ひ、先醫の捨てたる跡を請取つて、今迄十人の中二三人は助け來れり。油斷なく勵みさへせば、いか程の分限者にも成るまじきものにてなし。世の中の愚蒙なる人々は、或は一旦不仕合なれば、我身上も知れたりなどいひて身を捨て、或は本卦の占、此身上より上にはならざるなどいひて、我と我身を限る類、人とは生れながら、其靈なる所を知らざるゆゑなり。殊更貴殿は慥に長者になるべき神の示現を蒙りながら、氣を腐らさるゝは大きなる誤なり。御靈殿頭を打つて、懷中の書附の通りになるとの示しは、人の身の中にて天窓は是天也、懷の

心ざしゝが、何時歸るべき旅ならねば、氏神御兩殿へ御暇乞に參り、神前に跪き、今一度の仕合を心中に祈りけるに、何かはしらず我分限は懐に書附あり〳〵と、誰がいふ共なく、是は不思議と振仰向くに、人影もあらねば正しく御神、氏子を不愍と思召し、仕合復るべき吉相を示したまふと、肝に銘じて有難く覺え、千度百度禮拜して、下向の道すがら懐の中を探して見るに、今賣替へし大佛の家財と、此元手とをかけて、我物とては凡十貫目程と、心覺したる書附より外になし。扨は我何程挊ぎても、一生十貫目より上の分限にはならぬ所を知らしめ給ふものならん、されば今離れ難き妻子をふり捨て、先祖より代々傳はりの屋敷を拂うて外聞を失ひ、知らぬ他國へ赴かんと思ひたつも、今一度昔の身上にたてなほすべき大望を心にかけて旅立つ所に、末の知れたる御示現、いつ迄長生しても變りたる事もなき浮世と、心後したりしが、日頃我心にすまぬ事は御尋ね申して胸を開く浪人の儒醫ありしを、今此時と、直にお尋ね申して、心底の趣御靈殿の示現の次第を語りければ、儒醫樣子を具に聞かれ、暫く工夫して側なる硯箱を指していはれけるは、「惣じて人と器物とは同じからず、假令ば筆は一代筆に

にして浮世に住める甲斐はなし。我人生れ落ちるから此合點はしながら、智惠才覺にて長者には成りがたし。利發にて分限になる事ならば、ない智惠をかす世界の虎落者は、皆福人となるべけれど、其癖貧にして淵純に宿代やるものは稀なり。今有德人といはるゝ程の人に、優れて賢う見ゆるはなし。其比東洞院の上に、金屋の喜六とて、親の代には分限近所に竝ぶものなく、榮耀に育ちし男なるが、兩親に離れて後、手代共に倒され次第に手前薄くなり、昔とは格別に目を附替へて、不斷著の絹物を木綿に仕替へ、隨分内外心をつけて愚なく、渡世大事にさまざま商賣を振替へても思はしからず。年々喰込み借銀も少し出來ぬれば、兎角此調子では迚も續くまじと覺悟極めて、家屋敷を十五貫目に賣拂ひ、五貫目の借銀すまして、三貫目にて大佛の骨屋町に廣き屋敷を求め、裏に十疊敷の小座敷を建て、其外は傍へ作りの長屋を建て、宿代の取れるやうに少しの地をも遊ばせず、爰に妻子を移して是を女房子の喰物と定め、其身は何か引殘つて五六十兩の小判を腰にひッつけ、「いまだ此身無事の中、遠國に立越え、身過なるべき所を見立てて、一指稼いで見るべし」と、名殘を惜む妻子が袖を振り切つて、西國の方へと

宗兵衛へ一言の屆もせねば、相手にして表向へも出られず、肝心の本人なき上は何處へ取りてかゝらう島もなくて、金主は損、口入共は分一の取徳と笑うて果てけり。斯くて宗三は上方へ上りがけに、肌につけたる百兩の金を以て、都にて唐物商する人と同道して長崎へ下り、糸類の物を買込み、三年ばかり通ふうちに段々騰貴を得て、六年が內に一萬兩の小判にして、江戸へ再び立歸れば、宗兵衛悦び、先惡處金の借手共へ、利分を斷いうて元金殘らず濟し、親父果てられてより、終に內證の尾を見せず、世間へ化濟して此家を立直せしも、偏に三男が働なれば、本家に壹萬兩つけて讓り渡し、二男宗助には三千兩つけて他家へ養子聟に遣し、其身は四十五にて法體し、芝の邊にて海邊見晴す景地を見立てて奇麗なる座敷を建て、妾と下女二人男一人使うて、世を歡樂に暮しぬ。誠に人の內證は機關の糸屋と、今に變らず榮えけり。

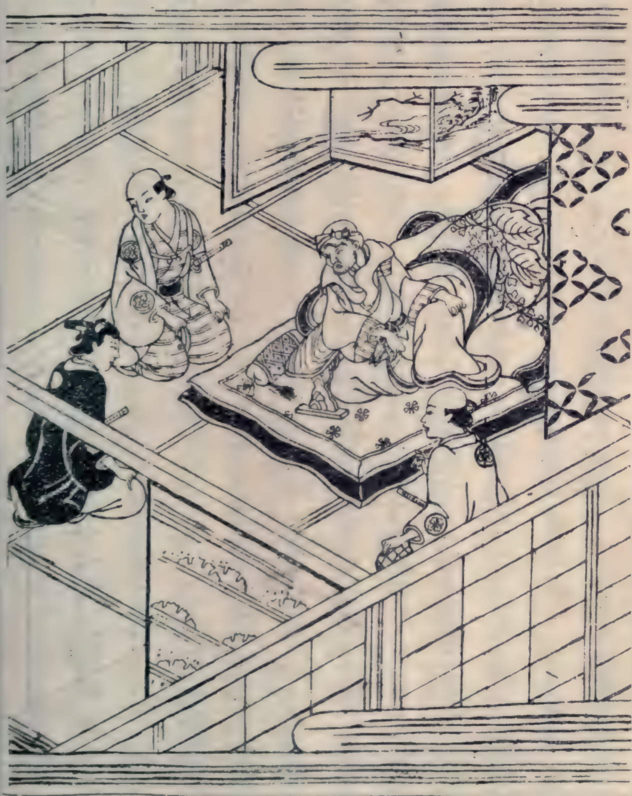
利の有る事を推する梅干からの工夫

夫福者は招かずして德來り、貧者は願ふに損重り、さりとては儘ならぬ世上の有樣、兎に角貧

掛け、惡所金といふ名題にして借込み、皆惣領の內證へ入れて、吉原にては一兩使うて五十兩も蒔いた顔すれば、惡所金の借込すさまじきを聞いて、人皆僞とは思はず。歴々人の名を匿して竊に請出さるゝ太夫格子は、我口から云はねど、あれも三男ぢや、是も宗三が替名して請けたるぢやと、脇から大分の使手にして評判するも道理ぞかし。惣領宗兵衛は三男が惡所名題の金高、凡三千四五百兩も入りぬれば、萬事買廻し自由になり、此時を失ふべからずと、表向は昔に變らず手廣く、內證は隨分細に氣をつけ、萬に始末をいたしければ、內證ねぢなほし、最早計略よき時分と、名主へ參りて、「三男宗三郎吉原狂に、譲金一萬兩を何時の間にか盜み出し、殘らず使ひ果す上に、承れば少々借金も仕りたる由、何共私手に合ひ難く、持餘し候へば、勘當の御帳につけて、追拂ひ申す」と五人組迄屆け、御斷申上げ宗三郎を追出しぬれば、「誠に子を見る事親にはしかじといへり。斯る惡性者ゆゑに、三十になるまで譲金を渡すなとの遺狀尤ぞかし」と、過ぎゆかれし親父を賞めしは知らぬが佛、極樂の東門から笑うて居らるべし。
三男宗三に金貸したる者共は、元來惡所金なれば、內證づくにて請判もなく、勿論貸す時分兒

かにしても默止し難く候へば、憚りながら兩人の者共、合點仕るやうに、竊に御異見賴み奉る」と、篤と申置きて歸りければ、名主聞屆けられて、殘る二人の兄弟を呼び寄せ、樣々異見ありけるほどに、二人は聞入れ何の言分もなく納り、此沙汰世上へ廣くなり、扨も賴母しき身代と、娘持つたる人は聟に仕度いと、出入の者を以て言入るやら、三番目の御子息を養子に貰ひたいと、内證をいはするやら、親の時よりは格別人の思入よく、兩替からは小判の入替賴みに來る、知らぬ取賣ども迄掛物茶入を以て來て、御機嫌を伺ひける。それより三月程過ぎて、「三男宗三郎三野へ出掛け、晝夜宿に居りませぬ」と、惣領宗兵衞氣の毒なる顏をして、又近所の人を賴み異見をして貰ひしに、是は若氣とて行盛つて、中々誰が異見でも聞かず、是より愈金銀あてがはぬ述懷を申し、大臣貸する口入共を招き、惡所金を借り出すに、親の讓り一萬兩、三十になると慥に請取る男とは、町の名主を始め誰しらぬ者もなければ、入來る肝煎ども唆したてゝ、己等が分一の多く取れるを願ひて、貳百兩でよいといふ所へ五百兩持掛け、今の世の根強い大臣さまと持囃して貸しかけけり。元來三男は實からの色狂にはあらず、其身惡性に見せ





男宗助三男私に一萬兩宛御讓書、但し兩人の弟どもへ、當分は右讓金、一兩も渡すべからず。似合しき商を内々見たておいて、年三十にならば、元手金に渡すべし。夫迄は弟共が貳萬兩を、兄宗兵衛預り置き、遺狀を守り兄弟喧嘩いたさず、宗兵衛を親と思ひ、何事も指圖に漏るべからずと、御書置を認められ、宗兵衛殿に御渡し置きなさるべし。是にて家は相續致す」と申しければ、宗入三男が思慮の深きを推し給ふか、今は思ひ殘す事もなしとて、三男が好の通りに遺言狀を認め、それより四五日過ぎて、極る往生を各悲み、野邊の送り花を降らし、死光とや挑灯道を輝かし、葬禮迄を人羨みける。四十九日までの弔、諸僧の經の聲絶えず、人皆是を殊勝に思ひぬ。五十日も過ぎて三兄弟月代剃りたて、町内を始め、悔に來られし先々へ禮に廻り、其後惣領宗兵衛名主へ竊に參り、親の遺狀を見せて、「斯くの如く書置き相果て候所に、二男宗助三男宗三郎申合せて、讓の一萬兩づつを只今渡せと申出し、何とも難儀仕り、色々異見仕れ共聞入れ申さず、持扱ひ候なり。尤も彼等が申す旨に任せ、只今相渡し以來構ひ申さねば、私世話はなく候へ共、三十になる迄渡すなと申付けられし親の命を背く所、い

家を持ちこたへ、隨分張つて見て、其内に大分敷銀のつく女房を呼び入れ、其銀を持つてねぢなほして見るか、兄弟三人いかやうとも談合づくにすべし。但し今少しにても金銀借らんとせば、借りつけぬ家から借りに來るは合點がゆかぬと、愈不審打れて、永く身代の謀計なるまじ。是を思へば商人は、常に銀の入らぬ時も借りて、費なる利を出しておかねば、入る時に借り惡いものぞかし。今いうて役に立たず、兎角思案せよ」とありければ、三人の子供始めて聞いて驚き、吐息をついて有無の返答もせざりし中に、三男宗三郎思案して申す樣、「いかに面々の勝手がよきとて、親の仕似勢の跡を潰して、他國して世を渡らんは、人間の本意ならず。殊に斯る内證といふ事、世間には知らず、我々三人の子兒が仕果にて、可惜跡を潰したと、ない惡名を立てられんも口惜しき次第なり。私好き計略を存じつけて候へば、兄々達我申すごとくに仕給はゞ、恐らく此跡昔のごとく、取直して見せ申さん」と、詞を放つて申すほどに、「何がさて跡さへ無事にたつことならば、汝が指圖を戻かんや。いかやう共思入を云うて見よ」と申せば、「然らば此度御遺狀にない金を書附けられし、惣領宗兵衞に三萬兩に家財添へて御讓り、二

るに従ひ、手前大きに取弘げ、斯くては始終算用合はずと、身代縮めんとすれば、大體に仕掛けし商の坊となつて、愈潰れに近く、段々沖へ漕出して楫を取直して見ても、大身代は動かし難く、年々減るを知りながら、無分別に世を張つて、今日迄來りぬ。是我一人に限らず、世上に此類多く、同じ丁銀を天秤響き渡るほど、日には百度もかけ、銀のある顔して子供に鼓を打たせ、我分限より物事仕過し、内證の勘定知らねば、女房は算用なしに奢りて、無用の腰元中居を抱へ、步行でゆく方へも大乘物をさゞめかし、假令ば一年に廿五貫目入帳あるに、世帶は三十貫目、入方の日影のごとく、漸々に足元から暗くなり、燈火の消ゆる迄世を張つてゆくを、呆痴のやうに思ふべけれど、其身になつて見ねば知られぬ事なり。爰にひとつ難儀なるは、我若い時人の物を借るまじきと思ひつめて、手前銀ばかりにて、段々仕來り、終に人と貸借をしたる事なく、さるによつて内證はかく明きぬれども、借銀とては一錢もなし。然れども明日より買入萬事に金銀なくては立難し。汝等三人打寄りて、借銀のないうちに家財有る物を賣つて三つに分け、京大坂へ所替して、何成とも見立てて、商小まへにするか、但し此儘此

商手廣く、世盛の時に至つて法體しての十德、名を宗入とよばれ、惣領宗兵衞に家督を渡し、二男宗助には屋敷方の商、三男宗三郎に寺方と、それ〴〵に商賣の道筋をつけ、何れも若盛にして器用に勝れ、諸藝に達し、他人交ぜずに打囃子をさせて、宗入慰み老の歡樂、いつ年のよるべきものとも知らぬ身の夕暮より、風心と少しの事の熱醒め難く、色々醫術を盡すに、験氣もなく次第弱りの枕に、三人の子御機嫌の程を窺ひけるは、又もなく美々敷く、人は病家を他人に見せけるは悲しきものなり。斯る時節には妻子ならでは賴みなし。宗入浮世の限と思ひ定め、書置狀を殘さんと、三人の子供を近くへ寄せ、通口の戶を閉めて、「我今度絕命なれば、申置く事外になし。兄宗左衞門を親にして、我に從ひし如く少しも背く事なかれ。扨世間を思ひ廻すに、見分よりない物は金銀なり。我若き時より儲け出し、次第に榮えて外よりの所思には、五萬兩もあるべきやうに見ゆべし。汝等先としてたのもしく思ふべけれど、人には聞さぬ事、さりとは各別の內證、今ある代物ばかりにして、金銀とては取集め三貫目ばかりより外はなし。定めて不審に思ふべし。或知るごとく外の榮耀に、一錢も使ひ捨てし事はなけれども、繁昌す

渡世の品玉見せぬ所が智惠の種

長袖善く舞ひ多錢善く買ふ、兎角金が金儲ける世の中にて、得手のない商人は、慥に買へば上りを受ける物を知りながら、手が屆かねば持つたものに好い事させて、人の仕合するを見て、舌打して好しがれども、金銀不仁にして、ない所へは行きて惠まず、寶の字の友多き方へ集るこそ是非なけれ。斯くあれば持たぬものは末代迄も貧で暮し、持つたものは萬年しても潰れぬ筈なれ共、今の世間を見るに根生の旦那分は、幽になりくだり、手代小者上りは大屋敷の主となつて、置頭巾で山寺を唄うて、能い衆顔するぞかし。然れば元手なくとも、品玉にて種さへ祕して、あぢに世を渡れば、近附ならぬ金銀も、呼ばぬに獨と集れり。兎に角商人は內甲を見られぬ樣に、平生表向の軍配が大事なり。商賣手廣くせんと心は矢猛に思ふとも、內證を見透されては、中々一日も立難し。世はからくりの糸屋宗左衛門とて、江戶本町二丁目地ばへ商人、その昔は僅の組糸より延し初めて、今五萬兩と近所よりも指を指され、一年增に人を抱へて、

古郷へは小判の返り花盛にあふ妻子の悦び

取附は細き針が積つて金の山

望姓なしに古手屋が近年の仕出分限

諸藝は渡世の妨身過に疎き器量聟

しもつれて世間へ鼻の低い天狗頼母子

商人軍配團　巻三之

目録

渡世の品玉見せぬ所が智恵の種

　表を張つて内證はからくりの糸屋が志學

　身代は三男が分別で押して行く二挺立

　三野通は世渡りの手管事

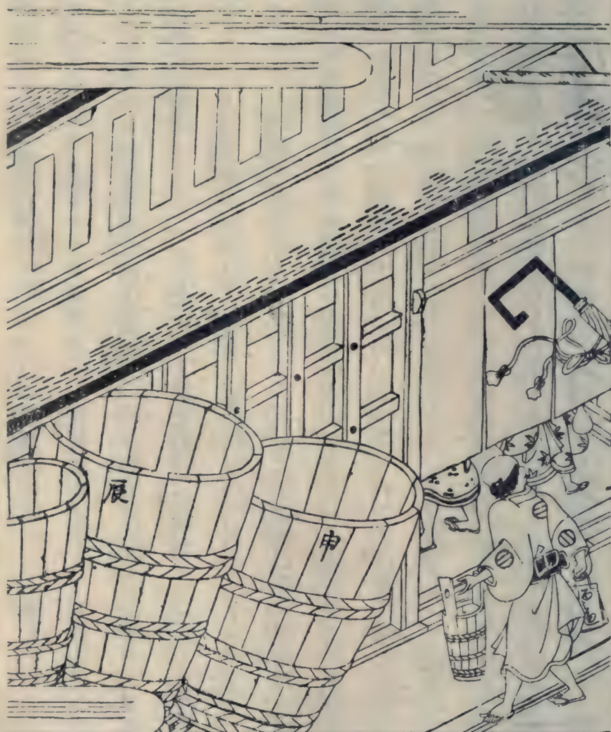
利の有る事を推する梅干からの工夫

　次第〳〵に色のさめる金屋が身上

　氏神の御示現一點の違ひで大分の立身

聞き廻るに、姨にかよつて朝夕がみ〳〵とせがまれ、哀れ早く幸の事もあれかしと、はねつくろひして、「松屋町の表具師の娘、今年十九といへど大女房にて、二十二三に見えます。是は」と申せば、其幸と頼み遣し、吉日定めて呼び迎へ、此上の願孫の顏見る事をと、後家も強飯の次手に法體して隣の家を買足し、是に隱居してゐられしが、未だ馴染のない嫁なれば、下々も我儘出して、臺所そこ〳〵に始末の事も心元なしと、幾度となく見舞ひて末々迄氣を附け給へば、餘多の下子共奉公を大事に蔭なく働きぬれば、繁昌日に增し、酒屋の勝手は是で持つたかみ樣の御飯貝といへり。不斷可笑敷き事ばかり仰せられて、御年はよられてもお志わつさりと、何れも行末賴母しく、身を任せ骨を惜まず働きける。扨弟息子も二十六七に成りければ、身代分けて、最早片附けられさうなものと、町内からも不審をなしけるに、何時から極めて置かれしやらん、御堂筋の酒屋へ五十貫目附けて養子聟にやられける。先には聢と仕て、中老なる二親扣へて世話を燒るれば、弟も彌たまかに勤めて、金銀を仕出來し、廣き大坂に三番と下らぬ兄弟の酒屋と成りしも、後家獨の軍配、是ぞ女の鑑なるべし。

六百目取藤次も及ばぬほどになつて歸れば母は悦び、高麗橋の本宅に、絶えて久しき花菖蒲屋の名を顯し、下女一人おきて、親子三人主從四人にて挊ぎけるほどに、正直の頭に松尾大明神も宿らせ給ひ、下戸も上戸も此家に通ひ樽の道狹く、福德の兄弟に幸の母じや人、手を揃へて金銀の攫み取、杉林の旗揚げてより、いまだ十年も經たぬに、五百貫目の身代と成りければ、今は女房呼びてとらすべしと、「二親のない兄か叔父の世話になつて居る、十九か二十二十一二迄の娘をほしき」と聞かれしに、仲人するもの不審たてゝ、「世には父親の無き聟殿は二親のある人の娘を貰へば、新に親を設けて、平生の問ひ談合の力になると、年寄衆のあるを好ませらるるに、變つたるお物好」と申せば、「親のある娘はあいたてなく育ちて世事に疎く、ぴらしやらと浮世事に賢うて風俗を作り、假初にも物見物參に樣子をして、見せに歩行きたがりて、世帶を麁末にするものなり。十九二十迄兄叔父にかゝつてゐる娘は、親類の世話になるを氣毒に思ひ、緣についても去られぬやうにと、男の心をとつて世帶を大事にかくるものなれば、先樣は少し內證薄くとも、親のない背丈延びた娘を、肝煎りて給はれ」と拔目のない言分、仲人聞き屆け


辰
申



て、よい事を見習うて、末々汝等が爲に惡しゝ。赤頭搔亂し胸前垂を離さず、不斷草鞋履きて、酒を擔賣に出ると、樽を取りに廻る事を精に入るれば、身ざま見苦しきとて主人手近にては使はず、幸にして表の商の方にばかり使ふものなれば、必ず今母がいふ事を耳に篤と納めて、此通りに奉公勤めよ。十年經つたらば母が元手を拵へおきて、人の笑はぬ程に酒屋をさせて、一度萎れし花菖蒲屋に水を打つたるごとく、活々と世にあらせん」との庭訓を、小耳に挾みて奉公に出でければ、今は心安しと六間口の家を眞中より仕切り、借屋二軒にして、一方は酒株に賣殘しの酒道具を添へて、十年が間年を切つて、壹年銀五拾枚にて貸し、其身は谷町の貳匁五分の宿賃出づる裏屋に引込み、人仕事して女の手業に、其身の口拂と宿代をして、五拾枚の酒株の貸代と、今壹軒の借屋賃一年十枚と、合せて銀六拾枚宛、十年が間二拾五貫八百目溜りぬ。扨酒株十年切なれば取戻し、兄弟の主人の方へ、年明きたる樽を入れて隙申請けられしに、親方惜みて、「今四五年禮奉公を勤めさせよ」とありしを、色々歎きて取戻せしに、二人の子供は鬼の孫のごとくに成つて、母の意見を守り、十年が間に酒の造りやう水加減を覺え、一年五

く思ひ、賣立てて十露盤して見れば、貳分半にも當らざれども勘忍して、家を仲間へ取らうともいはず、宥免して濟しければ、後家悦びて立歸り、兄弟の子供が體を見るに、今迄榮花に育ちしものなれば、十四十二になる迄人形まはして、たゞ一人なり殘りし小女童に、見物になつて伽をせよとわんざんを云ひける程に、此樣にして置きては、始終これらが爲にならず、何卒我息災なるうちに、せめてむかしの半分程の酒屋に取立て、此家の先祖のとひ弔をさすべきと思へども、元手なければ酒造るべき事もならず。殊更兄弟共に痛し痒しを知らず、榮耀に育ちしをのこ子なれば、成人するに從ひ、後家親とて侮り自由にはなるまじ、せめて矯正して人にして見ば今なりと思案を極めて、心を鬼のごとくもつて、兄弟の子供が著たる絹の小袖を木綿物に著せ替へ、本町と伏見堀の名題の棟高き酒屋へ、十年の年を切つて、兄弟ながら丁稚奉公にやられしが、遣す時に至つて二人の子供に向ひ、「今其方達を酒屋へ奉公にやるは、主人の遊興打囃子、其外の藝を見習はせにやるにあらず。隨分臺所より下に廻りて、藤次が氣に入る酒の造りやうを鍛錬して、それぱかりを上手になるべし。髮頭美しければ、供はやし茶給仕に出

い事に極りぬ。

金銀を藏に詰込の酒屋後家

難波津や世盛の梅の花軒に薫りて、菖蒲酒といふ名酒は、樂天が聞書に造りやうを記しおきて、是を久しく家に傳へて、日の本に弘めてより其名唐土迄聞えたる、高麗橋筋の花菖蒲屋といへるは、鴻池をも下に見たる酒屋なりしが、亭主酒家に生れ合せて、果報なる大上戸、次第に醉が募りて、是よりの色狂ひ、新町に行きては歸らん事を忘れ、樽の前には賣場の錢もなく、既に身代の回向の鐘と共に、不斷の不養生にて頓死をせられける。妻子に大分の借銀を惜し氣もなく讓りて、此世を去られぬ。いづれ人の身代死なねば知れぬものぞかし。此後家四十にたらぬ身ながら後夫を求むる心なく、兄弟の子供を憐み、人の疑はぬほどに髮を切り、白粉紅をつけず藤鼠の布子に身を堅め、嫁入より以來、年々物好に拵へたる小袖共に、家の内の道具疊迄あげて、負せ方へ突出し、自身家々へ廻りて侘び嘆かれしほどに、世界に鬼もなくて痛まし

へされ、是に驚き本阿彌の手筋を賴みて見せて見るに、二拾七腰潰しの直にして三百目が物外なしと、眞をいへるに肝を潰し、研屋を呼びにやれば、「御屋敷方の御用で江戸へ參られ、來年上られうも知れず」といひこす。是はふづくられしと大きに心散亂し、又此損を取返さんと、金山にかよつて三拾貫目打込み、米市油市に出て二貫目喰はされ、芝居の太夫元にちよろまかされて千兩してやられ、ゐる所障る所で損重り、八十年の貯の五百五拾貫目は、何時の昔修理料、類燒の考へ迄して、のけて置きし銀に皆手がつき、生れもせぬ惣領に讓りの百貫目を、新田の訴訟仲間へ加はりて、三年目にうつくしう皆になし、せめて子がなうて算用の外の延銀、三九二拾七貫目を命のつり緒と大事にかけしが、これも藥種の買置で、門前町の居宅まで添へて損を埋め、今といふ今手と身に成りて、八十年は扨置き四十四年迄りて、今四十日が暮し難く、悲しや年の暮も餅つかず松たてず、箒で掃きたるやうに薪棚絶えて、米櫃にいかな事なんにもなく、あはれさて錢が八十あれば、四十五の春を迎ゆる事ぢやがと、夫婦昔の樂を夢のやうに思ひ出し嘆きぬ。兎角町人は其身堅固にして朝夕働き、儲けて使ふほど世の樂はな



本目の利かぬ悲しさは、疵ばかりの詮議をして、根から役にたゝぬ道具といふ所へは氣がつかず、先は無疵物なれば、何にしても安き物と、かの作州の牢人方へ持ちゆき談合しかくれば、下地頼まれゐる道具の事なれば、よしなに申す口を頼みに、五拾兩渡して賣手形取つて仕舞ひぬ。それより四五日して又件の研屋、備前の盛光の正銘の刀を持來りて、「小判五兩に召しておかせられませい、今月中に私の手先で拾兩には慥に賣つて進じまするぞ。誠に銀が銀を儲ける世の中、目前に一倍になる事は知れてありながら、手に銀のないものは、みす〳〵人さまによい事をさせて眺めて居ります」と、味氣なき口上申して五兩金を請取り歸り、一月も經たぬうちに、「先日の盛光の刀、さるお屋敷方よりお望、拾兩にして遣されませ」と、刀取つて歸るより早く、耳を揃へて拾兩渡せば、今時何商をしたればとて、胴をかへす事のあるべきぞと、才助心中に悦び、是より研屋を律儀者と一筋に呑込み、是より目利も頼まず、研屋が詞を頼みに言次第にして、二拾七腰求めし銀高八貫五百目、二拾日にもする氣にて、御婚禮のある大名方へ、手引を以てお目にかけしに、皆似せものにて、一腰も役にたつ道具はなしとつッか

いたすものを、小判三拾兩で手を打ち申し、明後日金子渡し、御道具を請取る筈。此三拾兩の金子の才覺急には成難く、先當分是を才助殿に預け申し、三拾兩借用申して、右國俊の刀を求め、又是を何方へなりとも百兩の質に入れ、此道具を受戻す暫くのうちのからくり、旦那の御詞ひとつで首尾よう參る事なれば、お馴染はなけれ共、偏に私をお取立と思召して、宜しく御挨拶頼み奉るなり。此代りには何やうの御用なり共仰附けられ下さるべし」と、さまぐ\のてれんを申せば、世間に恐しき人間のある事を知らぬ牢人にて、我一言にて人の助になる事ならばと、無益の惠心出來て、「才助を永くぬかぬ事にて暫くの事ならば、成程首尾するやうに挨拶をしてとらせん」との御意難有く、御前を罷立ちて才助方へ件の取合の道具を持行き、「是は大原眞守とて、大江山の酒呑童子が首がきれて、賴光の甲へ大きにいたゞかせました名作物、折紙の表は判金五十枚なれども、金の急に入る侍衆よりお賴み、幸と存じ金五十兩に仕負せて參りました。斯な道具は拾年かゝつても自由には出ぬもの、どれなりとも目利に遣はされて、其上で金子を遣されませ」と、慥に申して置いて歸れば、折紙に心迷ひて、正眞でもあらうかと、

して、十年たゝぬうちに百五拾貫目餘の使越、八十の事はおいて三十四五にて六七拾貫目も使ひ越して、此調子では中々厄年迄は使ひあはされまいと、勘定して見て始めて驚き、此七拾貫目餘の使過しを、今何をしてなりとも埋合さでは、八十年の長生、前へちゞめねば算用合はずと、是より掘出して、元銀の使越を埋める思案にて、少しは刃物目利のなるを頼みに、近所の研屋を招き、道具求めたき咄をすれば、研屋は聞くより仕合の切先が向いて來たと、目の鞘外して直に仲間を走りありき、折紙は正眞にて刀は似せの抱合物をいたゞかす目論見。抑此男が目利だてをするは、美作牢人に道具好する男あり、是と念比にて不斷行きて見習ひ、地やれ疵などの直したるを見覺えたる分なれば、此牢人の目を頼みに刃物狂をする事と、先彼美作牢人に傳手をもつて近附き、件の抱合物を見せて、「是をお前の御念比なさるゝ萬屋才助殿へ、暫時の質物におきまするが、早速こなたへ見せに參るは極つたる事、其節宜しく御挨拶なされ下されますと、私一ケ月の中に大仕合を仕ります。樣子はさる歷々の御牢人樣、鎬つまつて一腰の刀を賣らせられたき由、御道具を拜見申せしに來國俊の正眞、捨賣に仕りても金二十枚は

つけて、尻はらやまずにふッつに遣はす爲とて、三九二拾七貫目子供が土産銀と書附けて取つておき、百貫目は惣領に讓銀、其の餘の百貳拾三貫目は、「一生の中には類火に遭ふも知れず、又は修理等病痛の入用迄細に積りて、八百貫目をそれ〴〵の心當に、札をつけて藏に納めて、居所を知恩院の門前町に構へ樂隱居して、是あぶなげのない身代の取置と、聞く人咽喉を鳴らして羨みぬ。我も心中には恐らく身上の堅き事、咸陽宮を布著にして、粉糞かうたるやうに覺え、喰ひたき鰒汁を斷つて長生する合點、人の請拂に忙しがる盆前にも胸をどらず、大晦日にも春の來た心地して、小き座頭を呼んで色絲を彈かせ、扨も命はあるものをと、裕なる小歌の聲、都廣しと申せども、かうした家はあるまいと、身代自慢の鼻高く、愛宕へ千日參り、唐崎へ二日がけの參詣、夫婦連にてこの面白さ、半年ばかりは身につくやうに覺えしが、相手替らねば、そう〳〵夫婦鼻突合せてもゐられず、近所のたのしやの樂隱居どもの方へ咄しに出かけ、それより交際廣くなり、今日は川狩明日は芝居のかはりめ、又は西島の踊見にゆくなど、腹ふくれの友達出來、一日も内にはゐず、今年は壹箱で世帶の仕舞足らぬとて、五貫目たし七貫た

子にはならぬもの也。京極通りに萬屋の才助とて、よい親もたれて、家財かけて八百貫目餘、外へ散さず一人して讓りを請けられ、親父を西方極樂へ隱居させて、其身今迄手も濡らさずして、生れながらの果報人、倩世間の金持共を見るに、皆根生の分は倒れてしまひ、幽なる暮し、是を思ふに親の讓り銀千貫目あれば、此上に望はない筈なれども、欲に限りなく、一萬貫目にも殖したしと、大名貸の仲間へ入つて、思はぬ大損をしてゆきつき、或は商手廣く、江戶長崎へ店を出して手代共にこかされ、一生心を苦めて、其上に讓り銀を減らし、今零落して名を埋む人多し。是人の身の上の事にあらず、前車の覆るを見て、後車の誡と身用心の思案を堅め、我命を凡八十迄に積り、今二拾五の年から五拾五年が間、一年に拾貫目宛世帶の使と極め、夫婦と物縫腰元丁稚、下男主從六人に定め、外の榮耀をやめて、不斷も大抵の美食好して、商せずに人におそれれいはずに、五百五拾貫目を八十迄の世帶の入用銀と退けて、火除のよい土藏に入置き、人にも貸さず一年に一箱宛の崩し喰、殘り貳百五拾貫目は八十迄の內に子供十人出生する算用にして、惣領一人殘し、殘り九人は生れ落ちると菰の上から、銀三貫目宛

道頓堀の芝居へ銀貸す人の方から、三割半の高利で金銀借り請け、今日迄は世を張つて參りましたが、私が果てたらば跡が蕨燒いたやうになりませう。其處をこな樣一人ある姪が後見して、家を立てて下さりませ。さのみ大分の事でもござりませぬ。百貫目あれば丈夫に家が立つ事、お前も此度諸方の所務分お取りなされ、思ひもよらぬお仕合の中なれば、賴まぬとても引受けてなされて下されうとは思ひますれど、是を申さぬうちは、胸が休まりませぬ」と、重手代の十兵衞を呼びよせ、「向後兄樣の後見なされて、銀は何程もいれうとある筈ぢや。賴母しう思うて奉公してたもれ」と、押附けて否共應ともいはれぬ首尾、「百貫目の所を三拾貫目でどうぞ家の立つやうに」とすべり迯にして立歸り、扨も悲しや愁事にあやかしがついて、思はぬ不仕合、取算用の形見をとらずに、出入大きな違と、始めて愁顏になつて力を落しぬ。

商人の刃物目利は大疵の基

不定世界に生れながら、一代の事を五拾年前から定めおく算用、是琴柱に膠するとて、同じ調

餘所の葬禮を見ても、若やこちの親類の端ではないかと、聞耳たつる所へ、「過書町の妹御、此中ぶら〳〵御氣色悪しきとて、御食もしか〴〵あがらざりしが、今朝程より打込んで御枕もあがらず、お前樣を呼びまして參れとの由、只今御出下さるべし」と、乳母が參りて申すほどに、「是は曾て知らなんだ。今其所へ行くべし」と、乳母を歸し心の中に、四百貫目の都合になるぞ、亭主は去々年過行き、五つになる娘の子を養育して後家をたて、二軒三軒の店の世話を一人して燒いてゐれば、精の盡にてあるべし、おつとつて此身代も家財かけて、五六千兩とは慥な事、然れ共妹めは質朴なる奴なれば、形見に長町の小座敷ならでは形見に吳れまいと、まだ死にもせられぬうちから、遺物の胸算用、置いた物取つて來るやうに勇んで行きければ、妹御は枕をあげ、看病人を遠くへ退け、小聲にて申されけるは、「私氣色も只今出でたる事でもなく、主の死なれてより此かたの段々の疲れ、中々本復致さうとは存じませぬ。それゆゑお前樣へ跡の事を申しおきませうと、呼びましに進ぜました。連合四郎兵衞どの死なれた時分に、手代共が勘定して見ましたれば、三拾貫目も不足いたし、可惜跡を潰さんも無念な事と存じ、

氷の上の刻海布、扨は天満の大根にて朝夕をしまへば、内證には物いらずして、諸方よりは所務分の家屋敷金銀はいりて、此唐物屋は愁事續きて俄長者になりぬ。よく／＼愁事の相應して、形見貰ふ生性にや、跡の季使はれしお物師に、ふと出來心で、二三度内儀の内に居られぬ時、留守事をせられしに、此物縫此家を出でて、平野町の醫者の所へ奉公に行きしが、癆咳を煩ひてぶら／＼と勤めしに、主人は幸醫者なれば、さま／＼工夫して盛りたい藥を盛つて見て、終に旦那の匙先で嬲殺しに逢ひしが、是さへ少しの情を忘れず、死にざまに、「伏見町の唐物屋の旦那様へ、是を形見に屆けて下され」と、りきん縞に白裏のつきし袷を送れば、是も形見貰うたれば、命日に精進でもせねばなるまい、しかし大分の家貰うた親類の忌日さへ、朝精進ですませば、此物縫が精進は名代をたつべしと、出入の心安き道心者に、貳分宛にて御物師が精進は渡し切にあつらへてしまはれぬ。此男欲に限りなく、彼方此方の形見分と、手前の有銀打合し、高をあげて見れば、三百九拾貫目、元來死の道より集る銀なれば、四百四拾貫目迄には上りさうな物と、十露盤抱へて、しねがな目くじらふと、愁は去つて欲に本心を失ひ、

と驚き駈附くるに、最早叶はず野邊の送をしてのち書置見れば、一人の甥なればとて、御池筋の角屋敷捨賣にしても廿貫目が所を讓られ、涙と共に忝く、まだ其袖の乾きもやらず、浮世は水の「、あはぢ町の姨樣、たつた今餅を咽喉に詰めたまひ、ぎく〳〵して往生なされたが、お子とてもなく、日比お前の御孝行になされて進ぜられました印が今見えまして、御居宅は申すに及ばず、栴檀の木橋の御家も、お前へとの御遺狀」と差出せば、是はいかなる廻年で、斯る憂の續く事ぞ、白衣著るに間なく、世間の所思迷惑千萬と、苦い顔して葬禮の輿に手を添へ、千日寺の火屋へ納めて立歸り、無紋の上下未だ脫がぬ所へ、「舅太夫樣中風で目ばかりぎろ〳〵してござります。早くお見舞」と申すほどに、扨も只事ならぬ事と走り行き、醫者よ人參よといふうちに、是もごつとりと落入られ、三日の仕あげ過ぎて、内儀が里から戻つての話聞けば、惣領娘なれば形見に金子五百兩と、鹽町の下屋敷が參る、涙の中にも嬉しさうなる物語、下下迄目出度い節とは違ひ、憂の時は陰氣になりて、假にも浮氣なる噂をせず、酒を過さず、道頓堀の替目も、此節と遠慮して物も高うはいはず、而も上下とも精進なれば、肴屋も這入らず、


うどん
亀屋



領三人額を合し、此暮の志覺をとひつおひつ相談して、物も心にいらざる所へ、念佛講仲間の道西參られ、人の機嫌も知らず、「扨々段々目出度い事が續いて、此方のやうな果報な人は、廣い大坂にま一人とござるまい。聞けば娘御も頓ての中に平産なさるゝ由、此仕合では惣領孫は御男子であるべし。追附彦を見給ふやうに、今度は一廉お祝ひなされよ」といへば、親仁苦い顔をして、「いや〳〵最早目出度い事に飽滿して、振舞々々が胸先へ支へます。必ず娘が平産いたしたと、念佛講中へは祕して下さい。誰が持つていて役にもたゝぬ口を叩いて、目出度い事を披露いたすぞ、沙汰なし〳〵」と、喜び却つて今は目出度い事が出來てこうかと、親子三人は胸を冷されぬ。然れば目出度い事の續くもきのどくの始ぞかし。又伏見町に唐物商する人の兄哥、食傷にて僅二時計苦み、終に果敢なくなられて、一子もなく女房は去年去なされて、跡取る者なく、自ら唐物屋が物になつて、家財かけて八拾貫目は確な事、大分の物がをさまれば、一入佛事に念を入れて、三十五日の齋過に、「順慶町の伯父御樣、二階から踏外して落ちさせられて、うん共すんとも仰せられず、彼世へ宿替なされました」と、手代息きつて申來る。是は

めぬうちに、嫁御の初産逆音いふより、守刀産著を重ね、七夜の祝儀振舞、親類附合彼よ是よと隙なき内に、娘御の帶の祝、段々續きておめでたく、二親の法體、强飯配るに隙なく、振舞振舞續きて、無益の釜の下へ大くべすれど、嫁の里からついて來る女どもの手前を思ひ、うちかけして臺所の事差引もならず。常はそこ〳〵に氣をつけて、申せし始末を云止み、油火の所を蠟燭になし、次の間の火燵も、木綿布團をかけず、旦那分の人達は、長者の顏して鷹揚にやらるれば、下々は每日の酒に心太く、溜錢貫銀を持つて新地へ出かけぬれば、手代共はぞは〳〵として、商賣は脇にして、目出度事が續いて嬉しうござると、貝燒の心當に、取寄せてある卵子を取つて來て、見世の火鉢に薄鍋かけて、ふは〳〵にして向隣の若い者を招き、店先での酒盛、此熱がまはりて謀反を巧み、燗鍋盃片附けもせず、呑捨にして新町へ駈出で、局女郎をあげて腹一ぱい遊びて、朝戾れど主人は目出度い折なればと、叱りたい時も胸に納めて笑ひつくつてゐらるれば、內は出るやら入るやら、臺所はどん〳〵として、目出度い〳〵と云重ねて、何時ともなしに目には見えずして、金銀減して身上傾き、最早どうも續き難しと、夫婦惣

悦び積つて十露盤の粒程な涙

世の中に目出度事ばかり重るも、難儀の一つなれば、滅多に目出度々々々々とて、喜ばうものでもなし。又愁事の續きて、悦びになる事あれば、無性に悲しまう事にもあらず。長堀の流れの末に木曾山の林木屋せし歷々、夫婦堅固にして、子供五人持たれしに、先惣領に嫁を呼ばれし婚禮の儀式、流石棟の高きほどありて、難波中の評判にのるほどの花麗なる祝言、御新造の御入りなさるゝお部屋の普請ばかりに、五十貫目の入用、是に准へて諸事の入目何程といふ事を知らず、溜錢溜紙さへ大分の事なり。町中友達念佛講仲間を、淸水利兵衞座敷、浮瀨が隱居にて、三汁九菜の膳部、聞いてさへ腹がふくれぬ。そのどやめきも止まぬうちに、妹御堺筋の生藥屋へ嫁入、長持五十棹、定紋つきし絹の覆をかけて、慥に五町は道具續き、大坂中の目を醒しぬ。嫁の親元へと聟の方への附屆け、三番目の息子が元服の祝、續いて末子が髮置、乳母に祝儀の小袖二襲、乙子なればと出入者迄呼び集めて、扨も目出度やと呑うで果され、まだその醉も醒

昔の劍今の薙刀はぎれのせぬ摺切男

金銀を藏に詰込の酒屋後家

手作りの子供に酒食の強異見

器量より拵を重に呼入れる花嫁御

十年の艱難に枝葉榮ゆる杉ばやし

商人軍配團　卷之二

目錄

悅び積つて十露盤の粒程な泪
商見世より賑な臺所の物入
目出度事に朽の入る材木屋が內證
形見は泪の溢れ幸一門の嘆きは淵の上の雨
商人の刄物目利は大疵の基
一生遣ひに事缺かぬ萬屋が內證の取置算用
不仕合の三番續　金山新田是が身代の切狂言

の繪書へ返らぬやうに、一生身代を大事に持つ[illegible]こと、長談義を說かれぬ。何と何れもさうではござらぬか。

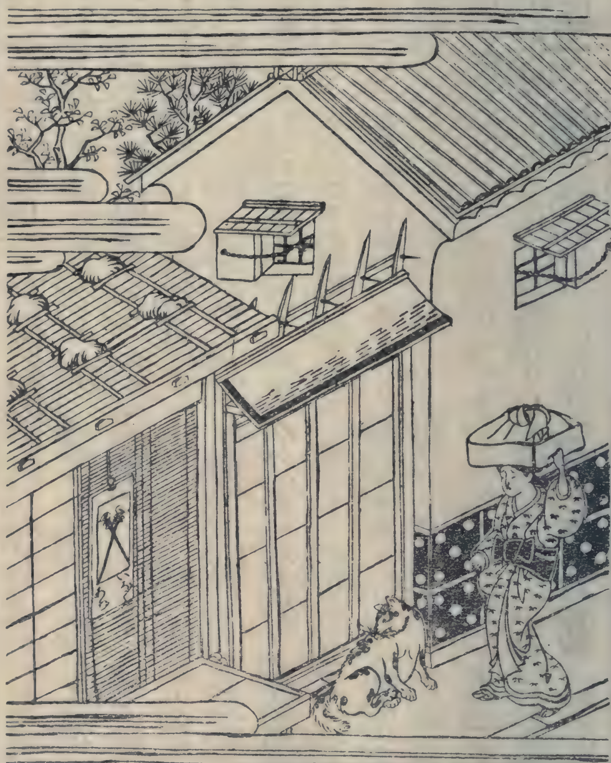
い衆と縁を組み、根生の分限者と交れば、自ら成上者といふ悪口は止むものなれば、平に家を廣げ給へ」と勸めければ、親父頭を振つて、「成上り者といふを悪口と思ふは僻事なり、あはれ世間に我昔の、貧なる時を知らぬ人もあるべければ、古は骨牌の繪を書き、淺猿しく暮せしが、今は五萬兩の金持になりたると、書付けて表に張り置き、普く人に知らせたし。是町人の手柄にて、更に恥ぢる事にあらず。假令ば昔は[illegible]左大臣魚名公よりのつりにて、俵藤太が惣領筋と名乗りても、米踏して居ては先祖をいふ[illegible]身の恥なり、町人は金銀が氏素性なれば、穢多焚坊の筋ならねば、世に恥づる事一つもなし。今三ケ津の町人、近年の出來分限多し。是商人の面目ゆゝしき譽なれば、感ずべき事なるを、卑むるは道理を知らぬ馬鹿と知るべし。又家を狹く小構に建てしは、金銀入るを厭うてにあらず、我は過去の宿習にて、一代の中に斬る福人となれども、汝が果を知らねば我好い仕合の生性に合して、其調子に萬事を手廣く、大身代にして奢つけては讓り難し。家廣ければ、毎夜の油火にても大分の違あり、此家は長者の屋敷なれども、今日既に我手に入りぬ。是を思うて諸事うちばにして、儉約を守り、古の骨牌

られし羽織迄を取りにやられしかば、此野郎未だ勤盛に男になりて、跡へも先へもゆかず、旅芝居へ花車方に出でて、長者倒れにたをされぬ。其後段々御前の首尾惡しくして、御國へ參る事叶はす。是非もなき仕合は、代々續きし家を放して、一門難波に歷々としてあれば、先此方へ引込み、天竺浪人となつて、御國の雲行を窺うて居られける。此樣子を彼出來分限の生藥屋聞及び、「我久しく隣に借屋して、手代衆の御念比に預りし事忘れ難ければ、人より直段よく屋敷を買つて參らせん」と、長者の家を買取り、殘らず借屋として、我居る所は隨分狹く小構に建てゝ、是へ子供と一所に移り、二條の家を人に貸し、新宅の表に少しの藥見世を出させ、仁助夫婦は法體して、隱居もせずに暮されける。誠に此男骨牌の繪を書きし時分は、隣の長者の家を求むべきとは、狼狽へたる神も御存じない事なり。或時息子の仁三郎、親に向ひて申しけるは、「我奢心より申すにてはあらねども、世間からたゞもさへ、骨牌の繪書の成上り者と蔑し申すに、此大屋敷をせめて半分は居宅になされ、見分なりとも歷々らしう見せ給ひて、昔を云出す人の口を止め給へかし。さもなくば我妻を迎ゆるとも、宜しき人の娘は呉れまじ。好

一萬兩などは馬につけて上る事、兎角立寄らば大木の影と、殿樣賴みに無性に奢りて、今一錢もなくなり、仰附けらるゝ御用等も辨じ難く、遙々奥筋へ下り、身上不如意なる御嘆を申上げければ、御先祖へ御奉公申せしものゝ末なれば、御見捨てもなされ難きよしにて、一萬兩下し給はり、冥加に相叶ひ、有難く頂戴して、京へ上るより早く、西東の遊興所へ蒔散し、高なしに騷ぎければ、追附この金皆になつて、間もなく又殿樣をせがみに下りければ、御家老衆中々承引なくて、「それ貴賤共に、身代相應に儉約を守れば、家業の影によつて、妻子を安かに育む事なるに、分際に過ぎたる奢を極め、度々殿への願ひ、冥加を存ぜざる曲者なり。每年殿より下さるゝ物を持つて、それに合ふごとく身代を賄はゞ、千年立ちても外の願は無き筈なるに、殿を賴みに奢を止めず、數度の願御前へ申上ぐるに及ばず、決して相叶はぬ間、罷歸れ」と大きに叱りつけられ、大分に當が違ひ、御目見えさへせずして、すごすごと立歸り、先島原の太夫請出す約束を變替に遣し、下りしなに馴染の野郎を男になし、手代分にして四條の御旅町に、花車道具の見世を出させんと契約せしが、是も此節なれば遠慮と、酒の上に失念して、置いて戻

置いて廻れば、是を請けて菅笠に股引脚袢はいて、町中を賣りに廻る男幾人か來て買うて行き、五年が内に千兩近き金を儲け、二條通りに家を求め、生藥の見世を出し、長崎へ自身下り、上るべき藥種を見たてゝ買込み、又は砂糖にて利を得、段々仕合續き、十年して惣勘定をして見れば、凡三萬八千兩儲け溜めぬ。女房是を見て亭主にいへるは、「最早夫婦共に六十に近ければ子供に世を渡して、別に家をたてゝ隱居をして、是から後世を取外さぬやうに、寺參を仕給へ」といへば、「まだ後生を願ふは早し。人は時至り勢に乘りて、仕合に向きたる刻は、其時を失はざるやうに、拍子に乘つて油斷なく挊げば、何程も儲けらるゝものぞかし。惣じて金銀の溜るも峠ありて、溜るほど溜れば、何ほど精を出し勵みても、居据りて儲け難し。我今の勢にては五萬兩になるは二三年の内なり。此峠迄遣りつけてのち、隱居をすべし」と、成人の子を持ちながら、それに構はせずして、自身手代共を引廻し、軍配を振られけるほどに、案の如く二年經たぬ間に五萬兩の餘になつて、内藏に小判の山を築きけり。然るに長者といはれし持丸の六代目の長三郎、御大名を後立に賴み、無益の奢を極め、金銀なければお願に一下り下れば

明神へ祈誓をかくるくらゐなれば、人の捨てる物を拾ひて用ゆる方へ持つてゆかば、錢を儲けぬといふ事はあるまじ。五百文の錢がほしいといふは、我繪を書き止まれば、その方が飢るを思うて元手といへり。其方さへ當分喰口あらば、我事は氣遣すな」と、女房を働に他所へ遣し、其身は朝疾く起きて箒一本持ち、京中の寺々の墓の掃除をして、樒の葉の散りたるを拾ひ集め、宿へ持歸りて樒に似たる葉を、拾ひ寄せて一つに打交ぜ、日に干し臼にてはたき、花抹香にして賣りける程に、元手なしに錢を儲けぬ。是より寺々へ廻る道すがら、馬の沓草履草鞋の切れたるを拾ひとりて、是を水にて砂を濯ぎ落し小かに切つて、左官釜塗の所へ、すたにして商ひければ、次第に人の知らぬ錢を儲け、猶工夫して藥種屋を廻りて、虫入の藥或は蘆頭、又は袋、箱の底の芥迄を、五文三文にて買ひまはれば、生藥屋には人頼してなりとも捨てさせんと思ふを、錢迄出して買うて行くこそ幸なれと、それより溜めて置き、此男を待つて賣りければ、此藥種の屑共をひとつにして、石臼にて挽卸し、小き紙袋に、梅の木和中散と能德書迄板にして、見場好く拵へ、十袋二十五文づつにして、一文菓子賣る店、小間物店、伽羅の油屋へ





夫を仕出し、儲ける道筋さへついて來たらば、あれほどの身代にはなるまじきものでなし。あはれ錢五百文欲しや、それを渡世の品玉の種となし、四五年の内には、一軒の家の主となつて見すべきもの」と、獨言をいふを女房聞きて、「此方と十五年添うて居る内に、終にさうした一言を聞かず。其思案の出るは立身の基、福の神の敎なるべし。骨牌百面の繪代三匁、十日には出來難し、一生是に喰付いて居ては、棺桶へ入る迄いでは揚らず。なるほど其心を以て明日より職を替へて、責めて盆に鯖をすわり、正月に餠を祝ふ程に出世をする勘辨を仕給へ。五百三百の元手は隣の長者殿へ、二十日ばかり働に雇はれて行けば、心安く借り出して來る事なり。先何ぞ商の思ひつきあるか」と問へば、「今の世は銀が銀を儲けさすれば、手振にて中々儲ける事難し。併し手のものの骨牌を以て産業を考へるに、三枚の時九と虫ととれば錢をしてやられて大きに損をする。又讀み骨牌の握りに、九と虫をとれば一九とて錢を取込み、大きに德をとる事なり。是捨てる物を用ゆる所あり、用ゆる物を捨てる所あり。然れば切のない虫をお助けといふて座中へ嘆くを、三枚には同じ物貳枚見ては、此お助けの虫を欲しがり、骨牌大

平生の挊にあり。爰を以て小富は勤めによる、大富は天によるといへり。其昔奥筋の御大名の御先祖へ、町人ながら比類なき働をなし、侍に御取立あるべきと仰出されしを、「二腰さして邪々馬に乘つて、自然の時に一命を捨つる事、代々町人の種を繼ぎぬれば、恐しうて有難き御意、却つて迷惑の至り、同じ御取立ならば、子孫迄御呉服を始め、總て京都の御用を仰附けられ下されなば、有難く奉レ存べき」旨申上げけるに、願の通り仰附けられ都に登り、壹丁四方の屋敷を求め、それより代々御用承りて、日々に榮え持丸長三郎とて、其名三ケ津に匿れなく、美々敷暮し羨まぬ者はなし。此長者殿の隣に一寸外へ出ず、打込んで骨牌の繪を書き、一から十迄年中是で女夫が口を過ぎぬ。不斷書いて居る釋迦の十は百ものと聞けど、遂に百繋ぎたる錢の寐姿を見ず、今ころりと死んでも此世に少しも念の殘らぬ身代なりしが、親代々からの貧苦の業も最早遂げ果す時分とて、福神の重手代、十露盤の精、まんを替へに此骨牌の繪書く所へ這入り給ふと、繪書の仁助遂にない思案出來、「我此儘死んでは人界へ生を受けし甲斐はなし、倩此隣の長者殿を見るに、目鼻手足ありて、我とさのみ變つた所もないからは、何ぞ工

されませ」と、權柄にいうて取つて歸るやら、寄る所さはる所内外にて取挫がれ、財寶さらりと埒明けて、家迄賣つて立退き、今日を暮し兼ねて骨を惜まず、足手を百足ほど働かせて、鞍馬口に小家を借り、榮耀に育ちし内儀も昔を捨てて、朝夕の米を炊ぎ、楊枝のやうな手も自ら荒れたる宿に、是非もなき暮し、亭主は米屋へ碓踏みに毎日通ひ、踏んだりはたいたり、此世からの地獄扨も落ちたり〳〵。

貧苦を切替へる骨牌の繪書

それ人の貧富は出生の初より定りたる天命なり、智惠才覺の及ぶ所にあらず。假令ば石菖などの如きの草は、いかほど陽氣を受くる所に植置きて、朝夕土をかひ水を注ぐと雖も、一生一尺とも高くなる事能はず。松杉などは五年十年が間に程なく大木となるがごとし。然れば今世に知られたる分限者を羨み、あの身になつて見たしとて、晝夜寐ずに挊ぎても、石菖の身を以て松杉にならん事は及び難し。たゞ大晦日を困しまず、大抵並に世を渡るは天命にかゝはらず、

御を呼びつけ我内より乘出すを、悋氣すべき内儀は、貧乏神の守りめにて、何時とても機嫌よく差櫛拔きて、亭主の鬢撫付けて參らせ、「又今日も夜ならではお歸りあるまい、四つ前に湯風呂を焚かせ置くべし。角助お煙草入は持つたか」と、旦那殿を出したてゝ、其身は芝居の替日見に、物好の衣裳著飾り、お物師腰元乘物の兩脇に尻をふらせ、上京の歴々の奥樣風を移さるれば、糠かづきし手代は鬢つき改め、伽羅の油で痛めつけ、男磨きて石垣町へ出掛け、此仕過しを埋めんとて、旦那のお爲顔に米市にかゝつて、損がゆけば親方へかづけ、徳がゆくと無言り、主なき家の如くなつて、小美しい下女が米買ひに來れば、五升の内三升添へて遣れど、誰が吟味する者もなく、米踏男迄糠小米をはづし、出入の者は朝夕を來て喰ふのみか、さま〴〵の茶好して、肴屋呼んで蒲鉾買つて、内方の通に付けさせ、又は家請を賴みながら疊の無心を申すやら、「奥樣のお腰が冷えさせられて、久々御子のないを氣の毒にぞんじ、此度御名代に女共を、有馬へ湯治させまする御合力」と申せば、「まあ五年いたせば旦那樣四十二にならせらるゝ、御厄年を當年取越し、御息災なやうに願掛に、夫婦連で參宮いたせば、女夫が通し駕籠の代遣は

出る男にあたつて、斷りなしに夫々に片附く中に、後れて一座目をつけてゐる、小勘といふ艷白人色知らぬ米屋の惣太郎が取當り、扨も是はおやかりものと羨ましがりぬ。惣太郎貧乏鬮に取り當るも、してのさする仕合とは、後にぞ思ひ合されける。女房の外は色といふ字を知らぬ男、今を初めの旅衣、帶紐解いて寐て見しに、地女とは各別世界、殊更此女上手者にて、名譽人の氣を取り、隨分吝い此男を手に入れて、又逢ふ迄の形見とて、白布の鼻紙手拭取初めてより、是を綱にして動きの取れぬ仕掛に乘つて、是より毎日通ふ程に、出合頭に町の髮結が太鼓に附いて、近所なれば一度はと勸められて、島原へ出掛け、局女郎より十五へあがり、天職の豐なる道中を見て、直段を聞けば三十目といへり。「あの器量幅のある體では、安いものぢや」といふを、くつわの手代が聞いて、「大宮の嗇い米屋が安いといふからは、よく〳〵の事なるべし。さらばあげよ」と二百十日も靜なるに、何を目當にや俄に直上して、四拾三匁に相場が立つと聞いて、惣太郎天性の算用氣離れず、四五十目出すからは今少しなれば、一向一飛に太夫へ飛ばんと、上分別を出してより止途はなく、元來金には事缺かず兩親はなし、誰を憚る事もなく、

いへば、一座尤と同じ、日を定めて圓山にて少々會、晝から酒にて、今日の樂千金にも替へぬと、隨分奢つてからが世智なる者共が指圖なれば、どうしても百二三十目銀が餘ると申すを、迚も仲間の慰に使ひすてる合點なれば、「三味線彈いて歌唄ふ座持の野郎白人を四五人呼べ」と、高の少い貸方の若いものから云出し、上々機嫌の上にて、座中「是はよからうと、ばたばたと人を遣りて、何となしに白人三人野郎貳人呼寄せ、三十七人車座になほり、門跡樣の御盃頂くやうに、一人々々頂戴し、尙面白き日もはや西に傾けば、たゞ去なすは世界の費、鬮取して床入せよと、請取普請に切々入札しつけてあり、材木屋の手代がちいさう紙切つて丸め、搔餅乘せて出た高杯の菓子盆に入れて、「さあ〳〵何れも近う寄つて、御緣をお結びなされ。此内に若衆樣と女郎の御名が書いてござる。是に鬮當つた衆は、圍の間へ連れましてござつて、若衆なれば貳角の儲け、女中なれば銀四兩のまうけ、さあ取つたり」と詞をかくれば、彼世へ半分足踏込んで居る親仁、手に輪珠數かけながら、人よりまんがちに取りかゝるこそ可笑しけれ。遂に斯る君達の寐肌を知らぬわろへは當らず、小錢も使ひ兼ねず、折節は野郎白人の席にも





裾をからげ、素股を踏んで悦びける。仲間立合ひ吟味するに、ねばまもなければ、家財に六貫目の古手形を添へて取り、賣立てて見るに、やう〳〵三分半にまはれば、何れも堪忍して濟し、「古手形はとても埒のあかぬ物、反古同然なれば、もみくさにして紙子屋へ遣るべき」といふを、はした金賣る小兩替屋、此仲間にて手形の文段を見て、「是は慥に銀になれば、我に任せ給へ。見事に銀にして見せん」と彼手形を懷中し、預りし主の方へ行き町所へ附届し、其上に表向へも出づべきと、むつかしうかゝりければ、借手は歴々の浪人、親類の取持にて、近日御奉公に出らるゝ心拵の最中、若し表立ちては、立身の障りと、町中を頼み、六貫五百目を貳貫五百目にて色々曖れければ、仲間には拾物と悦び、貳貫五百匁取つて濟し、「捨物にした銀を、兩替屋殿の大きなる御働、忝い」と仲間寄合ひ、割付けて取らんとするを、頭分の人申しけるは、「死んだものが蘇生る事はあらうが、此古手形が銀にならうとては存ぜなんだ。然れば萬更拾ひものといふもの、此内五百目の少う取りたればとて、さのみの事もござるまい。何と何れも貳貫目は割つて取り、五百目はのけて置きて、仲間の氣晴に申合して東山へ參るまいか」と

吝く、親類出入の下々迄に、形見とて切一尺箸かたく／＼散さず、親仁艱難を經て儲溜められし一萬兩、家藏諸道具ともに手も濡さず丸取にしてやり、三日の仕揚に旦那寺の一山、一門中迄齋に招き、四日目より見世を開けて、世を渡る業を大事に掛け、世の樂は銀溜める事とのみ一筋に思ひ込み、世間を止めて挊ぎける程に、いかな貧乏神も此男は力に及ばず、少しにても算用疎略にして、油斷する氣につけ入りて、我貧道へ誘引せんと、紙屑籠の影に白眼詰めて居れども、親の吝きにつり取る位にて、桶の輪替さすにも門に立番して、乞食と爭うて古輪を集め、大風の朝は散りゆく屋根板を拾ひて薪と悅び、鹽肴買ふも目にかけて直段をし、斗芋も百を何程と數讀みて買ひ、夢にも十露盤を忘れねば、貧乏神も此算用の嚴しさに恐れて近づかず、是は福神の重手代が、我を一杯箝めしか、但し所を聞間違へて、福力の强い家に來るかと、尻据らず貧乏ゆるぎしてゐる所へ、松原通りの紙子屋身上潰れ、負せ方三十七人寄合するについて、此米屋惣太郎も、米代壹貫三百五拾匁あれば、賣掛の頭とて中間より回文廻る。扨こそ損の口が開いた、此弱みから附込んで、今に貧乏の花咲せんと、ぶ肩をいきらし左前の

旦に星を戴いて寒前に酒屋の米を踏みに通ひ、夕は月に向うて草鞋をつくり、捨りゆく藁屑迄取集めて、鍋取錢差に拵へ、若い時から繫ぎ溜めて、五百七拾五匁を元手とし、小商のありさうな所を聞立て、耳塚の前にて小米屋をして、次第々々に富貴の身となり、大宮通りに間口二十三間、裏行野よりも廣き屋敷を求め、形には構はず、襷がけして挊ぐ女あらばと、是程の家持になりても、呼入れておかさま待遇にせず、下女竝に働かせて、その身もそゝけし鬢を撫付けたる事もなく、地太き木綿を淺黃に染め、花色の紬のふとりの首卷して、今の都に住みながら、四條の板橋を東へ渡らず、近所なれども丹波口の西へ行かず、晝夜家職を大事に勤め、慰には十露盤彈きて、塵劫記のつもり物の圖にある、杉なりの俵物廣庭に幾所かはへて、諸國の秋を居ながら詠め、藏には金銀の光大晦日の闇を照し、元日から元日迄年中始末を第一にして、「譬へ此度の煩重るとて、乘物醫者にかくべからず、氣を取失ひ踏外して、地獄へ行かうが、名を指してよびは生けうと、必ず高き人參など用ひな」と、一子惣太郎に是をいひ死にして、七十古來稀なる挊手と、同商賣の者死顏を拜みに集まりぬ。此悴親に優りて、人の憎む程

藏にうめきし銀箱、明暮の附屆に何時ともなう皆になし、やう〳〵此比我と合點して、蒔捨て歸らぬ金の、名殘惜さは朱雀の細道通ひ絶えて、今は內證に尾が見えて、稻荷の宮の前に、煙草切して朝夕の煙をたてぬ。此身代を見出せしより、暫く揚屋町に休息いたして居る折節、くつわの神棚から、此方の言傳が屆きまして、是迄參つた。然らば仰に任せ大宮の米屋へ、是から直に參るが、若其家にまだ果報力の殘があつて、異見など致す手代はござらぬか」と問へば、「いかな〳〵悋氣して泣き叫く筈の內儀さへ心が洒落て、男をせくは初心の至りと、亭主が餘所へ出る時は、手づから小袖取著せ衣紋繕うて、我夫ながら出立ばえのする好い男ではあるぞと、後から團扇で貧乏を煽ぎたて、其方を待つて居る樣に仕掛けておいた。氣遣なしに行かしませ」と、互に聲を合せて、「福德貧乏々々々々〳〵〳〵」と、三度祕文唱へ、又元の黑白二つの玉となりて、兩方へ飛去りしは奇なるかな〳〵。

揚屋へはかり出す米屋の仕果


福（ふく）
そろばんの
わけ屋町


貧（ひん）

ん臍下貧乏の神司なり。又黒き小男こそ、福神の重手代、始末大明神の殞子、額を合せて密なる相談、「我等久しく大宮の米屋にありて、僅なる搗米より、碓の拍子よく踏み堅めたる身代、仕合は吹きつける、風空に上りを得、金銀溜るに從ひ、商の道面白く、始末第一にして渡世に油斷なく、十露盤枕に寢覺心安く、今一萬兩の分限、是過去よりの仕合の峠にして、最早此上の果報、追付有難い國へ親仁が宿替、跡取の息子前生にて蒔いた種なければ、親父一代切の福力、是によつて我今宵より彼米屋を立退き、親代々から貧苦に責められ、夫婦の口さへ過ぎ兼ぬる、仁助といへる正直者あり、是過去から持つて來た果報あれば、貧乏の花盛も漸々散りがたになつて、實のなる時に至れば、此方へ行きて、内外を守れと、福神達の指圖によつて、世に聞えた持丸長者といはれし、有德人の福を削りて、仁助が貧と入替に參る。貴殿は是から大宮の米屋へ御出」と申さるれば、貧乏神の小坊主承りて、「拙者は十ヶ年以前より、室町の絹布屋、二代續きし有德人、三代目迄續くべき福の果なければ、福神と入替り、惣領仁兵衞を此島原へ誘ひ來りしより、一日も我宿に寢ず、夢覺めて夢に又現のごとく、十歳餘の大騷ぎに、年々內

我心から合點にてする事なれば、丸裸になつて野に寐るほどの身になりても、人を恨むる事もなく、斯うなるも太夫ゆゑぢや、君ゆゑなれば喰はずに居ても本望ぞと、乞食しても樂しみふかし。いづれ我代に潰れねばならぬといふ事、あたまから知れてあらば、外をやめて色事一道にて、身代の回向をし果てば、念佛申の坊主になりて、先の世で好い身になるやうに、心掛けるこそ俗家の悟道といはめと、色里の年寄ども打寄りての物語、是は利口な事を夕暮に、揚屋町を通れば、東側の揚屋の二階の紙屑籠より、延紙の色したる白色の玉、白き筋を引いて飛出で、東をさして颺きゆく。是は年代記にも見當らぬ不思議と、此玉の行く方について行けば、大宮通りの近年の出來分限、始末から儲溜めしと、同じ仲間の賞め草、穗に穗榮えた米屋の親仁、不斷手馴れて黒光に垢づきし、枕の十露盤三五の十八ばらりと、ひとり粒はぢはぢけて一つに塊り、黒色の玉となりて、黒き筋を引きて西の方へ飛行きしが、紙屑籠より出でたる玉と、空にて行合ひ、丹波口の野中へ此玉二つながら落つると見えしが、一つは白き小坊主となり、今一つは黒く四角なる小男となつて、竊に咄すを聞けば、揚屋の紙屑籠より出でたるは、是な

貧福二つ車廻り持の金銀

人間の盛衰はあざなへる繩の如し、誠に長者二代なし。親父死なれて世盛の花も散り、移り變る夢の世の有樣、電光朝露火打の石の、紙子姿に間もなくなりて、子供が代に家普請に手のかからぬやうにとて、瓦葺にし銅樋をかけて、石井筒に鐵釣瓶、諸道具も一度の大願に、末代物にして讓られし家財を皆になし、親の物好に建てられし家を餘所に見る事、其子呆痴にて仕果るのみにもあらず、潰れ時には潰るゝ事、凡夫の智惠才覺にてゆかず、是皆時節到來必ず色狂の業と、此面白き色道に疵をつけて貰ふまじ。色事に皆になさねば、銀山買置掛損、大廻しの舟で打込み、手代に使はれ、さま〴〵無量の事にかゝつてこけてのければ、同じ潰るゝ時節ならば、若女二つの樂に打込んでしまふが、未來迄もよささうに思はるゝ。利をとる爲に銀を貸して、根からしてやられ、買置物に下りを請け、大分の損をする時は、胸やすまらず心怒りて、大きなる罪ぞかし、女郎狂には假令千兩萬兩蒔捨ててからが、可愛さのまゝ面白さのまゝ、

親の跡を踏堅める　碓歌節々のない夫婦間
遊女の縁に取りあたるは身のために貧乏鬮

貧苦を切替ゆる骨牌の繪書

高う吹く風に立消のする長者の萬燈
貧家の働身から出す脂の光
暗からぬ内證廻りの好い生藥屋

商人軍配團 卷之一

目録

貧福二つ車廻り持の金銀
繁昌の店段々手代を置きたてる算盤の御影
商人の盛衰世はさまぐ＼に變る見世つき
若い者のげんかい灘一度は身を打込む色の港
揚屋へ計出す米屋の仕果
島原の女郎もよねの中とて風前の大あがり

もに家榮え、昔の奈良刀金作にして箱にをさめ、永代松の條をならさず、此御時江戸に安住・してなほ悦を重ねける。

法師ともなりて我後世を弔うてたべ。我又出世して立歸り、そなたが死んだと聞いたらば、たとひ如何なる富貴の身となり、榮耀の暮するとても、一生女といふものは奉公人にも使ふまじ」と、「互に心底をかため、旅籠屋の見世にて契約の盃して、怪我に手さへ握らず、行儀づよく立別れ、娘は南都の親の許へ歸つて、刀屋に逢うたる事はいはず、それからつくり聾となつて奥に取籠り、夫の出世の便を心待して暮せば、始め貰ひたがりし人々も、かな聾になりし樣子を聞いて、それでは世帶がまかされぬと、呼ばうといふ者も無ければ、親も一生喰つぶしの娘と算用して、嫁入沙汰なく我内にさし置きぬ。それより五三郎は白銀町の細工人にしるべありて尋ね行き、此度の仔細語れば、哀をかけ、「男の働くべき所は爰なり、一挊」といふにぞ力を得て、腹の中から知つたる道とて、刀脇指の拵所の看板出し、御屋敷方へ出入り、十ケ年たたぬ内に一萬兩の分限になつて、南都より契約のおそめはいふに及ばず、舅姑ぐるみに江戸へ迎へ、朝夕女夫孝行をつくし、心の儘の暮、是皆貞女の道をたてる娘の影にて、榮花の老の入まひ、邪なる古の心を悔み、今直なる世を渡りて、日本橋のほとりに角屋敷隱居、母屋と





をうつて、「扨はそなたは花園の墨屋の娘おそめか。我こそ今話されしいひ名づけの聟の刀屋の五三郎、其方眞の志の縁くちずして、今此姿で始めて逢ふ事、嬉しいやら恥しいやら」先いはうて抱きついて互の泪、「おちやうて斯う寄るからは、すぐにそなたを伴ひ、草を結びてなりとも二人が住所をこしらへ、共挊にして夫婦の語らひを樂に暮すべきが、我勘當をせられ京都を立ち去る時分、江戸に行きて大金をまうけ、親の身上に百倍增の身にならずば、古鄕へとは歸るまじと、大明神へ誓をたて立出でたる事なれば、そなたを連れては心のまゝの挊ならず。其上二人が添うて居たらば、兼ねてから兩方の親の目をぬき、忍び〳〵に出あひ、古鄕を出づる時節いひ合せて連れて立退きしかと疑はれては、手前の親其方の親達のにくしみ、又そちが眞なる心底も前方から人知らず、斯うしたいひ合せありし故に、他所への緣組も嫌ひ、親の詞をそむいて、男にそゝのはかされて家出をしたと思はれ給ひては、貞女の道とはいはで、いたづら者と惡名をとり給はん。眞實其心ざし違ふまじき心底ならば、我出世して再び古鄕へ立歸る迄、ひとり身となつて辛抱して待ち給へ。念願とゞかず此儘にて病死せしと聞かれなば、尼

まで請取り、來年の春は嫁入して參る筈なるに、聟殿色狂と喧嘩好にて、度々の異見用ひ給はぬ故、近き頃勘當の由にて、わらはが親達の方へも其ことわりの人參り、悴勘當致し追ひ失ひ申す上は、今日より契約の緣切れ申せば、何方へも外へ緣組下さるべしとの口上、二親聞かれて、幸々兼ねて物にならずと聞いて、おそからぬ事を早く極めて、今更變改はならず、あつたら娘一人すてたと思ひしに、あの方よりのことわり、一重に大明神の御影有りがたし、三條通の布屋織右衛門内々ほしきとの望、刀屋よりは格別身代よし、高畠の勘太夫殿賴みて、刀屋の緣切れたる樣子を布屋方へ知らすべしと、二親の悅聞くに淺ましく、女の身の枕を竝べねばとて、一度賴みのしるしを取つて、夫婦の緣を結ぶ上は、わらはが夫にまぎれなく、親達の爲には現在の聟、實の親が勘當せられたらば、此方へ引取り、わらはと夫婦になして、布の中買なりともさせられ、一生世話をせらるゝこそ道なるべきに、勘當を幸にして他所へ緣に附けらるべきとは、親ながら道ならぬ御志と再三申せど、聞入なき故、所存を書置に殘し、あひも見もせぬ夫の行衛を、斯くうろ〳〵と尋ね出ました」と泪兩袖をぬらしての物語、五三郎橫手

へ參るやうな身なれば嬉しけれど、行衞も知れぬ人を尋ねに東の方へ先參つて見まする」と、心ぼそき答に、自然と胸中しは〳〵となつていとしぼく、「女性なれば何の樣子も御存じなく、遙遙の吾妻路へ、ついも行かるゝ事かとおぼしめしての思ひ立ち、是より末には筥根といふ所に御關所あつて、御切手なくては女の行く事かなひがたし。立歸つて親達共相談あつて、町中へも披露の上、御切手を申請けて重ねて下り給へ。樣子を語られ苦しからずば、尋ねらるゝ人の名苗氏を聞かさるべし。我等はお江戶へ薪の能にのぼられし小鼓打と、南都に逗留の中心やすく噺したるを便に、身の上を賴みに罷下れば、名さへ承つて參らば、心がけて尋ねて參らせん」と、懇に申す詞を聞いて、「お前は南良のお生れか」と問はれて、「いかにも〳〵親一つにうまれ、錢を一文かすがの里に取替へてくるゝ人さへなく、向脛から飛火の野守も出でて見よ、あのやくたいなしが勘當せられてうろつく有樣をと、目狹き所とて指をさして笑はるゝが恥かしさに、武藏野の廣き心の友を賴みに、只今下る」との物語、「さりとては世には似たる事あり。私も南都の花薗と申す所のものなるが、十三の年同じ所の手貝の刀屋へ緣邊の約束、たのみの印

かへり三笠山も今が見をさめとなりなん事もと、何とやら悲しく大明神を恨み、氏子は千金にもかへ給はぬとの御事なるに、今二朱一つなくて寒空に綿入の布子さへ、木津川の渡しに乗つて遙々の東路に下るを、あはれと思ふ人もなしと、ひとり言の浪に聲ありて、佐保の川を打渡りてと謠を門々にて唄ひ、勸進してやう〳〵袂に米ばかり、おあしといふ物は一文さへ無き膳所の晝休に、旅人のしたゝめするを見て腹をふくらかすより外なき所へ、抜參の娘と見えて、十四五なる美しきが菅笠傾け只一人、うろついて來るを幸、是を賺して道連となり、伊勢までの泊々の旅籠代を拂はし、其上でぬれかけ、手にも入らば路銀のあまりを望姓とし、此海道で蒟蒻の田樂なりと賣りて、しばしなりとも命をつなぐべしと、身の苦しきまゝ道にあらぬ横る思案を仕出し、「こなた始めてのぬけ參宮と見えたが、此道筋には護摩の蠅とて、おの〳〵の樣な小美しい娘はかどはかして、茶屋風呂屋へ無體に賣つてやる事なり。正直正路の我に行きあひ給ふは、こなたの信心つよき故、大神宮の加護にて我等にお引合と思召せ。伊勢の太夫衆へ用あつて行く身なれば、下向迄世話して連れて參つて進ぜう」といへば、此娘會釋して、「伊勢

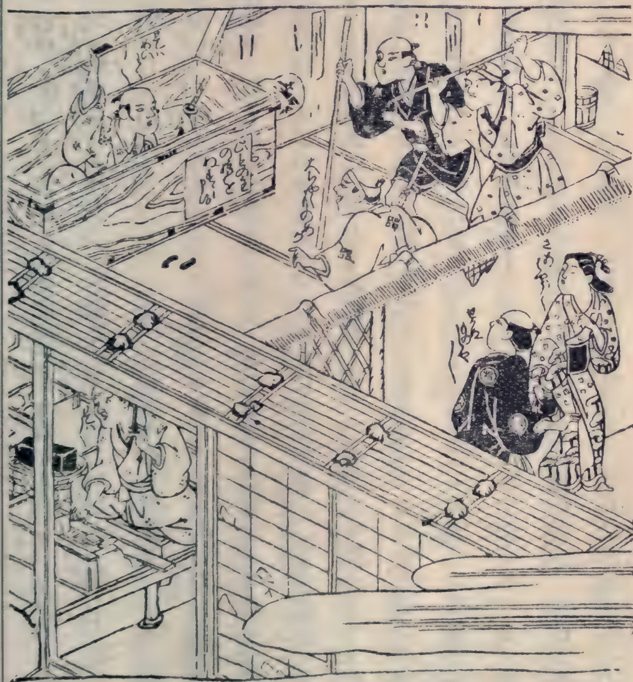
はるを、五年以前の餅つきの夜手傳に參つて、荒神の鏡を二人してこなせし時、ひよつと手がさはつて出來心で、取粉ぐるみにじつと締めましたれば、かたしげないは締め返されまして其れから病みつき、大方月に十七八度人知れずの隱し喰、斯うした私を佛のやうに存じて、內外共に心やすう致してくれる與五三が手前面目なし。殊更與五三は私とは違ひ平生堅い者なれば、こんな事など聞いたらば、目前の天狗樣よりは我等を引裂いても捨てうやうに申しませう。其段は先達樣お慈悲に沙汰なし〳〵」と手を合して拜みしは、知らぬが佛なるべし。

貞女の道を守り刀切先のよい出世娘

奈良坂山雨に菅笠もなく、手貝といふ町より夜をこめての旅出立、昨日までは木辻の里にて二三樣とて名題の大臣、今日は切先の悪い刀屋の宗齋といふ者の一子五三郎、諸藝に器用なりしが、鋼鐵反へまはりぬけ鞘持つての喧嘩好、親に幾度か袴を著せ、常にも不孝なれば、目せばき所よりいひ立て舊里きらせて、其里を追出しの鐘の鳴る時、春日野の跡にいつか仕合よく、

て、「私生れてより只今までつひに惡といふ物はどんな色やら存じませぬ。然し爰に一つ心にかかるは、仰つては下さるゝな。此度同道いたした松原屋の藤八内儀おゆかと申すは、にくからぬ生れつき、どうぞ言うたらば情も有りさうな物と、不途存じついたが因果にて、さしも兄弟同前に懇なる藤八が目をぬいて、京へのぼりし留守を考へ、おゆかに戯れ、跡にも先にもたゞ三度道ならぬ事を致した。南無行者樣天狗樣、是は同じ盗でも戀といふくせもの、御了簡にて怪我の無いやうに御通し頼み奉る」と、一身に汗を流して懺悔すれば、先達聞いて、「此霧のふかき事中々常ならぬ樣子なれば、それはかりでは有るまじ。隱さるゝと只今あの杉の茂みから、あれ〳〵」と指させば、與五三顏色土の如くなつて、「三度とは申しましたが、誠は十三度あひました。是より外には身に於て非道といふ事おぼえなし」と涙を流し懺悔すれば、先達行者へお詫申して、恙なく此難所を通りぬ。扨次は藤八が懺悔の番、恰好より氣のほそい男にて、あたまからがた〳〵ふるうて、「小い時親父の巾著錢盗んで、れんとび買ひしより外、芥子ほども惡い事を致さぬが、罪にもならうと存ずるは、懇に致してくれる與五三郎が女房お





の聲もせざれば、家主へ斯くとゞければ、欠落と極つたと町中立合ひ、僅の道具改めて書附ける時、長持の內に人音、是盜人にきはまつたと手にくゝ捧にて取廻し、錠おし明けて內を見れば、亭主の角平夜の明けたる心地して出づるを、町中長持の書附見て、主人の娘をかどはかして來る橫道者、後の災一町の難儀と、すぐに請人へ渡して家を明けさせてしまひぬ。凡そ此娘に限らず世の浮氣女、隱し紋の下著ほころび、我つまならぬ妻をかさね、一門までの名をよごす事、一つは夫が愛過ぐるより事起れり。江戶堀に松原屋藤八、生野屋與五三郎とて、他人ながら兄弟よりも親しく、內外共に懇なる者ありしが、行者講の中間へ入り大勢連にて山上をしけるに、藤八與五三は此度が始なれば、新客とて先達道々の世話をやき、高山深谷を誘引せしが、鐘懸といふ岩壁になつて、同行皆信をとつて登る中に、「新客二人は此所に於て心に微塵でも非道のおぼえあらば、つゝまず懺悔し、業障の垢をすゝいで登らるべし。少しにても隱し給へば鼻の先へ天狗來つて、首筋もとを摑んで數千丈の谷へ投げ捨て、又は引裂き木の枝にかける事僞ならず。早く懺悔をし給へ」と先達の敎恐しく、與五三郎生きたる心地はなく

と、否應のならぬいひ方、息子ものりかゝつた女房なれば是非に及ばず、「然らば是より尼ヶ崎にしるべあれば、一先立退くべきが、亭主が跡にて恐しい所へ願ひ申さば、我々は磔道具」と二の足ふむを、「それも氣遣なされますな」と硯取出し、

此角平と申す者、主人の娘をたぶらかし、無體に連れのき候へども、女の身の悲しく刃物拔いておどし候ゆゑ、心ならず只今まで透を見て打過ぎ申候。幸の時節酒に醉せたばかり長持に入れ置き、自は元來出家になる志ゆゑ、是より直に尼寺を賴みに罷り出で候。

播州何の何某が娘とわ。

と書附け長持にはつて、心しづかに立去りぬ。角平は斯くとも知らず、鳴らぬ神鳴に恐るゝ如く、長持の中に大汗になつて待てどくらせど、相圖の音もせざれば、内よりあけて樣子を見んと蓋を押して見れども、いかな〱動かねば、せう事なくて中から聲立て、「隣のをば樣賴む〱」とわめけど、桶の底から物いふ如く微塵も外へ響かず。日の暮れる迄升おとしに掛つた鼠のあばれる如く、がたつかしても明かばこそ、其内に相借屋の者共、暮れても戸さへさゝず、夫婦

まと我家の内へ招き入れば、亭主の角平心得たりと明長持の中に隱れて、女房が合圖を待ち居たるこそ非道なれ。女は元來紙屋の息子に思はく心底打明け、どうもならぬと寄り添へば、若けれども息子少し思案あつて、「男のある身でこなたから思はくとは、うま過ぎて氣味わるし。世間に筒もたせといふ事はやれば、神々入れての誓言でも肌が許されぬ」とかぶり振れば、「さりとはお若けれども粹樣なり。成程御推量の通り夫非道の欲心を起し、こなた樣を是へ呼び寄せ、枕を交すを相圖に、あの長持から出らるゝ約束。是はお前に逢ひたさ故に亭主と同意の顏して、ゆつくりと逢うて御話申さう爲に、長持に錠をおろし置いたれば、亭主を籠へ入れ置きしよりたしかな事、是見給へ」と立つて行き、長持の錠までおろし置いたる僞ない所を見すれば、無慙や亭主は斯うした噂が思案とは知らず、女房共相圖の時分ではないか、隨分ぬれかけ味をやれと息もせずだまりゐる。紙屋の息子僞ない女房の心底見さだめ、扨はと打解け枕かはして、又重ねてと出でんとする袖をひかへ、「夫と見かへて斯うした我なれば、此所には最早居られぬ首尾なれば、何方へも連れて退き給へ。さもなくば長持あけて亭主にねだらすが」

さるべし」と能く〳〵頼みて立歸りぬ。傳七、今迄よしなき不義者共に一ぱい喰され、此間をしき骨を折つたる事のくやしさよと、其後は二人が來ても物さへいはねば、扨は身の悪知れたる物よとがんづきて、おのづから此所に尻する廼難く、夜の間にぬけて高原といふ茶碗燒くあたりに、わづかなる賤の家借りて、風の神放下師と合住居して隱れ居たりしが、近所の紙屋の息子少し男自慢にて、鬢附の厚き若い者角平が女房を見て、貧家の妻にはしほらしい生れつきと、通るたびに目を附けしを、女房見とめて、夫の角平にさゝやきけるは、「我々世間せばく成りて思ふやうに挊がれぬ故、朝夕の煙さへ立てかね、大方は餅買うて一食で暮し、はや明日の送りやうを案ずる身なれば、道ならぬ事ながら、紙屋の息子が妾になづみたる目つき、是に戀を仕掛けて筒もたせで、かたまつた銀を取るまいか」と女の智惠から恐しき巧、貧につれて角平も同心、「是は佛さまの附智慧なるべし、究竟一の思案、然らば是へ何卒つり寄せ、帶紐解かせて嫌のならぬ所を、我等是なる長持の中に隱れ居て、そちが相圖を聞いて飛び出で、隣家へ聞ゆる程に聲立てゝ物にせん」と夫婦しめし合せ、どうやら斯うやう紙屋の息子をふづくり出し、まん

をぬいて持ち行き、米味噌までの世話をやいて主從二人を移し參らせ、大方は商賣やめて朝晩御機嫌を伺ひに參りけるが、一月あまり過ぎて播州の古主に仕へし傍輩の侍二三人、傳七方へ尋ね寄り、「主人の娘子おとわ殿、同じ家中の歷々へ緣につかれしが、出入の玉都といふ聲のよい座頭と度々の不義あらはれ、既に手討にもせらるべき所なりしを、侍の女房を目のないものに盜まれたと家中に沙汰あつては、武士の一分すたるを悲み、胸をさすつて何となく不緣の由にて、穩便に戻されければ、主人も內々此噂耳に入りてあれば、心よくおとわ殿を請取り、近近南都法花寺へ遣し尼にせんと、御兩親相談なかばに、中間の角平と狂はれ、夜ぬけにして二人づれで所を立退かれしが、我々に近國を尋ねめぐり、見合次第に兩人共に討つて來れとの仰附なり。若しや此所へなどうろついては來られぬか」と問ひければ、傳七女夫目を見合せてぎよつとせしが、傳七氣をしづめて、我口一つで眼前二人迄の殺生と、そらさぬ顏にて、「堅い旦那のむすめごに、そんないたづら者もある物か。此邊へ來らば叩き出してやるべし」と、苦り切つて申せば、討手の侍詞を揃へ、「此處へ見えなば賺しおいて、早々國元へ飛脚を立てゝ知ら

し」と不審すれば、娘御おとわ涙ながら、「口惜しやおれが嫁入した所の舅太夫殿、とつ樣と口論して闇討にして立ちのかれ、難波に所縁あつて此處へ立のかれし由。其口論の發りは皆みづからが事ゆゑよりと聞きつれば、舅なれども妾が敵を打たずしては、武士の娘の一分たゝず。それ故此角平はそなたも知つての通り、季をかさねて久しき家來、たのもしくも後見して、親の敵を討ちおほせて參らせんと、かひぐ〜しくも是迄ついて來りしが、敵を見出すその間當地に借宅したき願ひ、其才覺頼む」とあれば、傳七泪をこぼし、「御幼少より疊の上からすぐに御乘物に召して、つひに土を踏ませられたる事も無き御身にて、然も御供まはりさへなく、此所まで御出のお心ざし、近頃おいとほしき御事、私ためにも御主の敵、共々心を合し御本望を遂げさせ奉らん」と頼もしく、夫は煙草切さし德利さげて酒屋に行けば、女は木綿縞織りすて茶の下燒附け、心一ぱいもてなしけるに、「一夜を明して見しに、中々氣遣絶えねば、何卒我宿と定めて少しのうちも暮したき願ひ」とあれば、「幸 近所に此程迄鍼立の住まれし明家、南請に菱垣のきれいに、相借屋なくて人の目のゆかぬ所、是にしばらく御座りませ」と、二つある鍋

心底は操的段々に替る仕掛娘

千早振る神代には鹿蘆津姫、一夜かはせし新枕にたちまち御懷姙なされしを、天孫は筒もたせにてやあるらんといぶかしがらせ給ひ、人の代となりては采女なりける女の、まだ十六の春の夜の夢ばかりなる假寢の初床に、其まゝ皇子やどらせ給ひしを、雄略天皇その手はくはぬと綸言ありしとかや。僞知らぬ古さへ、色には心のまはるもの、ましてや今の奢女房、一代やしなふ男を尻に敷きて自由なる遊、こちの嚊は嘘つかぬ者とばかり心得て、下ぬき喰るゝ人多し。七人の子中はなすとも女に肌を許すなと、惡七兵衛景淸が觀音經讀みさしてのよまひ言、今もつて理ぞかし。爰に生國播州に武家奉公を勤めし傳七といふ男、たまかに勤めて切米のばし、少しの金にして御暇申請け、難波にしるべあつて谷町に住居を定め、鍋尻やいて夫婦世を心やすく暮しけるが、古鄕を去つて五年目に、いにしへの主人の娘御中間の角平一人御供にて尋ねさせられ、是はと傳七肝をつぶし、「かろ〴〵しき御なりにて遙々の御出心得がた

夫婦の中はあんばいよう仕合のまはり時
積重ねた銀箱數々の悦は千秋萬歳樂

世間娘容氣　六之卷

子息形氣追加

目録

心底は操的段々に替る仕掛娘
男の鼻毛は長持の錠前おそろしい女の巧
夫を思ふ顔附は正眞でないにせ懸けた夫婦あひ
互の恥を懺悔噺しらぬが佛見ぐるしい友達中
貞女の道を守刀切先のよい出世娘
宿さへ春日野の里に一夜あかされぬ勘當の身
咎なき親に恨をいひ名附の娘が家出

もせぬ心なれば、上問屋下問屋へ蓮葉女といふいたづら奉公勤め、諸國の商人の夜の慰ものになつて、果は新地堀江の二瀬にながれわたり、仕舞は白人まはしの駕籠の者とひとつになつて、辛き鍋尻を焼いて半分の嘘で浮世をわたりぬ。福島屋は女夫中よく、母に孝をつくせし天理によつて、次第に仕合よく、家に家を買ひならべて裕なるくらし、母をねがひのまゝに安樂に養ひ、目出度う往生さしぬるに、妹のたつは道ならぬ奉公をせめても恥ぢて、我方から敷居高くなりて、母の死目にさへあはず。冬も木綿のときあけひとつ著て、夫に見はなされて今日の命をつなぎかね、夜歌うたうて濱側の納屋の陰から密と出でて、往來の袖をひかへて拾文づつに情の切賣、不幸の身の果、隱居もしそうな年ばへにて、振袖著てのたはぶれ淺ましの身やさて。





は私の手強く折檻いたさうかと、それ程の不孝の娘なれども親の慈悲とて申されず。女共は尙以てよしなに取りつくろうて悪じき事を耳へいれねば、微塵も留守中の妹めが不孝の次第を存ぜなんだ。近比御眞味の御知らせ」と悦び、立歸つて引寄せ嚴しく異見をもせんと思ひしが、生得の不孝者、なまなか異見して口答などしをらば、默つてはゐられぬ首尾、志のなほる程打擲せば片輪にならうもしらず、さある時は母に思ひをかくる道理と異見をやめて、とかく人中を見せなば自らひとり世間を知つて、孝行なる心ざしも出來べしと、人頼して北濱の大所へ中居奉公に出しければ、傍輩のすりがらしの下女共が悪性を見ならひ、誰が教へねどいたづらの道を知つて、二度の藪入にも親元へは歸らず、小宿拵へて爰にはいり、盆正月に母の顏さへ見ずに、昨日は嵐が芝居見に、今日は集錢出の濱燒、燒きたての蒲鉾に生醤油つけて板ぐち噛り、腹ふくるゝまゝの晝寢、夜は男狂、誰とも定めがたき血落し、罪とも酷いとも命勝負とも、跡先知らずの身となつて、後は浪人して口をもきかず、主なしの思出に毎日のうかれありき、身をぞんざいに持ちなし、女ながら針持つすべさへ知らず、氣をつめて縮めたる奉公は迚

より段々見て袖をひたし、かゝる優しき嫁の有るべきか、扨も〳〵と感じ闇より出でければ、おの〳〵是を忘れて驚き、夜の明くる迄まし〳〵てから、只今才覺もならずと又斷を申す時、掛乞泪にくれて、「不孝なる娘もあるに、此嫁御の心入さりとては肝に銘じて、何と讃むべき言葉もなし。此上ながら懇にし給へ」と、財布の口をあけて錢貳貫と小判壹兩あるにまかせ、「此嫁に進ずる」といひすてゝ歸りぬ。孝あるゆゑに天のあたへ、憂き所を凌しうちに、息子の五兵衞例年より仕合して立歸り、買懸り悉く濟して、伴の島や町の搗米屋へも、二貫壹兩に日算用して利足相添へ自身持行き、「御情ゆゑに母人に切なき盆を寛りとさせましたる此御禮、車に積みてもあきたらず」と、段々の禮を述ぶれば、米屋曾て此錢金を請取らず、「是は嫁御の姑へ孝心の深きを感じて、合力したる錢金なれば、取戻すべき道理なし。留守中の米代百拾五匁二分五厘、殘らず渡さるれば出入ない」と、何程いうても請取らず、「仕合は眞ある女房をもたれて賴もし。しかし不遠慮ながらこなたの妹御は、内儀に變つて又なき不孝者、田舍商賣なされうなら、お袋の側につけて永留守は御無用」と、目顔に皺よせいひければ、五兵衞我ををり、「母

しが、今の間の光にて頼みなし、是より先に命消えたし」と、母の嘆きをかまはず、娘のおたつは庭におりて、身振に色科やつて、明日の晩からの踊の稽古、「如何に若きとてさりとては心なし、人の手前世の所思、身の程も恥ぢぬべし。其方が年も十七嫁も十七なれど、世間の思ひやりありて、彼のごとく身をすてゝ内證を隱し、親里へも是を知らせず。かゝる前後を淩がるゝは、女の鑑にも末々迄しらすべきいとほしき人なり。いまだ此春緣組して半年もたつやたゝぬに、衣類手道具迄をなくなして、嫁なればとて面目なし。其方とあの人がやうに心ざしもかはる物か」といひも果てぬに、娘ははきたる雪駄を親に投げつけ、不斷の寢間に行くを、母も今は堪忍ならず、手元にありし爪切持つて立たれしを、嫁のおそめ驚きて抱きとめ、漸うに是を詫びすまして、片陰に立忍び、美しき髮おさへの插櫛笄をぬき出し、玉子色の帶を細き組帶に仕替へて、此三色持ちて出でしが、暫く有つて歸り、右の袂より錢百四五十取出し、左の手にさし鯖三つ素麪二把、懷より白き餅を出し姑に與へければ、四五度もいたゞき泪をながし、「此恩いつ報ずべき、嬉しや其方の御志」と丸團扇にて嫁をあふぎ立て〱喜ばれしを、掛乞宵

定つて宿に歸り、半季の買ひがかりを算用して濟す事なるに、今年は七月十四日迄文の便さへなくて、母の親心元なく、嫁のおそめ妹娘のおたつ諸共、如何と案じやるほど、波の上の仕合日和定めがたく、心にまかせぬ海路とは思ひながら、此際の危さ阿波の鳴渡より渡りかね、忰が留守ぢやとて借錢の淵はゆるさず、賣懸したる人々庭に立竝び、節句前とは格別、「否でも應でも百貫に塗笠一かい」と母親せがむにぞ、身も置所なく悲しく、戻らぬ息子を恨み、「せめて斷文なり共のぼしぬれば、おの〳〵さまのお腹の立たぬ事ぞ」と、手を合して詫言、やう〳〵に聞分け、四十五六人の掛乞、とても濟ぬ事に隙費しと立歸りぬ。其中にきかぬ生平の島や町の搗米屋、「朝夕の飯米代なれば、中々取らでは歸らじ」と、一人跡に殘り角なき鬼の貌つきして、「埒があかぬと鍋釜ぬく」と、廣敷に座をくみていつとなく眠の出で、人の物いふもうつゝに聞きぬ。母親他人のある共知らで、「日本第一の大湊に住みながら、我ほど淺ましき者また有るべきか、連合の佛棚も飾らず、蓮の飯を祝ふべき始末もなく、把木も絶えて今朝から簀子の竹をぬきて燒くなど、煎じ茶きれて煙草なく、燈火の油も事缺き、嫁の轆轤引より雫をしたみ

父様は法譽道三といひます、方譽道圓とはおれが父様ぢや」と、蓮の飯をせりあひ、麻がら持つての戰ひ、殊勝にも又をかしかりけり。

傍輩の惡性うつりにけりな徒娘

桃や柿や梨の實、是ぞ蓮の葉商、七月十三日より諸一門の聖靈、亭主が拂ひの心當違うて馳走機嫌でない所へ、心なくも來て造作になる合點は、近比佛達には聞えぬ仕方と思ひながら、聖靈とらへて物前に借錢乞と一口にいひぶんもならず、つい出來合の念佛ふるまひ、あゝ南無阿彌陀佛迚もあはぬ算用、幾度十露盤おいて見ても、三五の十八角豆、茄子青瓜せめても煮燒せずに其まゝ供へ、錢なき宿にも門徒の外は、家なみに世に亡き魂を祭る業の哀は秋こそまされと、一入物悲しく、過行かれし夫の事を思ひ出して、露に泪に兩袖の湊難波橋筋に、福岡屋の五右衛門御家とて、不束なる生れつきなれ共、心正路にして人に憎まれず、夫の仕附けし西國への小間物商、惣領五兵衛につとめさせ、毎年宮島の市より近國を賣廻りて、盆前には

いとの京からの御狀」と段々斷り、皆迄きくにおよばず貳百兩請取つて、さらりと其所も立戻り、又産みおとして須田町の青物屋の親仁所へ緣について、爰でもめでたう年寄り男も佛になして、忘れ形見を持ちてかへつて、年中産むと嫁入する程にかゝつて、抑々糀町の乾物屋より口切して、今四十六才迄二十七所緣附して、男女の子供二十七人儲けて、我内は繼子だての繪を見るごとく、三十疊敷の二階に四方一ぱいの蒲團二つに綿厚く入れ、一つの蒲團の上に子供をぐるりと丸く並べて寢させおき、其上に今ひとつの蒲團を被せ、夜も暖に寢させて、扨夜があけると一人々々起出でて、茶漬くはうといふもあれば、汁かけ食をと望むもあり。酒を飮まうといへば、おれも飮まうといひ出し、蚊のなくごとく口々に好みくひて、腹のよいうちは外へ駈出し遊びありき、暮方に歸る時分、母親帳をひかへて、「太郎松は戻つたか、五郎介は、おせん、おかや、岩之介は」と、答を聞いて帳面の名をけし、「以上二十七人都合あうた、二階へ上つてやすめ」と、大勢をかいそだてゝ段々に成長し、盆の魂祭とて精靈棚を飾るに二十七人ながら腹はひとつにて皆父がかはりて、卒都婆さへ二十七本、戒名も紛らはしく、「こなたの

なさず、未だ三十にもならぬ身で、一町行かるゝにも杖をつき、追附親に跡やらるべき生れつき、しかも片目神田筋違橋邊に、上丸屋とてかくれもなき質屋から、二十四五の發明なる内儀樣を欲しきとのお頼み、お年格好と申し御器量發明、貴方のお望の通りなれば」と、ついいひ出して早速首尾し、千秋萬歳と諷ひしまうて半年もたゝぬうちに、願の通りころりと往生めさると、帶の祝が一時にて、又是にても所務分拾貫目あたゝまりて、立歸ると早や定つて、得意の取揚婆がお見舞申して「お雪さまのお歸りと聞きまして、定めてお土產がお腹にあらうと存じて參りました」といへば、お袋も粹になつて、「うるさい事はまた喰溜めて戻りましたが、此度は質屋の子なれば、同じくば流れてしまへかしと思ひます」と笑うて打過ぎ、程なく安產して七十五日の忌もあかぬ内に、又も嫁入をするが町の錢屋へゆきて、間もなく孕めば亭主は都へ用事あつて、花の三月から七月迄逗留して歸らぬこそ道理、京の祇園の茶屋の娘を請出し、宿の妻にとのぼりつめて、下るけしきはなくて、出入の噂をたのんで此譯をお雪にいひこみ、「とても末かけて思はぬ人に添はぬ所存なれば、腹な子ぐるみに貳百兩つけて、首尾よく戻した

安く産んで母の苦勞にさせけれ共、一嫁入に銀子をしたゝか取つて歸れば、欲といふ兵に出逢うては老の辛勞も忘れはて、其儘一所に抱娼とつて育てぬ。されど世の中に借錢負ふも嫁入するも同じ事にて、外聞わるいの恥かしいのといふは、ずんと前方の穿鑿、度重れば面の皮あつうなつて、近所の所思世の人口いかな〳〵耳にかゝらず、「かゝさま太儀ながら子供が世話をやいて下され、今四五軒嫁入して歸りなば、およそ都合百貫目ぢかうは取らうと思ひますれば、今度嫁入の口きいて下されうなら、隨分病者なわろか、扨は六十過ぎてちと腰のかゞんだ、あの世へ片足踏込んでゐるやうな年寄男望」といへば、母も同じ氣になつて、「血氣な若い者は子をうまして後迄の厄介かゝれば、大黑屋の肥後方へ内證尋ねにつかはし、地黃丸を通でとる所へやるべし」と、又仲人を賴みて、「娘もたび〳〵亭主の別れに憂目を見て、大分病づいたれば、男の達者な所へは遠慮してくれといふ。親の身にしていふも道理と、心入不便さに、此度は二十三十年がゆきて、假令頭がはげてあらうが、鬢先が白からうが、男つきにはかまはぬ。藥鍋を枕にしてゐるやうな聟もあらば、肝煎てたもれ」といへば、「幸ひ六月にも皮足袋は

の息子、無病にして灸の痕さへなく、赤子の時分五香を七夜が内飲みたるより外、藥といふもの小田原の外郎さへつひに齒にのせたる事もなく、名さへ腎八とて健なる若い者、しかも身上よければ重疊と兩方に悦びて、近所へ沙汰なしに呼迎へ、二親の滿足大方ならず。腎八に母屋渡して近き内に本庄へ隱居せらるゝ談合半に、腎八三野へ通ひそめ一日も宿にゐねば、親達驚きさま〴〵異見せらるれども中々耳へも入れず、けつく逆うて始よりしげ〴〵通へば、今ははや異見も盡きて、外樣沙汰になつて勘當帳に附けて追失ひ、跡へは日本橋の妹聟を夫婦呼入れて、家を立つる相談に極まり、又爰にてもおゆきに斷いうて戾す談合、連合勘當せらるゝ上は是非におよばぬ首尾なれば、歸るまい共いはれず、此所でも懷に祝言の塊だかへてたゞならぬ身、「平產いたさば此子は此方へ御請取りなされて下され」と淚ながらに申せば、「妹夫婦を跡目にたつれば、其方も知らるゝ通り年子に五人迄屈強なる子供あれば、其上に養へとは、如何に親なればとて、聟の手前もあれば何もいはれず。腎八が形見と思うて其方一生養育して給はれ。それ程の心附は我々がいたさう」と、隱居銀の內から銀百枚添へてかへされ、又其子を

自慢の庖丁の焼が胸へまはり、鰒汁の仕損に客も其身も大きにあてられ、是はくといふうちに、河豚の汁椀持ちながら直に新精靈となつて、母の歎きお雪が悲み大方ならず。尼にもなるべき覺悟なりしを、一門さまぐ異見加へて中陰を無事に勤めさせ、扨跡目の穿鑿するに、一家の內にお雪と娶すべき相應の人もなくて、姑の弟の子今年十になるを養子として、家相續の談合に相極り、二十歲にもならぬ人に後家立させ、此子が後見さする事も行末心もとなし、さあればとて身持になられて早七月の腹をかゝへてゐる人を、其まゝも戻しがたしと、親類相談して、「腹なる子たとへ男子にても女子にても、直に其方にて成人らせ、何方へも遣して下さるべし」と、銀五貫目懷妊のおゆきに附けて、段々の斷いうて里へかへせば、母の後家詮方なく、又手前にて平産させ、此子にも乳母とりて養ひ、最前乾物屋にて儲けたる子と兄弟分にして育て置き、花の盛のお雪を又獨身にして抱へゐるも、年寄りてせいたうむつかしと、諸方を聞いて、此度は前々の男にこり、器量はあしく共隨分丈夫な、若死しそむない聟の所を聞立てしに、世界は廣し好のごとく慥なる生れつき、筋骨太く肉のつて、鬼鹿毛のやうな傳馬町の綿屋

もする程の悲み、一門殊には母の親とゞめて、「未だ祝言して二月もたゝざれば、後家立てさすべき馴染もなく、此跡とるものなくて、親類それ〲に配當して身代を分取にし、後家にもだまつてはおかれぬ所」と、おゆきに百兩そへて親里へ戻しぬ。二十年餘も後家のあんばい覺えたる母親、若い娘を後家にして堅しい浮世に暫くも置く物にあらずと、急に緣の口を聞きしに、是ぞ渡りに船町の魚屋、去年内儀死なれて臺所とりじめなく、器量さへよくば裸でなりともはやく呼入れたいと、何かなしに早速聟にとりすましたと、しやんと祝儀をさめて五ヶ月もたゝぬうちに、嫁御の腹體をかしく、是はと亭主肝をつぶせば、乾物屋與吉が仕入の胤なりと言分たちて、表向は病氣分にして母の方へ引取り、平産させて誕生せし男子は與作と名をよび、母の手前にて育てて、おゆきは七十五日もまたで魚屋へかへり、姑の氣をとり、内外の下人下女迄も詞にて堪應させ、夫の友達に挨拶するも利發を鼻へ出さずぼつとりと見せかけ、世帶方の始末野菜買ふ迄も拔目なければ、自ら德に隣ありて、一門中の賢女の鑑と仰がれ、先妻の事いひ出す人もなく、氣に入りすまして最早是ではと、お雪も少し安堵する時分に、亭主手の物と料理

女は稀なり。名聞の寺參見せかけ珠數の玉にもぬける柳原の邊に、米屋の俵左衞門後家とて、二十六の年夫に別れ、惣領俵七妹おゆき、五つと三つになる兄弟の子供を養育して、若いには奇特になさるもたらで、下女下人と同じなみに働き、亭主死なれて十三年の春秋を拵ぎ通して、心のおよぶだけ亡父の遠忌を弔ひ、兄俵七を元服させ親の名にあらため、俵左衞門と呼びて公界をさばかせ、昔よりは金銀もたまりて、相應より過ぐるほどに、嫁入道具を拵へ、妹娘おゆきを緣に付くるこしらへ、器量すぐれぬれば我人嫁にほしがる中にも、上野の花見の折から見初めて、あの娘を女房共というて、枕二つを浮世の樂に寐て花をやりたいと、麴町の乾物屋の與吉郎切に仲人を以てもらひかくれば、聟の人柄身上のたしかなる內證を聞いて、米屋後家は幸の緣と悅び、たのみ取交して霜月朔日に娘をおくりぬ。與吉郎は元來思ひかけぬる女房なれば、世界は我程果報なものはあらじと、萬事をやめて女房の顏をながめて、片時も傍をはなれず守りつめて、五十年の樂を三十日に取越し、一門一家のひざなほし振舞の場にて、吐血してより夢中になつて、翌日惜い女房を後に殘して此世をさりぬ。おゆきは當座に自害を

嫁入小袖つまを重ぬる山雀娘

去るものは日々に疎きならひとて、二世と契りし夫の若死せし時は、卽座に命をすてんと思ひし女房も、泪の中にはや欲といふ物つたなく、萬の財に心をうつし、あるは又出來分別にて、息も引きとらぬ中より後夫のせんさくを耳にかけ、其死人の弟を直に後しらすなど、又は一門より似合敷き入緣とる事、心玉に乘りて馴染の事は外になし。義理一遍の念佛、香花も人の見るためぞかし。三十五日の立つをとけしなく忍び〳〵の薄白粉、髮は品よく油にしたしながら結ひもやらずしどけなく下著は色をふくませ、上には無紋の小袖目にたゝずして、尙心にくき物ぞかし。折節は無常を觀じ、はかなき物語の次第に髮をきり、浮世を野寺に暮して、朝の露をせめては草のかげなる人に手向けなんと、縫箔鹿子の衣裳取散し、是もいらぬ物なれば天蓋はた打敷にせよといふ、心には今すこし袖の小きを悲みける。女ほど恐ろしきものはなし。何事をも止める人の中にては空泣しておどしける。されば世の中に疝氣もたぬ男と、後家立て濟す

娘が不孝今ぞ思ひ白づきの米屋がつげ口

善悪は目前の鏡うつくしい嫁が心底

世間娘容氣　五之巻

子息氣質追加

目録

嫁入小袖妻を重ぬる山雀娘

五體鰒汁で佛となる魚屋の亭主

度々の平產は年中一所で禮銀を取揚婆

諸方よりの形見の金置きたてゝ見るまゝ子算

傍輩の惡性うつりにけりな徒娘

閙敷い中へのお客はふしよう〳〵に聖靈祭

貧家の苦みは此世から借錢をわび地獄

な所へ行く氣はなし。然ればあの衣の棚の家を質に入れて、金を百兩ばかりとゝのへ、おれが思ふやうな當世模樣の衣裳を拵へ、毎日々々著替へて出ありき、あの娘なら何が附かずと欲しいといふやうな、男の方へ嫁入する心ゆゑ、かうしてゐる中に思ふやうな小袖を好み、其方と談合して拵へたいに、家質にして百兩かつてたもれ」と頼まれ、是は一商賣したものと、呉服屋の手代請込み主人の金を百兩持つて來て、衣棚の家書入たる證文とつて、小判わたして立歸れば、是から算用なしに水づかひといふものに遣ひはたして、其身も後には常著物さへなくて、是より二親氣をつけ出して僉議して見らるゝに、女の惡性さま〴〵なる中に、讓らぬ家を書入しての金の才覺、世間の息子の性惡が死一倍をかるといふ話は聞いたが、女の身としてかゝる行跡、又例なき娘とて、親一門見限りはてゝ、衣裳をはいで一重紙子に著替へさせ、勘當帳に迄つけて、舊離切つて追出しければ、此身になりても戀をやめず、それから突出の白人となつて、其役者と一座する事をよろこび、疾から此身であつたものと、身をぞんざいにしたい事して世をわたりぬ。

作顏、親の因果とて大概ならず氣遣がり、針立呼んで痛うもない腹を揉み、とかくに是は久々
氣をつめ、聟に責めなやまされし情のつき出でたるものと了簡して、先嫁入沙汰をやめにして、
東山の見ゆる氣色よき先斗町の座敷を借りて養性に出し、「心次第に毎日何方へなりとも遊山に
出でよ」と、家久しき年寄の手代を附置き、心儘の養性、親を誑りかゝる仕業、悪人の女大將
といふなるべし。くだんの腰元召連れて毎日の芝居ゆき、茶屋を頼んで彼所思の役者の方へ文
をやれば、すべて斯樣の色の道役者仲間の法度にて、互に嗜吟味仕合ふ作法なれば、町方か
らの艶書は手にもとらぬを、媒する茶屋が中にて返事をこしらへ、逢はぬ先から絹布の無心、
又は金子の合力など、さまぐの事いひかけて娘の方から取込めば、役者に戀するは大分物の
入る物とおもひながらも、仕懸けた戀は今更止められもせず。親元へはいかに養性なればとて、
行所の知れぬ大分の金を取りにはやられず。お出入の絹屋を近附け、親が讓りもせぬ衣棚の
家を「今度嫁入すれば二度目ゆゑに、此家を妾につけて近日緣に付けらるゝ筈なれ共、家がつい
てゆくといふ欲を目がけてもたうとある、聟の方へは如何にしても實がなうて、妾が更にそん

らうと存じます」といへば、兩親頷き、「ヲヽ其方が思案若けれ共至極ぢや。どうして又外へ縁附さする身ぢやによつて、おのれが非道はいはずして、却つて其方を恨み、先々へ何した怨をせうも知れぬ。とにかく爰は上手をつかうて暇をとるが上分別」と、神ならぬ身とて二親は如才もない聟を怨みて、娘を戻さすさま〴〵の拵事をいひつかはし、隙をねがひて遂に埒明け、偖兩親は手前の惣領にも近き内に嫁をとれば、それより先に此娘を宜しき所へ仕附けたいと方々をきかさるゝに、元來娘は芝居者に思入あつての男にくみなれば、外へ行く氣は微塵なく、「そこは法花宗、爰は姑むつかしければ商賣が氣にいらぬ、是は男が鈍いげな、今度戻つては妾は最早名がたちて浮世をたてゝは居られね場、今迄の縁組より大事の所なれば、父母の無性に急いて念も入れずに早う仕附けたがらしやるが聞えぬ」と、是より作病かまへ、腰元と諜し合うて、朝晩晝三度の喰物時分には、膳にすわりながら兎角氣相がわるうて食事を見るも嫌と、箸をもとらず二階へあがり打臥してゐる所へ、腰元そつとつくね食してあてがひ、かくして兵粮つめおけば、十日たつても表向何喰はいでも苦しからず、不斷鉢巻して頭痛がするとの

も調ひにくい銀なれ共、適聟の方から頼んで越された事と思ひ、手代共を手配して、二十九日の八つ時分に三十貫目といふものを整へてつかはし、あの方の身代の間をあはす程にする舅を踏みつけ、毎夜娘を責めさいなむ事、手前で養ふ事がならぬ貧家の捨てるやうな娘にしても、左樣の事をさせておかうか。弓矢八幡町中はいふにおよばず、御上へ此段訴へて白晝に取戻し、今の聟に十倍增した所へ緣につくるぞ。氣遣すな」と、じく〳〵をどつて腹をたて、重手代を呼びつけ聟の町へ斷にやらるゝを娘押止め、「御耳に入つたら左樣に御腹を立てられんと、それが悲しく今までだまりゐ申せしが、理非をもわきまへぬ腹立上戸にて、斯樣の事を聞かるゝと、拔刀をして親であらうが打ちつける無法な男、とかく何事も仰せられず、妾病氣づきしゆゑ養生がさせたければ、まづ本復いたす迄當分の暇をやつて下されと、うつくしう隙をとつて、あと〳〵迄もあんな無法な人には怨みられぬやうになされたらば、此上妾が又何方へ緣につく共、禍が御座りますまい。かゝさま爰は大事の分別所ぢや、とゝ樣を宥められて浪風のたたぬやうに、兎角さらりと埒のあくを此方の勝になされたら、代とりの兄さまの爲までがよか

ば満足ぢやに、心にかゝるいひぶん、樣子をいへ」と尋ねられて、「何をか今はつゝみ申さん、連添ふ男大酒を好み、毎夜醉ひて歸つての慰に、刃物を拔いて妾が胸元へあてらるゝ時は、もはや親達には二度お目にかゝるまいかと、魂きえ〴〵として生きたる心地はいたさず、夜に三度づつのくるしみ毎夜の事なれば、アヽ癖ぢや物と隨分こらへて居りましたに、此中は荒繩にて裸身を縛められ、床柱に括り附けて、妾を科人にして責めるまねぢやとて、玄關に用心のため掛けおかるゝ鎗の鞘を拔いて、脇章門のあたりをひイやりとさせらるゝ時は、眞の事ではあるまいと思ひながら、一度々々で肝にこたへ其恐ろしさ、かうお話し申すやうな事でなし。是は嫁入して參りたるにてはなく、たゞ罪人が責められに萬の道具に物入れて持つて參つたやうなもの、姫ごぜの祝言してかく立歸るは世間のとなへも恥しく、是まではこたへて見申せしが、酒の上にてひよつと手がまはり、どんな所をつかれて死ぬまいものでもない故に、今生の暇乞に忍びて參りました」と、跡形ない狂言こしらへしく〳〵泣いて語れば、親父牙をかみて大きに腹をたて出し、「祕藏の娘を責めてもらはうとて、大分の拵して嫁らしたか、去年の師走に

十八日にも機嫌わるう顔ふくらかし、口がわるいとて朝夕菜好して、はだてゝ煮焼させ、襖障子引裂きて紙捻にし、色附の柱にはぐろ吹きかけ、床の塗縁にあてゝ楊枝けづり、書院の軒端は洗濯物の竿もたせとなし、接木の初咲を用捨なくへし折り、香の物桶の鹽入時を芝居沙汰に取紛れて打忘れ、あたら瓜茄子くさらかし、替狂言の番附賣を久三丁稚を跡から追ひかけさせて買求め、門立の歌祭文に錢米をつかんでとらさせ、何の事もない座敷を家鳴がすると言出し、夜半過からおれが所へ狐殿が見舞しやると、亭主が淺黄羽二重の股引はいて城廓嚴しくかまへ、兎角飽れる魂膽、男見兼ねて物いひする時、「お氣に入らぬ女房を一日も見てござるがわるい、何が執心で此方がやうの者をおかさまに持ちて、まだらくと氣にあはぬ事をながめてござる」と、是から二つ三ついひあうて下々の耳に入るほど泣出し、髪先すこし切つて辻駕籠に打乘り、尻に帆かけて親里へ立歸り、「今迄は隨分と怺へて辛抱して居りましたが、最早是にては命もつゞくまじく、親達に此世の名殘に顔見せに一寸歸りまして」と泣出せば、兩親心元ながりて、「如何なる事ぞ、娘の子とては其方ひとり、何方の浦にゐても息災なといふ便を聞け

け、裾へ蒲團打被せ、夏の夜もすがら夢もむすばず、枕近くゐて團扇の風をたやさず。鼻のひくい夫を大事にかけて、人の目にかゝらぬ程の稀なる白髮を歎きてぬき、宿を出づれば歸る迄夜著にもたれて床に待ちわび、うつゝにも男の事を忘れず。さすが懷子のあさましさは、世界の男はこんな文盲な不器量なものぢやなと思ひくらして、外を見ぬ氣さんじは、一途にこちの人のやうなは日本にないものと、始の程は有りがたう思うて、朝鮮人參のごとく大事にかけぬ。されば一切の女移氣なる物にして、次第に心しやれて來て、浮世のうまき色咄にうつゝをぬかし、芝居の濡狂言をまことに見なし、いつともなく心をみだし、二軒茶屋の葭簾から安井の藤見歸りのうるはしき、立役子供の笠の内を見てうかれ歸りては、今迄大事にかけたる男うるさく、定紋のつきし扇子手拭、又は下著に二つならべのかくし紋、腰元相手に其役者の噂のみして、一代養ふ男の事を嫌ひ出し、兎角さらるゝ分別より、萬の始末心をすてゝ、大燒する竈を見ず、いらぬ所に油火ともすもかまはず、麻上下の皺は寄り次第にして簞笥へ押込み、又節句にも朝寢して髮ゆはず、氣がつきて立ぐらみがするとて、晝も高枕して物いはず。朔日二

身の惡を我口から白人となる浮氣娘

浮世のならひとて賤しきものゝ娘も、容にひかれて姉の死後へ行きて年寄男持つもあり、商賣の勝手づくに下人を引上げ一つにする家もあり。敷金見かけ在所より色の黒い養子をするもあり。七明年なる親どもいそがぬ事に稚い時から許嫁して、年たけて娘は思ひの外美形に育ち、男は兀頭にて少しおいてきたわろと妻すも、末は見えぬ事ぞかし。是等の娘の身にしては、當世男の伊達を好む風俗、中折の髮先拭ひ白粉の地顏など見て、あんなを欲しやと思ふもにくからず。それさへ隱居樣おそろしく、姑の氣をかね隨分さられぬ用心して、朝とく起きて髮ゆふかたちを見せず、夜の行水暗きをおそれ、夫の疑をやすめ、それ〴〵に腰元使もあるに自身茶の下の薪をへしたり、眞綿ひくこそあれ、朝夕の膳にすわりても箸もあたふたと取らず、鱠せよらず、燒物に手もかけず、萬嗜ふかく、針仕事の透には、燈火のかげを少しそむきて、伊勢物語薄雪の草紙などを中音に讀みてゐて、外へは心をうつさず。我男のうたゝ寝に氣をつ

なるが、何處に見込あつて百に近い婆とは死んだ事ぞ、若いものなれば、言ひかけられて引かれぬ義理に迫つて死んだ事もあらうが、よい年をして盛の息子をたらし扨も憎や」と、ふしやうな最期の相伴せられて、なき跡までの無實の恨、草の蔭にてさぞ迷惑に思はるべし。扨かの遠里小野の油屋は、母と取違へて優形の娘を負うて、八軒屋迄來るうちに、夜があけて見てから大きに動顚し、おるいに次第を具に聞き、直に件の市場の小屋へ立歸りて見れば、老母は朱になつて空しくなられぬ。相手も死ぬればねだるべき方もなく、斯うならるゝも前世からの約束ならんと思ひあきらめ、辨七母とひとつになつて高麗屋へ連立ち行き、娘の不義を詫言し、直に辨七お袋は娘分におるいをもらひ、腹なる兒を無事に產せしに、玉のやうなる男子なれば、辨七と名を付け油屋に後見を賴み、おるいは北濱の米問屋へ緣に付きしに、心あらたまりて聟と中よく、年子に男女の子を十一人までまうけて、しかも八十八の升かけ迄きつて、疊の上にて目出度う往生せられぬ。危い最期を脫れて榮花の長世、かへす〴〵もお婆と先へ痛いめして死んだものこそ、現當二世のそんの損なり。

ねて竹の子笠を一かい借りて立歸り、「さあ〳〵とつて參つた。夜あけぬ先にはや〳〵」といふ聲、母は年寄の耳疎くして更に聞かれず、おるいは辨七に血脈取つて來て飛田へ伴ひゆくと心得、探り寄るを母と心得、何かなしに背中にかい負ひ、八軒屋を心ざして馳せゆきける。其跡へ辨七は危い場所をさま〴〵として下女のすぎを誑り、血脈取出させて請取るより一散に馳來りて、「何かと思はぬ隙をとつて束がしらみ、最早飛田まで行くうちには夜もあくるべし。しかれば往來の人に見とがめられては一大事の最期の障り、爰にて我々が死すべき過去よりの約束の場所ならん。念佛申し給へ」と、いとしや耳も聞えぬお婆を引起して、相口拔いて胸元を刺通し、直に其刃物にて我身も同じく自害し、思ひもよらぬ最後の有樣、男は二十二おばゝは九十一、例なき心中と夜明けての評判、さぞや來世で胸算用がちがうて、年寄女房にもてあつかふべしと、知つた程のものは手をたゝいて笑ひぬ。かく共知らず辨七お袋は重手代作兵衛連れて、親父の勘當せられ久しく顏見ぬ我子にあふべきと悦びいさみ、堺へゆかるゝ道にて、心中したものありて大勢人群れてさま〴〵の噂、何心なく立寄りて見て、「これは正しく我子の辨七

我ゆゑ死んでくれるものの、最期の望をかなへさせぬも無殘なる事なりと、「如何にも取つて來て參らせん。幸あれにすかし見れば、菜大根の市場と見えて藁葺の孤屋あり。戻る迄は是に忍びてゐたまへ、今の間に立歸り思ひこうだる最後の場所、飛田迄はどうしてなりとも今夜中に伴ひ行き、無緣法界の墓の前にて刺違へて死ぬべし」と、市場の小屋におゐいを入れおき、其身一人引返して娘が家へ走りゆきぬ。何れ世の中の有樣いろ〳〵ある中に、遠里小野の油屋僅の事に此節季を仕廻ひかね、おしつめぬ先に思案きはめて、借錢の方へ有る物をわたし、「假令何歩にまはらう共身すがら出て參る上は、御了簡賴み入る」と書置認め雜物にそへ、九十一にならるゝ母親を背中におひ、暗まぎれに欠落して、京の北野近くの姉聟の方をたのみに、八軒屋から未だ舟があらば乘りて行くべしと出かけぬるに、大雪に負ひたる老母の凍えらるゝを痛ましく思ひ、是も市場の小屋に母をおろし、「此雪に笠なくしては中々半町も參られず、幸此邊に佐五兵衛とて存じたる百姓あれば、其方をたゝきおこし、笠をかりて夜のあけぬうちに八軒屋迄參るべし。しばらく待つてござれ」と母を市場に休めおき、佐五兵衛方をやう〳〵尋





一所に死んで先の世で永う添うてくれうとは思うて下されぬか」と、男の膝に顔おしつけて忍び音に泣く娘が有様、魂に徹へて嬉しく、「淺からぬ心ざし、然らば今宵是より直に立退くべし」と、此世の名殘に暫し枕かはして、ついむく起にして、丑の刻の時計を二人が知死期と觀念し、高塀乘りこし、今夜の中に飛田の墓所迄あゆみ行き、あれにて淸く果つべしと、北をさして行く程に、比は師走の五日の夜、闇さはくらし雪は頻りに、今死ぬる身にも辛くおぼえ、一向爰にて死ぬまいかと、野中の雪を手して掃きやり、おるいは其處に座をくみて懷の中をさがし、「悲しや未來迄もと賴みに思ひし血脈を忘れ來れり、さなきだに女は罪深しと聞くに、況てやかゝる無理死、後の世とても恐しゝ。せめては此血脈をあの世の土產とおもひしに、是なくては後世の事覺束なし。さあればとて取りにかへらば中々捕へてははなすまじ。幸明日は味噌つきとて、下女のすぎは夜半から豆をしかけて、只一人起きてゐる筈なれば、近比わりなき事ながら、是より妾が方へ御越あつて、すぎを呼び出し、何卒僞り部屋にある血脈を取出させ、持て來て給はれ」と泪片手に賴むにぞ、一入不便に思はれ、よしや立歸りいかなる憂目にあへばとて、

つて案じわづらひ居たりし所へ、辨七方より今宵逢はでならぬ事ありと、隱に文して言越しければ、定めて外への緣組の沙汰をほのかに聞給ひ、我を疑ひ心の底を聞かんとの事なるべし、愚や假令親同胞の勘當はうくる共、外へとては行く氣なき妾が心を疑ひ給ふは曲もなしと、暮るゝを待つて寢屋の戶のかけがねはづし、寢もやらず嵐の音もそれかと待ちわびて、夜半のかねを數へゐる時、平常の如く辨七は高塀越えて忍び來り、おるいに逢うて泪をながし、「我事親の勘氣をゆるされ、近き內に大坂の親の家へ歸るにつき、母の姪と一緒にして母屋を渡さんとの相談極り、明日母と重手代我等を迎に來らるゝと、今朝乳母の方より內證を知らせしが、勘當をゆるさるゝは嬉いといひながら、其方と別れ思はぬ女房をもたうかと思へば、胸算用違うて更に古鄕へ歸る心底微塵もなし。何と其方は我と緣をきり、明日にも親の仰にまかせ、何方へも嫁入する心底か、極意を聞いて思案せんため今宵忍びて來りしが、心の底は何ぞ」と問へば、「我身は倘更只ならぬ身、祝言もちかづく由、とても生きてはゐられぬ所、今夜何方へも立退き、諸共野邊の露と消えたき願なるが、御身は何と思召す、生きては兎角添はれぬ身ぢやに、

ゐて、闇になる夜を待つて裏の高塀を越え、身を捨てゝかよへば、娘も戀より大膽になつて、猿戸の鍵を盗み出し、人しれず我寢間に引入れ、二人が命をかけて二世迄變るな變らじと、互に小指を喰切り、其血をひとつに絞り出し、娘は男の肌著に誓詞をかけば、男は女の下著にかきかはして、後には戀の詞もつきて、逢ふたびに物はいはず、泪に更けて別れを惜み、次第に募るは此道のならひぞかし。情の日數かさなるを、房附の枕より外に知る者もなかりしに、思ひの種塊りて八九月に青梅を好み出で、食を見て嘔吐し、ぶら〳〵をかしき病の容體、母の親は氣遣がり、「緣にも附けた娘ならば、惡阻ぢやと思うて安堵もなるべきが、懷子のかうした煩は皆鬱症にて、後は癆咳にもなるもの、隨分心で養生し、早く息災になるやうにしてたもれ。御講衆の中の大道筋の和國屋塵入殿嫁に、旦那殿が約束なされて、明日賴みが來る筈にて、近々嫁入さする心拵するなれば、其方も心をいそ〳〵もち、はやう孫をでかして祖母樣といはしてたも」と、神ならぬ身ははや人しらず、お腹に孫のあるをも知られず、娘が氣をいさめんために緣邊の極まりしを早く耳に入れらるれば、おるいははつと胸に徹へ、倘更食もすゝまず、部屋にとり籠

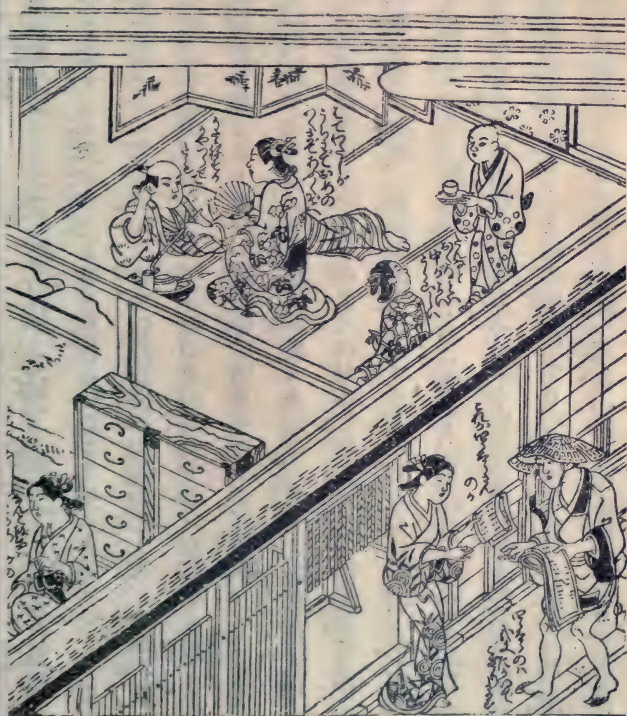
盛立ちたる娘の子を親の手前に長置するは、南風の吹く時生魚たばひて腐らして捨つるがごとく、鹽せぬ娘に蟲がついては後へも先へもゆかぬものなり。其町に伽羅の油屋の辨七とて店借の若い者あり。元は大坂本町の古手屋の息子にて、新町の半太夫に戲れ過し、勘當せられて堺の鹽を踏む爲に、此所に姨の有りしをたのみ、僅の油見世を出しおけども、商は假令にして明暮男つくりて、ないもせぬ日野のひとつ著物きて近所を歩きしが、何れ女の好ける風俗、しかも義太夫節が上手にて、高麗屋の日待によばれ、道具屋心中の淨瑠璃語りてより、娘のおるい思ひつき、それから旦暮心をつくし、魂身のうちをはなれ、辨七が懷に入つて我は現が物いふごとく、春の花を闇となし、秋の月を晝となし、雪の曙もしろくは見えず、夕ざれの時鳥も耳に入らず、盆も正月もわきまへず、後は我をおぼえずして恥は目よりあらはれ、いたづらは言葉に知れて、母親さとく氣を附出し、月待日待にも辨七をやとはず、剩へ最屓買にせし伽羅の油さへ買はせず。辨七が方へたよりすべき橋さへたえて、文の取遣りなりがたく、思ひの火に互の胸を燃し兩方戀に責められ、次第瘦にあたら姿の變り行く月日の中に、辨七胴をす

世の中に見せまじきものは道中の肌附金と、短氣な酒の醉に脇指と、それより別けて危きものは、若い後家と嫁入盛の娘の宰領に、器量のよい音曲のなる手代を附けて湯治につかはすは、偏に獺を捕へて瓶の灸の蓋をさするやうな物で、暫くも油斷のならぬものぞかし。爰に泉州の堺は千代の松原、萬歳の浦風靜に、人の住みなしも表向よりは內證奧深にして、京にまされる樂人あり。是皆唐へ投銀して時代儲の分限、高麗屋の仙德とてかくれなき福人、惣領源吉に母屋わたして其身は隣家に隱居を建て、仙德夫婦妹娘おるいとて今年十六、艶顏はひとへに遠山に見初むる月の如し。髮は聲なき宿烏にひとしく、芙蓉のまなじり鶯舌の聲音、聞く人五臟に徹へて、立所に氣をうしなふほどの器量、兩親娘自慢にて、諸方より緣附の事いひ來れ共、中々大抵の所へはやるまじ、我より優れる身代の慥なる近國にかくれなき商賣人、宗旨は東本願寺宗にて、聟の器量すぐれ、諸藝に達し色狂せぬ始末ものにて、身過に賢く世間にうとからず、舅姑に孝ありて、人に憎まれぬ聟の方へならでは遣すまじと、見合せ聞合すに年月を送りて、十七まで徒に深窓に養はれ、賽の川原の講釋聞いて世を味氣なくくらせしが、とかく

不思案の至り」と意見すれ共聞入れず。其日になれば思ひ焦れし美形の娘の顔見んことを悦び、勇みすゝんで聟入せしに、音右衛門夫婦兒の音五郎出でて祝義の盞取結び、肝心の姫君の出でられぬを不審すれば、一昨日より大熱にて今に枕があがらぬ由。是はと自身懇なる醫者の方へ走り行き同道して見するに、「疱瘡の山をあげてしかも大分の出物、隨分大事にかけられよ」と藥置いてかへられぬ。聟は疱瘡と聞きしよりも萬事を捨てて、おむめに物痒くと隨分顔を搔きやるなど、此せいたうをするも道理、ゑぐ痏とやらんにて一面に跡つき、昔の美なる容はなくて面體黒菊石引つり、ひとへに炭火で手水をつかひしごとく、廣き武藏野に又なき惡女、しかも針手はきかず、疱瘡のたまりゆゑか左の足まで短うなり、戀焦れたる所へは行かず、暫くも傍にゐがたく、金銀大分打込むばかりか、數年しにせし家業を捨てて、日來識りし法花宗に迄なつて、是は何たる報いぞや、アヽ南無妙法蓮華經々々々々々々。

胸の火に伽羅の油解けて來る心中娘





「ハテあの娘故に地獄へ落ちたらまゝよ、代々浄土なれど宗旨を今日から變へませう」と、俄に妙法寺を頼みて總の長き珠數に持ちかへて、是を又音右衛門が方へ友達を遣して、今朝御經を頂き改宗せられしと言はすれば、音右衛門不肖々々に、「根ぬきの法花でなければ信心薄く自墮落な物なれど、其程までに娘が事を忍ばるゝ上は、成程聟に取りませうが、不斷一所に居ては互に窮屈にて、飽めも見ゆればいかゞなり。幸此裏に明地もあれば、我々夫婦が氣休め所を、彼方から急に建てらるゝやうに頼みまする」と、是より内外の入用共書付けにて取寄せ、吉日えらみて聟取の日限も早一兩日になれば、薪屋の息子は灸するゑて山見る心になつて嬉しく、男つくつて悦ぶを、一門さては後見の十右衛門詞をつくし、「藝者と醫者は商人とはちがひ、其身生付いて其道にはまり、天性の器用にて名をとる事なるに、十露盤の外藝能もたしなみ給はぬ田夫の身をもち、名人の藝者の世繼にならんとは無分別の至り、其上代々仕付け來られし家職をすてて、金銀入れて他所への入聟、拙き世話に、小糠三合持つてさへ入聟すなとは申すに、かたぐ

音諧に見初め、うかくと物をも食はず思ひ焦れしを、後見の手代十右衛門此譯をきいて、「娘の親商人にあらねばちと不同心ながら、あれ程に旦那の思入られし上は、假令駕籠舁風情の娘でも、呼び迎へずばなるまじきに、況てや扶持人の藝者一門にならせられても耻かしからず」と、幸弟子の中に主人の友達ありけるを賴みて、「自然嫁入の拵などに屈詫あらば、其入用は手前から何程も遣すべし」と、懇にいひつかはせしに、「此方へ聟をとる所存なれば、他へ緣組は思ひよらず」との返事を、薪屋の息子聞くとひとしく、尙々焦れて、「あの娘と添はでは此まゝ思ひ死にするといふもの、しかれば命には替へられず、所詮商賣を後見の十右衛門にとらせ、鼓打に養子になつて藝者になるぶん、入聟に肝煎つて給はれ」と、肝煎かけし友達を賴めば、音右衛門方へ行きて右の段々話して、「聟に參らんとの事、同じ養子をなされうならば、御息女にあれほど思入り、身代さらへて持つてこうと申す深切なるものを、聟になされたがお爲かと存ずる」と達つてすゝむれば、「如何にも拙者身分には少々過ぎたる聟なれば、祝著にも存ずれども、宗旨を承れば法花宗ではなき由、それなれば千兩萬兩持參金があつて、何程に器用な生

口からひどこなしに言ひまするが、其手間でせめて兄の音五郎が三分一針手がきけば妾が氣助け、不器用なと此方はしかられ共、音五郎ほど器用ものはござらぬ。誰に習はねど我著物は人手にかけず、我と仕立てゝきるのみか、此中こなたの御屋敷へ著てござつた裏附の上下は音五郎が仕立てましたが、口利の羽織屋が手際にもおよばぬほどの仕立際、世界の重寶といふは兄が事。たゞ苦になるは妹が手槌、打つても叩いても役にたゝずで行末が案じらるゝ」と、額に皺よせしんきさうに言はるれば、音右衛門頭をふつて、「其方と我等とは大分の所思ちがひ、妹が針手のきかぬよりは、兄めが鼓を打ち居らぬは、先差當つて此家の退轉、其家に生れて曲舞一つきかるゝ程に得打たぬこそ道理なれ、男と生れて縫針の道に心をよせるからは、本道の人間といふものにあらず。燕石を玉と見て琢くごとく、百日千日藝をみがき入れても、元が光なき石なれば、世話やき損といふもの、兎角急に器用なる鼓に心がけある若い者を養子とし、妹のむめと娶せ我後をつがせ、兄の音五郎は己が得手の羽織屋へ弟子奉公に遣すべし」と、所存きはめて入縁の事を聞立てしに、八丁堀の薪屋の息子、此おむめを過ぎつる十八日に浅草の觀

ら寢る迄教へて見れ共、聾に物いふ如く一つも役にたゝざりき。然るに此音五郎が妹におむめとて、今年十五の月の顏花の容又ならびなく、兄に優つて天性拍子よく鼓を好きて、親の打つ程の事を習はずしてよく覺え、亂道成寺の傳受事迄聞覺えて、打たせて見るに、しかもよく鳴りて間のよい事親もおよばず。「さりとは浮世とてまゝならず。その器用を音五郎に半分やれば、家は目出度う續くといふものなるに、何程上手に打てばとて、女の小鼓は出家の兵法鍛煉して印可をとつたと同じ事にて、表向へ出されねば、名人に成るほどつらし。可惜藝をうづもらする事の殘念さよ」と女房にしみ〴〵と語りければ、内儀聞いて、「兄より妹を讃めさせらるゝは大きなるお目ちがひ、妹のむめは緣付させても、世帶など中々持つものにはあらず。彼の樣な不器用な娘の子は、廣い世界に又有るまじと、産出した母が目にあまれば、他人は嘸や指さして笑ふべし。女は貴きも賤しきも針持つ術知らずしては一生立ちがたし。さるによつて十の年から我膝元へ引附置き針仕事を敎ゆるに、今に綻一つ縫ふ事ならず。女の役にもたゝざる鼓にきゝ入り、あれではないと、末々は米にもせうと思うて稽古さつしやる歴々の弟子衆を譏り、女の

器量に打込む聟の內證調べて見る鼓屋の娘

淺草の御下屋形にて殿樣七十の賀の御祝の御能首尾よく相すみ、太夫役者狂言師迄御金を下され、益御機嫌よく御酒宴はじまり、御肴に御扶持人の小鼓打ち、松林音右衛門を召出され、一挺御所望冥加にかなひ、首尾よく打をさめて御褒美の御言葉數〻のうへ、音右衛門も五十有餘と見ゆれば、悴に藝を傳へて折節は代りを勤めさせ、休息仕るべきの旨有難き御意、生前の面目と袖にも餘る身の悅び、拜領の五十枚を持たせ白銀町の宅に歸り、先神棚へ上げて此上の仕合を祈り、さて惣領の音五郎を呼びよせ有難き殿の御意を申聞かせ、いよ〳〵鼓の稽古を勵むべしと言渡し、翌日より暫時もたゞるさせず敎へけるに、羽衣の曲舞一番何程敎へても覺えず、親音右衛門も鼓の外に手を打つて呆れ、「さて〳〵親に似ぬ不器用者、是では藝者の家たゝず、所詮他所より養子をして、おのれは引切つてしまはうか」と、嚇し掛け聲かけてもいかな〳〵覺えのかひないよりは、生得不拍にて間にあはず。親父氣の毒の頭を搔いて寢食を忘れ、起きるか

あいそも月夜に釜ぬかれた婿が心底

胸の火に伽羅の油解けて來る心中娘

嫁入を日待の淨瑠璃語るにつきぬ二人の中

道理といはれぬ無理殺し迷惑な浮名をおひ女房

仕合の長生は八十八の升かけ切るゝ場を遁れた娘

世間娘容氣　四之卷

子息容氣追加

目録

身の惡を我口から白人となる浮氣娘

聟との中は初よし後のわるい作病やみ

頭計に血の多い先斗町金銀を借座敷の無分別

思ひ入の役者に魂は置いて來た質はては流れの女

器量に打込む聟の內證調べて見る鼓屋の娘

親仁が異見に耳をつく針手のきいた兄子息

替へてやりたい妹が隱藝是も二目とは菊石顏

らるゝ事の口惜しと歯嚙をなせども、性悪の娘のしぞこなひ、今さら取返しがならず。段々つけあげ、貳百五十兩にして起請の外にかまひないといふ一札させて、此上の口留して酒までもつてかへしぬ。同じ胤腹ひとつの兄弟とても、姉とは格別の生れぞこなひ、是とても親の身で指がきたないとて切つてもすてられず、家内出入の下々までも沙汰するなと言含め、契約の尼棚へ嫁らせしが、夜更けて門の戸の鳴る毎に、妹めは何事も仕出來しはせぬかと、二親肝を冷さるゝも道理ぞかし。

届けて歸るが、さあ實不實を急度申せ」と眼を剝出しいひければ、番頭聞いて、「先おのれがおなつ樣と夫婦ぢやといふ證據を出せ、證據がなくばねだりものに極つたゆゑたゞは歸さぬ」と、和藤内が虎を取挫ぎし勢の如く、肩肘をいきらし睨めつくれば、「番頭顏してびこ〳〵とやかましい、主人おなつが手跡は見知つてゐつらん。本町の吳服屋で二つなき命にかへて契約した印の起請、是が證據にならずば浮世は闇ぢや。よく見おけ」と晒の守袋より一通を出し見すれば、妹娘の自筆にて、「其方と密通せし事あらはれ、如何なる憂目に逢ひまゐらせ候とも、互の心かはらず來世迄も添ひ申しり〳〵」と、諸神を書籠めたる起請文、番頭見て赤面し、張つたる肘をすぼめて、是より手をつきさま〴〵詫して、「此誓紙を二十兩にして私へ下され」と貰ひかくれば、「金銀づくにはあらず、おなつを連れて宿はいりを仕る。女房共を此方へわたされよ、さなくば御町へお斷り申す」と、かさ高に出づれば、二親は物影から此樣子を聞いて、一身に汗をながし、「さりとては外聞わろし、百兩が貳百兩でもあの者奴が滿足するほど金をとらして、書いた物を取戻せ」と、餘の手代に言含め、番頭が耳へ吹込ますれば、無念なる金を十分にと

埋め　拵も大概にして迯らるゝ用意半へ、紺の單物著たる剃下の草履取、角鍔の大脇指さして案内なしに臺所へすつとはいり、「おなつに逢ひませう」と横柄に申せば、手代共興をさまし、「此方の内におなつといふ食燒はない」といへば、「イヤサこれの妹娘のおなつに逢せて下され。身はおなつと二世迄の夫婦の約束いたした角助といふおなつが夫、承れば明晩何方へやら嫁入いたす實說でござれば、弓矢白山堪忍いたさぬ。おなつをお出しなされ」と、脇指拔出しむつかしうかゝれば、番頭の杢兵衞腹にするゑかね、「推參千萬、己等が樣な下郞にはお詞をかけらる事はおいて、假にお姿さへ見せられたる事もなき主人の娘御と、二世の約束とは大それたねだり者、長居すると棒ぶせにして、御上へ申上げるか」と肘まくりしてかゝれば、角助打笑ひ、「推參といふはうぬらが事なり。おのれが主の娘と夫婦の約束ある身共なれば、此角助も主筋ならずや。それに腕まくりして緩怠千萬、主ある女を緣につけんといふ、道に反きし仕方を默つてゐる男でない。此方より表向へ斷申上げて、おなつも聟も木の上へのほせて見せう。是からはおなつに逢ふ迄もない、祝言するが實か虛か眞直に申せ。眞なれば直に是から名主年寄へ

ざりき　全くお主様を嫌ふにあらず、身を觀ずれば夢なるかな。錦の褥を重ねても人間つひの煙はのがれがたし」兎角後世の心入つど〳〵に語り、至極の涙にしづめば、入婿是を感じ、「心やすかれ其方の望にまかせ、二親一生の中は隨分懇にあたり、死去の後勝手次第に出家さすべし」と、表向は夫婦分にて内證は嚴しく、假のてんがうさへいはず。姊の手廻りに久しくつかはるゝ、もんといふ美目よき腰元を替りに寢室へつかはし、それは〳〵行儀正しき身のとりおき、いな事で孫がおそいと二親内證しられねば、待兼ねらるゝも道理ぞかし。是にかはつて妹のおなつは、本町の吳服屋へ緣につきしが、下々と密通あらはれ、堪忍せぬと血氣強き息子が、血眼になつて腹を立つるを、親々異見し、其上に谷中の旦那寺の和尙迄をかけて、さま〴〵詫言して世間沙汰なしに暇の狀もろうて立歸り、少しも是を恥ぢたる粧もなく、若い手代を捕へてはじやら〳〵とのてんがう口、兩親の目にあまり、又も浮名の立たぬうちにと、緣の口のあるを幸に、其まゝ振袖きせて、少しも年のひねぬ樣子に見すべきとて、細眉つくらせ白粉濃く紅つけて、尼棚の塗物屋へ明日の夜嫁らす契約、二度目なればとて千兩の敷金にて前々の疵を

目に逢ふは前世の因果なるべし。假令一夜もそはぬとて、夫婦の契約するからは、女をたつる筈はなし。姿をかへて過ぎさりし夫の爲の後生菩提の道に入るべし」と、一筋に思ひ定めて下髮の中程を思ひ切りかゝる所を、二親乳母取りつきて、「是非思ひつめたらば、四十九日目に如何にも尼になすべし」と、やう〳〵諫めて其夜は過ぎぬ。是より姉は髮容にもかまはず、一間の奥に取籠り、外なく念佛申して暮しける。親達はとても跡目を入れねばならぬと、又聟取の内談有りしに、はなれきつての出家の望、いろ〳〵止めても聞入れざれば、後には異見の品をかへて、「汝孝行の心ざし僞なくば、聟を求めて此家を立つべし。妹おなつは早本町の吳服屋へ契約し、たのみまで取りたれば、變改して此後をつがすべき事もならず、其方が心ひとつにて此家を退轉させ、親迄に先祖への不孝をさするか、家を潰し親の心をそむき、身をたすかる佛法ありや」と道理にせめられ、あやまつて思ひ止り、其後靈巖島より歷々人の三男を入緣にとり、萬事を渡して親達は近所に隱居屋敷を建て、是へ引込み世に思ひ殘せる事もなし。姉娘は入聟に始の夜心底の程を語りて、「親孝行の爲かく夫婦のかたらひなすといへ共、さりとは心にそま

つは姉の婚禮すみてのち、身代よろしき方を聞きたて縁につくる思案にて、まづ惣領娘の祝言を急ぎしに、久米三郎病氣によつて延引を親父迷惑がられしは、盛りだちたる妹を何方へとも縁定めなく、嫁入させぬ内に脇ふさぐ程の年にもならばと、後のつかへるを氣の毒がり、「大概に本復あらば、先表向の聟入の祝儀をすまし、其上にて心まかせに養生いたされよ」と、親と親との談合にて、日柄見るにもおよばず、俄に今宵祝言と諸一門を呼集め、出入の手代數十人麻上下をぐわりつかして、家内は萬燈の如く燈火を輝かし、聟殿お出を待つ所へ、聟の所より追々手代走り來りて、「久米三郎殿此間聟入の御心こしらへに氣を揉れしゆゑか、但し四五日養生藥たべられざる加減か、只今門口にて目をまはされしが、氣付も鍼も叶はず、聟入の行所ちがうて、地の下へ永くゆかるゝ身とはなられし」と、泪と共に申してかへれば、家内呆れて詞もなく、「手代共が今宵を晴と三井が店で仕立てさせたる麻上下、直に葬禮の用にたつとは、不定世界とはいひながらあんまり變りし事共」と、親父胸を痛めらるゝも道理ぞかし。姉娘は斯くと聞くより涙兩袖をひたし、「夫におくるゝも世のならひとはいひながら、是程果敢なき憂

長者町に玄關作りの大屋敷を求め、門前に療治人市をなし、酒肴菓物菓子の音物たえず、二親を安樂に養ひぬ。是を思へば不器量なる娘を持ちしとて歎く事なかれ、美女持つたる兩親は淺猿しき姿となつて、昔相借家の交誼を慕ひ、此按摩取りの方へ合力のねがひはかどらず、次第次第に見惡うなりしが、流石大黑の娘養子にした緣因とて、今は親父は此界の人でなし、天竺浪人となつて、其後は一に俵ふまへて、六十にあまつてから臼踏して、三條の裏町に一枚敷借つてござつた〱。

物好の染小袖心の英は咲分けた兄弟の娘

所がら武藏野の廣き心の商人、少望姓の時より大きなる請取普請にかゝつて、年々大分儲けためて、今世盛の金の光、軒に輝く星月夜、鎌倉柯杙の材木屋の木曾右衞門とてかくれもなき新長者、十六と十五になる兄弟の娘を持ちしに、二人共に都にも稀なる器量、惣領娘おはるには通町の中橋邊の有德人、龜松屋の次男久米三郎を養子婿にして、家督を讓る契約、妹おな

早屋敷を追立てよ」と直に其日に追出され、不首尾にして都へ又歸りぬ。惣じて行くさき〴〵の大名方をしそこなひて、又しても〳〵立戻りしは、慰みものの身として、とかく佛沙汰いうて、一座の興をさますわるい癖があつて、突戻されてかへれば、親一門打寄りてさま〴〵と異見するに、其身も得心しながら、兎角酒盛婬樂の時に至つては、我しらず佛經を囀る事つひに止まずして、大名奉公の手がきれて、可惜器量を埋もらしぬ。是一朝一夕の事にあらず。此娘元養子にて、實の親の穿鑿すれば、道理なるかな、さるお寺の大黒の生みすてし娘とかや、誠に念は生をひくといへり。其後は妾奉公の口もなくて、裏寺の墓守の女房となつて昔の形かはり、淺黄の古袷の右の片袖紙子縫ひつぎたるに、霜月比の風をしのぎ、觀世紙捻の帶して、髮はならず髷に、爪きらず、鐵漿つけず、こわつぎも舌ばやにうらがれ、かくも賤しくなる物かな。又抹香屋の惡娘は其身面體にて、錢の儲けられぬといふ事を我と合點して、按摩に心をつくし、十四經をよく覺えて其上に天性苦手といふものにて、小兒の蟲痞を擦るに妙を得て上手の名をとり、お歴々より乘物にて迎に來り、療治に暇なく次第に金銀たまりて、昔の貧家を去つて今は

頭をとれば、美しい唇をうごかし、「酒を飲みて心もたゞしう慈悲をもなし、善道に入る人には佛在世の時にも赦されたると見えて、祇陀太子末利夫人などは、常に酒を飲みたまふと、未曾有經にも侍れば、過ぎず心ち亂れぬ程は佛もゆるしたまふ。いやが上におさへたの間のと、無性に進ぜらるゝは更に善道とは思ひませぬ」と、實から腹のたつやうな顔つき、殿樣けうとく思しながら、お叱りあらば時の興もさむべしと、その色目も出されず、「らんは京育ちには堅い事いふ、身が心を慰むるが役ぢや。ちと柔らぎ給へ」と、振袖よりお手を入れられて戯れ給ふを、おらんおさへて、「近比淺猿しき御遊興、男女の婬樂は互に臭骸をいだくと、東坡居士の申されしごとく、人の身ほど穢らはしきむさき物はなし。皮一重下は臭くたゞれたるものにて、中々淸きものにあらねば、此慰にてなくとも、何卒濁らぬ淸淨なる遊もあるべきものを」と、佛說引出し御異見申せば、殿今はこたへかねさせ給ひ、「推參なり、女の身として一國一城の主にむかひ、經文ひいての異見だて、おのれら如きの賤しき女をはるゞ呼びくだすは、我心を慰めんためなるに、歷々の家老共さへ身が前では遠慮していはざる異見を、くわんたいなる女め、早

して、行先々に尻もためず、其まゝ歸るは内證に惡しい所が有るかと、父母懇なる人を頼みて僉議してもらふに、さる程に兎の毛でついた程も疵のない娘を、如何なれば早速に突戻すぞと、吟味せし懇なる人も不審をなしけり。何れ女の都ながら美女は稀なると見えて、北國の大名より御國上﨟をたづねさせられ、上下京をさらへて見せさせらるゝに、此戻娘ほどの器量なくして又此娘にきはまつて、脇明の大袖を振つて雪國のお大名へありつき、二月に瓜を喰ひ六月に櫻をながめ、華淸宮のたのしみ、殿樣此娘の器量御心にかなひ、晝夜御側におかせられて、御出頭の近習衆お出入の町人を召されて御酒宴をはじめらるゝに、浮氣の町人輕薄ある程申して、「京の君樣、恐れながら殿樣へ爰は一つあげさせられて下さりませ」といへば、此娘仔細らしい顏して、「たゞもさへ飮酒といひて佛は誡め給ふ、況てやお嫌とある物をしひてまゐらするは、三世の諸佛の心に反き大きな罪なる事、飮酒をやぶれば邪婬妄語諸共にやぶるゝと佛の誡、御無用になされませ」と眞顏になつて申さるゝ。「是は堅い穿鑿、今此世界に酒のまずに、何が外に慰むわざのござりませう。飮めや唄へや一寸さきは闇の夜」と、扇をかざへて音

れ、二親は低い鼻を怒らして、兩端についてひけらかし、「此方の娘御もあのやうにして置かずとも手入をなされよ。とかく何の道にも元手と氣骨を折らずしては、こんなよいめにはあはぬ浮世、追付けおさんが若殿まうけて、我々をお國のぢい樣ばゝ樣と迎の乘物來る時に、これの娘も介添につれて下りませう。頼母しう思うて待つてござれ」と、勇みいさんで二親は稻荷の前迄送つてかへり、捨金にて萬の質物を請戻し、心祝の膾して、相借屋の婆嬶呼んで小半酒でもてなしぬ。同じ娘をもちながら、器量の善惡によつてむやくしい事をきくと、人の知らぬ心腹たてゝ、偏に閻魔のくやつた抹香や女夫は顔ふくらかし、「牛は牛づれがよい、僅な賃とつて素麵の臼挽にゆく身で、大名聟にとつたとの廣言、必ず罰のあたる物ぢや。不器量な娘もつたとて、宿替といふ家主もないものぢや。捨銀とつてぱつ〳〵と使やつたら、跡に算用があふまい。笑止の事ぢや」と呟きしが、未だ二月も經たぬ中に隣の娘西國から歸つたと、兩親氣の毒の頭を掻いて、外聞わるさに戻つた沙汰もせずに、直に丹州の歷々の方へ又妾奉公に出しけるに、此所にも半月ろくに居ずしてぐるりと立戻れば、是程十人なみにすぐれたる美女の身と

の道具ども置所違ひ、名所古跡の多き面體、第一地色樂燒の茶碗にひとしく、口廣く稚いには稀なる大食、しかも味無い物の煮えぶとりと、七つの年疱瘡おもく、やう〳〵命は取止めぬれども、其痕一面に雲紙を見る如くなつて、物くひのよい古金買に見せても、つぶしと外見えぬ娘、兩親思ひの外に思案ちがひて、とかく一升入袋には一升の抹香に、樒ならぬ餘の葉をまぜて、業をはたきける報いかと、過去未來の事迄思ひやりて、隣家の娘は日々に美しくなれるを見て羨み、とてもこちらの娘はたゞの奉公に出しても、中々悋氣強い女房の所にさへ置かぬほどの不器量なれば、兩親筆をすてゝ手習綿摘針仕事、すべて女の業をやめさせ、近所の名を得し腹擦りの上手の方へ按摩習はしに通はせ、高が身についた貧乏神と覺悟きはめて、捨物にして養ひける。隣の娘はよい仕合の釣竿にめでたいがかゝつたと、夷川の妾肝煎のなべが嗅がきほうて來て、立賣の吳服所へ伴ひ行き、召抱にのぼられし侍衆に目見えさせけるに、百三十五人の中の勝れものとて、早速に此娘きはまり、俄に乘物しつらひ縫箔の小袖の中から目を見出し、今といふ今仕合の花開き、西國へ下りしなに、暇乞がてら抹香屋が方へ乘物に乘りながら訪づ

にて、其比楊貴妃といふ美形の娘を持つて、馬嵬が原の裏屋かりてゐる、僞媒女といふ人置の嬶が肝煎、玄宗へ妾奉公に出し、それより一家一門浮みあがつて、男伊達の上米とつて、物にかゝりの楊國忠が俄大名になりしを羨み、欲から女子をうむ事を悦びぬ。如何樣下々は力の強い男の子をもたうよりは、大概に生れついた娘の子をもてば、思はぬ老のいりまいよく、昨日迄は我肩にかけて舁いてまはりし辻駕籠に、今日は紫蒲團敷いて、置頭巾に花色紬の首卷して乘つて來る仕合、うまずの嬶は顏だちのよい疱瘡までしまうた二三歲の女子をやしなひ、是を末の樂に女夫は襤褸著ても、此娘には絹の小切つぎ合せ、肌の柔かなるやうにと萬に心をつけて、判金二十枚の鶯を飼ふよりも、二親の世話大概ならず、七つ八つより琴三味線を習はせに遣し、朝夕糠袋の底のぬけるほど磨きたてゝ、四方も輝くばかりの娘となして、恐らく萬石どりの御大名を聟にとつて、若殿の祖父樣祖母樣と敬はれ老の樂を極めんと、夫婦心嬉しく、世にない寶を持つたやうに祕藏するも道理ぞかし。其隣に花抹香をして賣る女夫ありしが、是にも一人の娘あつて、末々物にせんと隣を見ならひ、五つ六つから手入をしけるに、天性顏







不器量に身を歎く抹香屋の娘

人の親のならひ、我娘のかはゆさに顔附のむつかしき聟の機嫌をとり、大分の物を入れ敷銀まで付けて、しかも懐子にして、寒き風にもあてざる娘を、夜の玩弄物に遣りながら、さられぬやうに年寄男のお髭の塵をとり、横槌で庭はく事、是を思へば母親十月のくるしみも、生るゝ時取揚婆の骨折も、餅も鰹も味噌汁も同じ物入なるに、少しの思入にて娘の子を喜ぶ程、一代の損になる物はなし。せめて人並に育ちて當世風俗に色つくりて、裸でなりとも貰ひたいといふ程なれば仕合なり。必ず意地のわるい浮世とて、男の子は美しく、女の子は大概顔膨れて胴あひ短く、尻大きにだゝ廣く、無景にして千丈か嶽をあらはし、鬼の住家へは人倫更にゆく事なく、縁遠くして幾春か櫻に恥をさらし、廿二三まで白歯に振袖、一生親の氣づくしになる事なり。さはいへ昔玄宗皇帝の時代には、萬民女子を儲くる事をたつとみ、男の子が生るれば切のないかるたに蟲持つた心地して、人のお助けを待つてゐるばかりぞかし。是を思ふに皆欲の世界

ふ斷のみに打くれて、後には女ども近附き、「同じ男持つなら、まそつと悋氣せぬ殿子を吟味してもたうものを」と、時節とて悋氣にこまり果てしは可笑しかりき。聟は元來悋氣の先手を打つて見る合點なれば、娘を傍に引附け置き一寸もいごかさず。人にすぐれて悋氣強い男なりと口出して觸れながし、用事に行くにも跡からついて行く程にすれば、ましてや物見遊山芝居の替り目などは、いかな〳〵思ひもよらぬ穿鑿、平生羽子板の繪を見るごと竝びゐれば、娘ほうど情をつかし、「是ではどうも命が續かぬ。何卒主の目に入つたる女もあらば、給分の外に我等が著ふるしの小袖帷子は何程もやるべし。何卒主にたはぶれ氣に入るやうにして、妾が手代りとなり、少し間なりとも傍を離れて息がしたし」と、手廻りの物縫腰元を頼み、聟へ濡をしかけさせ、其上にまだ道頓堀新地の色茶屋へ、慰みにござつて下されと臍繰銀を出して、夫に詫言して色狂をすゝめ、妾に自ら膳をすゑて、「聟に氣に入るやうに隨分頼む」と打つて替への心入、世には術の仕樣もあらう物と、聞く人手を打つて是を笑ひぬ。

とのへ、一家一門悅びの盃事をさまり、娘の部屋に入つて、幾千代かけての閨の盃取結びの折から、聟は娘にちかづき、「其方が座敷で三番目にゐられた男に盞さしたは、何とも合點がゆかぬ」といへば、娘けうとがり、「あれは妾が伯父樣で、萬事今から家のお世話を賴まねばならぬお人ゆゑに、盃をさしましたにお疑ひの深い」と笑ふを、「いや〳〵心得がたい事共おほし。尤親父樣の事なれば別條は有るまいと思へ共、背から其方が親父を見る目は如何にしても飮込まぬ目つきぢや。親し過ぎて合點がゆかぬ」といぢれば、娘氣の毒がり、「さりとては日本の神々樣を誓文に入れ、とつ樣と何のわけがあるものぞ」と、眞顏になつて斷り申し、其身の悋氣すべき段迄にはおよばず、聟に悋氣の先をこされて、日頃いひつけたる我悋氣の所にはゆかず、却つて聟へのいひわけ、物には仕樣もあらう物なり。聟はそも〳〵此家へはいりてより以來、萬事をやめて朝起きるから寢るまで、娘をとらへて、「今の小者に物の言附けやうが疑はしい、手代の九兵衛と目を見合せたがうさんな」と、毎日々々いぢりゐれば、娘は家來に物いふ事もならず、目やかましう困りはて、小い時から仕附けし悋氣心さらりとやんで、たゞ夫の疑

事があらばおれが聞く前でいはしやれば疑はぬに、向後は妾が氣のたゝぬやうに、かゝ樣へ篤と御異見頼みます」と、ぴんとしてひぞつたる顏附、こましやくれてけうとかりき。和尙大方ならず我を折られ、二親にむかひ、「段々異見申したが、とかくお袋へきつい悋氣でござれば、あの子が心の邪推のなほるまで、夫婦別々になられ、暫くお袋には假座敷してなり共、親父殿の傍にござらぬやうになされ。最早各もよい年なれば、少しは娘御の手前も遠慮なされたがよい筈」と、和尙も異見にうろたへが來て、思ひもよらぬ二親にしみ〴〵と異見して歸られぬ。成長するにしたがひ物妬ふかく、つき〴〵の女どもは言ふにおよばず、出入る者まで言ひたてければ、此沙汰大坂中にひろまり、欲の世の中なれど此家へ養子聟に來るものなくて、十八の春迄祝言の沙汰なく、此家繼さだまらず、二親六十に餘りて明日をも知らぬ老の身、今は宜しき聟のねがひをやめて、貧家の息子なりとも此家の聟になつて、娘を不憫がりてくれる者あらば、土産にも筋目にもかまはぬと、諸方の仲人嗕を頼まれしに、谷町の古道具屋の息子當年二十五に成りけるが、悋氣強きを合點にて、聟にならんといふや否や、吉日撰みて聟入の祝儀と

ごとのみ言ひつのれば、二親こまり果てゝ、寺の和尚を頼みて、五つ子に嫉妬の異見・神武以來ない圖なり。和尚此子に近づきて、「昔六條の御息所は死して鬼となり給ひ苦みをうけられ、髭黒の大臣の北の方は物狂はしくなられしも、是皆妬ふかき例とて、今の世までも名をながされぬ。女の第一たしなむべきは此道なり。唐の法には、女を離別其一つの言立にする事なれば、かまへて〳〵今の心をあらためて、悋氣嫉妬の心をやめられ、成人して後聟を迎へられた時、中よくして外の女に夫が心をかよはすとも、大目に見てゐたがよい」と、三十女房に異見する如く、引言いうて教訓せられしに、娘聞いて、「其の御異見を同じくばかゝ樣にして下さりませ。夕も父樣のうたゝ寝してござれば、かゝ樣のよい年をして、いやらしい裾へ小袖きせて、腰うつてしんぜうかと、如何に妾が小いとて鼻のさきにゐるに、あんまり踏附けた仕形でござんす。是が何と腹が立てずにゐらるゝものぞ。胸が焔えて乳もろくに飲まれませぬ。腹が立てたいとて一人立てらるゝ物でもなし、相手のもたす氣ぢやによつて、兎角かゝ樣の妾を蔑如になさるるからぢや。今朝も起き起きとゝ樣とらへて、何やら囁いておぢやつたは合體がゆかぬ。いふ

規の下女、世間なみに身嗜すれば、此娘まだろくに舌もまはらぬ形をして、「其方は誰がゆるして尻ふつて歩くぞ。食鍋をみがき過ぎて白いが氣にいらぬ。我きはずみの仕様は何處にはやるぞ。手足の指が細うなるが合點がゆかぬ」と、不斷の遊事をわきにして是を慰にいひくらし、二親機嫌のよい時分、打寄つて寢酒など飲みて睦じき體を見ては、はや勃然として母親に顔ふくらかして見せ、二日も三日もふりくすべて物をもいはず、雛祭すれど女雛の分は首をぬき、或は結構にみがきたてたる衣裳雛の顔に墨をぬりて、是ではよもや殿の心がうつるまいと悦び、羽子板の繪に殿と女郎の中よきさまを見ては、無性に機嫌わろく、小刀にて女郎の鼻をそぎ、出入る手代の女房がこちの人よばはりを聞いては、奥から走つて出て、「何も知らずにおまんのこちの人〳〵と嬉しがりやれど、こちの腰元のはつに來てはてんがういやる、あんな男は急度仕附して、聞かずは藏へいりや」と、餘所の事まで悋氣して、靜なる家內、此娘一人にて朔日二十八日も、それは〳〵やかましき事ぞかし。父母も此體を見て次第に我ををり、是では成人してから聟をせがみ殺すで有るべしと、いろ〳〵敎訓せらるれ共中々聞入れず、いよ〳〵悋氣

悋氣はするどい心の劒白齒の娘

大坂は思ふより人心大氣にして、末の算用あふもあはぬも、花麗を好めり。娘の親は相應よりよろしき聟を望み、息子の親は我より棟の高き緣者を好み、取結ぶより無用の外聞計を繕ひ、聟の方には俄普請、娌の方には衣類の拵へ、一門の女談合、親父が高利の銀借つて身代の間をあはす、內證の事は知らず、それでは成るまい是ではおかれぬと、ぬり樽が斗樽になり、鯛をやる所が鴈になりて、膝なほしせぬ中に横にねねばならぬやうに成つて來るこそ不思案なれ。娌をとるも子孫相續のためなれば、相應より輕くして、幾久敷家を傳ゆるこそ人たる者の本意なれ。こゝが分別の堺筋に、近年商物に利のまはりのよい木藥屋道齋とて、五十に及んで始めて女子をまうけ、大方ならぬ重寶、名さへおいとと附けて、夫婦のいつくしみ五つの年被初めせしより、天性いて悋氣ふかく、乳母をはじめ物縫腰元中居下女に至る迄、色つくるを腹たて鏡なしに髮ゆはせ、身に白粉ぬらせず、賤しからぬ生れつきを惡しくなし、此勝手知らぬ新

内證はあたゝかな饅頭の按摩とり

物好の染小袖心の花は咲分けた兄弟の娘

祝言の夜に婿をふる材木屋の花嫁子

悪性な妹娘果は尼棚へ千両の敷金

表の間のねだり者番頭はむつと脇指に剃下奴

世間娘容氣　三之卷

子息氣質追加

目録

悋氣はするどい心の劍白齒の娘

迷惑な雛の首拔目のない和尚の異見

聞かぬは親の育から甘やかした甘艸子

今ぞ女房が廻りのよい藥屋へ入聟が七加減

不器量で身を撻く抹香屋の娘

同じ所には尻のすわらぬ舞子の三味線嫌ひ

呉服所より抱にござつた〳〵お大黑の殞子

も聞いてるやつたでないか。をかしかろは今年の暮ぢや、極樂で年とつてござつて、其身は佛になりながら、此きはの鏡餅は小さかつた、鰤も丹後ではなささうなと、蓮花の上に乘つてるて仰有つたら、溜らぬ程をかしうは有るまいか。こりや何も堪忍がならぬ」と、腹を抱へて大笑、手代半兵衛我を折つて、「是は餘り俄事ゆゑ、お聞きなされて、はつと思召しお氣が亂れたものならん。まづお心をしづめられよ」と制すれば、聟は此樣子を聞いて奥より出でられ、「半兵衛半兵衛氣遣せられな、女どもは狂氣もいたさぬ、憂の持病の療治がきいて、彼の笑は養性のいのり過しぢや」と、聟もあんまりで貰笑をして、「まづ此度は笑はうがまゝ、其分にして連れて歸つて暇乞をさせらるべし。重ねて此方母ぢや人の死際には、天晴見事に泣かして見せう」と、異な事に自慢をせられぬ。

になつて、親達姑聟の悦び、娌も年のゆくにしたがひ泣く事を恥ぢて、何卒是をなほさんと我心からもたしなみて、心しをれてうれひ氣になる時は、酒取寄せて茶碗にて引かけ、無理に笑うて見る心になつて、自ら何時ともなく定癖止みてえしやくにあまり、姑とは格別ににこやかな嫁御樣、御家繁昌の瑞相と、家内の外出入るもの迄悦びあへり。或時お里より手代の半兵衛けはしく走り來りて、「お袋樣俄に持病のお痞さし發り、灸鍼藥の驗もなく、只今御臨終と見えますれば、早く御出であそばし、此世のお暇乞なされませと旦那の仰付けられ」と、口上も後前に急き切つて申しければ、嫁御は是を聞いて、昔ならば人一倍もなかるべき所を、今は以前と心の持ちやうかへられ氣質格別に、憂を聞くと其まゝ無性に可笑しうなつて、「何かよ樣は夫程急に取つめしか、今にもお果てなされたら、とゝ樣の嘸淋しいとて、よい年をして跡追うておい〳〵というて泣かしやらうと思へば、可笑しうてたまらぬ」と手を打つて笑へば、「是はけうかる笑の段ではござりませぬ。お乘物にめさずとも早々お出で」とせり立つれば、「ハテやかましい、母樣のつね〴〵あの子が泣かずに機嫌よう笑ふ顔を見て死にたいと仰有つたは、其方達

幼少より小氣に生れつき、見る事きく事につけて涙もろく只今の仕合なり。かう取結びいたす上は聟殿を賴入ります。心を附けられ何卒氣質の大膽に成るやうに、そろ〳〵と御異見を賴みまする」とあれば、是にて座中安堵して、「泪もろきは仁心の深きゆゑなれば、下々出入の者迄に慈悲ふかゝるべし。女中の氣質には重疊の御事」と取なし申して、盃もをさまり目出度く婚禮とゝのひぬ。馴染かさなり異見しても此癖やまねば、聟はさま〴〵工夫して、兎角生れつきの小氣を、大氣にもたす方便より外有るまじと思案し、惣じて人の心を大氣にするは酒に增したる事なしと、手代の女房出入の嚊共に、少しも酒のなる者どもを呼びあつめ、內證をいひ聞かせ、「隨分女房共に面白可笑うしかけて酒をすゝめ、泣きさうな時分は脇からむしやうに笑ひ出して、憂事ををかしい事に轉じ變へて見る療治なるぞ」と、隱に言含めて、朝から晩まで酒事にして、泣出しさうなれば、可笑しからぬ事に、何れも手をうつて腹を抱へて笑うて見すれば、娘は呑むにあがつて次第に酒がなり出で、泣上戶へこけさうな所を、相伴の女共爰こそ大事と笑ひかけて、つひに笑の方へ心を傾けさせ、後には泣く事笑にうつりて、年來の泣病大槪笑

へ緣につくる約束、何程泪こぼされても、商賣が紙屋なれば幸ひの所と、吉日をえらみ送りけるに、白き小袖に綿帽子著たる我姿を見て、「頓て父樣母樣のお果てなされて灰よせに行く時、かうした姿で行くであらうが悲しや」と、ばら〳〵と泪をこぼし、「はあ氣がはつきりとして心よい」と、乘物に打乘つて出づれば、跡には門火燒いて下々が聲して、「次手に娘御に此門火をおしが、それ嫁御の御入と乘物直に手操にして、奥座敷へ舁入れて愛敬の守取替すなど、貝桶わたし奉公雛の置所、腰卷したる女長柄加への品を盛り、千代重の白無垢皆紅の小袖に著替へさせ、御祝儀の島臺娌御の御側へ持つて出づれば、嫁は臺の物の尉と姥との人形を見て、「此年まで手助の子がないかして、自身木の葉かきかたげて、松の木下を掃除せらるゝ年寄夫婦の心入が、嘸あぢきなからうと、思ひやられて悲しうござる」と、待女郎の見るをもかまはずさめざめと泣出せば、座中の諸一門肝をつぶし、餘りの事に挨拶もなくて互に顏を見合せ、是はけうといけう行跡といはぬばかりの氣色、娘の親達氣の毒がり、「何れも嘸けうとく思召さん、娘事

行先の寺迄とはせて、其時分に乘物に乘つて先の旦那寺へ行きて、葬禮の來るを待つてゐる心の樂、月花芝居には替へぬ程の悦び、二親も興をさまし、「あの如く葬禮蟲がついては嫁入させても聟の手前異なものなり、何とぞ葬禮見ずに哀な咄ばかり聞いて、泪を溢して慰んで呉れまいか」と、氣に障らぬやうにあしらうて教訓せらるれば、「然らば御異見を用ひて葬禮場へは參るまじ。其代には大坂中の死んだ人の方へ、直に訪ひに遣つて下され」とあるを、乳母が中分に入りて、天王子の神子町にて內證を賴み、「隨分涙の溢れるやうに口よせにて御堪應なされて下され」と、漸神子の口よせに葬禮を替へて、每日神子町へ行きて、一家一門は謂ふに及ばず、水茶屋の同じ床机に腰かけたる人迄思出して、口を寄せて泪を溢しけるが、「葬禮程にしみじみと眞底から、哀に悲しう泪がこぼれぬ」と餘程不足なるを、「夫程の御堪忍遊ばす所が、親御への御孝行と申す物ぢや」といひなだめける。兎角哀傷を好んで泪をこぼすは心氣の疲れなるべしと、老功の醫者が考で、益氣湯に加減してもつて見るほど、いよ〳〵泪頻りなれば、祝言して男をもたせなば、夫の手前を恥ぢてなほる事もあるべしと、一門談合して高麗橋の紙屋

かく作ればすぐれて目にたち、所がら難波のよしあしいふ惡口仲間の若い者も魂をとばしぬ。此娘極めて哀なる事が好にて、小い時から日暮太夫が歌說經を聞いてまたなく哀れがり、それより出羽芝居の阿波太夫がうれひ節に打込み、四十八願記の三段目を覺えて、獨慰みに語つては泪をこぼし、延の紙さへ一日に一束づつ入つて、平常日のはたおもばれてよからぬ事と母親の異見、其身も尤と思ひながら、半日にても泪をこぼさねば食がすゝまず、頭痛がして目眩心にて氣もうかざれば、煩には替へられぬとて後は親達もゆるして、あはれなる淨瑠璃小歌を聞かせけるに、次第にあはれなる事高上になつて來て、淨瑠璃小歌祭文は元來作物にて眞のうれひ事にあらず、悲みの至つてかなしきは、人間死の道の別れに越したる事なしと、思ひきはめて門を葬禮が通ると、是こそ眞の哀れが通るはと乘物舁俄に呼びよせ、忙しさうに打乘つて此葬禮の跡について、或は飛田千日の燒場へ行きて、死人の一類嘆くを見て其身も袖をぬらし、是ぞ眞のあはれなりと、心から泪をこぼして悅び、葬禮の通らぬ日は手代に言附け大坂中をありかせ、門さして敷居に薦のかけたる家を見せさせ、「こなたの御葬送は今日何時でござるぞ」と、

遊女は歷々人の身代をくうてしまひ、男を虚大名にするぞかし。惣じて婦人には氣鬱よりして醫書にも無いさま〴〵の異病を煩ひ、醫者に枕をわらす事なり。栗ばかり食へばとて、嫁入させずに持ちくさらかしにする親父こそ無分別ものなれ。容貌さへよくて連添ふ男が堪忍せば、假令火をくはうとまゝ、婚禮して男をもたせて見たきものなり。必ずかやうのもの堅き親父が美形の娘を持つて大事にかけ過し、若い娘の度々出歩くは浮名の立つ基ぢやと二階へ追込め、縫物摘綿の外は今時の流行草紙はいふにおよばず、伊勢物語さへいたづらの智恵づけと、半枚も讀ませず、罪なくて配所の二階に糸屑そろへてゐるが如く、無殘や陽氣の盛の娘に當世の日のめさへ拜ませずして、つい癆咳やみにしてのけ、臍を噛んで悔む親父が、何程かこの粋の世に多し。異樣なる煩も、男もたせば大概はなほる物と、氣の通りたる女醫者の申されしは道理と思ひ侍る。爰に長堀のながれの末に、木曾山の材木屋せし有德人の息女、美形當流の釣島田、針金入の匕髷かしらから常の仕出に替り、光琳模樣に手をこめ、紅の隱裏ほのかに十三がはりの寄島帶、おまん樣結びもよしや花車づくしの抱帶、紅の二重内衣氣をつけて、よき上を

中づきあひ夥しき奢にて、替りめの狂言に六間つゞきの棧敷あけさせ、役者子供への附屆仕出茶屋のしはらひ、萬事の物入かうある筈と申す程に、一門の亭主共手を打つて肝をつぶし、向後親類づき合はいふにおよばず、親の日に墓參も無用と乘物に封をつけ、扨、「此質物面々が働にて儲出して、一色なりとも請戻すべし」と申渡され、歷々のおく樣達洗濯物を請取り、冬の日のつめたいもいとはず、打かけして粘つけ物をなさるれば、紙びいなの首括つて千を十文づつの賃仕事、摘綿かけ物仕立物、尻も結ばぬ糸ぞかし。何なりともして錢儲せよといひわたされし中に、眞苧うむ事は無用と亭主の忌みしはをかしかりき。

哀れなる淨瑠璃に節のない材木屋の娘

因幡の國に何の入道とかやいふものの娘、容貌よしと聞きて人數多いひわたりけれども、此娘たゞ栗をのみ食ひて更に米の類をば食はざりければ、かゝる異樣のもの人に見ゆべきにあらずと親ゆるさゞりけりと、つれ〴〵草に兼好が書かれしが、栗よりは丙午の女は男をくひ、傾城

とつ不足のないやうにこしらへして嫁入したに、二十ならんだ小袖簞笥に衣裳の事はおいて白紙が一枚なく、おそろしいほど肝が潰れ、數々の長持共をあけさせて吟味せしに、夜著蒲團すずしの蚊屋天鵞絨の長枕手道具迄、何處へやりしか一つもなく、高蒔繪の文筥の蓋のならぬほど質の札の入つたを見て、扨は亭主が內證ならず、女房の道具を質物につかはせしかと身代の樣子をうかゞひ見るに、今日も西國のお大名さまから急なるお金の御用とて、時の間に貳萬兩とゝのへ出し、見世も居間も小判の山をなす事、よもやかうした身上にて女房の物を質にはおかれぬ筈とおもひ、聲山たてゝよしない事を穿鑿仕出し、夫にまで見限られてはと、此上ながら娘不憫さに叱りさへせずして、是迄斷りにまゐつた。女の身でかゝるわざは詞にもつくされぬ」と、齒のない齦をくひしばり、淚をこぼして腹立てらるれば、亭主是を聞いて、「こちのわろもさうした事か知らず」と、內儀の道具に僉義しかゝり、簞笥共吟味せらるゝに、紙が一枚入つてなし。是たゞ事にあらずと油小路の妹が方も穿鑿あるに、何方も著のまゝにて夏冬の物一つもなかりき。扨も我の折れた穿鑿と、年季の腰元せたけて樣子を聞くに、近年御親類の女





にお役にたゝざる殘念さと、是からも斷ばかりにして、小袖惜みして越されぬこそ氣の毒なれ。姪は賢き娘にて、一家の內儀達我に衣裳をかす事不同心と見きはめ、俄に氣色あしきとて一間に引込み、今日伊丹の衆へ見えられまゐらする事、此氣色にてはなりがたき由亭主に斷り申されるば、主人此心入を悟つて不憫に思ひ、「然らばとてもの事に氣分のすぐれし時逢うたがまし」と、見に來る伊丹の人の方へ斷り申遣し、扨妹を呼びにつかはし、我女房とならべおき、一人の姪に衣裳惜みしてかさぬ卑劣の心入を嚴しく異見すべきとて、奧の間へ引寄せ、額に皺よせ談義の口あけせらるゝ所へ、「柳の馬場の姨御樣お見舞」と申す程に、先異見事やめにして、內儀も妹御も臺所まで出迎ひ、「よくこそ御出でなされました」と奧座敷へ伴へば、姨御は奧におしなほり亭主を招き、「姨が今參つたは其方と姪のおつやとへ詫言に來ました。今朝娘が方へ小袖かりに越されしに貸さぬ樣子を聞きしゆゑ、それは外と違ひ一家の事なれば、此度姪の祝言には其方にも小袖の十ばかりもぬがし、夜の物の三流も進上にさせうと思うてゐる所に、借りに來た小袖をかさぬ心底不屆の至りと段々叱つて僉議したれば、九十貫目入れて何ひ

靜めて、「大事にかきやる小袖をおれが姪に貸してやりやといふが惡い、こりや油小路の妹が所へ此文をもつて行き、小袖二つ取つてこい。久三に挾箱なり共柳行李なり共持せて連れて行け」と、年季の腰元に口上あらまし申含めて遣しけるに、妹から內儀へむけての返事に、兄樣より小袖の事共仰越され候へども、爰元は此比おしこみはやり用心あしく候ゆゑ、常住著ばかり殘して、皆々御隱居樣の方へ預け置き候らへば急なる用には立ちがたく候間、御機嫌そこね申さぬやうに宜しく御取なし賴み入る」の由こまぐ〵申來れば、亭主此返事見て、「おのれが爲にも姪の事なれば、自分に持たずは借りとゝのへても役に立つべき道理なるに、女の性は言合さね共何方もおなじ事」と、內儀へ耳こすりいうて、「柳の馬場の姨御の娘おかん事は、日來の生れつき寬濶にして物惜みせぬ大氣な女、殊更衣裳持なれば此方へ申しつかはすべし」と、文したゝめて取りにやられけるに、是からの返事にも、仰下され候小袖共は、先日おぎん樣ひざなほしの圓山振舞の時、庭阿彌の築山へ、腰元のりんを追ひかけあがり、躑躅の枯枝に裾引きかけて三つながらさらりと引裂き、昨日かけ物屋へ遣し今の用には立ちがたし。たまく〵の御用

つやとて嫁入盛の美形の娘、父親不仕合にて江戸の土となられ、後家の手にて人並には育てがたく、萬事材木屋の厄介になつて、今年十八十人並にすぐれたる器量の由聞きおよびて、筋目さへよくばこしらへなしに貰ひたいと、伊丹にて名高き酒屋の身代よしから申しかけ、其家の乳母と重手代娘御の器量見に計わざ〱のぼれば、材木屋杢兵衛ためには一人の姪を、近き比より手前へ引取り養育せられしかば、是を聞いて幸ひの縁と悦び、自分の娘分にしてこしらへも大概にしてやるべしと約束大方なり、よりて今日姪が性質を彼方より見に來れば、隨分飾りて目に入るやうにしたしと内儀を招ぎ、右の譯を語り、「人形にも衣裳といへば、其方のおりもんと地なしの小袖を、少しの間姪にかして著せてたもれ」とあれば、「成程やすき事ながら、其小袖どもは妾が乳母が娘、近き内に御所方へ御奉公に出づる其お目見に入るよしにて、昨日貸してつかはし、手前にはござりませぬ」と迷惑さうに申さるれば、「然らば地赤の著物と紫鹿子の縫入の小袖を」とあれど、「それも此中妙安様の法體振舞の時、油と酒がかゝりまして、今解きほどきてあれば俄の用には立ちがたし」と、兎角貸しとむない口ぶり、亭主むつとせしが押

つてまゐれば、白きが上の身の中を二時ばかりかゝつて洗はせられ、おあがりなさるゝと御部屋に入つて夕化粧なさるゝと、はや日も入つて御居間に蠟燭たてつゞけ、お夕食あげるなど、商事はつぎにして、おく樣の御用大事にかけねば旦那の御機嫌わろきと、萬事を捨てゝ上下共ににえかへる事ぞかし。すべて盆正月衣更の外、臨時に衣裳を拵へ用捨なく著ふるし、程なく針箱のつぎ切となりてすたり、又はお出入の尼嚊等に著おろしを下され、萬鷹揚なる至りぜんさく、亭主是ではならぬと思ひながらも、かう取擴げては中々我身代ながら自由には成りがたし。是身上善惡の堺町に材木屋の杢兵衛とて有德なる町人、今世盛の棟高く、內儀は立賣の吳服所の惣領娘、身代半分入れてのこしらへ、時代蒔繪の手道具に小袖は手の物とて、工手間のかゝりし素縫織紋地なし鹿子の美をつくして仕付けられける。夫婦中よく五年の馴染をかさね、一子をまうけて寵愛限りなかりき。身代よくなるにしたがひ歷々の親類緣者ひろくなり、日每の一門附合に互に花をかざりぬ。されば何れの家にも揃うてよい親類ばかりあるものにもあらず、其中には蟲喰の一家ありて、必ず世話にせねばならぬ浮世とて、此材木屋の姊の娘にお

今の世の風儀を見るに、手前よき人表向をかるう見せるは稀なり。諸事其分際よりは花麗を好み、隨分世を張つて子に能をさせ、娘に不斷惣鹿子をきせ、鞠楊弓に日をくらし、鷹揚に見せかけばかり、さりとは恐し。同じ丁銀を天秤響きわたる程日には百度もかけ、廣庭にはのべ米をかりて積重ね、まだ堪忍のなる面向の屋根を葺きかへ慥に思はせ、手形がりの金銀を取込み、人目には、鷹揚なる顔附、內證は氷の上の炭火起して、田樂燒いて食ふやうな危いたのしみ、斯樣の人もわざとたくみて身代をつぶすにはあらず、其分限に物每仕過し、大概は女房家主奢つて無用の腰元中居をかゝへ、步行でゆく方へも大乘物をざゝめかし、花見紅葉見開帳まゐり、扨は芝居のかはり〴〵に棧敷をとらせ、手前から拵へさせて持せ來た提重の外に、茶屋へさまざまの料理を言附け、提煙草盆の火入に伽羅を燒掛け、朝日山といふ煎じ茶を臺天目にて運ばせ、狂言の善惡いうて、內には亭主が借銀返辨の日限相違と催促つけられ、留守つかうて佛壇の間に閉籠り、胸をいためてゐるも知らず、所思の役者見て氣がはれたと機嫌よくお歸り、其まゝお風呂にいらせられ、小豆の粉に麝香入れたる洗粉袋糸瓜瓜のをかしげなるを取添へて持

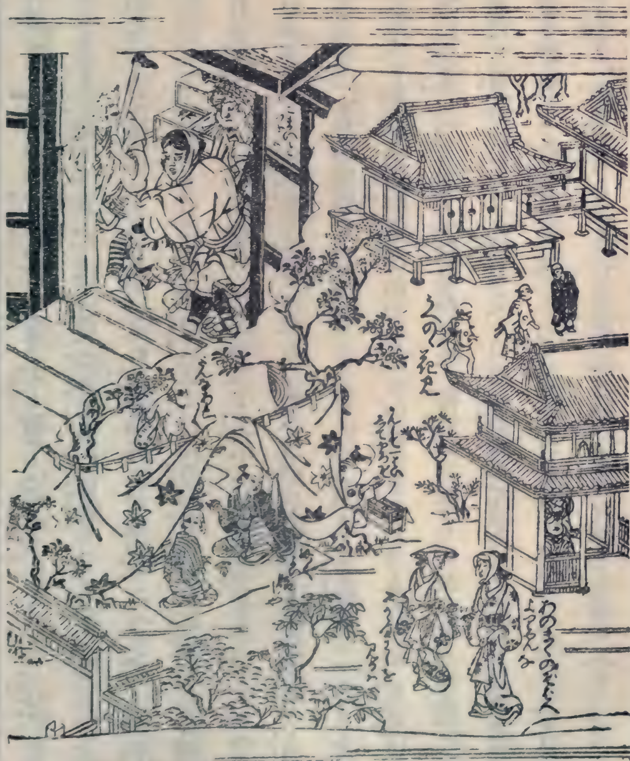
らはれし、重寶のおかさま」と、扇を以てあふぎ立つれば、女房更に滿足なる體もなく、正月の蓬萊かざる三方を取出し、其上に紙卷の脇指乘せて勇んでゐる亭主が前に直し、「男と生れ夜盜の手にかゝつて縛められ、のめ〳〵と生きて永く人に顏を見られんとは口惜しき御所存かな。最早こなたは男の一分廢つたれば、せめて潔く爰にて切腹なされ、繩目の恥辱をすゝぎ給はねば、武士の法をしつた三輪の何某が娘が妻となりながら、夫に切腹すゝめざるかと世の人口にあづかるも無念なり。跡の事は氣遣なされな。妾が生存つて家には疵を付けませぬ。はや〳〵腹を」とすゝむれば、亭主大きにけでんして、「町人のかたじけなさは踏れても恥辱にならぬ。無念ならば太儀ながら男の代りに其方切腹の名代たのむ。あらいま〳〵しいゆるし給へ」と、いふかと思へば夢さめて、同じ枕に内儀は鼾の最中、扨も嬉しや夢なればこそ、女房がだまつてゐれ、誠ならばおそろしや〳〵。

小袖簞笥引出していはれぬ惡性娘

て、我物いらずに蠟燭數多點したてゝ藏の戸押開けこみ入る所へ、内儀くだんの嗜具足著して長刀よこたへ奥座敷より躍出で、「命しらずの盗人共一人も餘さじ」と、藏の戸外よりしやんとたて、臺所へ出でて見れば、亭主朝からの醉さめて高手小手に縛められ、投首してゐられしが、内儀の體を見て、六道の辻で地藏菩薩に御意得た心地して、「こりや女共油斷すな、味噌部屋に貳人のこつて居るぞ。日比の軍法此時なれば、天晴な働して爺が難儀を救うてくれ。まづ繩解いて水一ぱい飮ませてくれ」と、蘇生つたる氣色にて、じだんだ踏んで喜べば、女房頓て亭主をはじめ手代小者の縛切りほどき、用心にかけたる棒共おろさせて、味噌部屋を驅出せば、作髭の大男さいぜんの氣色とかはり、手を合して拜みゐるを毆きふせて縛め、藏の前へ引きすゑ、「さあ尋常に是へ出でて勝負をせよ」と、女房長刀かまへ藏の戸明けさせ待ちかけぬれば、此勢に藏の中の盗人共も手を束ねて命のねがひ、「重ねて此邊に徘徊せば、殘らず首を切りならぶべし。先此たびは赦す」とて、殘らず作髭とらさして、首代に棒にてしたゝか打擲して追拂ひ、門の戸疾くとしめさすれば、亭主悅び、「日來は麁末に思ひしが、今といふ今女房の德あ

自身物ぬやらうにや、そりや聞き樣がわるい」と、口すぼめて機嫌をとるこそ氣の毒なれ。すべて女のする業はせずして、平生軍の沙汰して大裏の庭に眞砂を聚め、城取して軍のかけひき、魚鱗鶴翼のそなへ、正月著物の模樣の事はいはずして、具足屋の岩井大和を呼びよせ、春の晴に花見鎧をあつらへ、小櫻縅こそ見よけれと具足のたしなみ、神事の練物の役にたつより外はなし。頃は十月二十日惠美須、商人の祝ふ日なれば、旦那をはじめ手代小者まで、終日酒機嫌にて門の戸のあいてあるをもしらず、半太夫節に頭をふつて語り、寢入にする折を考へ、面體を墨塗にして屈强の夜盗八九人ばた〳〵と押入り、亭主をはじめ小者下男下女迄に繩をかけて、猿繋にして大黑柱に拉附け、中にも生醉の手代一人を括らず胸元へ刃物を押當て、「金銀の有る所眞直に申し、我々を案内して其金共を渡すべし。さもなくば只今刺殺すが」と白眼めば、手代わなわな顫ひて、「旦那の居間の戸棚にも入れてござる、又藏の中にも幾箱か重ねてござれば、力次第どちらの金からなりとも御機嫌ようお取りなされて、私が命をお助けなされて下され」と泣聲にて申せば、「さらば先土藏の銀からかたづけん」と藏の鎰を取出させ、手代を先へおした





斯かる疵を附けられて何う堪忍がなるものぞ」と、中々聞くべき樣子見えねば、町中を頼み名主年寄月行事ふしやうの下袴著てさま〴〵の扱ひ、向後亭主に口過させまいと一札書いて、町中連判して是を以てやうやうに詫びてすましぬ。それより亭主は女房に強みつきて、睦言も鬼と戯言いふやうで打解けててんがうもいはれず、偏にばてれん組の男伊達と同船する心地にて、夜の樂みつきて女房を仕替へたい心なれど、暇といはゞ又二尺三寸を閃かして、よもや我等を生けておかうとはいふまじ、兎角前生で彼をいためる報いでがなあらうと思ひ諦め、主の子あしらふやうに朝から晩まで女房の機嫌とつて、さりとては氣のつまる穿鑿なり。適々小袖の談合しかけぬれば、けうとい顏して、「諸侍の娘が手ぬるい針仕事などするものか、其爲にお物師とて針手のきいた女に切米やつてかゝへ置きぬれば、縫物の事ならばおゐまと相談なさるべし。如何に浪人の娘にて貧家に育ちたればとて、自身糸針持つて手づから物など縫うた事はござらぬ。近頃口惜しう御座る。自身物をも縫はう女ぢやとお見立にあづかる所が恥しい」と眼色かはれば、「ハテ其方に縫うてたもれといふ事ではない。人の女房ともあらふものが、なんの

鍔元寛げ居合腰になつてつめかくれば、元來半四郎臆病者、「是は迷惑、女夫の中の心やすだて、何事も堪忍」と手を合すを、「さて〳〵未練の擧動、相手より果し狀を付けられ、返事の遲さへ武士道にはおくれたりと笑ふ事なり。況てこなたの女房に討果さうといひかけられ、堪忍せいとは男に似合はぬ卑怯の至り、尋常に勝負あれ。女なれ共まさかの時、首をくゝり剃刀わざなど見苦しとて、爺親の祕藏の刀、男子なければ自らに譲りおかれ、自然の時には是にて潔く相果つべしと賜はつたる一腰、來國俊が百日精進してうつたる銘の物、先祖三輪の何某信州地藏峠の合戰に、さしも手强き武田方の甲兵を引請け、只一人踏止つて此刀を以て大勢を三度迄、峠より下へ追下し、武勇の名譽をあらはし給ふ高名の刀にて、素町人を切つて刀をよごさうと思へば、正月小袖の紅裏の裾のきるゝよりは悲しい」と泪をながし、今は是迄と引拔いて振りまはせば、こりや堪らぬはと半四郎二階へ迯上り、下口の戸を閉して口には觀音經、身體には大汗、生きたる心地はなくして顫ひるるこそ道理なれ。家來のもの驚き馳集りて、おいくをさま〴〵宥めけるに、「生れぞこなひとあるからは、妾を片輪者にし給ふといふもの、女の身

嫌をとるべきに、おいくは人に變つて氣の毒なる顏付にて、「お言葉を反くは不禮ながら、常々親共の申付けしは、月雪花の眺めは格別、其外の見物事は四座の能の外は女の見る物にあらず。殊更當世の歌舞伎狂言、いたづら事を第一にたてゝ不作法なる行跡をして見すれば、人たるものの娘の見る事は勿論、又咄も聞く物でなしと堅き誡、是ばかりは御免あれ」と達つて辭退すれば、半四郎大きに腹立して、「夫が連れて行かうといふ芝居を見まいとは我儘千萬、今の世に芝居を嫌ふは生れ錯といふ物、たはけた事をいはずとも早く拵へよ」と詞荒にいひければ、女房聞いて顏色變、「如何に男なればとて、諸侍の娘を生れ錯と惡名を付けらるゝ段、如何にしても女の一分捨て、先祖の佳名迄よごす事口惜しき次第也。身不肖なれ共妾が先祖は、長尾景虎入道謙信の家臣、三輪兵部太輔俊貫が子孫、世につれて町人風情の女房になるさへ無念なるに、賣人に生れぞこなひのたはけ者のとさみせられては、親達迄の恥辱なれば、近頃相手には不足には存ずれ共、夫婦の誼に相手にいたして進ずれば、嬉しいと思召し最期の御用意なさるべし」と、長持より刀取出し、「さあ此方から打ちかけませうか、但し其方から打ちかけらるゝか」と、

やに通るを半四郎見初めて、世界に女房といふもの彼娘ならではと、切になづみ、出入の者を跡からつけて宿元を見させせけるに、本郷の裏店借りて、楊枝けづりて其日を送る浪人者の娘、母親も歴々の侍の息女なるが、昔をすてゝ朝夕の米を炊ぎ、手足も自ら荒れたる宿に娘を養ひ、此子が出世を願ふばかりに、夫婦手痛い働をして惜からぬ命をながらへ、憂き年月を送る由と、具に聞いて歸りて物語すれば、半四郎手代共に申付け、萬事此方より嫁入道具美々敷拵へさせて、迎ひとりたき願入れて段々言ひ遣しければ、親父聞屆けて、娘おいくを半四郎方へ嫁らせけるに、貧家に育ちぬれ共流石武士の娘とて、町人の子とは違ひ行儀正しく、假にも賤しき業なければ、多くの手代共も奥樣とかしづき、親里の侘しき暮しを誰いひ出す者もなくて、人は氏より育といへど、姓は元をあらはし、爺親の由緒ある形氣を繼ぎて、舅の一家の内儀連に出合つても少しもわろびれたる體もなく、自然と位あつて人皆種姓を感じぬ。馴染むにしたがひ心易うなるは世界の女夫の中ぞかし。或時半四郎女房おいくを連れて、堺町の歌舞伎芝居を見物にゆく催し、常の女ならば此思立やまぬやうにと、平常にないしほの目して亭主が機

世帶持つても錢銀より命を惜まぬ侍の娘

上野の櫻咲いて人の內儀の容體自慢、色ある娘は母の親ひけらかして、ひとつある著物の裙のきるゝをも厭はず、花は見ずに見られにゆくは今の世の人心なり。いづれ器量さへよくば連れて步行まじきものにもあらず、美目は果報の基といへば、歷々人に見染められて、思はぬ仕合に乘つて來る玉の輿、氏なうても奧樣になるは美形の一德、嫁入盛の娘は商物と同じければ、花を飾つて見するも又にくからず。爰に吳服町の卷物屋の半四郞とて、有德人の息子、店商は手代に任せて每日の野遊山、今日も櫻の盛に愛で、樽の前によい機嫌して歸らん事を忘れ、末社まじりに唄ひかけて、見返る女中を此方の肴に、是は飮めるはと、どよみつくつて餘念なき中に、昔鹿子に金糸の縫紋振袖の小きを其儘著せて、年は十六ばかりと見えて白齒の娘、面體いふばかりなく上々飛切、風俗しやんとして派手めかず、さりとて萬揃うたる生附、母親らしき人、幾度か洗濯せし日野の著物著て、娘の尻について脇目もふらず、男の聲を聞いて足ば

一門づき合も今から奥様の賃仕事

哀なる淨瑠璃に節のない材木屋の娘

嫁御の氣の弱いに嘘のない尉と姥への御挨拶

聞いて悦ぶ神子の口間うてたもつて愁の根元

啼く口へははいりよい茶碗酒今ぞ望の笑ひ上戸

世間娘容氣 二之巻

子息形氣追加

目録

世帯持つても錢銀より命を惜まぬ侍の娘

牢人の楊枝けづり手足もおのづから荒れたる宿

思ひは薄からぬ戀女房我と心を臆病者

盜人も舌を巻物屋の妻女のはたらき

小袖簞笥引出していはれぬ惡性娘

替りめの芝居見物は亭主を腰に提重の酒

呑込にくい小袖惜み如在は内儀の下心

先へ呼びて談合を極めぬ。後には御白洲へも女房がかいぞへして、年寄是に居りますと、尻をついて言はしけると、笑種となつて來てけり。

持つて行け」とさらく〳〵と書いて、ひんねぢ用人にわたせば、役人もをかしき奴にて、「今からお寄會は會所では御無用にあそばし、御思案の勝手の好いやうに内方でなされたらばようござりませう」といへば、「推參な、下として上を計らふ慮外者、一町のたばねもする者が女房の智惠を借つてなるものか。譫言いはずと早う往てこい」と、赤面して苦々しう叱りければ、役人小わきにわかして、憎さもにくし困らしてくれうと、鏡屋へ行かずして上の辻迄ゆき戻り、「内方へ參りましたれば、御内儀樣は遠方へ御用があつてござりましたが、中々急にはお歸りなされまいと、御家來衆が申されまして、御狀をとつて歸りました」とさしおけば、年寄頭をかいて、「身共が寄會へ行く時は何な用でも宿にゐよと、日比言附けおくに、公用をかいて何處へ行きし事ぞ。何れも相談は明日の事にいたさう。女共が何用で何方へ參つたぞ、内が心元なうござれば拙者は罷立ちます」と、飲みかけし煙管下におきて歸られければ、町衆跡に殘り、「是では諸事の相談が埒あかず、向後寄會に御年寄は女夫づれで寄らしやれと、お宿老殿の氣のたゞぬやうに、仁介に言はしたらばよからう」と、重ねての寄合には御年寄樣より、先お内儀樣を

得あらまし思案を書附けて、「是を主へ密とわたせ」と仁介へやれば、急ぎ會所へ立歸り、お年寄にわたせば、其まゝ用事に行くふりして背戸口にて開き見、隨分忘れぬやうに四五遍讀みて懐へ入れ扨戻り、「身共は若い時からわるい癖で雪隱へ參らねばよい思案が出ませぬ。何れも扱はうと仰せらるゝが、借主のひもの屋殿は何程で詫びてもらひたい心ぞ。先其詫銀の員數を聞いて其上で詫をする相談に致さう」といへば、何れも是はお年寄樣の御意御尤と、ひもの屋を呼びよせ其段を尋ぬれば、「元此銀は百五十匁にて四割半の利足を、五節句に一度づつをどり、七年以來になつたと申され、當春手形も彼方から認めて參られ、判をおしたばかりで算用は如何あるかも私は確と覺えませぬ。兎角元銀百五十匁なれば、是を三分にして四十五匁で、お詫なされて下さりませ」と達つて賴めば、町衆詞をそろへ、「内證のわけは兎も角も、先手形のおもてが壹貫五百匁なれば、四十五匁で濟して下されと髭くひそらして、町中の口からは、どうも申されぬ。然しお年寄樣には、如何思召しますぞ」と問へば、年寄は彼女房の所思とは相談ちがうて當惑し、「仁介々々、又太儀ながら女房共方へ取りにつかはす物あれば、此文一つ

とかく町久しき人なれば、鏡屋殿を無理に今からのお年寄樣に頼入る」と、袴代とて銀五枚つゝみて、家持借屋迄御見世へ來て、否とはいはさぬ頼みかた、「文盲な私で苦しからずば何がさて」と、明日牢の飯くはうとまゝ、まづ五枚の包銀に飛びつき、其日から正座になほつて燒物の大きなるをすはつて、俄に分別らしい顏附をかし、或時町内檜物屋へ壹貫五百匁の預銀不埒につき、近日表向へお願ひ申すとの屆によつて、俄に寄會ふれさせ、會所へ町衆集り、「外樣事になれば先むつかし、兎角先樣を詫びて内證で濟したがよからうと思へ共、お年寄樣の御思案を知らねば我等が分別にも定めがたし。如何仕りませう」と組中伺ひ申せば、鏡屋仔細らしう打聞いて、「扱うたもよからうづ、又出たもよからうづ、爰に宿老の一世一代の分別の入所、おのおのざは〳〵仰有るな」と、硯とり寄せ鼻紙に一筆かいて、「仁介々々」と用人呼付け、「宿に失念せし事あれば、はやく此狀女房共に渡して返事とつて來れ」と事有りさうに我方へやりければ、仁介彼狀持つて鏡屋へ行き、内儀にわたせば女房ひらき見るに、「町衆は詫びたがよからうとあるが、我等は爰にて何んというたる物にて有るべく候や。分別御申越」と書いてあり。女房心





ごし、離別こそいたされずと、是ばかりは止めらるゝやうに、竊に異見をせられよ」と、小聲になつて知らさるれば、愚平次胸にこたへ、「御知らせの段忝い」と一禮いうて立歸り、「女房共もはや此商賣も末になつた。やめねばならぬ仔細あり」と、所思ちがひの文の沙汰をはなして、「世間でかう唱へられては止めずにはおかれまい。今日からさらりと遊女の祐筆やめにして、何ぞかはつた思ひつきで錢儲ける思案して、我等を養うて給はれ。其代りには飯焼いてするそなへ、洗濯物も我等してあてがひ、寢道具のあげおろしも拙者いたして、其方の手にはかけまい。何卒此城のもてるやうに頼む」といへば、いにしへ兼好の高の師直に頼まれ艶書を書きて名をたてられしといふ事、今身におぼえて尤と一人頷き、是より願訴訟の目安を書きならひて女案者に名をとり、事にもならぬ少しの言分を手がかりにして、公事沙汰の腰をおし、後にはさまぐの虎落分別、女には又例なき行跡なり。是も根が世間しらぬ女の案なれば、我儘なる思案多しとて、次第にたのむ人なくて、今は筆の命毛もきれる折節、「町の年寄先月はてられ、其跡がはりの役目をつとめさせう人なし。智恵才覺ある人ぢやとて新規の人にはもたされず、

此節内外共に不足して、百の口の尻からぬける身代、分別せうなら今ぢやがと、女房が氣をもたすれど、さしあたつて商賣かへて挊で見やうも望姓なく、一倍智慧の鏡屋も曇りはてゝ、水銀さへ無くなり、「是では此まゝ朽ちはつるといふもの、こなたの思案を待つうちには、身代の日がくれて、夜ぬけにして此所を立去らうより外はなし。爰は妾が一智慧出し働いて見るべし」と、表の柱に女筆指南の貼紙して、近所の女子をあづかり手習を教へけれど、俄に弟子もあつまらず、是も急なる助にはならずと、猶又思慮をめぐらし、無筆なる茶屋風呂屋、白人が客の方への屆けの文の祐筆して、奉書で五分杉原で三分、物前の無心の長文章は客から合力の金高にあはして十分一をとる約束、元來女筆は勝れて自由なる筆のあゆみ、いさぎよくながるゝ水のごとく、宮川筋石垣祇園の遊女より隙なく頼みて、人のしらぬ金をまうけて、亭主をはじめ五人口を寛りと養うてとほりけるに、愚平次一家の堅い親父竊に鏡屋を招きて、「其方の内方は近處の若衆と、一人ならず大勢と密通して數通の文の取かはし、我等内儀の能筆を見知つて居れば、見損ずる事でなく、慥に見屆けおいたゆゑ其方に今耳をうつ。如何にしても一門の頬よ

やら自然と備りし所ありて、元より琴をひき歌の道に心ざしふかく、萬花奢なる行きかた、擂鉢のうつぶせなるを富士にうつせし燒物かとながめ、釣瓶取を小船の碇かと優しく見なし、同じ油火も松明すゝむるといひ、一文菜の鰯をおむらさきのおぼそのと、首筋もとばかりせより箸して、手元に延紙おいて一口喰うては口のごふなど、物毎やさしく、糠味噌迄も酒塵と見るを見まねに弟子小童まで言葉あらたまり、亭主が片言も女房を恥ぢて大方の事はいはずに暮し、我ばかりよい物持つた顏附にて、妻女を浮世のたのしみと、手の物の髭ぬき鏡取つて見れば、跡の月より鼻毛も餘程ふとくなつたと、女房自慢にいつとなく家業無沙汰に成行き、內證はからの鏡屋となつて、花奢事好んで嗜ふかく、寢所から鏡見て亭主に寢顏も見せぬ紫式部も、身代にからまかされて、うば玉のと詠みし我黑髮もそこ〳〵にして、諸肌ぬぎて脇腹にある瘤を見出され、ある時は樣子なしに步きて、伊勢が歌のみじかき足をあらはし、いにしへの遊樂の琴の音も確にひきかへ、小麥の粉の白きを富士の雪と見たてしも、何時しか鹿の子斑に上置飯を引かゝへて、五六ぱいとは女の食にけうとし。夫は元より下地から足らぬわろなれば、倘

百の錢よみ兼ねる歌好の娘

闗々たる雎鳩君子の德を助くといへり。唐土の宣帝は無鹽君といへる醜き女を后と定められ、此智を借つて政道を執行ひたまふに、齊の國大きに治れり。是を今時は爺嘮とて笑ふ事にして、たまく女房がよい事いうても、女の鼻の先智恵と頭から打込み、妻女のいふ事を用ゆるは恥辱のやうに思へるは、大いなる誤ぞかし。世に女房を養ふ顏して、女房に養はるゝ亭主多し。己が智恵の曇りを磨がぬ鏡屋の愚平次とて久しき町人、代々小家をもちくづさず。落ちもせず秀でもせず、いつも一尺の鏡の中を廻つて、小い弟子二人に腰をつかはせ、借錢せぬを手柄に世をわたる律儀者あり。緣とて此者の妻は、御所方のお歷々のするゝに召使はれて、歌書の御文庫預りし四人の中の其一人の女なれば、今町人のせはしき世に住みながら、ありし昔の玉かづら色つくれる面影常にかはり、不斷紫に紋なしの小袖いくつも同じ重著して、其色の後帶朝見る姿殊にうるはしく、諸人何となく氣を移して、鏡屋の紫式部といへり。大内山の花の香どこ

際の苦み、是でなければ世渡りはない事かと、呼んだ客の手前もかまはず、互に身の上を語りあうての忍び泣、太鼓持は間のある節季をおもへば、此暮は欠落か首縊仕舞と、もんさくやめて、「ア、味氣ない浮世ぢや、太鼓持の役とて無理酒のあひをさせられ、埒もあかぬ大臣の端歌を讃め、我よりは鈍い客に白痴者といはれ、蟲に入らぬ事にも笑ひをつくり、女房共のかくす事まで人中でかたらせ、世に身過ほど悲しき物はなし。かくお氣に入りても五度程召しつれられた上で一角、よう下されて二角ぢや、此廣い世界に小判の降る國はないか」と、指のまたすほめて無常を觀ずれば、欲の深い主人夫婦も何となくむじやうに後生氣になつて、何卒虚言つかぬ商賣もがなと、簫の一音をきいて心亂れて、思はぬ涙をこぼせば、奥口の客共は、「いつも面白い座敷が、今日はいな事で鬼界が島へ流される心地がする」と、折角金出して慰に呼うだ白人と、浮世のならぬ世帯咄して、不憫さに二朱ひとつ合力して、袖を濡して茶屋から歸りぬ。

主人夫婦疊へ額を植ゑければ、大臣調子にのつて、「さあ御臺所とてもの事に奇妙をふいて聞されよ」と、玄宗の顏して床柱にもたれかゝり、鼻高うしてゐらるれば、内儀は元來簫の名人、時は秋風落葉して旅人古鄕を思ふと云ふ、漢楚の戰の時九里山にて張良が吹いたる一手、上手をつくしてふかれければ、隣座敷に今まで高なしに騷ぎたる血氣の客共、俄に陰氣になつて、親父が身から脂出して儲けられた金を、わけもない事に遣ひはたすは冥加もない事と、言附けし夜食喰はずに歸りたい心になつて來るこそ奇妙なれ。座敷の興によばれた治郎は、實の親のかち荷持して、今日を暮し兼ねらるゝ古鄕の事を思出して、三味線抱へながら泪ぐめば、親方がかりの白人は呼ぶ人もなくて、三十日ながら内にゐる時の事思出せば、茨の上に腰懸けたる心地して、餘所の女共はこつならしにゆくに、此方のは尾の多い烏賊幟で尻があがらぬと、嚊が當言いふもきかざるのひえもんだ顏して、無念ながらうごく〳〵として油火も費と、暗がりに追込まれて煎じ茶ののみたきにも、遠慮して自ら肩身すぼりて、悲しき隙日の時をかたつて泪をながせば、自前の白人は相撲取ほど裸になつて働いても、附飯の飯料と呉服代に引れて、際





ふかし、八反掛の羽織に金拵への中脇指、おぼろ富士といふ大編笠きて亭主と連立ち、毎日諸方への遊山長じて、高野へ登つて女珍しがる法師の心魂をうかして見たいの、熊野浦で鯨つくを見せて下されのと、さま〴〵のお願、いづれ夫の威なくして、今時の奢女房の心任せにまかれなば、入唐して今はやる國姓爺が城構見たいといはうも知れず。男は元來女房に逢うて日のないわろなれば、内儀が男の風をまなぶを變つた物好と喜び、女房つれて島原へ出かけ、花菱屋が座敷へとほりて、「我等御臺所がしやれたる姿を拜見せよ、恐らく唐にもない物好、何と斯うした器量は口きかるゝ太夫衆にも有るまいが、しやれるか〳〵」と内儀にも名どりの女郎呼んであてがひ餘念なきあそび、天上の婬樂も是にはおよばし。或日女夫づれにて祇園町のはやり茶屋に行きて、太鼓まじりにさま〴〵の大さわぎ、亭主内儀の藝自慢して、「女房共に簫をふかして聞すべし、汝等黑白の粹共につきあひ、いろ〳〵の音曲は聞かうが、名人の簫を聞いたる事、恐らく祇園町はじまつて有るまいが」「中〳〵天竺から祇園殿此所へ宿ばいり遊ばしてからつひにない事、縁によつて稀なる奥樣の簫を承る事、よい時節に生れあはせて有難い仕合」と、

調子をふきて霜をふらし、壽命の調子をふいては夫の鼻毛をのばさせ、藝といひ氣分といひ、萬を花車でかためし身、夏の夜は蚊除の間とて薄絹の障子の中に、五尺四方の盆石に水行燈をしかけ、宇治勢多の螢をとりよせ、暑氣を知らずにくらし、冬は八人詰の火燵にあたりて、鬢切したる女童子に足の裏をさすらせ、夫婦寐ながら名所香をきいて、富士淺間室の八島煙さまざま袖にとまりて、匂ひ立賣の伽羅さまと崇めて常住寛濶なるくらし、此人の親仁いかなる富貴の種を蒔きおきて、今子の代に銀のなる木の山をなし、利銀請取針口の音いやしき物ながら、貧家に鼓の音を聞いておもしろからず。此宿大節季に懸帳をさげたる者一人もみえず、萬事霜月のはじめに正月の來て門松立てぬばかりなり。此暮しにてしかも夫はわけしりの美男にて、廿四孝の中にもない、母よりは女房に孝行なる男、是諸果報なれば、何か此上に外なる願はあるまじき事なるに、女の身にて我女の姿をきらひ、何の因果に女と生れて、痩せたる男一人をまもり、自由なる遊をせぬ事ぞと、是のみ案じてゐられしが、思切つて亭主に訴訟し、笄髷の髪を切つて二つ折に髱出して、若衆めきたるたてかけに結はせ、不斷の風俗も裾短に裏を

し、今日は眞葛が原の相撲の初日七五郎雷電が勝負、是は見ずにはおかれまいと、内に金砂子に秋の野かきし乗物乗りはしらかし、女のすまふ見るといふ事昔は沙汰にもきかざりし事ぞかし。世間一切の男女房に甘うなりて、何をいうても細目して頷くゆゑ、成敗者見に粟田口へ辨當して行くなど、興のさめたる穿鑿なり。是を思ふに、殷の紂王の后妲己は慰につきて、炮烙の法を見て目を喜ばしめ、周の幽王は褒似にのびて、烽火をあげて見せられしも、皆女房になづみて目の見えぬゆゑぞかし。奥様の御用とて西瓜の代三百六十五匁、新小判にて八百屋が請取つてかへれば、心太の代二拾八貫三百二十六文、大男がさし擔ひにして四條の彌吉が所へすましに行くなど、是を以て外の驕を思ひやるべし。昔は女の煙草のむ事遊女の外は怪我にもなかりし事なるに、今煙草のまぬ女と精進する出家は稀なり。爰に町人ながら能い衆と呼ばれて、其名都に立賣の有德仁、代々家職もなく名物の道具つたへて、雪に茶の湯花に歌學、朝夕世の事業をしらず。亭主は萬事大名氣にて臺所を見ず、内儀はやごとなき御方の殞し子にてならびなき美人、歌道は其家の流に心ふかく、しかも音曲の業妙にして箏の名人、六月に冬の

世間にかくれのない寛濶な驕娘

朝貌の盛は朝詠めこそ一しほ涼しさもと、宵より奥樣の仰せられて、家居はなれし裏の垣根に、腰掛をならべ花氈しかせ、重菓子入に切飯品々の肴このませられて、「杉楊枝に蒔繪の小盆、茶瓶に栂尾の出茶を入れよ、明六つの少し前に行水するぞ。髮は三つ折に帷子は廣袖に、桃色の裏付を取出せ、帶は鼠繻子に丸づくし飛紋の白きふたの物、萬に心をつくるは隣町から人も覗くものなれば、つきぐの腰元共にもつぎのあたらぬ帷子を著せよ。釜の座の妹が方へは常の起時に乘物迎に遣はせよ」と、臺所賄ふ家久しき女房に言附けられ、ゆたかなる蚊帳に入り給へば、四の角の玉の鈴音なして寢入り給ふ迄、番手に團扇の風靜なり。我家の裏なる草花見るさへかくやうだいなり。惣じて世間の女のうはかぶきなる事是に限らず、流行芝居に三軒つづきの棧敷とらせ置きながら、長樂寺の開帳場の歌祭文に立寄り、是に聞入りて芝居は見ずにかへり、十種香、歌骨牌、琴三味線、繪かき花むすび、すべて女の慰む程の事は見はて仕つく

乳母と同じやうにむかし〳〵爺と姥との話などして、とも〴〵に嫁御を賺すぞをかしかりき。
嫁は父母のあひだてなく育てられし、稚き時の調子今に改めず、聟が耳喧しういふを嫌うて、「乳母あの人を彼方へやりや」といじり出すこそ氣の毒なれ。「先御機嫌のなほる迄は御勝手へ御出なされて下さりませ、お腰元衆いと樣の寐そゝくれて御機嫌があしい、起きてござれ」といへば、臥したる腰元共起きあはせ、「いと樣是は夜ざといの」と、塗長持から高蒔繪のおかわ取出し、小便やるなどけうとかりき。「いざ御機嫌なほしに太神樂事していさめませう」と、御手道具の中から箔おきの太鼓出して、獅子頭つかうて騷ぎまはる。臺所には是をしらず、明日部屋見舞のお衆へ、御馳走の料理をこしらへゐたりしが、太鼓の音をきいて、よい衆の祝言の作法は、お部屋へおいりなされても格別、太鼓うつたうの故實と、物知顏する番頭が感ずるも又可笑しかりき。

大振袖を著ながら乳母が乳くはへて、ずい〳〵と吸はるゝこそけうとけれ。聟殿あんまり興さめて、「乳母こりやどうぢや、平常もかうした事か」とあれば、「なるほど御兩親樣お小い時より御祕藏あまり、萬此お子のお心に逆らひ給はず、御幼少の時の御癖が止まずして今に此通りのお身持、お五つの年お乳の人を緣に附けられましたれば、御乳母をしたはせ給ひ、當座にお目を見つめられてから兎角乳をはなしてはならぬ子ぢやと、それから五年三年づつ今に至る迄、乳のあるものがお傍に添乳いたさねば、御機嫌が惡うござります。お前にもあんまり聲高に物仰せられて下さりますな。ひよつと寢附にわやくが出ますと、石臼箸にさそうで御座ります。コレいと樣わやくおつしやれずと靜におよれ。ねんねこ〳〵」と脊中をほと〳〵叩いて居れば、聟は大かたならず肝をつぶし、「こりや女房呼うだではなうて、乳飮子を養子したやうな物ぢや。こんな事なりや思案がある」と少し腹立めいた顏付、「そこを御不肖なされますかはりには、此御縹致に千兩といふ土產がござります。三十にもおなりなされましたら、斯うはござりますまい」といふにぞ、此聟も見分よりは內證にたらぬ所あるか、千兩の土產といふに胸をさすり、





唐への投金するも、これは商の手廻し利を得る事もあるに、娘の子につける物ははじめからうせ物にたつぞかし。定紋染込の覆かけたる長持簞笥、五六町もつゞきて近所目を驚かし、美人にかゝる美々敷こしらへして、千両の敷金付くるはあんまりよい事すぎて、却つて娘に讃がつき、内證に悪い病があるか、偖は轆轤首か、いかさまにも仔細なくてはと、法界悋氣の世の中、いろ〳〵に評判しけるに、病ものでも轆轤首の類でもなく、三十二相打揃うたる美人、微塵疵氣のない様子、内證しつたものの話に、聞く人喉をならしぬ。扨祝言の夜のことぶき、獻の盃事をさまり、お部屋にはお床とりて長枕釣夜著の下に嫁君臥し給へば、つゞいて乳母も御傍はなれず守りゐる所へ、聟は少し男自慢のうまれつき、鬢先掻撫で今宵を千世のはじめと、釣夜著の下に入つて、「姥きづかひせずと去て寐やれ、祝言の夜をいかゞと心元ながるは、百年以前のとつと氣のとほらぬ昔の事、今時ついて居るなどとは初心の至り」と、はや我物にして近寄れば、嫁御はむく〳〵と起きあがりて、「乳母モウ去なう」とあるを、「お道理〳〵、お乳あがつておよりませ」と、稚い子をするごとく膝の上にかきよせ、乳房出せば七十になる娘御、

習ひ、都に雨合羽著る女も見えける。兎角はさかしき世とて、七つ八つになる小娘も人まかせの髪結姿氣にいらず、髱なしのなげ嶋田に、隱しむすびの浮世元結をかけてと、こましやくれたる物好、古代は緣附の首途には、親里の別をかなしみ、泪に袖をしたしけるに、今時の娘おとなしく仲人をもどかしがり、身拵取急ぎ乘物待兼ね、尻輕に乘りうづりて、悅喜鼻のさきにあらはなり。殊更都そだちの娘は、外の國より心はやくしやれて、情の道をわきまへ、誰がをしへねど前後を見て、身をたしなむ事ひとり知れり。かゝる盛の世に、かゝさま赤子は何處から産れますと、十六七になつても親の懷そだちとて戀の道にうとく、男は恐しきものとばかり覺えて、假初に人手をとれば上氣をし、袖褄引くにも遠慮なく聲高にして其男手持わろく、今の世の戀知らずめと是を譏れど、人たる人の少女はかく有りたき物ぞかし。爰に室町の呉服屋の祕藏子、縹致すぐれて見る者魂をうしなひ、諸方からいひ入れある中に、新町の酒屋へ緣定つてちかぐに送らるゝ筈、此人の聟になるもの前生にして、よくくよい戀の種を蒔きおいて、かゝる仕合にはあひけるぞ、しかも美人に千兩の敷金、何處の國にも有るまじ。

りにけりな、いたづらの浮名たつ基ぞかし。惣じて今時の女の風俗、猫の目と同じ事にて、時々にかはるといへり。氣を付けて見るに、今朝出立の姿とかはり、花見歸りの夕暮、手ばしかく木綿足袋をぬぎて袂に入れ、銀の笄を楊枝に挿替へ、玳瑁の櫛も鼻紙袋にをさめ、緋縮緬の内衣を内懷にまくりあげ、上著の襟をかなしみ、首筋をとりのけ衣被は挾箱に入れさせ、加賀笠につきたる白ぬめのくけ紐は、汗づかぬ鼻紙手拭卷きそへて供の下女にもたせ、宵闇うれしく植女の田の草取に行くごとく裙まくりあげ、何れが奥樣やら飯焼やら打交りて風俗亂れ、酒機嫌に黃なる聲音の歌祭文、八坂八軒繩手の茶屋の戸をたゝきて、遊女の見して歸るなど、男に增つて京の女ほど大膽なる事はなし。昔は八瀨小原の黑木賣る女ならでは、脚絆といふものは履かざる事なりしに、近年の女世智がしこくなつて、歷々の奥樣まで小袖の裙を厭はせられ、紅の脚絆蹴かへしに見えて、其女中の下心おもひやられてさもしかりき。後は花色紬の首卷して襟の汚れぬ用心し、油堅の笄髷の髮に、埃のかゝらぬ工夫して合羽の烏帽子拵へて、人の見ぬ野中ゆく時は、鹿嶋の事觸見るやうに著てありかうも知れず。近頃は武家方の女中を見

古は女の伽羅の油をつくるといふは、遊女の外稀なる事なりしを、今は娘の子の臍の跡迄に伽羅の油をぬる事にして、毎朝頭に五兩入の曲物一つづつ、飯米の外の入目と算用せねば、うつかりと女房はもたれぬ浮世ぞかし。色の白きは十難かくすとて、生地にて堪忍のなる顏にも白粉を塗りくり、目のゆかぬ所はそれなりけりにして、顏と首筋と安樂庵の袋見るやうに、片身がはりなるも見ぐるしかりき。されば當世の娘の風俗洒落過ぎて、遊女のごとく派手になれるは、母親の鼻の先智惠にて、大概なる器量なれば娘自慢して、目立つ衣裳をきせて人立多き寺社へ連れゆき、浮氣男の見かへし立止るを悦び、恐らく此方のやうな娘持つたものは世界に有るまいと、鼻高うして行かるゝは惡からず。十三を頭にして五人迄年子にまうけて、母じや人といはるゝ家主の身を持ち、物見物參に遊女のごとく品つくり、派手なる衣裳著飾り、かゝ樣行かうかと聲々に泣きわめいて、跡追ふ子供を内にすて置き、子のない顏して世間の男に見られに行くなど、假令心は貞女にしても、子にかへて伊達を好み、人立多き所を心がけてゆく氣からは、内の事も子の事も親の事も忘れはてゝ、大盡めきたる當世の美男に、自然と心はうつ

男を尻に敷金の威光娘

往古は律氣千萬なるを人の娘氣質と申侍りき。近年は人の娘内儀もおとなしからずして、傾城遊女芝居の女形の形容をうつし、籠持たぬ靈照女の繪を見るやうに、胸高に帶して男のすなる袖口ひろく、居腰蹴出の道中我身を我儘にもせず、人の見るべくを大事にかけ、わき顔にうまれつきし瘤をかくし、足くびの太きを裙長にしてつゝみ、口の大きなるを俄にすぼめ、いひたい物をもいはず、思ひの外なる苦勞をするは今時の女ぞかし。連添ふ男さへ堪忍せば、鼻の穴の内つら迄磨きをかけずとくるしかるまじ。生えたがる首筋のおくれをにくみ、產毛迄をぬきそろへて、立砂もらぬばかりの掃除、見るを見まねに上をまなぶ下とて、つきぐの腰元中居、右の手に酌子の跡ある飯焼迄、松魚かきの小刀にねた刃をあはせ、額を剃りあげ、ぼんのくぼの芋毛を刈りて、茶袋の古きに米糠を入れて、入りたがつて待つてゐる傍輩の手前かまはず、湯風呂に長入して滅多磨きにみがけど、きめ所を知らぬゆゑ結句たゞれた様にてむさくろし。

女の女嫌ひは榮耀に餅の皮むいきな髮切大臣
やぼでない西瓜のあばれ喰是はやめに簫の笛
不機嫌になる一座の客身の上を遊女の懺悔噺

百の錢よみ兼ねたる歌好の娘

世につれて色の替る紫式部明日の貯に
興の覺めた女の物にかゝり遊女の文を
かき立汁の三十一字うたていお年寄の分別顔

世間娘容氣 一之卷

子息氣質追加

目録

男を尻に敷金の威光娘
女房あたりは雨合羽著て見せる花見小袖
裾を始末のあづまからげ肌は八瀬の黒木賣
嫁への馳走聟が手づからうつたり太鼓
大神樂の獅子頭まうてゐる〱
世間にかくれのない寬濶な驕娘

序

息女化して新婦となり、娌變じて姑となり、姑妖けて嫗となり、持佛堂とひとつに置所のない身となつてはてぬ。是等の嫗は幼き時より、父母の寵愛にあづかり、深閨の中に我ままに育ち、女の道をわきまへずして、一生孫子のもてあつかひものになれり。是皆三つ子の智恵八十迄徹るといへる世話の如く、幼少より教を聞かず、心の儘に育ちしゆゑなり。すべて女の道といふは、必ずしも才智人に勝れたるをいふにあらず、貞節の心を專にして、婬亂なる心を退け、世帶がたに心を籠めて、夫によくつかふるをいへり。されば禮記には婚禮の事をのせ、詩經には女房の徳をほめて關雎の篇をはじむ。今教へずしてよく知れるは好色の道ぞかし。たゞ色にかへよと教たき女の容氣をあつめて、直に題號して世の慰艸となす而已。

其磧

阪より殘銀見事なる仕切狀を下しければ、僅か五六年の間に五千兩の小判の身となり、夫より一株立てて唐人出島の嫌なく、運に任せて強氣を出し、諸方の商人に齒切させければ、段々手廻しよく儲け溜めたる金銀を、大船五艘に積みかさね都に上り、二條通に棚出して、鮫藥種の商賣手廣く新長者と仰がれて、大阪より親父を迎へ朝夕孝行を竭し、人の爲となり、慈悲善根をして直なる世を渡り、發明なる子供を持ちて、世に不足なく京に安住して、尙悅びを重ねける。

町へ行き、占明院なりと同道して行かずばなるまい。戻られたら島屋町の木八ぢやが、好い銀取つて遣らうと思ひ、辛勞した甲斐もなく、お留守で殘念なというてたもれ」と、表より戸をさして歸りぬ。親子の者は長持の中から是を聞いて飛出で、「どちらへ行きやつた、今歸られましたと跡から追掛けて行け」と下女を走らせければ、闇の夜なれば行方も見えず。「偖も占倒れに倒れた、木屋の八右衞門とて日頃懇にして呉れらるゝ人にて、皆人家名と其名の頭字計り呼んで、木八々々といへるが、八木と上下へ考へ損うたは、米唐櫃がひつくり反つて、好い銀を取外さう卦體の惡い占樣」と、親子目と目を見合せ、舌打して殘念がれど是非もなし。其後丹三郎我と我所作を見限り、易道にも外れたる鳩飼の商賣して、一生よい加減な嘘を吐きて世を渡らんは、人たる者の本意にはあらずと、書置殘して少しの知邊を便にて、長崎へ下り、始の程は十禪寺の日雇中間へ入りて、唐人の小使に雇はれ、丸山の文の通路、或は上方の商人共の御用承りて味に仕こなし、三四年の中に働出して、五十兩といふ金を溜めて、是より此津の形氣となつて、てんぽ儘よの買置事、木香宿砂の思ひ入を合せ、置荷に商のまん好く、大

夜食の米を借りに來ると察する」といへば、親父冠を振つて、「其では心元ない、今日を過ぎかぬる素浪人とは、近所の衆は内證をよく知りぬいて居らるれば、此貧家へ米など借りに來る事あらず。我熟考ふるに、跡の晦日に米屋の銀を過半殘し、二三日中には必ず遣るべしと一寸遁れをいひ置き、今日廿日に及べども錢の溜なき故に一錢も遣らざれば、晝は親子占をふり賣に歩行けば、夜宿に居る所へ仕掛け、嚴しく米の殘銀催促せんため來れるに極まれり。占知つたは此樣な時の調法、親子共に遠方へ參られたと留守を遣うて歸せ」と、一人使ふ下女を呼んで言含め、眞所もなき狹き家なれば隱るゝ隈もなくて、親子明長櫃の中に隱れ、心中に道切の祈念して、汗を流して居たりける。下女は戶を明け、「米屋殿か、極の日かなんぞの樣に、夜に入つて何事ぞ。親子共に遠方へ御座つてお留守ぢや」と素氣なくいへば、「是は仕たり贔屓に思うて、島屋町から爰迄走つて來れり。さる有德人の奧樣より、娘御の御緣邊の事に付き、相性其外勘考へて貰ひたいと我等をお賴み故、唐にもない上手の樣にいうて、一廉禮銀を取つて遣らうと思ひ、態々と呼に來た。留守なればせう事がない、是から谷

士の顏付もせず、木綿著物上に縮緬の單羽織を掛け、三十年の夏を勤めし古編笠、折目を裏より紙子にて綴り冠れば、日影者と云はれて、我身の善惡は知らぬ人の身を占うて、夫を渡世の種にして每日町へ出でけるが、一子丹三郎にもさすべき業なくて、占文の一道を傳へ、親子して大阪の町中を、占さんというて廻りぬ。易道を知つたにもあらず、昔日伏見に鎗屋孫左衞門といふ者、醍醐の聖寶尊師より夢中に授りし、花月の占とて調子を聞いて、吉凶を知る事神の如く、近國に名を取りし其術を傳へて、大方に占合すれば、少の錢になりて其日を送りぬ。或夜表の戶をこと〳〵と敲く者あり、無塵聞いて丹三郎を呼び、「今戶を敲くは何事に來れるぞ考へて見よ」といへば、丹三郎首を傾け、「時は初夜にて五つ、戶を敲く音はこと〳〵ことゝ數三つなり。時の五つと敲く數三つと合せて八つなり。敲く戶は木なり、八木と占へり」と申せば、無塵點頭き、「如何にも汝が考の如く米なり、彼短金長木の卦體を斧と鋤との變あるが如く、占の外に氣轉といふ物第一なれば、米は米なるが何故に夜に入つての八木ぞ、其を考へずしては占とはいひ難し。其氣轉を聞かん」といふ時、丹三又工夫して、「此長屋が向ひの懇なる方に、

福人に成る世忰の身の上知らぬ占形氣

富貴にして苦あり、貧賤にしても樂あり、今時の人間應ぜぬ分限を願ひ、急に好い身にならんとて思はぬ損をする者多し、長者になれるは智惠才覺にて行くものにあらず、備つたる有德人の大銀儲けるを羨み、生れも附かぬ運に任せて、千里一はねの買置物に損をして、不仕合重ればおほやけなる天を恨み、罪なき人をも咎めて心を碎き、魂を惱す事極めて愚なる見解なり。其身善果なくして如何程願ひ禱りても、貧者が俄に福者には成らぬものなり。貧福は天地の道具にて、駕籠に乘る福者有つて、是を舁く貧者なくては世界は立難し。硯になる石あれば火打になる石もあり、孰れも石の役を勤むるぞかし。人も其如く銘々の役を勤め死するが人なり。何處に住みても儘ならぬは、身代の善惡難波の大湊繁昌の場は、宿賃高くて小谷といふ所に裏屋借りて、久しき浪人孕石浦右衞門とてぎつぱなる男なりしが、近年孔子頭に變へて名も無塵と改めける。不幸にして寄る年の口惜しく奉公の望も絕えて、六十歲にて入道し、其後は丸腰になつて、武

より千貫目になるも手間入らず、高歩を望まねば損もなし。必ず大銀をわしるとて大仰なる事取組み、其筈違ふ時は忽地に亡ぶる事なり。不定世界に住む人の證文、曖に慥なる事が有らうわいの。然るに常住の思ひを爲して、米先納の手形握つて嬉しがるも可笑し。梢に常の色なく月に缺くる光あり、咸陽宮も一炬に野原と成る。況てや火桶程なる町人の身上は、飛鳥川の瀬に踞うて居ると思ふべし。萬貫目持の葬禮も薪一掛帷子一枚の外は終時不隨者ぞかし。玄右衛門に大分の家財取らせたり共、老後には野外に行倒れて果てなんも、死の縁無量なれば測り難し」と、埒の明いたる說法に番頭も泪を溢して、御尤といふより外なくて罷立つを、「これ〳〵」と呼戻し、「揚屋の酒は必ず惡うて毒となる、此方より古酒の輕きを遣はし置きて、過ぎぬ程飲めといはれよ」との言葉又貴し。玄右衛門も世間の親仁とは違うたる了簡に、誰憚る事なく通ひしが、此の里は人目を忍び首尾を求むるにてこそ面白きに、餘り打晴れたる遊に拍子拔して、結句可笑しからず。最早色里厭になりて、何卒氣の詰る樣に、寺參がしたい事ぢやと歎かれける。

この銀を一年一割に廻して利足貳百貫目餘あり。この利にて世帯の入用五百貫目引いて百五拾貫目延びるなり。此内にて玄右衛門が遊代を引いて見るべし、序に其積して聞かすべし。あれが逢ふ女郎は太夫か、然らば此太夫が客玄右衛門一人計りでも有るまい程に、一月に十五玄右衛門に買はすべし。其跡は手柄次第に外へ賣るやうにさすべし。此入用六拾三匁宛、十五は九百四拾五匁よな。是を十二合して一年に拾壹貫三百四拾匁也。偖五節句に金貳十兩宛太夫に遣るべし、凡八拾匁金にして一年に八貫目なり。此外折節宿への附屆け、太鼓に遣る花代、供の者の料理代、駕籠賃など、百兩計りにて好し。偖連には手代共の内一人宛隨いて行くべし、是には梅君を月に十づつ買はすべし。此代一年に三貫六百目、惣高〆て凡三拾壹貫目也。是を延銀の内にて引落せば、殘銀百拾九貫目は毎年延びるなり。利に利をかけて見よ、鼠の子算用方圖もない銀高、死んだる時は此銀を持つても行かず、銀は生前を樂む道具なるに、愚痴の衆生は是を集めて却つて苦を求む。其心は貧僧より遙に淺猿しき有財餓鬼といふ者なり。人間の身上は現銀五百貫目迄を願ふべし、五百貫目になる時工面よくすれば、一生樂に過ぎるなり。夫

ありて早く脇詰め、十五の暮に角入れければ、年より大形なるに好く似合ひて、親の若名を譲り玄右衛門とて、たまかなる性善遠く遊ばぬ白鼠にて、近所なる謠の師春藤作兵衛と、儒者の晦元方より外の交りもせざりしに、春日屋の何某謠講より唆かし、江口の生身拜ませたい事かなと、夕間ぐれ扇風方を陣所と定め娵の勢揃へ、小太夫に目利相濟みて、閨の契いと深く、今宵より夢や變るらんと可笑しかりき。此事家老の久兵衛聞くより氣の毒がり、下にては中々濟まぬ大事の前の小事ぞと、眉に八字の皺を寄せて、隱居道伯に斯くと申し上ぐれば、道伯點頭いて、「如何にも其方達の此家を大切に思うての注進、臣たる者の道至極せり。さりながら我等了簡とは各別なり。能く聞かれよ、惣じて若い者の惡所に遊ぶ事珍しからず、是を折檻する事一向なる故、結句逆さまになりて、外にて銀を才覺して、高歩を出し人目を忍ぶ心から、生れ附かぬ僞いひ習ひて明德を暗まし、行く所宿も語らぬ故不時の用の間に合はず、友を隱すゆゑ不善の連を誘ふも知らず、是皆子を育つる便知らずの文盲親世間に多きゆゑ、却つて子の心を僻め、重代の家を亡させ、身を沈むる事、此比類數へ難し。此方の身代は其方も知る如く、有銀二千貫目餘の店卸、

何病で此所へ御養生にはお越しなされましたぞ」と問へば、末社の新八元來口輕な男なれば、「我々は此踊が病ぢやが、何と湯が中つて、ねいもには成るまいか」といへば、亭主もすれ者にて、「ねいもに成つたら、有馬より湯の尾峠の孫じやくしをお頼みなされ」と笑うて立ちけり。

遊興に草臥れて養生に引込む隱者形氣

世界の若い者一度は直通の成らぬ街といふは、色里の事ぞかし、脇からの添智惠にては中々悟らるゝ道にあらず、自身工夫の心の駒の手綱、一世浮沈安否の戰場油斷する事なかれ、此意域に至る事稀なるゆゑ、只一向に無用々々と諫むる人の親の心汲みで知るべし、中庸を知りて遊ぶ事、節あらば勿論なりと常に申さるゝ隱居夫婦、共に法體して本屋の地尻に座敷をしつらひ是にかたづき、本屋は幼少なる悴子一人を、性善き手代共に後見させて世を樂に暮さるれば、若代は幼少にて公儀張らねば、めき〳〵と銀殖えて、現銀二千貫目と外よりの積り違なし。此子天性美男にて、然も器用はだへに女の最愛がる風俗は、身に附いた寶なり。振袖は衆道の恐

ば、座摩の前の椀箱といふ末社が上分別を出し、「日本に構手のない心の儘の踊り所を存じ付きました。來月事始の日から爰許を立つて、有馬へ湯治なされませ。盆も師走も構ひなく、年中慰半分の病人絶えぬ所、何樣な事して遊んでも時を嫌はぬ榮耀所、先氣が變つて面白うて、隨いて參る我々迄大晦日を遁るゝといひ、氣散じな遊所、何と旦那上分別で御座りませうが、此智惠代霜先なれば壹兩にして貧けて上げます」と欠伸するにも欲を申せば、大臣一段御機嫌にて、「是究竟の踊所、いざ今から行くまいか」と俄に旅用意させて、隙なる役者太鼓持、此極高で仕舞はれぬと金の足らぬ茶屋の亭主、彼是以上十八人肩を揃へて通し駕籠、旦那の御影で借錢乞の顔見ずに、大晦日を越ゆる事、辱け有馬の湯に入りに、病なし共打揃うて行くより早く萬事を棄てて、二階座敷で踊出せば、相客の病人共、枕に響きて折角愈つた頭痛が起ると腹を立つれば、奥には耳が又鳴出ると苦しがれば、宿の亭主氣の毒がり二階へ上り、「皆樣には血氣よう踊せらるゝが、此所は弓手も妻手も御病人で騷しいとて、最前から何方も難儀なされて御座ります。有馬始つてこの方お前方の樣な、御氣象な御病人は御座りませぬ。皆樣は先

さりませと、惣茶屋中からお前へ願で御座りますといふに依つて、二十五日から正月三日迄踊を止めずはなるまいかと、今から其が胸先へ支へて苦に成つてならぬ。何卒此師走の末に至つて世間に構はぬ踊場は有るまいか。夫を思案して呉れ」と大事さうに云はるれば、高なしの末社共案に相違の旦那の御意、横手を打つて、「是は御苦勞に思召しますが御尤千萬、假初ながら大事の思案ぢや、何れも近う寄つて愚案を廻らし、大臣の宸襟を休め奉れ」と額を合せ、笠附を案ずる樣に無い智惠を出す時、南の役者が申すは、「我等は惡い癖で、金氣を見ねば好い思案が出ぬ」といふ。「汝もさうか、此方も小判のかざをかゞねば、出る智惠が引込む程にの、いかにも〳〵分別も金の拍子で出た物ぢや」と、口々に申せば、大臣聞きかね、家來に持せし財布を取寄せ、小判の花を降らせば、笠屋町に徘徊する小働の女迄、思はぬ金を頂戴きぬ。時に太鼓の新七が申すは、「二十五日から三日迄川口の大船を借りて、思召す儘の踊場に」といへば、役者の城右衞門冠振つて、「旦那は船がお嫌ぢや。天王寺の廻廊が好からう」といふを、「彼處は夜踊らせぬ」と打込む。「然らば何處にか」と、又吸物させて一杯宛して遣り、手を組んで案ずれ

ら、遊び出しては歸ぬる事を知らぬ大臣、廣き難波に見事な名を取り、吉野屋の庄五右と誰知らぬ者はなし、異見するとは脈のある子息の事、腹中に相手なければ、怪我せずに銀遣はるゝを好いにして、二親のない氣散じは、誰引緊めて敎訓する人もなくて、心の儘に遊ばしぬ。或時踊大臣役者末社を召寄せられ、額に皺寄せ、「氣の毒な事がある、皆の者共智惠袋の口を開けて、一分別して呉れ」と一仔細ある樣に、小聲にて申さるゝ。何れも目と目を見合せ、心の中に算用して、極月が近附けば銀の才覺ならぬ程に、茶屋共に諸拂を待せて呉れとの事なるべしと、いひ合さねど面々が心に高括りして、「お前の事なら例へ一際か二際遣はされませぬとて、待つまいと申す者は一人も御座りませぬ。其處らはお氣を入れられず、さあ何れも用意が好いか」と、はや手拍子を打ちかけて分別なしに踊り出せば、大盡暫くと扇を開いて鎭められ、「茶屋共へは來年中遊ぶ程は先金遣つて置きぬれば、そんな事に屈托は微塵もない。汝等が智惠が借りたいといふは、此中左吉がいへるは、師走の二十五日からは、面々請拂を仕りますれば、お客の事でも算用合の邪魔になれば、素遊は各別、踊は正月三ケ日迄は、御無用になされて下

嫓に焼れて火にくばる大名形氣

銀持爰に有明のと、夜明から好い機嫌の聲して、南江の至茶屋にて小判を逆手に持つて、大勢の役者末社を呼集め、太鼓に三味線引掛けて、飲んだり、舞うたり、踊つたり、手拍子揃へて朝から晩迄變つたる遊もなく、戯れ遊べど、現の樣に踊るより外なく、可惜金銀を雨の降る如く、笠屋町にて大擾ぎ、一家の女郎を引連れて向の茶屋へ伴ひ行き、半時計り踊つては、又其家の色共を殘らず揚げて隣へ移り、其所の山衆爰の女郎、一町二十八軒の色茶屋を踊り廻り、其家家のおやま共を幾人有らうと一日揚げ、引連れて行く程に、二軒目では十人になり、三軒目では十五人になり、打留の茶屋にしては遊女計りが九十餘人、夫に役者太鼓持家々の亭主共打混りて踊る程に、狹き座敷にては此大臣申しうけ難く、半分は隣の座敷に殘し置き、二軒して踊る時もあり。誰に思はくといふ事もなくて、其身は不拍なる踊を見て、是より外に面白い物はないと、年中茶屋町を宿と定め、我内には狐が住んで嫁入事をするやら、梟が來て洗濯するや

年代記にも見當らぬ親父の了簡

福人になる世悴が身の上知らぬ占形氣

買置から目つ切と身代に驗の見ゆる木薬屋

心の直なる竹の子の親勝り

孝行の徳をあらはす繁昌の表藏

世間子息氣質 五之卷

目錄

娌にやかれて火にくばる大名形氣

年中遊に遣うても減らぬ内證は吉野屋

雛の口のぬけた男百に成つても踊好

樂は有馬の湯入目を構はぬ病なし

遊興に草臥れて養生に引込む隱者形氣

何萬兩の身代か外からは測られぬ米問屋

茶の湯の稽古から買初めた圍女郎

に有りながら、後家姿と成つて直に親里へ送られける。皆是れ慾心より起りて慚愧の甚しく、熟観ずれば既に財寶も黄泉の旅の糧にならず、今より死したる心になりて、有銀三百貫目祠堂銀に入れて、常念佛を執建て、老母諸共に後の世の願、本來の都に歸る山の邊に庵をむすびて、行ひ澄しける。

指捻くり廻す。勘介、「成程己が持つて見せん」と問答果てざるに、同行も扱ひ草臥れ、「兎角我我は日頃の好に、先沐浴をして仕舞ふべし」と舁出し、頭に湯を一抄掛けると、唸といふ聲と共に息出で、「やれ蘇生りたるは」と水を口に洒ぐと、勘九郎目を開き、猪も氣が附きたやら、永永とした夢を見たりと前後見廻せば、大勢立騒ぐ。「是は何事ぞ」と段々聞いて肝を潰し、先、「勘七めは何處に居る」といふ聲に驚き、はや僞の顯るゝかと勘太郎を倒に懐きて迯出でける。猪腰を探りて見れば金藏の鑰なし、「これは誰が取りたる」といへば、勘介、「私が取つて置きたる」と懐中より出すに、「汝誠の志あらば、母には何として渡さゞるぞ。其心底より此患を顧みず、跡敷の慾論せし惡人め、向後勘當」と叩き出せば、誤る道理に責められて、一言の返答もなく立出づる。次に、「掛硯は誰が直せし」といふに、老母を始め知りたる者なし。「好し〳〵鐵火を握らせて穿鑿すべし」といふ時、女房赤面して聲を振はし、「其は私が長持に」と、しほ〳〵と取出す誑惑なる心底いはずして現れ、勿論剃髪の志より、卽座に元結拂ひたる樣の潔さには似合はざる仕形、さりとては水臭き心根、行末思ひ遣られぬ。是迄の緣なるべしと、夫は此世





七眼を見出し、「其方は知るまじ、過ぐる七日の夜竊に勘九郎殿來り給ひ、今迄の勘當は御公儀へ訴へたるにもあらず、されども一端町の宿老へ斷りたれば、十年の中は表向往來なき分に待遇せ。若明日が日死んでも子は無し、勘太郎は甥子なれば、己が跡を遣るべしと、頭撫でられかたぐの約束、左樣なきとて兄親に理屈立て、はや敦賀に賣られ筒落米拾ひし事を忘れたか」と、伸上りて氣色するを、女房此有樣を見て奥に走り込み、衣類手道具何や角や心に掛る欲しい物、どさくさ紛れに取集め、嫁入時の長持に押込み、錠ぴんと卸して何の氣もない貌して、姑の見る前にて髪くるくと束ねて切掛くるを、老母押止め、「其方の心底尤なれども、未だ若き身なれば我分別あり、待給へ」といふを振離し、「最早私の髪の入御分別はふつく厭で御座ります」と、無理に挾み切つて抛げ出す。勘七勘介は互に大聲上げて、顏をはりあふ計に立騷ぐを、同行中取抑へ、「先靜まり給へ、此穿鑿は跡にてもなる事、死人には手も掛けず、野邊の衆も宵から詰掛けて聞かるゝ、外聞も善しからず」と、老母諸共宥めけれ共、勘七聞入れず、「何の六か敷事はなし、今宵の位牌を誰なり共、指でも差したるものは相手に致す」と、脇

寒汗瀧の如く、南無三寶といふ聲に驚き、母勘介も下々も、是は〳〵と計りに醫者呼に遣りて、口を開かすれ共開かず、鍼立て血を取りても出でず、一握灸するゑても音なく、終に息絶えて脆きは人の命、是は如何な事というた計り、各呆れ果て、老母の歎一方ならず。女房も四年の馴染なれ共子の一人もなく、先近所の同行四五人駈集り、「是非なき浮世の中、一度は此樣なるに定り事、歎きて還らぬに念佛の一聲が、最早此上の爲なり」と、老母内儀を慰め、先片脇に押寄せ、屛風引廻し、燈火を上げ、寺へ人遣り、脇指に紙を卷き、中通の女は經帷子縫ふなど、尻も結ばぬ糸哀に靜まり反りし所に、勘七周章敷、子の勘太郎七才になれるに、綟子の肩衣に裏付袴の大きなるを胸高に著せ、自身横に抱きて微塵も氣の毒なる顏はなく、座敷の眞中に勘太郎を下し置き、「今宵の位牌を持つてからは、此家屋敷を皆我が取る程に、嬉しう思へ」としかつべらしき貌して、當りを屹と見廻しける所に、其弟勘介涕押拭ひて進み出で、「偖も太い人、此方は何時勘當容されて來り給ふぞ。兄者人死なれたとても筋目なき事はなるまじ。我斯くて有るからは此跡敷を誰か取らん。是非欲しくば死人と中直してからの事」といへば、勘

らざる者なし。され共其身一代に挊ぎ出し俄分限となり、通町に大屋敷求め饒なる暮し、故郷の母を迎へ取り孝行を盡し、我弟勘七勘介も幼少より親の手を離れ、近在に淺猿しき奉公勤めて居たりしを呼寄せ、子供無ければ性根次第に孰れなりとも子と定め、此跡敷を讓るべしと、先兩人共に手代分にして家を治め、日に增して榮え行末の賴母しかりしに、さし次の弟勘七兒に變りて萬しどなく、商賣そこ〳〵と爲して然も色好なるより、商事に托つけ三野の色町に通ひ初め、二度の節季の帳前度每に三五の十八ばらりと違ひて、次第增の不足積れば、大きに虛く所ありて、勘九郎も度々異見するに聞入れず、はや侍所初川といへるを請出すに極まりしと、脇より是を告知せたるに溜りかねて、內證勘當して追出しければ、外に佇立む方もなく、哀に彷徨ひ步行きしを、母の不憫增り勘九郎が目を忍びて、死なぬ程のみつぎして、同じ所の傍に裏棚借らせて置きぬ。愡くて年月重り、或時勘九郎徒然なる雨の日淋しく、日頃將碁好にて六か數詰物の圖を案じける程に、朝の四つより七つ半迄眺め入り、「偖も今合點がいた是で詰む物を」と、吐息吐きながら喚きける音したるに、何事と女房馳附けて見れば、はや目を見詰めて

けて歸れば、松屋町の夜市の振手する辯舌者が是を聞いて、これや一儲して來うと、古き紫竹の杖を持行き、「神功皇后の花氈は人王時代にてねぬけとは申されませぬ。今此杖は天神七代の時代物、國常立尊龍宮へ御用ひあつて、御來臨の時つかせられし神代の御杖」と、是も騙り附けて好い直にして賣つて歸れば、源九郎は狐に化された樣に成つて、持耐へし家も賣り、今といふ今差詰り死なれぬ命是非もなく、三韓退治の花氈を背中に負ひ、右の手に神代の杖をつき、左の手には銀閣寺の五器茶碗を持ちて、袖乞に出でけるが、此身に成つても古きを好む心止まず、お助に古錢が有らば一文下さりませ。

欲故に禍は身に引掛る虎落形氣

人は正直を本として身を働き、商に精を出せば、禱らね共神の惠に與り、仕合は吹附ける神風や、伊勢の鳥羽といふ所よりお江戸へ挊に來りて、始は本鄕六町目の裏棚に、獨住して萬屋勘九郎と人に見知られ、晝は木綿切を賣り歩行き、夜は草鞋を造り、馬の沓して賣るなど、誰知

具共を戴き、何に依らず正眞とさへいへば、求めて悦びける程に、世になき珍物集れり。三條小鍛冶が打つたる鐵鍔、狩野の古法眼が書かれし六字の名號、利休の削られし鼻楢、後藤祐乘の彫られたる印判、皆紛れない正銘正筆正眞にしてから、何の役に立たざる道具共は藏に滿ちて、有銀は皆消えて行く淡路町の家一軒、命に代へて持耐へしが、生得古き道具を好む癖失せずして、時代物とさへいへば是程にかづいた上でも、まだ求むる心止まず。是を見透して欲に情知らぬ谷町の古道具屋お見舞ひ申して、古き五器茶碗を出し、「是は東山殿銀閣寺にて百服茶をたてさせられた時、高麗より態と取寄せ給ひし五器茶碗の根本、持主手詰り判金五枚に賣つて呉れとのお賴み、私が金があれば人手に渡さず買切つて、中の島の肥前屋へ隙を入れて賣りますれば、三百貫には慥に致すが、金が急で私の力に及ばぬがお前のお仕合、お飽きなされましたら何時なり共、五十兩には賣つて上げませう」と、金五枚にして括り附けて歸りぬ。其跡へ伏見町の唐物屋が古き花氈の小きを持來り、「是は昔神功皇后三韓を退治の御時、船に敷かせられし花氈、恐くは是程古き物は御所持の御道具中には御座りますまい」と、大分に賣附

利を得て、どか儲せし事度々なりしが、今の蜘の譬を聞いて、以前の事を思ひ出せば、天杜元がぞんぞとする。今よりは末子源八が金言を用ひて、殘る兄弟共も構へて買置する事なかれ」と、有銀貳千貫目を、千貫目庶子の源八に、材木商賣付けて本宅を讓り、殘る千貫目を惣領と次男におし割つて、五百貫目宛に、外の屋敷を一ケ所添へて與へられ、其身は法體して世を樂にして往生せられぬ。末子源八は親の跡を踏まへ、一つも變つたる事に掛らず。親の仕にせ置れし材木商賣計して、段々に銀を儲け、所の好き大屋敷共購めて宿賃を取り、大和の中に慥なる田地を買置き、此作徳にて年中の飯米を仕舞ひ、世を樂しく暮しける。惣領源十郎は好物の買置に掛つて損をし、又は新田鋳山芝居事に加はつて、年々の損積り、大分の引負ひ出來、二歩半にて見事に身代分散して、所にも居られず上町の裏屋へ引込み、無用の智恵有顏して、六か敷山公事の談合相手に成つたり、借銀の詫人に雇はれたり、或は夫婦爭の事迄も扱ひに掛り、詞並ぶるを人の賢きは是と思ひ、一筆書くを幸に目安訴狀に氣を盡し、虎落といふ惡名を取つて世を浮雲く暮しぬ。さて次の源九郎は朝暮掘出せんと欲に眼が見えず、取賣共が突付に道

夫より少し片側の榎の木の梢より、藪の茂りし竹の末へ、又大きなる蜘一疋、糸筋をはへて是を渡らんとしては、風に切られて中程より落ち、又傳うては嵐に逢うて吹切られ、五六度も掛けては落ち〳〵、後には溝川へ落入つて流れて失せぬ。これを思ふに、蚊の少き低き垣根に巣を掛けし蜘は、嵐の恐なくて其身も全く巣も破られず、折節毎に懸る蚊を樂みて食とする。又蚊の多き高き梢を望んで巣を掛ける蜘は、度々嵐に落され、其身も遂に溝川に流れて死し、家と頼む巣も風に破られ跡もなし。是蚊の多きを目掛けて大欲を起して、高き所に巣を張る蜘は風の爲に身を失ひ、欲に關らず蚊の少き低き垣根に巣を掛ける蜘は、無事にして樂み深し。人間も右の如し。一時に大分儲けんと大欲に關れば、必ず身を打つ程の損をするもの、只大きに德を取らうと思はず、地道にして損せぬ調義をすれば、何時迄も家は久しかるべし。上手の碁は勝つ事を思はず、只負けまい〳〵と打つといへり。是則ち勝つなり。損をせまいと思ふが是儲なり」といへば、親父手を打ち、「我今六十に成つて、汝が詞を聞いて、始めて我一生の運の好き事は知りぬ。若き時より欲深くして、千里一はねなる買置事に關つて、程拍子よく一度に

西南の野邊を眺め、三人一所に座敷へ下り、「見出して參りました」と詞を揃へて申せば、親父嬉しく、先、「惣領源十郎が見出したる儲けの種は如何」と問へば、「向ふに生えたる唐秬の根を見るに、南の方へ高く生え上れり。是古へから米買の考へて申し傳へる風年に極まれば、北濱の米問屋と相談して、八木を思ふ程買置くより外なし」と手に取る樣に申せば、「次男源九郎が見立は如何」と問はれて、「此頃は天氣打續き田畠日燒すると見えて、百姓共畠中に井戸を掘り、水澤山に汲上げて掛けるゆゑ、夏畠濕ひ見る中に生々せり。然れば掘出して水を得る所に眼を附けて見る時は、掘出をして銀を儲け、身上を濕す思案第一と存ずるなり。尤も今の人間倥はなきといへ共、世間を知らぬ奥山家、世智になき在鄕へ金銀を持せ遣はし、古き道具金物類、破れし屛風の煤びたる押繪、短尺色紙などを買はさば、其内には名物の茶器、狩野家の繪、歌人の筆、祖師の墨蹟有るまじきものにてなし。我等が工夫は今の世でも、掘出々々」といへば、「三男源八が見込は如何」と尋ぬれば、「私は兄々達の樣に當分何をと見極めたる事もなし。併し南の方の大角豆の垣に蜘の巣を掛け、飛ぶ蚊の折々懸るを己が食物として樂む體なるに、

扶桑第一の大湊、人の心も大氣にして、それ程の世を渡る難波橋より、西見渡しの百景、數千軒の問丸甍を並べ、繁盛の表藏旭に映りて、夏ながら雪の曙かと思はれ、豐なる御代の例松に音なく、千年鳥は雲に遊び、限りもなく打鬪き、蜆採る濱迄も小借家建續き、夫々の家職して朝夕の煙立てける。爰に長堀の流の末に木曾山の材木を請けて、掴取の有る時節思ふ儘に儲け込み、大坂瓦の軒高く三十餘人の手代を抱へ、近國の木山を請け、心の海廣く、仕合に乘つて來る帆柱の買置に、願の儘なる利徳を得、身代根強き楠分限商の軍法者、世帶の掛引拔目のない親父なれば、不斷ためつけて三人持ちし子供が智恵を當つて見、孰れなり共商人に備はりし器量の忰子を見極め、庶子なり共惣領に立て、此家を繼がせんと、行末迄も身代の傾かぬ工夫をし、長町の下屋敷へ三人の子供を呼び寄せ、「惣じて商人は日夜に心を配り、萬事に氣を附け、儲ける事を考へ出すが肝要なり。我此座敷の亭へ上り、西南の野を見亘す中に、儲けらるべき種を見出せり。汝等三人亭に行きて見出し來らば、末子なり共我家の跡取と定め、金銀家財を殘らず讓るべし」といひ渡せば、未だ廿より下の三兄弟、親の御意を請けて亭に上り、

如何程か滿足に存ぜう」と、武士の慇懃なる待遇、常心難儀し、「私は文盲な者で、左樣な呪とやら祈禱とやら申す儀は、夢々存じませぬ」とあれば、「成程祕して廣うなされぬと申す事は、辨七殿御噂で御座つた。外へ沙汰は致すまじ、平にお出を賴み申す」と、達つていはるゝ程迷惑して、又辨七を呼附け、「身共が何日呪をして、お歷々樣へ阿房口を叩くぞ」と腹を立てらるれば、辨七きよろりとして、是は長五左衞門樣ようこそお出でなされました。其疱瘡の呪は親父と同名で、常心と申して小石川に引籠つて居らるゝ隱者で御座りますが、陰陽師身の上知らずと、疝氣の妙藥ぢやとて鰏の腸食うて、後の月ころり小石川の砂になつて果てられました。親父と同じ名ぢやに由つて御聞まがへは御尤」と、いうた顏もせずして年中噓を樂にして、偖も變つた慰、後には普く人が知つて、千三つの上ぢやとて、萬三つの辨七とて、名題者になつて無事に暮せり。

末子が智惠は上々箱入の銀持形氣

心愈立腹して辨七を呼附け、「身共が堅いを知りながら奉加を頼みに御座れとは、何樣狼狽へて申した」と、齒のない齦を喰ひしばつて、夥しく叱らるれば、「されば夜前七兵衞旦那寺から奉加の足らずめを、四五十兩貸せとせがまれ、何共返答に迷惑する間、私に間に合をいうてあの坊主を歸して呉れよと、達つて賴まれました故、當分座なりを申したを眞實に請けて參られたと見えました。是御出家、此方は代々堅い法華宗で御座る。假令我等が奉加につかうと申したとて、念佛無間といふ方から奉加を請けさせられては、御寺の御本望では御座るまい」と、夜前とは各別の口上、兎角聞えぬは伊勢町の七兵衞ぢやと、智元は面目失うて我本坊へ歸られぬ。其跡へ下谷筋の屋敷方から歷々の侍尋ね來て、常心に會ひ、「此方には奇妙な疱瘡の呪を覺えて御座る由、御子息のお話で承つた。然れば拙者主人の子息、一昨晚より夥しい大熱で御座る。小兒醫者衆に見せますれば、大方疱瘡でもあらうかとの見立ゆゑ、幸と存じ此方の噂を致したれば、輕う仕舞はれます樣に私に參つて、何卒お賴み申して御同道致し來れと、主人申し附けて參上仕つた。御老人の御苦勞に御座らうづれ共、御出なされて呪うて下されなば、

かつた」と不審がれば、「此方の親父は何を寄進せられても、人の目に掛る所にすれば、正眞の名聞ぢやとて、隨分參詣の氣の附かぬ後堂に、大燈籠が六つ迄并べて有るが、氣が附くまい」と眞顔に成つていへば、亭主聞いて、「見えぬ所になさるゝが眞の志と申す物ぢや。先智元坊あなたをお引合申さう。あれは白銀町の辨七殿と申して隱れない身代よし、あんな旦那が此方の寺に一人あれば奉加せずに濟む事、幸親御にお世話させませうと仰せらるゝお言葉を力に、明くる早々御座つて、御親父樣をお賴みなされたが好いは。今夜持佛堂の御燈明に、何時ない灯花が立つたは、此方の寺にこんな好い寄旦那が有らうとの、如來のお知らせであつた物ぢや」と、亭主も我寺の事とて獨悅びしは、殊勝なる事ぞかし。明くれば智元坊大杉原壹束に三本入の扇子箱取添へ、案内乞うて常心に對面し、上葺の奉加の事永々と口上捻つて賴み入れば、常心腹立て、「抑やそも日蓮宗が、他宗の奉加について法義が何樣立つ物ぞ。忌々し、此進物共早く取つて歸らしやれ」と、以ての外の挨拶、智元驚き、「夜前御子息辨七殿に伊勢町の七兵衛殿にてお目に掛り、親常心に賴めとの御指圖を請けて參つた」と、顏を赧めて申さるれば、常

人の耳にも立たずして、手を打つ程の事もなし。或夜懇なる家に行きて、二三人咄し居る所へ、勝手口の暗がりから、牛込の旦那寺の弟子坊首差し出し、亭主にいへるは、「上葺の奉加しかじか附いては無けれ共、何の道させねばならぬ事故、屋根屋瓦師の方へ參つて注文させましたが、高で金が四五十兩足りませぬに依つて、序に立寄り御相談申す」といへば、亭主聞いて、「痩旦那に談合なされたとて、煙草の減るぶんで隙入つてから金の出所がない。淨土宗は不信心なり、自墮落なり、身に引懸けて世話燒く旦那がなさに、雪隱程な堂の上葺が埒が明かぬ」といふ時、辨七差出で、「只今は見世の商世帶廻り、我等一人して捌く故親常心は隙にして、金銀入れてなりとも佛の事が世話燒きたいといううて居らるゝ程に、我等に聞いたと仰せられずに、明日でも御座つて打掛けて、親共に奉加の事を賴んで見給へ。親の事を申すは自身の取合の樣なれ共、寺の事には隨分情を出す人で御座る。頃日も谷中の法花寺へ、唐鐵で大燈籠を六つ迄寄進致された」といへば、其座の若い者聞咎め、其燈籠は本町の吳服屋から、親の十三年忌に上げられて、身共も其日參りて非時迄食うて手傳うて歸つたが、外に目に立つ樣な燈籠は無

其中に薄雲さんの逢はんす本町の淸樣とかた樣と、此お二人に御器量の續くはなし。お目の上の出來物小いとて、其儘置かんすが惡い」と、自ら藥穿鑿するなど、僞にしてから甘い仕懸、是と親父が六ケ敷顏して異見するとを見較べては、女郎の方を捨てうとはいはぬ筈なり。辨七、此里に通ひ馴れて粹になりし德には、似合しい嘘を吐きならうて、一見の女郎にも指を切らす程に昵ます事を得て、幾人か人知れずお情に預り、是を自慢して晝夜新しい嘘を計畫めば、諸〱の末社共は其大臣の自慢せらるゝ事を見て取り、其を讃唆して取り入る鍛錬、天狗道に等しく熱鐵の熱燗を飮んで、指の股を廣げ、「旦那程珍しい迂訴を上手にお吐きなされて、お歷々の太夫樣方を、お手に入るゝ粹樣は、恐らく廣い世界に有るまい。何と皆達あなたの樣に我々が甘う嘘を遣うならば、金銀の攫取では有るまいか」「中々其方がいふ通旦那の半分嘘吐けば、今時分は乘物に乘つて太鼓商賣仕る。可惜藝が入らぬ所に有るではないか」と唆し立てられ、次第に嘘に實が入つて、色里離れた一門交際、友達中間の出會にも、自然と癖になつて、嘘を吐かねば口に唾が溜り、頭痛がして來て座に堪られず。始の程は少しづつ輕い嘘にて氣を補へば、

女郎の嘘に附廻る大臣形氣

氷は水より出でて水より冷く、大盡の嘘は、女郎に習うて女郎より凄じき世の姿、狐が人に化かさるゝにて知るべし。傾城狂に尾を見せず、毎日の三谷通に石瓦より澤山に蒔散らす、白銀町の辨七といふ大臣、好い親持ちたる身の仕合、然も風俗優れて女たらしの上手者、三浦の濃紫を手に入れ自慢、粹の女郎に揉まれぬれば、分里の事知となつて、此大臣のいひ廻しには、歷々太夫格子も欺され、手を取る勝にて面白い最中、近附ならぬさんちやも笑ひ掛け、物遣らぬ太鼓迄も附從ひ、今の全盛、いふではないが、我等に續く者あらじと、其鼻の高き事金龍山も下目に見て、八十末社を召連れ、伊勢屋久左衞門座敷を我物にして、萬自由の遊、兎角色里は江戸も駿河も小判蒔かねば可笑からず、向上に構へし太夫職も、金の光に附いて廻り、眞實から手に入れて揉むやうに、何のおてきより大事に掛けて、召替のお小袖も手づから著せて、帶迄して進じまし、後へ廻りてお腰の皺を伸し、背中を敲きて、「今此お町へ通ふ男其數を知らず、

慾の深い井戸茶碗掘出願ふ道具好

慾故に禍は身に引懸る虎落形氣

俄分限は商賣に骨を折出した木綿屋

表向は慾心を切つて見せる內儀の黑髮

僞の相手取にする死人の妄語

世間子息氣質　四之卷

目録

女郎の嘘に附廻る大臣形氣
乘掛つた二挺立毎日の三谷通に內證は唐物屋
禮扇子は骨折だけの損になる奉加帳
僞は積つて山をあげる疱瘡の咒ひ
末子が智恵は上々箱入の銀持形氣
內證のよい夫婦の中に節のない材木屋
目に掛る蜘の巣は仕合の瑞相

されたりとも、是よりはまそつと榮耀に暮すべきに、因果な子を持ち此世からの有財餓鬼、引寄せて異見せらるれ共、「金延すを無用とは、親父樣變つた異見で御座るの」と、逆目に成つていよいよ忙敷申す程に、大勢の手代共末頼みなき無慈悲の親方と見限り果てゝ、申し合して暇を乞へば、親々も我物ながら自由ならぬに草臥れ果て、一家一類打寄りて樣々に異見すれ共聞入れず、是では家が立ちにくしと、一門集り内談して、太郎市に一人扶持取らして、永く勘當して仕舞ひぬ。世に始末過ぎて金溜める忰子とて勘當請けしは、神武此方是が初物。

十露盤控へ、「あの者は當三月より九月迄八十匁にて置いたれば、一ヶ月が凡拾三匁三分五厘に當れば、今五月の初に四拾匁貸しては、未だせぬ奉公の給銀を先へ渡すの道理、成る間敷事ながら汝が取持なれば、聞届けて貸して遣らうが、三四の兩月分二十六匁七分引落して、殘つて拾三匁三分は壹歩半の利をかけて、九月節句の出代の時、給銀の殘りにて利足算用して引いて渡すべし。其が合點でなくば、勤めた丈の兩月分より外は、五厘も餘計を貸す事はならぬ」と嚴しく申せば、手代若旦那の面を眺め、「偖もむごい心根、是は世間にない事、下々は主人の惠なくては立たぬもの、利なしにお貸しなされませ」と達つて斷り申せば、「是は角介に限らず、汝等も以來は此通」と、微塵情といふ事を知らぬ男、朝夕の食物も飯汁の外、朔日二十八日にも菜といふ物させずして、親達にさへ、盆正月にも生鰯一疋進ぜず、「寺參も履物が堪らず、佛は何處のも同じ事、外へ出らるれば費なる錢をお遣ひなさるゝもの、持佛堂の如來樣を願ひ給ひ、腹の減らぬ樣に靜にお念佛を申されよ」と、何彼に附けて此不自由さ、身の油を出し、一生に千貫目餘拵ぎ出して、親父死際に腐つた鯛さへ目に見る事の叶はぬ苦しみ、鬼界が島へ流

にて内より持來る外に判紙を求め、紙遣ひ過して不自由なる子供に、一日一倍增の利にて是を貸し、萬事悪ひすらこく、不斷も臺所を離れず、飯炊き男が朝夕の餘物を、澤山に乞食に取らす迄の制たらをし、其小頬悪き仕形親父計りは悅びて、一生身を持損ふ者に非ずと、手代共に末末頼母敷いひ渡されしに、彌十六七の頃世の人に變りて、兎角外へ交る事なく、義理を缺きて細なる算用して、終にあだ錢一文遣はず。七歳の時かき始に桃色の犢鼻褌買うて、石町の姨より贈り給はりしを、今に其一筋にて埒を明け、朝起きるから寢る迄始末の事をいひ止まず。鹽肴も目に懸けて直段をし、計芋も百を何程と數讀みて買ひ、親の仕來りし家來出入の者迄の、盆正月の祝儀さへ費の至りと止めさせ、隅々迄眼を配れば、大勢の召仕ふ者も一日物見遊山に出づる事も成らず、命有つての奉公と呟くを聞いて、「煩へば奉公を缺くといひ、藥代を出さねばならぬ。夜隙な時隨分灸をせよ」と、不斷灸箸で目を突く如く、小道なる事をせか〱いへば、番頭を始め歴々の手代共愛想をつかし、大家の旦那に似合ざる心ざしと見限りぬ。下人の角介が在所の親へ見繼の爲に、給銀四十匁借度よし手代を以て若旦那へ申し入るれば、太郎市

歌舞伎役者の衣裳を請取り、段々仕合せ心の儘に成つて十年立たぬ中に、百貫目といふ銀を延し、古主の家を買戻し、此家に住んで二十年餘、當正月の棚卸に、代物除けて金銀の高凡千貳百貫目、一代の出來分限とは拙者が事、親の讓は御覽の通の高なれ共、是を吳れられし故に依つて、是程迄の身上とはなりぬ。さるに由つて此頃表具致して、今日の年忌の佛事に合せ申す、是私の家の系圖の卷物、定家の色紙百枚よりは重寶」と披露せられぬ。此太郎兵衞貳百匁の讓銀を以て、今千貫目餘といふ身上になりし事、町人の出世商人の手本ともいひつべし。幼少より親の手を離れ艱難を經て、一代の中に是程の身代に成りし男なれば、萬に拔目なく、一子太郎市に、諸藝を習はせずして、小さき時より十露盤を彈かせ、なみくにて世は渡られぬといふ事を、骨も固まらぬ内から身に染み附く程いひ敎へければ、親の世智なる形氣を見習ひ、八歲より寺入して手習するにも、他所の子供と違ひ、淸書に書損ひとて判紙壹枚麁末にせず、墨に袂を汚さず、雪踏のはなを踏切らず、大勢の子供の每日使ひ棄つる反古の圓めたるを拾ひ取り、一枚々々皺伸して、日每に屛風屋張貫人形の細工人方へ賣つて、人知らぬ錢を儲け、其錢

木綿縞の夜著蒲團一流、江戸の吳服町に奉公して居る、末子太郎兵衛に讓る物なり。我死後に相違なく相渡すべし」との文言、「是はお物好とて變つたお掛物」とあれば、亭主太郎兵衛申さるゝは、「私は元來生國敦賀の者、兄弟多き故に十一の歳御當地へ奉公に來りしが、抑は中橋邊の珠數屋へ參つて、後生大事と三年勤めて、是は隨分仕おほせて旦那程の身代になつてからが、いきだけの知れた商賣と見限り、十年の年を樣々に斷り申して隙を取り、十四の秋から駿河町の兩替屋へ行きしに、隱居の禪門我を見て、賢過ぎたる小者なれば、金銀蒔散し置く商屋には好かぬ奴なり、角入れぬ先に隙を出せと、此度は主人方から暇を賜はり、其より一年浪人して、吳服町の此家の先祖に勤めしに、旦那三谷へ通ひ初められ、見世の商は償ふまいと女郎に逢へば好いと、十年餘の色狂に、此屋敷傳りの諸道具迄も賣拂ひ、妻子と別れ〲になつて行方知れず。我も其時十年の舊功無になし、仕著の布子迄御主のお役に立ちて、正眞の手と身になりし所へ、今日の親在所にて果てられし由にて、此自筆の讓狀に銀弐百匁、夜著蒲團兄弟共より持せ上せしを力に、木挽町邊に店を借りて、始めての宿ばいり、纔の絹見世出して

問はるれば、「成程町方へ貸すよりは格別廻りのよい事ゆゑ、只今三千兩遣はします」と、素面な時と同じ調子に返答すれば、「こりや未だ酒が足らぬさうな。手代共客衆は兎も角も、十助に相をしてまそつと強ひよ」と下知せらるゝ。承つて若い者共茶碗と取替へ盛り掛けるに、百杯丸の藥力にて些とも醉はねば氣もめいらず。親父幾度問はれても、如何にも貸すと丈夫にいへば、親父不審し、あれ程飮んでもめいりの來ぬは、手代共が太夫本と一所になつて、悴子に酒でもない物を呑まし居るには極つたと、惡い方へ氣を廻し、「それ燗鍋持つて來い、飮うで見ん」と引請けて、つひに飮れぬ一口の酒に亂れてたわいなく、「十助芝居へ金貸すなら、顏見世の棧敷は定めてたゞで有らうな」と、子息より親父浮れて、詰る所は太夫本の仕合々々。

勘略は世帶藥聞き過ぎた始末形氣

旦那寺の一山を申し請け、親の三十三年忌を丁寧に弔はれし、其齋の座敷の床に、時代切の表具にて珍しき掛物を懸けられしを、和尙何方の御筆ぞと、懷中目鏡出して見給ふに、「銀貳百目

と申して奇妙に醉の醒める藥を貰ひまして、懐中して居りまする。貴下のめいりは醉の盛に募つたで御座ります。物の試しに進ぜて見ませう」と、丸藥取出し十助に飮すれば、忽ち醉醒め元の如く貸す筈にて、「明後日金受取に頭取同道にて參らるべし」と約束して立歸れば、太夫本は悦び、契約の日に手形認め、上文字屋へ來て、十助に逢うて證文に判するを、手代共見て肝を潰し、軈て此旨親旦那の耳に入れ、如何仕らんと伺へば、親父驚く氣色なく、「又忰子が持病が起つた。常例の通り濃酒を熱燗にして、大盞にてたて掛けて盛れ」とあれば、畏つて手代共燗鍋盃取持たせ、「親旦那の貴下方へ御酒一つ進ぜられとの仰附で御座ります」といへば、十助聞いて、「何うでも老功でお氣が附く、一つ參れ」と盃を差出せば、太夫本此中の樣子に懲り、頭取合點かと膝を突けば、其處らは其意を江戸櫻、紙入開いて嗜みの百杯丸取出し、「旦那是は御氣力を增す藥、先日もお心よいと仰せられた御意に入りの丸藥」と毒味して進ずれば、「如何樣どうやら善い樣に覺えた」と、十粒計り飮んでから、「さあ盃を亭主役に我等から始めう」と、一つ飮み出し其から酒になつて來れば、親父立出で、「十助彌太夫本へ金貸すな」と

と唆し立てて盛る程に、十助数盃傾けてより、例の如く氣がめいり、「此樣に馳走に逢うては、跡で禮が六かしからうが、理もない所へ來まいもの〳〵」と、口の中にていふ時、「是は旦那には御酒が足らぬと見えまして、大晦日に拂せぬ我々が樣な風情にならせられた。孰れも旦那を浮しませう」と、詰囃の血氣者共扇子にて煽ぎ立て、いさめ申せどたんだ弱りに氣が弱り、次第に眞面目にならるれば、太夫本覺束ながり、「愈先程御契約申した通、三千兩の金子お違ひなう、明後日お貸し下さるべし」といへば、十助聞いて、「最前から能々思案仕るに、素人の私芝居事に大分の金をお取替へ申さうと、お請合ひ仕つたは我ながら無分別、宿へ歸つて親共とも相談致し、此方から御返事致さう。先其迄は的になされな」と、始とは格別の申し方、太夫本むつとして、「偖は粹方共を、素人のこなたが嬲つて見るのか。愛宕白山勘忍せぬ」と、一腰に手を掛くれば、頭取押止め、「貴下も通町で人の知つた御身上、何しに各を嬲にはお出でなされまい。最前から十助殿の體を見るに、御酒も大分あがつたに、次第に御氣勢弱く見ゆるは、隱者上戸と申して、世間の酒吞に此一手が御座ります。私前方長崎の客衆から、百杯丸

されませ」と勝手へ入れば、親父指をさして、「私の嫌な酒を悴子に食べさせます所謂は、あれで御座る。あの者十八九の時から兎角生れ附いて大氣に御座つて、小判市に掛ります故、異見致して止めますれば、米油㭙は唐物薬種の買置、一夜檢校になる様な、どか儲を好きまして、今迄あいつが損金は、三千兩や四千兩と申す事は御座らぬ。傾城狂ひ博奕業に此半分減しましたら、今迄勘當せずには置きませねど、商人の儲けうとて致す事なれば、勘當も成りませず氣の毒に存じた所に、人と變つて大酒致せば、平生とは格別に氣がめいり、側で聲高に物いふさへびくつきますに依つて、夫から試して見ますに、氣象に人のいふ事を用ひず、持病の買置が萌しさうな時分、酒を盛掛けますれば只今の通で御座る。何と是も大きな病では御座らぬか」と、親父話に酒强ひらるゝ不審は霽れけり。ある時十助堺町の歌舞伎芝居の太夫本と、銀親の相談堅め、三千兩貸す筈にて、契約の手を打つて仕舞へば、「其ではまだ五百兩足らず、何卒御酒を上げまして、御機嫌の好い所を見濟して、三千兩の上をまあ五百ばいこぢ上げまいか」と、頭取と諸役者内談して酒を盛り、聲美き子供に歌うたはせ、二挺三味線引かけさせ、銀親大臣

ず、「一つや二つ飲む間にさのみの高下も有るまい。まあ〱飲め」と、茶碗に請けさし丁とつげと一盃飲し、「左次兵衛殿の代に己が爰はおさへやう」と又一つ飲し、「さあ左次兵衛頂戴いて下され」と、子息に獻さすれば、左次兵衛日頃と違ひ、酒屋とさへ交際はぬ親父が、是は合點の行かぬ事と、「此盃御亭主へ慮外申さう」といへば、「身共は若い時から御存の通、かざかぐ事も嫌ひなれば、悴子に戻して下され」と、又子息に一盃飲し、其上にて親父、「何と十助、小判は愈三千兩買うて見やうか」と問はるれば、「人は大慾でなければどか損はせぬもので御座ります。御無用になされませ」と最前とは格別違うたる返答、親父乘つて出で、「若い者のそんな弱氣でなる物か。ま一つ飲んで篤と思案を固めよ」と又一盃飲し、「おれは三千兩は尠い、五千兩買はうと思ふが何樣ぢや」とあれば、子息色違して、「そんな大氣な事承りますと、身の毛が戰慄つて寒氣立ちます。左次兵衛樣親父に御異見なされて下されませ。千里一はねの買置事に掛るは、申し惡い事なれど、私等程にない身上の者が爲る事で御座ります。年に似合はぬ蓮葉な事を申されます。私はあんな事聞きますれば、身が縮む樣に成ります。緩りと是でお遊びな

ば、懇して來る人々も心得て、酒の咄は隨分除けてせぬ樣にしたりしが、何日の頃よりか我子の十助とて、二十五六なる若い者にたゞ酒を飮めと、態と比目魚を作らせ、蛤の貫身などの肴拵へて、朝も晩も親父自身に强て飮さるゝよし、是は家來共が僞で有るべし、如何にしても誠しからずと、酒嫌といふ事前々より知つた近所の親父共、上文字屋へ來て樣子を見らるゝに、親父立出で、「好い所へお出なされた。悴子に一つ食べさせうと存して、引裂鰯の縵和を致した。あれを肴に各も參り、子息めにも大きな物で一つ飮して下され」と、家來を呼びて酒肴を出させ、「十助に來いといへ」と座敷へ招き、「盞は小さい、其所な茶碗で一つ飮んでお客へ獻せ」とあれば、十助客衆に挨拶して偖親父に向ひ、「私が考が違ひますまい、ひらに三千兩お買ひなされ。お前の不同心ならば私が一分買込みます。上るは知れてある小判を、弱氣を出して盞々なさるゝ」といへば、「偖其は何樣なり共思ひ入次第にしたが好い。先こんな時は一盃飮うで、きおひにかゝつたが好い程に、一つ飮んで左次兵衛殿へ進ぜい」といはるれば、息子氣を急き、「饒なも時によります、半時知れずに狂ふ相場、最早晝ぢや」と氣を揉めど、親父少しも急かれ

ら金の土を起して、三十荵を荷うて、根深き歌好の心ばせを賣つて通りぬ。

正直な親父を一吞にする上戸形氣

曾子は鈍魯けれども道統の傳を繼ぎ、石川五右衛門は利發なれども釜煎にあふ例、身上よき人の餘り發明過ぎたるも心元なし、少計り愚なる方こそ益ならめ。利發餘つて大氣を出し、智恵立てで無事なる家を潰す人あり。兎に角智あるも愚なるも、持つて出た果報にて相應に世を渡つて、通町中橋邊の上文字屋とて錢見世出して、若い者數多使へる手前しやあり。若い時から始末の二字を忘れず、人の身を持ち損ふは酒に增したる物はなしと、三十年來禁酒にて、我内には燗鍋ちろりはいふに及ばず、壺平皿の蓋も盃に似たる物とて置かれず。念佛講の同行の中に、酒屋が有つて交際ふが迷惑と、斷いうて講を退かれし位なれば、五節句朔日二十八日氏神の祭、惠美須講にも神の棚へ御酒さへ供へられず、子供が寺から上つて手習師匠に習うた通、猩々の謠うたふさへ神鳴嫌の稻光見るが如く、其儘兩耳塞いでお念佛申して居らるゝ程なれ

郎眞實に聞いて感心し、「其方を京へ上した程の德あつて、至極の御指南を請けて、自今の歌の讀みやうを得道致した」と、是より商賣は大きなる歌の妨と觀念し、手代が勘定お聞きなされと見世の帳を持つて來れば、助太郎腹を立て、「十露盤はじけば一首の體陋しうなる、向後我等に商の事迚は微塵も耳へ入れる事なかれ。給金遣つて抱へて置くは、商賣の事は汝等に捌かせ、主人は好ける道を玩弄びて樂まん爲ならずや。損がゆかうと德を取らうと、構へて我に聞すな」と出るやら入るやらこぼつやら、渡世の事には目も遣らず、奥に取籠つて心を澄し、歌を案ずるより外はなし。親一門異見すれども更に用ひず、剰へ心も形も公家にならではと月代のばして、儒者やら按摩取やら知れぬ樣に、惣髪になつて齒黑をつけ、堺町に伽羅の油屋に俄に商賣仕替る白粉屋の受領を買取り、一首讀んでは、武藏の目藤原の安文と墨黑に書いて悦び、和歌といふ大病に犯され、親父死なれてより間もなく身代潰して、金杉といふ所に微なる裏棚の長屋住居、ちはや振紙子さへ破れて、久方の天竺浪人となつて、あふさきるさに借錢しちらかし、鬼一口に食ふものなく、猿丸太夫の樣に、顏に皺寄せて案じて居ても濟まず、あ

出、千萬兩の金には代へられぬ有難い事ぢや。然らば御内室の文の分では覺束ない、假初ながら大切な事なれば、太儀ながら御自分京都へ上られ、彼御公家様に直にお頼み申してたべ」と達つて頼めば、「私京へ上りましては、仕掛けた療治が缺けます」といふ。「其段は我等合點ぢや」と、路金として道鐵に五十兩、「留守の中賄は此方から致す」といへば、「左様ならば明朝立つて參るべし」と契約申して船より上り、俄に旅用意して都へ上りぬ。それより助太郎萬事を捨てゝ此左右を待ちけるに、四十四五日過ぎて、道鐵京から戻られしといふ知らせを聞くより心嬉しく、人ばしをかけて呼びに遣れば、道鐵旅裝束其儘にて來り、「偖都へ上り女房共奉公いたせし御公家様へ參り、御詠歌を早速賢覽に備へしに、暫く再吟遊ばして、歌の心は面白けれども、さすが地下人とて歌のたけ高からず、自然と卑しき所あり。町人は不斷渡世の事に心を込めて利欲に係り、明暮是を思ふ事甚しければ、歌の様無下に卑し。文屋の康秀が歌のさまとは違ひ、商人のよき絹著る迄はゆかず、布子著て沈香をきくに等し。只返す〴〵も惜しき事と仰せられて差置かれぬ」と、京の寺社廻りて内裏の御門さへ見ずに來て、間に合を申すを、助太

り誘はれ行くに、夏川の涼しく、所がら武藏野の月水に映りて、此景氣何樣もいはれたもので
ないと、舅方より馳走人に附けられし出入の者共、酒を勸めて聟殿を饗應しける。助太郎好け
る道とて、月のいと面白きに心を寄せて一首綴りけるを、道鐵といふ太鼓醫者、酒機嫌に任せ
てこくうに讃めそやし、「私も醫を學ぶ暇には、敷島の道を慕ひ、及ばずながら耳底記に便りて、
歌の讀方をも心懸け、上方に有りし時より、お公家樣方の御歌を何程か承りましたが、只今の
御詠歌程なお歌を聞かず。天晴秀逸、此儘讀捨になされん事は、珠を淤泥に隱すに等し。幸
我等女房共は、都去る公家方に宮仕致した者で、今に奧方から便毎に御懇なるお文にあづかれ
ば、此お歌を上方へ上せ、此御公家樣の御目に掛け、迚もの事に御添削をお願ひあつて、序に
撰集の中へ入れてお貰ひなされませぬか」と乘せれば、助太郎乘つて來て、「何と地下の歌でも、
あなた方の撰ませらるゝ集の中へ入る事がなるか」と問へば、「ハテ偖古今集に三國の町とあ
るは其時の遊女なり。賤しき流れの女さへ入らるれば、お前の樣な銀持はなほ以て確な事、惣
じて讀人知らずとあるは、皆歷々の町人の歌人達の事」と申せば、其が成らう事なら生涯の思

世間の人に鼻毛を讀まるゝ歌人の形氣

武藏野の廣き心の商人、晝夜家業の油斷なく、我と我心に鞭打つて傳馬町に綿棚を出してより、暫時も無爲居せず命限に拵ぎければ、天理に叶ひ次第に分限になりて、助太郎といへる子を持ちける。ひとりも獨からと利發にして、親の氣を助け諸人の讃られ者、親の身にしては一しほ嬉しかりき。十八の暮に元服して器量隣町に並ぶ者なく、發明にて身代よし、何に不足なければ、聞傳に諸方から花聟に星月夜、鎌倉河岸の材木屋の美なる娘と緣有つて、婚姻首尾よく相濟み、此上に思ひ殘せし事もなく、表屋の裏に座敷作りて、親父是に引込み、萬の鎰を助太郎に渡し、商賣は數年勤めし律儀なる重手代二人に後見させければ、此身代鬼金持たせ根强い事隱れなし。此子息性善しにて、三野狂の事はおいて、隱し色女のある所さへ知らず、渡世を大事に掛け、費なる銀を遣はず、二親の悦び若き子供の手本となれり。他へ出ては惡しき友に交際はず、常に歌學を好み、二十一代集を殘らず暗ずる程になりぬ。或時隅田川の船遊山に舅よ

智惠が廻つて一盃飲れた親父の手盛

勘略は世帯薬効き過ぎた始末形氣

商人の中では優れた男一疋の絹屋
欲に爪を立ててかき集めた手習反古
銀持乍ら一生遊山嫌の有財餓鬼

世間子息氣質 三之卷

目錄

世間の人に鼻毛を讀まるゝ歌人形氣
育は御公家樣より柔な心の綿屋
歌に道知つた顏で口上を捻る鍼立坊
帳面を見ずに濟む蛙の一聲も和歌の友達
正直な親父を一吞にする上戶形氣
小判の高下に走り廻る心の駒繫いだ錢屋
芝居の銀本飮込んだ百杯丸効いて來た新役者

近所へも寄せられねば、惣領の孫太郎は常なる世を渡り兼ね、宮川町に間短商して、「親父こそつれなく共、せめて手代共は馴客がひに、此方客になつてお出でを待つ」と、主が家來にこれ旦那と、太鼓口を敲きて、逆なる暮し、正眞の冠を沓に白人のしまひ物を女房に持ち、世にありし昔を思ひ出して、今の嗅に唐土の道中の風を教へ、傾城事して樂めり。さて次の弟孫次郎は、數度の異見に相撲を止めず、遂には親に小腁を取られ、土俵より先内を衝き出され、如何なる手取も親には勝れぬといふ事を知つて、詫言しても門口に大關座つて寄せ附けられねば、日頃自慢の力も落ちて、便るべき方もなく、身の廻りを賣喰にして、今といふ今本の丸裸になつて、まだも昔の緣故とて、ちぎれたれども緞子の下帶一筋に、相撲を好いた奇特とて、此身に成りし因果の廻り車使ひに雇はれて、下鳥羽に住み果てり。三男孫三郎は榮華の餘り、我儘に使うて遊びし人形なれば、操芝居の間に合はず、かゝへて無ければ内證の機械の糸切れて、漸〳〵に小見世物の木戸番に雇はれ、皺枯聲を出し、さあ錢は戻りぢや、評判の三男孫三郎といふたはけ者は是ぢや〳〵。





が落ちて相撲が取られぬ。愛宕白山身が燃えても女は厭」といひ切つて、可惜花娌を生きながら後家にして淋しがらせ、我獨寢間の戸の明暮すまふより外に樂なしと、愈增に肉食を好み筋骨逞しく成りて、二十三の時三十四五許に見えて、前の形はなかりき。斯る身持にては御大名方への勤はさせられまじと、次男も舊里切つて追出し、三男孫三郎に名代をさすべしと、手代共と內談極め、此男を跡目に仕立てて見るに、兄々の如く惡所へも行かず、力業もせざりしが、幼少より今に人形廻が好にして、八疊敷の我部屋にあやつり芝居の如く手摺をかけて、金襴の幕を張り、平次が作の人形數多調へて、金入染込樣々の衣裳を著せ、町の髮結に淨瑠璃語らせ、常來る瞽女に三味線引かせ、出入の肴屋、青物屋、豆腐屋の丁稚共を呼び集め童の如く、親の役にも立ちさうな時分、さりとては罰當り太鼓敲き立てゝ、始りくと朝から晩迄人形使うて躍り跳ね、何時が盆やら正月やら、此慰に氣を奪はれ、夜も蠟燭點し立て、しくみになぞらへ代り淨瑠璃の人形稽古、さる程に世の中とて樣々のたはけ有り、いとしや親父は歴々の男子三人持ちながら、跡目に立つべき者もなくて、一家の中より養子をし、三人共に見限つて

ず、近在の祭に在郷の力強に出合ひ、一度も不覺を取らぬとの自慢、下帶に綾絹をして朝夕のいか物喰、兩の腕は反故染を見る如く色々の入れぼくろして、額は眉間尺の如く拔き上げ、久三小者を取つて投げ、近國に隱れなき荒浪孫次と名乘つて、下屋敷の掬場の柳を拔き土俵を並べて、假初の遊にも相撲取共を招き、是より外に人間の遊興はなきと、四十八手の外を工夫し、大名の金は濟まうが濟むまいが、相撲にさへ勝てばよいと、外の事には微塵目をも掛けざれば、親父額に皺を寄せ、「惣じて人の玩弄には、琴碁書畫の外に茶の湯鞠楊弓、謠などこそ汝等が慰ともいふべきに、何ぞや裸身となり、五體あぶなき勝負を面白がる事、大名貸する歴々の町人の悴子が所作といふべきや。自今是を止めて相應の遊をいたせ」と、色々異見せらるれ共、只世の中に相撲取るより外に、何か遊興なしと中々止むる氣色なければ、父母一門談合して、兎角は縁組を取急ぎ、艶なる妻を持たせなば、自から志も直るべしと、中立賣の呉服所の息女を貰ひ、祝言目度度事濟んで後、一度も部屋に入る事なく、父母氣の毒の頭を撫でて、嫁に附き來りの乳母を以て此事をいはせければ、孫次郎氣色をかへ、「女と枕を交しては、男盛に力

り口賢うなられ、「富んで足る事を知らぬとは親父の事なり。京で一二番限の銀持といはるゝ身をして、まだ此上にも慾を構へ、朝は星を頂きてお屋敷方の留守居衆へ下袴にて勤め、大分の金銀をお取替へ申して、濟む迄の中の心遣に命を削り、又は高利に目が暮れて、家書入れての證文の通には渡りかねたる世の慣ひ、反故一枚捻くり廻しても金にはならず、あかの他人に、多くの金銀を苦勞して取られうよりは、現在の子ぢや程に、せめて面白い程遣はして呉れたが能い筈、親の慈悲といふは此樣な所をいうた物ぢや。今迄手形箱にある、いかずの古證文の金銀の高程、まだ己は遣はぬぞや」と、異見を聞入れる段へは行かず、却つて思ふ程に遣はして呉れぬとの不足いうて、中々止る氣色なければ、親父詮方なさに一門と相談して、遂に内證勘當して、三井寺の伯父坊方へ押込め置きしに、燃え杭に火はつき易く、近ければ柴屋町へ入浸りて、湖の首たけ泳ぎぬ。惣領斯る身持なれば、親父名代にお屋敷方の勤を次男孫次郎にさすべしと、呼附けて其旨言渡さるゝ。此孫次郎は兄が美男に似もやらず、色黑く背高く、手足の筋節くれ立ち、小い時から力自慢して、軟取手偖は相撲取る事を好みて、勸進相撲はいふに及ば

御紋附の時服お出入申す御大名より拜領し、六十餘州の名物の土産は、て世の人の用ひ強く、粉引熊川曜變建盞井戸三島、和漢の書畫何百軸といふ事を知らず。は江戸鑑を衣桁にうつし、古金襴の夜著名物の茶器は長持に押込み、幾箱の内と書附し、などの茶椀は繩からげにして、金銀米錢玳瑁の箸百膳、白銀の天目百盃、珊瑚樹の棒百本、印子の狸百疋、蒲團、印金の幕、孰れも智惠男子三人榮耀に育て上げられて、廣き都に肩を並ぶる人もなく、はいふにや及ぶ、利發な子供と心嬉其苗の大いなるを知らぬ親の眼からは、の足らずめは金銀で敎へてゆくを、島原に通ひ惣領孫太郞何時の頃よりか、追附け隱居して老後の樂を極めんと思はれしに、しく、沖を漕いだる一文字屋の唐土船に乘つて來て、晝夜を分かず三枚肩にて脇目も振らず、初め、花奢事を專にして女の當世衣裝に名の木をとめ、不斷の樂み、然も其身器量よく、大騷ぎ、銀子自由の身なれば、何か女太夫が方から賃かいてなりとも逢ひたがる美男に、好ける風俗、算用なし此樣な面白い事天竺にも有るまいと、戀のきく最中なれば、郞になづまぬはなくて、惣領殿女郞に揉まれてよ樣々異見せらるゝに、親父驚きおも手代を以て、に遣ひ棄つれば、

儀の供させて、松茸狩に山へ遣る樣な物で、惡性な若い旦那を片時も置かるゝ寺でなし」と、重五郎を伴ひ立歸つて、親旦那に兄重四郎入道の身持の樣子を具に語り、「法師樣の御行儀に合せては、重五郎樣は聖人で御座ります。一年に五百兩などお遣ひなされた分では、御身代の痛とも成りますまい。只我々にお任せなさるべし」と、手代中詞を揃へ申しければ、「然らば隨分五百兩の上を遣はせぬ樣に致せ」と、思ひも寄らぬ許容を請け、心の儘に遊びしが、元來重五郎女嫌にして、一生婦妻を持たず、器量よき前髪達を置き並べて、愛する事甚し。其後親父果てられてより、母屋を手代に渡し、一年に千兩宛のあてがひを取つて、知恩院門前の下屋敷に引込み、目に入りし歌舞伎子を請出して、戯の餘相手に成つて狂言し、又は淨瑠璃の會に日を暮し、思ふ儘なる榮花の春、樂竭きぬ男世帶、律僧衆さへ女をすく浮世に偖。

大力は身の疵身體投げた相撲取形氣

中京に棟高く大名貸の惣大將と呼ばれ、二葉講の正座を張つて銀貸仲間の口利、日々に繁昌し

呉れい」とあれば、「私は脊から大分負けて居ります。如齋坊を遣らしやりませ」といへば、納所坊腹を立て、「そなたが行かぬ癖に、人迄の差圖をしやる。愚僧はお身達の樣に手味噌は附けず、正味の負が夥しい。こなた行きやれ」と睨め附くれば、「佛は見透ぢや、手味噌と云ふものは、佛祖かけてせぬ坊主ぢや」と、不仕合の兩僧負腹立てゝいさかふを、和尚鎭めて、「内に居ながら見すく〳〵留守遣うて、檀方に下ぬきも食されまい。ちよつと燒香して歸らう」と袈裟衣を引かけ、「それ乘物よ」と三枚坊主、七二小僧等を連れて乘走らかして行かれぬ。重五郎此體を見て、是に合せて我等が科は淺い事、兄坊と罪の輕重を計つて見れば、亭坊地獄へ落ちらるゝなら、我等は揚屋に居る程の違と、身を顧みて親父の勘當を恨みぬ。其夜明くれば手代加兵衞は早朝より重五郎を起し、亭坊の前へ出て申すは、「若旦那を此所へ連れまして參りしは、暫くも御寺に御座らば、殊勝なるお前の御行儀に恥ぢさせられ、自とお心も改り、昔の正道なる御形氣にもならせらるゝ樣に、御異見をも致して貰ひませう爲、お供して參りしが、夜前の行作のお前に預けて歸るは、偏に上戸に封せぬ樽を預け、歌祭文の上手な美男な手代に、若い内

の至り、向後心を改め隨分家業を大事に掛けて、無益の金銀を費さぬ樣に致されよ」と、眞なる教訓、流石御出家と申し兄御樣程ありと手代も感じ、其夜は加兵衞も逗留して、夜と共に異見を加へ、夜更けぬれば一間に入つて休みぬ。重五郎は親父が怖い顏を思ひ出せば、目も合はず寢られぬ儘に、こそ〳〵と出て見れば、客殿に大勢の人聲する、何事かと引手のぬけし襖の穴より覗いて見るに、大蠟燭を耀かし、近邊の百姓又は血氣の道心者、車座になほつて壹歩小判を蒔散し、重四郎入道諸肌脫いでどうを取り、かるたを頂戴き、「南無釋迦無爾佛、娘の子でも苦しうない、まあ一番見事な事を賴み奉る」と、興のさめたる體たらく、是さへ肝が潰れしに、蛸蒲鉾を手して摑み、茶椀酒を引かけ、「此美味さが下田村の彌八が女房に百倍」と舌打する所へ、外門あらけなく敲き、「小枝村の五郎作母長病なりしが、今宵相果て申されしに、思ひまうけし死人なれば、夜の中に野邊へ送り申し度し」との使なり。重四入道聞いて頭を搔き、「邪魔のときに業人めが、今夜でなければ死ぬる夜さは無いか。野布施の壹歩や貳歩には代へられぬ。和尙は晝から京へ出られて留主ぢやというて、西念坊其方行いてよい加減に經讀んで來て

て重四郎には此旨を云ひ聞かせ、俄に頭こそげさせて、約束の寺へ後住にありつけ、九族生天と親一門、悦びの入院振舞事濟めば、其身も日頃より願のまゝの道に入りしと、心まめに朝水手向けお經讀み習ひ、心に何の欲もなく、世間に十露盤はじきて金銀の取遣する物前にも、木挾刀持ちてゆたかに、庭なる白槇龍に作つて、天にも到りし心になつて、不憫や下界の人間共、書出し時分に氣骨を折り、夜も碌に寢ぬ事よと、今此身をば滿足せり。されば光陰流水の如く、花散る梢に蟬なきて、萩の枯枝は雪に埋もれ、年々速に暮れて、重四郎法師になりて、六年經つての春、跡取の弟重五郎に手代の加兵衞附添ひ、此寺に來つて重四郎入道に對面し、「偖も重五郎様已前のお志と變り、商賣の事をお構なく、御宿には尻が座らず、野郎狂に晝夜出步行き給へば、親旦那目鏡が違うたと、以ての外の御腹立にて、御勘當なさるゝ所を、我々漸宥め申し、御機嫌の直る迄先此お寺にさし置き、御町衆を賴みましてお詫言を申して、首尾能く御家へ歸しませんと、手代共相談致し、是迄お供は仕つて參りたり。御世話ながら暫く御寺に置かせられて、其内もよく御異見をなされて下さりませ」といへば、法師聞いて、「近頃不孝

世間の若い者の樣に悦ぶ氣色も見えず、頭は髮結次第にして衣裝も好まず、人が誘へど芝居へも行かず、不斷持佛堂の香を盛りかへ、夏花を摘み、身を食ふ蚤さへ殺さず、淺ましき者が酒買ひに來れば、錢取らずに量つて取らし、假にも嘘つかず、酒飮まず、葬禮の通るを見て、世は皆あれぢや物と無常を觀じて、常に物も高うていはぬ性質。歷々の寺から千鱈持つて、禮に御座る程の出家に落附いたる形氣、弟は是に變つて渡世の事に精を出し、大勢人を使へど旦那顏せず、朝から晩迄胸前垂を掛けてとうじ並に働き、帳日記に心を附けて、商賣人に生附いたる器量者、是に此家督を渡せば、明日目を塞ぎても跡の事に氣遣なし。さるに依つて惣領重四郎は、幸北山の近里に、永代寺領のつきし所あれば、敷金持たせて後住に遣る約束して、近日旦那寺の和尙の御剃刀を頂かせ、新米坊主にする筈なれば、此相伴をしてこなたも尼になりとも成り召れて、重四郎坊が寺に行き、世話なりとも燒いてたべ」と、所存の通を話さるれば、女房納得して、二十餘年添うたる亭主に離れて、河内の道明寺へ行き、尼になつて後の世を願ひぬ。斯く

ても欲しき物は、心任せに取つて行かれよ」と、思ひも寄らぬ一言、女房興を醒し、「二十餘年の艱難を經て老のいりまい時分に、俄に隙を呉れうとは、目に餘る見落し無くてはいはれぬ筈、家富榮え榮耀の餘に、妾足かけ置かるゝとて、悋氣する氣でもなし。兎角は暇を下さるゝ樣子を云うて聞かされよ」と、泪を流して恨みければ、親父聞いて、「今暇を遣らうといふは、世間の人に其方を惡ういはせまい爲め、そちを思うての離緣なれば、構へて我を恨み給ふな。樣子をいうて聞かすべし。惣じて世間の大法なれば、家の跡目は惣領に繼がすが極つたる事なれ共、身共が家督は次男重五郎に讓り、惣領重四郎は出家させて、一代樂に暮す程金銀を附けて、寺役のない寺の後住に遣さんと分別を固めしが、左樣した時には、惣領は先腹故、繼すべき親の跡を繼せず、今の嚊に目がくれ弟に家を繼せたと、世間に評判あつては、其方は繼母の惡名を取り、我等はまんざら妻子に迷ふ鼻毛といはれ、人に後指を指されん所が氣の毒さに、離別さへすれば夫婦の者に難がなし。惣領が器量なき故、代繼にならぬもので有らうと、何の讃も附かずに濟む。其方の目には掛つてあらうが、なさぬ中ゆゑ遠慮していはれぬと見えたり。兄重

をもつて世を渡る事、行く水に數かく通栭も集ひ來て、十年餘によい身とはなりぬ。仕合に從ひ味外より勝れ、猩々もちろり下げて來、劉伯倫も得意と成り、次第に笹の葉茂りて、竹の林に有らねど七けん口の家を求め、京の仕人となつて銀貸中間の座に連り、二條より下にて福人の名を取れり。成人の男子二人あれ共、未だ孰れを跡目とも定めず、黑き筋なき頭を振つて、親父世間を勤めしが、ある時女房に近づきいへるは、我若き時大津にて身上しもつれ、妻子を引連れ爰に來て僅なる酒を商ひしに、先妻果報なくて乏しき渡世の中に相果て、惣領重四郎をねり粉地黃煎にて育て居る時、合借屋の內儀が其方を肝煎呉れられて、夫婦になつて次男重五郎をまうけ、兄第共に分隔てなく愛み、身を捨てゝ共に挊いで呉れられし故、今此富貴の身とはなりぬ。さあれば是からは其方と一所に法體し、未來迄も一つ蓮と後の世を願ふが女夫の本道なれ共、添はれぬ仔細あれば、其方には只今隙を遣つたれば、ふしよう乍ら此家を去つて、尼法師になりとも成つて、後世を願ひなり共、又は相應の年寄男なりとも持つて、世をたてなりとも心次第にし給へ。暇の印には是を參らす」と、小判千兩並べ立て、「此外衣類諸道具何に

みもせぬ藥を無理に盛つて、慰に殺して見るといふやうな、世界にむごい事は御座るまい」と、隣方へ聞える程高聲上げて泣き叫べば、親旦那耳に入り、これは大方ならぬたはけを盡し居る事と、近所の手前を思うて、寢所から直に勘當々々。

内證は知らぬが佛有難い出家形氣

昔日は少年より見立てて、發明なるを出家になすが故に、名僧も出來て衆生を利益ありしが、今時は智惠才覺に構はず、武士の家にては弓馬の藝に疎く、又は病者にして公儀勤り難きを勧めて衣を著せ、町人は算用おろかに秤目覺えず、日記附さへならざるを、迚も商人には思ひも寄らず、世を樂に墨染になれと、親類了簡の上にて髪をおろさせ、法師となせる事なれば、衆生を勸める事は置いて、其身の取置さへ覺束なし。沙門となれる見せしめには、衣著して表向精進勤むる分ぞかし。爰に若い時不仕合打續き、生國大津を分散し、身代仕舞うて都に上り、やう〳〵鍋一つにて釜の座に小家を借り、門は印の杉を靡かし、僅なる酒商賣をせしに、正直

「昨日のお藥を食べさせますと、ゐづきが出まして足が冷えて、小便を通じませいで難儀仕ります。何樣ぞあの世へ參られませぬ樣に、加減をなされて下さりませ」というて來れば、又其處へ横町の角の七兵衛が女房が來て、「夕のお藥から腹が頻に下り出しまして、大熱がさしまして、狹い所を夜中くる〱廻つて、昨日の旦那殿は善いお人で、奴茶屋で酒飮めとて兩人へ二十づつ增を下されたと、譫言申されましたが、夜明方からがつくりと成つて、最早寢がへりも得いたされませぬ。あれ程俄に弱られませうとは存じませなんだ。何卒元のやうになされて下さりませ」というて、見世先に腰を掛けて待つて居る所へ、貸屋の嚊が涙片手に、「如何に貸屋風情の子ぢやとて胴慾な、一服で物もいはずに、目を白黒して居るやうに、あたる藥を飮ましやるものか。貧乏人の子は殺しても大事ないか。なんぼ大屋殿でも、あの子が死ぬれば遁しはしませぬ。相手で御座る」と涙と共に喚けば、手代氣の毒がり、「只今は若旦那寢て御座る。起きられたら樣子をいうて、名人の小兒醫者を此方からかけて能い樣に致さう。先歸なしやれ」と賺すれば、「人の大事の子を殺しかけて置いて、朝寢して居らるゝ場か、起しまして下され。賴

として隱すは、親子自然の道理にして、人の心の至極せる所なり。道理に從ふを直とす。然るに今手代大勢聽く前にして、茶屋狂する子の罪を顯し給ふは道理に背けり。如何ぞ直とせんや」と云へば、親父苦々しい顏にて、「猪口か皿か知らぬが、其の陳ぷん漢ぷんが家業の妨ぢや。假名で算盤稽古召されよ」と教訓を致されぬ。或時讀書の師匠件の子息に向ひ、「伊川先生の語に、貴賤共に生を請けたる程の人は、醫道を知らでは適はざる事とあり。其子細は、我親又は子供などの病みわづらはん時、其身其道理に暗くして藥師の善惡をも見知らず、無學の醫者に打任せ、療治させせんは誠に比類なき不孝不慈なり」といひ聞かされしを聞きて歸るや否や、俄に結構なる藥箱を拵へ、樣々の藥種を調へ、療治の手習に家内の丁稚久三郎、下女のたまなどを反故として、疼うもない腹を擦りて、無性に藥盛る事を月花にかへて面白がれば、藥代の出ぬを悅び、お名人とそやし立てゝ、借家の亭主出入の婆嚊、療治を賴みに來れば、おき掛けた十露盤棄てて脉をとり、仕掛けた商差置いて藥を合し、家業を外になし療治にのみ心を盡せば、商見世へ夜明から物買ひに來る人かと、手代手水もつかはず立出でて、「何が入ります」といへば、

お前の事は近所の御子息方の身持の手本と、蔭で人毎にいかう賛めます事で御座ります」と追従を云へば、其返答はせずして唐扇子をしやに構へ、「巧言令色鮮矣仁というて、其方が樣に輕薄を本とする者は、我本心の德を失ふ、表裏者とは汝が事ぢや。手代共が見習へば惡い、重ねて出入無用」といひて、可笑氣なる顏をすれば、數年入り來る者もそひよりなくて、盆正月の禮にさへ來惡がり、賑に有りし家めつ切と淋敷なりて、手代共氣の毒がり、「若旦那の學問は此家の破滅の基ぢや。何やら五倫の道だていうて、壹分も商の助けになる事はせいで、子の曰ふ仰せらるゝ手間で、ちと算盤を稽古なされたら、お家のお爲にならう」と親旦那の耳に入れば、親父尤と點頭き子息を呼附け、「汝學問立をして、商賣の道を脇にするは大なる誤、其上儒道を學ぶ者が、夕も茶屋へ行きて夜半八つに歸り、己が酒機嫌に任せ、湯の水のと寢て居る家來共を起し、たはけを盡すが儒者の敎か。論語讀みの論語知らずめ、重ねて書物を止にして、帳合を大事に掛けよ」と、額に皺を寄せて叱るゝ詞の下から、子息は又物知顏を止めず、「父爲子隱子爲父隱、直在其中、といふは孔子の語なり。父の罪をば子として隱し、子の罪をば父

らば、何事にても苦しからず世の樂なるに、皆人心盡せし振舞に逢ひながら、其座を立てば、花の生けやう炭の形を譏りぬ。是を習ひ得て茶入の名を附けて見る程には、おつ取つて十年の稽古なくては成難し。總て連俳、立花、獨狂言、彼樣の類は銘々の自慢、差當つて善惡の沙汰もならざる事ぞかし。手跡鞠音曲などは、忽ちに知れて人に目あり耳あり、殊更世間に有徳仁と、持囃さるゝ程の子息の惡筆なるは、內證に何樣な藝が有らうが、見落さるれば、人たるべきものの嗜むべきは、第一は筆道修行の後、學文の外なしと物知れる人の云へるを、子息殿聞いて歸られ、今迄百色も習ひかゝりし藝能をさらりと止めて、俄に書物とゝのへ、浪人儒者の許へ通ひ、四書の素讀大方に濟むと、我等儒學仕ると、はや鼻の先へ現し、人を非に見て我智を振舞ひ、親父朝暮の看經を聞いて、何をたはけを盡さるゝ、極樂の地獄のといふ事、今日口を食ふ爲の賣僧のいへる虛言といひ破り、佛法を異端と貶しめ、今迄の形氣と變り、無性に仔細らしう爲つて、出入の者が銀借りに來て、「是は若旦那には此お日和のよいに、何へもお慰にお出ではなされませぬぞ。內方に計り御座りましては、お氣が詰りませう。さりながら

異見はきかぬ藥心を直さぬ醫者形氣

倩世間を見るに、親より其子萬事に劣り、其孫愚に、親に優れるは稀なり。第一今の人間往古とは氣根劣りて、諸事の藝者も極意まで習ひ得る事難し。醫學も一人に足らずして、俄剃の頭を振り、武士の具足と思ひ拵へたる淺黃縮緬の長羽織に、小脇指藥箱丁寧に拵へ、我を見知らぬ他國の大場に住居して、名字を仰山なる張札門柱に現し、化粧造の玄關構、押出しての療治するなど、人の命は大切なるものなるに、此生死の境二つ一つの大事、藥師人を殺すとは是なるべし。又茶の湯は和朝の風俗人の交り、心の花奢になるのひとつなり。是に入っての德は當住萬事に氣の附く所格別なり。今の町人茶事は榮耀と心得、諸道具に金銀を費し、數奇屋長露路に商繁昌の地をせばめ、美食を好み、衣服を更め、萬に淸らを盡し、此奢に家を失ふ人かしこき都にも數多あり。さは云へど此事辨なきは、人間不恙にして口惜しき事のみ、或は缺茶碗にしても其志一つなり。元これ作意なれば、一通り手を引かれ、其上の道理さへつま

一生女嫌ひ藝子を請けて我宿の眺め物

大力は身の疵身代なげた相撲取形氣

將棊大臣金銀で末社を歩廻しにする銀貸屋
大關と名乘つて角屋敷を棒に振る力自慢
世間を止めての淨瑠璃好末一段に語りつめた身代

世間子息氣質　二之卷

目錄

異見はきかぬ藥心を直さぬ醫者形氣

學問立は仔細らしい口上に舌を卷物屋

親父も匙を棄てゝ療治に竭きた子息が身持

身に引請けた勘當風逐には家を追出し藥

內證は知らぬが佛有難い出家形氣

いろは附の通ひ樽に醉ひもせず京の酒屋

節季を知らぬ山寺打あかしの讀がるた

り其れであらう」と、親父の耳へ入れらるれば、子がゆすりといふ仕掛を知らぬ時代違の親父驚かれ、「外聞かた〳〵家の破滅、悴子がすいた女房なら、卑しい者の娘で有らうが、命には易へられぬ。今なりとも呼び迎へて取らすべし」と、重手代に云渡し、萬助に様子を尋ねらるるに、太夫花崎身請して添ひたいとの願、「世に無い慣ではなし、隨分直切つて請けて遣れ」と、千兩の小判耳を揃へて聽いたり〳〵、子息が心中の狂言。

や。正眞の世界に子といふものは繪にかゝうというても、あの萬助より外にはない。旦那殿の朝から晩迄世話燒かしやるも、有る上にも金を殖して、あの子に遣りたい〳〵と思うてのお世話ぢやに、何時からやら少々金を遣ふゆゑがみ〳〵と云はるゝも、あれが物が減らうかと、皆萬助を可愛さのまゝ仰しやる事ぢや。先づ何にもせよ、夫程不食しては身が堪るまい。あの子が好物の料理をして、先づ飯數を增してたも」と、母人の心遣ひ、是を何とも思はぬ忰子は、立所に罰も當り冥加にも竭きさうな物ぞかし。腰元のくめ萬助と仕組なれば、「とても生きて居ぬ身ぢやもの、何故に飯くはうと獨言を仰しやりましたれば、何して進げましたとあがりは爲されますまい。此樣申したら萬助樣の、口がまめなとお叱りなされうも知らね共、おぬしのお部屋に挾箱に封附けて、大事さうに取廻して置かせられますは、私は胡散に存じます」と口びら反らして申せば、「其は心元ない」と萬助部屋に行きて、件の挾箱封切つて見給へば、死拵への一式なれば母親驚き、「此頃は心中が流行つて、荒神川原で米屋の子息とやらも死ぬる、唐崎濱にはびやうぶ屋の娘、鳥部山祇園林、彼方此方に名を流して死んだ者が多ければ、是もてつき

うても、内證の甘い所の高を見透し、僅貮三千兩など遣うたとて、耳八釜しう異見々々が聞きともない、ちと方便の狂言して、重ねて異見せられぬ樣に、懲しめの爲親父にちつと鹽を踏ませうと、箔置の木刀拵へ、卸の仁兵衛が婆の血脉をかりて來て、白小袖二つに百八の珠數一れん、挾箱に一つに入れ蓋をして封をつけ、腰元のくめに袖の下から黄なる物を握らせ、我身の上の狂言の仕組を吹込み、女共の髮結ふ二階につくね飯を上げさせ置き、四五日は一寸外へ出でずして、朝食、晝食、夜食、時々に据ゆる膳に向うて、苦い顏して一口も喰はず、先厭ぢやとさし置きて二階へ上つて、件のつくね飯をしたゝかせしめ、腹の城郭慥にして置き、据わる膳は佛樣か白人に据ゑた樣に其儘さし置き、物案姿にて折節は欠伸をし、可笑き事があつても隨分堪へて笑はねば、母人は目を附けて、お物師のぬひ腰元のくめを招き、「萬助が此頃の體は合點が行かぬ、何所も惡いとは云はぬか」と、氣の毒さうに問はるれば、お物師腰元口を揃へ、「お心惡いとは仰せられませぬが、朝御膳夕御膳お夜食共に微塵もあがらず、人の見ぬ所では涕を醱して御座ります」と云はせも果てず、「其を今迄こちらが耳へ入れて呉れぬは胴慾ぢ

てせがめば、傳七手を合せ、「何を隱さう此内には女夫が物を預け置いた質の札が二十三枚、流すといふ緣が惡い。汝等が世話燒かいでさへ、流れさうで氣味が惡い」と、大笑になつて、跡は亂酒の無性立、お籠輿に乘せまして直にお宿へおくらせ申し、さあ仕合の川流と、亭主算盤はじいて見るに、時の間の道具代金銀合して五拾三兩貳歩貳朱と、大黑棚の悅びの鈴を鳴らす所へ、料理人下男濡れたる道具をさし擔ひて、松原からかたげて歸るは、此趣向始まると亭主其儘川下に人を出し置き、箸かたし迄洩さず上げさせ、帳附の代金は此川に手も濡さずの儲けと聞きぬ。されば人間一生の中に、一度は色狂に取亂さぬといふ事一人も無し。何卒面白き中程にて、神佛のお扣へあつて此遊興を止めさせ給へば、居宅も賣殘し商賣物も小體にして、渡世に取つゞき、身を捨てゝ働きければ、町内世間の人親類の末々迄も、今迄は若氣と了簡して容しぬ。必ずさう善き方へは步まずして、大概が貧乏神に腰を押されて、迚も續かぬ身代、今から通ひ止んだとて、遣ひ棄てた金銀が戻る物ではなし。僅に知れたる此世界、詰る所は腹切仕舞と覺悟極めて、通ひ〳〵て行當つた所では必ず死なぬものぞかし。萬助親父が表向嚴しうい

なされませ。孰れもておふざおふになされて、道具の混亂せぬ樣に景氣よう流しませうぞ。如何樣これは變つたお慰み」と、物馴れた透さぬ亭主なれば、半紙へし折り帳に綴ぢ硯引寄せ、「へぎめの折敷五枚代金壹兩、さあ帳に附いた流した〱」と聲を掛くれば、一座興をなして手に手に川へ投げ込み、罪も酬も知らぬ顏附。亭主は道具に倍うつての直打書、「此赤繪の皿十枚銀貳百拾五匁、かん鍋が五十九匁、さし枕九つ三歩二朱、昨日購めて未だ鰯一疋きらぬ柳まな板代八十六匁、杉箸百ぜん二十三匁、友治盃金二兩、煙草盆煙管五本添へて壹兩壹歩、米かし桶六十五匁、擂木壹本代八匁、杓子三本拾匁、女房共が櫛箱おはぐろ道具一式合せて五兩一歩四匁五分。さあ是ぎりて家内の道具は、御眞向樣の表具が殘つた計り、帳の附け序に隣の取揚婆の世帶道具も、一所にお流しなされまいか」といへば、殘りの末社詞を揃へ、「汝が日來旦那衆に貰ひ溜めの花を入置く、前巾著も出せ」と取附くを、「是は許せ」といやがれば、「偖はしこだめた壹歩が有るゆゑ出さぬか。壹歩ぐるみに代附して旦那から申請くれば同じ道理、太鼓持の前巾著はよいお衆の土藏同前ぢや。其れを流させねば可笑からず」と、厭がる程面白がつ

中にも筒拔の傳七といふ末社が、「此頃西川端に宿を持ちてはたご茶屋を仕る、あはれ見苦しくとも旦那お還りにお腰を懸けられ下されなば、外聞かたぐ〵有難い仕合」と、額を疊に摺り附けて申せば、御機嫌の善い折にて、幸ひ此座の色まじくらになりこむべしと、直に一座の者共を殘らずお供に召し連れられ、傳七方へ御來臨辱き仕合と、亭主は槌で白人まじりに、樣々の饗應、「取附世帶の借道具、此椀折敷の見苦しさ、さらりと仕易へて吳れまいか」と、堪へ性なき旦那の御意、畏つてお側に扣へし飛上りの休古、分別なしに据つたる吸物椀、前なる川へばつと流せば、面白の有樣やと、大臣浮れさせ給ひ、「迚もに折敷も流して見よ、氣が變つて可笑かろ」と、無性なる御機嫌、是はよい事仕出したと仕澄し顏に、休古は又折敷をも流さんとするを、亭主驚き勝手より走り出で、「こりや家主からたつた今借つて來た道具ぢやに、よい年をして何事ぢや」と、むつと爲たる顏附、大臣見給ひ、「借物でも金で返したら否とはいふまい。今の流れた氣色の面白さ、何よりの馳走ぢや。道具代は出さう程に、まそつと流して見せて吳れよ」との御意、「何が偖道具代とてお金を遣はさるゝからは、此家なり共お望み次第にお流し

取附世帶は表向を張つて居る太鼓形氣

世盛の金花、山吹色の眞劍商ひ、兩替店に紺の長暖簾下げたる家の主人、預金にて壹匁も損せず、肩のよい人と呼ばれ、次第に繁昌の軒を並べて隣を買ひたし、十年以前とは格別の暮し、加賀笠著て下女につぎ〳〵の袋持せて、物參りせられし內儀は、おくまと呼ばれて假初にも大乘物、兩脇に花やかなる腰元連れて、年がましき手代が附き、萬事を花麗に上歌舞伎なる最中に、生れ合せし惣領の萬助が至り形氣、稚い時から辛い目を見ず饒に育ちて、己が家業の日廻銀の算用さへ知らず、覺帳は上書する時に見た計り、讀みおほせても公家にもならぬ三十一文字に首を傾け、韵字をふみて花を眺め、釜を煮して雪を樂み、裏借家を毀つてかゝりを拵へ、夕暮の鞠に魯陽が戈を羨み、楊弓の射場で大金貝の看板に乘つたとて、一町へ强飯を配り、旦暮の遊事の透には西東の色狂が仕事、今日は靈山の稽古能見物の歸りに、祇園町の文字方へお立寄り、例のお側去らずの太鼓共、お出と聞くより招かざるに集り來りて、そゝり上げ奉る。

跡より來り、「あの馬は古への小栗判官さへもとねに爲かねられし鬼鹿毛に似たるとて、横山栗毛と名附けられ主人の祕藏、是に首尾よく乘る者は、廣い家中に僅一兩人ならではなし。然るにおのれ賤しき身として乘靜めんとは慮外千萬、得乘靜めずば此馬の餌食とするが合點か」と睨み附くれば、「成程乘損じましたらば如何樣にも御存分に成るべし」と、木綿布子の裾端とつて腰に挾み、寄るよと見えしがひらりと乘つて、兩鐙をしかと踏へ、祕傳の手綱を持つて引靜むるに、さしも猛かりし馬弱々となつて自由になれば、侍大きに感じ、殿のお乘物に走り附き、御近習衆をもつて右の次第を申上ぐれば、「其者もし奉公や致す承れ」との御意有難く、御乘物の前にかしこまつて、早速御目見え仕り、假初ながら主從の御契約申上げ、栗毛甚七と召され、直にお國へ召連れられ、段々御意に入りて、願の如く五百石取となつて、年月嗜みし武藝の功、今此時に顯れぬ。

組中も我を折つて、さても一騎當千のたはけ者、相手にはならぬと、親父に向うて、「大事の御子息で御座れど、甚七殿をお手前に置かせらるゝ御所存なら、御親子共に他町へ御座つて下され。あの無分別の旗頭を此町に置きましては、何樣な災が出來て、年寄組へ難儀掛らうも存ぜぬ。勘當なされうとも、内證勘當の分では、親一門の難儀は遁れますまい。御思案なされ」と會所にて口々に申さるれば、親父も覺悟極めて、子を持たぬ昔と思へば悲もないと、母親にも諦めさせ、世間晴れての勘當、身から出した錆身の脇指一腰計りで、親の家を立離れ、伏見の片脇に崩れ次第の家を二十五匁五分で貰ひ、漸々爰に獨住、微なる朝夕の煙を立て、蚊屋なしの夏の夜を凌ぎ、蒲團持たずの冬をおくり、扇の要を刻みて三年三月の日數を經る中に、西國大名のお通りの折柄、御祕藏の名馬と見えて、馬取七八人口について來りしが、何にか驚きけん馬取共を跳倒し一散に駈け出し、崩れかゝりし在家へ入りて跳廻れば、祖母嚊稚い子供ども怯ぢ怖れてこけ廻れば、馬取ども追々に馳來り、止めんとするに止らず、倦み果てて居る所を、甚七罷出でて、「御許されも候はゞ、憚りながら私乘靜めて進ずべし」といへば、侍分の者

とせられても、あの構では中々喰はさるゝ事でない。是が黄石公が祕せし一打退身と云ふ虎の巻の大事ぢやが、なんと身共が心掛の程を見て置け」と、額に皺よせて臟を揉んでせられし異見は他所に聞き、只兵法の自慢して、いよ〳〵さかんになつて來れば、寵愛の悴なれど、親父分別して見らるゝ程怖しうて夜が寢られず。世にある若氣の至りとて、傾城狂野郎遊は、金銀を皆になし、末々身代がつぶれうかといふ案じより外になし、然るに我子の甚七が行作は、明日が日何の樣な血臭い事を仕出來して、親の首に繩を掛けうも知れ難しと、是より氣遣絶えずして、町衆を賴み異見して貰はるれば、「淺ましや偶々うけ難き人身をうけて町人となつて朽果つる事、此世に生れし甲斐はなし。是計りは釋迦如來がお出なされて、四十九年が其間長々しい異見を述べ續けに仰せられても、聞込む甚七では御座らぬ。手前商賣の衣の墨が白うなり、木馬に角が生ひて跳ねあるかうが、男と生れ一旦思ひ込んだ事を飜へす物でない。夫勇士の本意は心を變ぜざるを義とす。素町人等が分際で、一方の大將もせうと思ふ甚七に向ひ、武藝は商賣の邪魔で御座るとは推參な」と、爲思うて異見せらるゝ町衆に向ひて切刃廻せば、年寄も

さみし、「甲斐の信玄は智謀武勇を兼備へて、思慮深き名將といへども、信州川中島の合戰の時、山本勘助を頼みにして、徒に謙信の陣を西條山に見やりて、川端に備を立てられず、夜の間に川を謙信に渡され、敗北せられしは油斷にあらずや。其時我等居るならば、云ふではないが、恐らく北越無雙の猛將と聞えし長尾の謙信の首を取つて見すべきものを、近頃殘念の至り」と腕を撫でて話すを聽かれ、愛子の事なれば今までは見ぬ顏して居られしが、此頃怪しからぬ行跡、親父もはやたまりかね、表へ立出で甚七を呼んで、「汝は知行取には爲るまいし、無益の武藝を嗜むこと曲事千萬、殊に家業は衣屋にて、出家衆を相手にせねばならぬ商賣、其代りに佛書でも見れば、僧正衆のお咄の伽にもなつて御意に入り、七條の袈裟でも幢幡の一流でもつい請取るまい物でない。向後柔術兵法を止めにして、袈裟衣の注文を請取るやうに致せ」と、嚴しく異見して奥へはいらるれば、甚七親父の跡を見送り、若い手代を近附け、「今のおれが居ずまひを見たか、氣の短い親父なれば、異見の上で烟管でも振上げられまい物でない。所をしやんと身を捻れば、此方には三分の强味あつて、親父方には六分の弱味あり。面くはさう

見せ掛け珠數に世話と念佛をくり混ぜて、人目に後生願と思はするも商の一手なり。是正眞の鬼に著せたる衣の棚、家造綺麗に袈裟衣の商賣手廣く、江戸大坂に店を出し次第分限となつて、何不足なき身上なれ共、年久しく子のなき事を嘆き、諸佛神へ祈誓をかけ、たま〳〵男子を設け、花にも月にも眺め大事に育てし甲斐ありて、十六歳にて元服させ、甚七と名を改め、お華主の知行寺其外問屋方をありかせ、天晴れ器量の若い者と、兩人の親は我子自慢して、此上の富貴に何にても望なし、此子が娌に成るべき容儀もがなと、是を聞立てらるゝより外なく、成人の子を甚七々々と猫撫聲にて、寵愛限りなかりしが、甚七町人に似合はざる武藝を好み、我内に木馬を拵へ、知恩院門前に馬上の達者の牢人あるを師と頼み、朝暮馬に乘習ひ、祕傳の手綱の大事を傳はり、是より兵術を稽古し、座敷の疊を上げさせ、板敷にして毎日手代小者を寄せ品柄打の相手とし、萬事を止めて此藝を勵む事大方ならず。ある時は卷藁をたて弓を射て手前を試み、是がつのりて御幸町の具足屋へ鎧甲を誂へ、縅立てたる物の具を大床に飾り、平生も武士行儀に身を堅め、湯風呂へ入るにも一腰を離さず。軍書を讀みて古への良將の軍立を

倘惡道へ歩まする不思案なり。勘當せらるゝ程の不所存になりたる子息なれば、此時に目を覺し、先非を悔て心を改むる悴子は稀なり。必ず勘當面白いと逆になつて、更にわろびれたる體もなく、惡所友達太鼓おろせが方に行けば、お前の御身代で千兩や貳千兩お遣ひなされたとて、御勘當とは親父樣がせちべんな、お氣遣ひなされますなと、其より善い者には交際絶えて、次第に惡黨中間へ誘引せられ、樣々もがり分別を習ひ得て町所を擾がし、親に瞋恚を燃させ、假にも正道なる心は出さず、奴形氣となつて見事親が合力せいでも、乞食は致さぬはと、おやま奉公の肝煎して分一を取り、筒もたせの挨拶人になつたり、新田金山の形もなき騙事を拵へ、昔の形氣に百倍惡うなつて、後々勘氣許されてからが善い人間とはならぬものなり。そなた子がないとて味氣なう思やるな、有つてからが譲る物無ければ、無い方が遙に仕合々々」といふ聲の下より、烈しき風に連れて親仁さらば〳〵。

勘當は請太刀親の家を鞘走る侍形氣

に憤り惡人となつて、家を失ひ身を亡す人多し。凡そ世界の惡人親の仕業ならずして、誰が業といふべき。殊更近年は親の心も上歌舞伎になつて、身代不相應に奢り、子供に遊藝を勵ませ、家業の事は親父が捌き、年中打囃子にかゝらせ置き、町參會に御子息のお鼓、此中東山の稽古能で承りましたが、中々扶持人の役者も及ぶまいと、是のみ評判で御座つたと賞めそやすを喜び、いよ〳〵親父乘つて來て、內緣を求めて貴人の御能の役を勤めさせ、家の面目世の外聞と、無性に金銀入れて習事を傳受させ、身共が忰子はもはや亂道成寺を許されましたと、子自慢せらるゝ中に、此若子樣よい事にして、不斷よい衆交際して、浮世の悴を知らず、打囃子と好色に身を染め、數年親の貯へ置かれし金銀我物と盜み使ひ、隱居の心當の小判迄に手がつき、是はと親父始めて驚き出し、日來愛せし細目も猿眼に變り、不便氣去つて一門町中の詫言も聞入れず、勘當して遂ひ失ふ。是皆幼少より有りたき儘に育て、教へずして惡人になすは、偏に鳥の見ざるやうに網を張り置きて、今勘當の苦の網にかくるが如し。殊に近年懲しの爲の勘當とて、諸一門示し合せ、鼬をふませて倦じさせたが後藥とて、直さう爲の方便の勘當、是

つ物となほさず、鐵槌にて茶釜たゝき割るを見ても、あの思ひ切つた氣の强い所が男ぢやと却つて賞めそやし、餘所の子の五歳にて大學讀むは耳に入らず、我子の十一に成つて、茶碗たゝいて歌祭文の眞似するを、あのゆる節の所の思入を聽いて下されと、客の有る度に語らせて悦びぬ。其親の叔父たる人見兼ねて、尤そなたの子は發明なとはいひながら、昔時から走る馬にも鞭といへば、ちと折々は行儀を直されよと、身の中とて心を附くるに、皆迄仰せられな、惣じて稚い時に躾を教ゆれば、入目に成つて病づき、蟲など出でて後々迄の煩となれば、幼少の時は息災なを勝にして、ありたき儘に育て、骨身も堅まり物の心も辨へる時分より、萬の事を教ゆれば、早く合點し、異見もよく聽入れる物なりと、それなりけりに育上げて、後には持餘して勘當する事、是皆親の科ぞかし。木竹を造るにも、若き内よりそろ〳〵矯め造れば思ふ如くなれり。ひねて後矯めんとすれば枝折れ枯れ凋むが如し。又其子成人しておのれと恥かしき事を知り、惡しき曲を直さんとすれば物うく、元氣を減らし、或は窮屈にて癆瘵となり、親より先達ち父母一生の思となれり。又己と發起もせず、異見をも用ひざる時は、親は怒り子は恨み、互

寄る年の加減と、老の坂に杖して息む所に、十一二歲なる小賢しき小坊主、大きなる鼻毛拔を持つて跡より來り、不審に思ひ近づけて樣子を聞けば、此小坊主木賊賣の親仁を見て、「そなた身には辛勞すれ共心に勞する事なく、女夫中よく惡念のなきは、子といふものの無き故なれば、產まずの內儀を馳走めされ。御身正直正路の人なれば我眞をあかす。予は是其所々の產宮に使はるゝ小步行の小法師なるが、氏子は千金にもかへじと大切に思召す子供を、あいたてなく育上げ、成人させて後我儘いうて、親の手に餘るとて勘當帳に附けて舊里きる、親々の鼻毛を拔いて廻れよとの氏神達の神勅を請けて、只今都の方へ赴く」といへば、木賊賣合點ゆかず、「是は何とも飮み込めぬ神使かな。總て一身の外に大切に思ふ物は、世界に子といふものより外にはなし。其大切に可愛子を勘當して逐ひ失ふは、能々不孝にして親の心に背く故なれば、其子は大罪人にして、親に科といふ物なし。何を以てか氏神は、其勘當する親々の鼻毛を拔きには廻さるゝぞ」と、不審さうなる顏附をすれば、小法師答へて、「司馬溫公の語に、子を養ひて敎へざるは父の過なりとかや。今時の親心愛に溺れて左の手して箸を持てど、後には我とも

とて、世間をつとめ大勢の手代を引廻し、氣骨を折らでも緩りと暮さるゝ世を、親父無分別にて無益の世話を燒れし事よと、高ぐくりして二十の前後より商賣やめて、無用の竹杖おき頭巾、長柄の傘さしかけさせ、世上構はずゆたかなる顔附、いかに己が金銀遣うてすればとて天命を知らず、人は十三歳迄はわきまへなく、其より二十四五迄は親の指圖をうけ、其後は我と世を挊ぎ、四十五迄に一生の家をかため、遊樂する事に極まれり。何ぞ若隱居とて男盛のつとめを止め、多くの家來に暇を出し外なる主取させ、末を頼みしかひなく難儀に逢はし、世の人の請拂する二季の際に、手飼の座頭に三味線引かせ、女房に琴腰元に茶を運ばせ、萬しまうた屋の氣散じ、心積りの算用よりは毎日の奢に、親の儲け溜められし金銀そろ〱減出し、程なく内證に穴のあく屋根をも葺かず、孫の代には古家一軒殘らぬ樣になつて果てる物ぞかし。爰に奥丹波より都へ木賊賣に出る親仁、本卦に還る年迄夫婦の中に子といふもの無くて、我等女夫は一代者と觀念して、物を貯蓄へる所存なければ、其日拂にして心の樂み、世にいふ淸貧とは是なるべし。今日も木賊荷うて京の方へ賣りに出でしが、去年よりは辛勞に覺ゆるは一つも

木賊賣は心を磨く正直な百姓形氣

昔時誰か云ひけん、親苦勞する其子樂する孫乞食すると、世界の子供の行跡を未然に考へ、いひ置きし言葉は拙けれ共、信なる金言、今なほ是を感じぬ。世に愛する月花にも心をよせず、胸に算盤を忘れずして、常住香の物菜、此外にはいかな〳〵三月の櫻鯛を壹枚、松茸十本貳分する時も目に見る計り、咽が乾けば白湯に香煎、油火も眞中に一つ點し、是を寢ざまに消して、鼠があれても、膳棚にたしなみの肴置かねば氣遣なく、盆正月に著る物せず、夏冬內では袖なしの襦袢一つで暮し、年中始末に身を固め、金をのばして取らしたやと、子故の闇に黑き髮の白くなるまで其身を使ひ、悴子に榮耀させて我は手代同前に働き、萬貫目の銀に世間の面白き事を見せず、藏々にうめかせ一生狂死して、一家一門家來迄、著古しの布子一つ形見とて遣る事の嫌ひな親父なれば、箸かたし外へ散らさず、金銀家藏釜の下の灰まで手も濡さず、一子讓りを請けて、仕にせ置かれし商賣、又は棚賃、貸金の利積して、是程年中はいれば商せん

友達に唆されて乘つて來る馬上の達者

取付世帶は表向を張つてゐる太鼓形氣

白人に上り詰めて金銀の雨を降す兩替屋
大臣羽織は八丈の島罪なうて流さるゝ諸道具
無分別の大風二親をゆする見懸の木刀

世間子息氣質 一之卷

目錄

木賊賣は心を磨く正直な百姓形氣
丁百になる親父の目を拔いて盜遣の白銀屋
親は子ゆゑにのばす金子は色ゆゑにのばす鼻毛
母の異見はあまくさび島原通の一騎打
勘當は請太刀親の家を鞘走る侍形氣
町衆の異見でも角を折らぬ鬼に衣屋
慰に身を賣つたり品柄の稽古

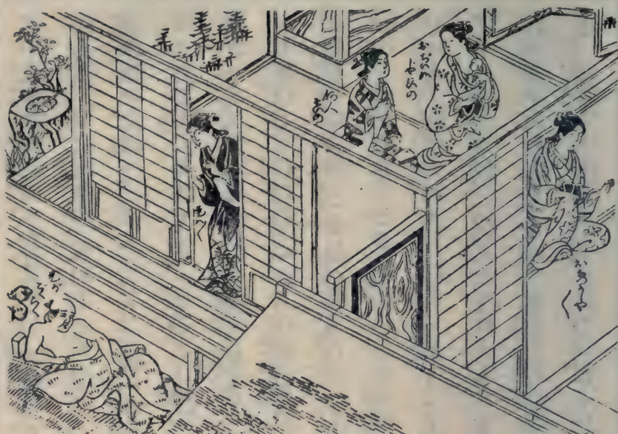
正徳五ッの年の秋　　　　其磧

序

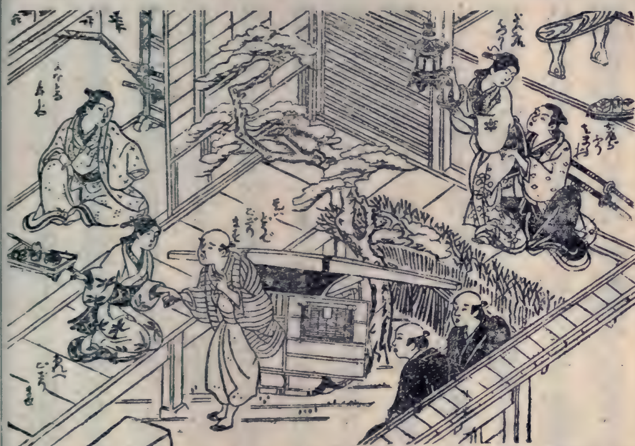
人生れて八歳より小學に入り、十有五にして大學にいたる、古への法なり。今時の子供を見るに、八歳にて烟管を咬へ、十有五にして死一倍を借つて傾城を請生す魂膽、是人たるもの道と思へり。宜なる哉、教へずして人生れながらに知るものにあらざれば、若子樣ともてはやされて我儘に育ち、無性に高うとまつて、己が家業に心を寄せるは、至らぬかなと賤しめ、諸藝色遊にかゝつて放埓に身を持つを、銀持の風俗は斯くこそと思ひ込んで、自ら非を改むる心はなくて、分際不相應の遊に親の讓り銀を皆になし、昨日迄は大臣と呼びし男、今日は太鼓の鍼立坊となつて、老いて辛勞する人あまたなり。是皆幼少より父子の禮儀たがひ、親は子に孝行をつくし、身の脂を出して儲けてあてがひ、子は親を不粹なりと見くだし、今あの堅さでは世間はつとまりませぬ、隨分異見致せど、誰に似てか片意地で直されぬに困ると、彼方此方に變つたる世間の子息氣質、樣々なる事を書き集めて、すぐに題號として梓に彫め、孝にすゝむる一助ならんかし。

その儘木綿の繻袢を著せて置きぬ。扨昔から御酒がお好とて、高蒔繪の大盃を出せば、「是よりは茶碗で」と望む程に、「いかやう共御心まかせ」と、其日は行儀を改めず、段々野菊が作法共をいひ聞かすに、「とかく本の住家へ歸して給はれ、爰にゐて朝夕結構なる生食を喰うて、疊の上に荒働せずにくらしては、中々命が續かぬ」と、夜も紫蒲團の上には寢ず、人寢しづまれば音せぬやうにそつとぬけ出で、庭に荒筵一枚敷きて、裸身付けて是極樂と悅びぬ。然れ共若殿の祖父樣なれば、家來の人々も此行舞を笑ふこともならず、とかく御機嫌のよいやうにと、樣々もてなす程苦しがりて、「たゞ古巣の埴生へ歸して給はれ。美食を給べてたゞるゆゑ、骨々いたみ迷惑いたす」と難儀がれば、「然らばお慰に千本槊をさせませ」と、俄に黑塗に高蒔繪の地築棒こしらへ渡せば、是々と悅び、身には小袖をまとひ、置頭巾にて、「ヤアレ、天滿の、ヒンヨエ」と、月花にかへておもしろがり、一生安樂にくらし、八十八の升搔切つて孫の殿に奉り、百歳まで堅固にて、おほくの人に御隱居樣とかしづかれて、大果報の親父、猶繁昌の時にあひて心のまゝの榮花、めでたかりける老の入前。

て、奥様の御部屋へかき込み、乗物の戸明くれば、又兵衛人心地はなくして、即座に氣を取失ひしを、漸に呼生け、氣付などなめさせ、心をとくと靜めさせて、奥様側へ寄らせらるれば、現在の娘を見違へ、尻しざりして疊へ頭をにじり付け、何をいふも耳へ入らず。「御慈悲に御助けなされて下さりませ」と、ほろ〳〵啼いて申せば、「是私はこなさんの娘お菊でござる」と、詞をかへして申さるゝに、漸〳〵合點して、「扨もお菊か、生をもかへず其やうにもなる物か」と、是より案堵して悅びぬ。「さらば親御樣に御小袖召替へさせませう」と、黄無垢の下著に黑羽二重の紋付の著る物、「御肌の帶も仕替へられませ」と、龍門の下帶をあてがへば、おし戴きてかきかへ、始からしてゐる虱のわいた木綿のふんどしを袂へ入るゝを、「それはお捨てなされませ」と、女中方笑止がれど、「是もたゞでは出來ませぬ」と、小袖に著替へて俄に身をふるはしてくるしがる體、「何となされました」と野菊氣づかひして尋ねらるれば、「我等に馳走ならば、此小袖をぬがして、今迄の木綿の袷をきせて給はれ。身中がこそばうてどうも著ては居られぬ」と、色青うしてくるしがれば、「召しつけて御肌馴れし御著物なればさも有るべし」と、下には



なし。去年呉服町の大文字屋の普請にやとはれし時、穴藏をほりしに、赤銅の鯰の目貫を片斷なしに拾ひましたより外、人の物は錢壹文ちよろまかした事、日本國中の神々を誓文に入れござりませぬ」と、手をすつて申せば、瀬平治をかしく、「いや〳〵御氣づかひなる事ではなし。御自分の御爲には大分よい事なればお悦びなさるべし。御内方樣御堅固でござらば、さぞおうれしう思召さんに、去々年お果なされし段、奥樣にもいか程か殘念に思召し、委細の樣子は御屋敷にて申上ぐべし」とて、つゞれを著たる又兵衛を乘物に打乘せ、飛ぶが如くに屋敷へ歸り、すぐに奥へ入申せば、多くの女中方乘物を手ぐりにし



生みければ、一家中の悦び、幸若丸と名を付けられ、御家の跡目とかしづきける。それより野菊は奥様ひろめ有つて、御前様とうやまひ、奥方の親御様を、御屋敷へ入れ奉れとて、家來沼田瀬平治旦那の御意を承つて、乘物にて野菊が親を迎に來り、金杉の賤が家の、半分ちぎれたる繩暖簾をあげて、「中椀の又兵衞樣所はこれにて候ふか」と尋ぬれば、折節又兵衞中間の日雇取二三人寄りて、たがひの草臥やすめに、酒五合買ひて、伊勢天目の缺けたるにて呑んで廻し、世に是より上のたのしみあらじと餘念なき所へ、見なれぬ侍美々しき體にて尋ね來れば、又兵衞動轉して庭へ飛下り、私身において何も咎を仕りたる覺

よろづの指引、人皆悦びて直なる仕置者と稱美しける。豕子の夜は御家の御作法とて、御一門集りて御祝儀の酒盛、機嫌よく御立ありて、その跡は俄にさびしく成りて、東の方の書院に出で給へば、宵は月見しに空さだめなく時雨れて、軒の松無用の嵐をおとづれ、釣灯籠のゆらぐを、誰かははづせとありしに、野菊かいどり前して御意にしたがひ、灯籠をおろし立歸る面影、何となくしめやかに惡からぬ身ぶり、東そだちの女には、尋常なるやうに御心うつりて、後帶の端をとらへて、「我にいふ事有り」と、口ばやに仰せられしを、何の御用やら知りもせずして、「勿體ない事を」と逃げんとするを、抱きとめられしが緣の始にて、それにこしらへて夜の御伽の合點にて、御奉公にはるゞの都からくだりし妾ものどもには、御目さへやられず。さしてよい器量ともいはれぬ中椀の又兵衞が娘の野菊に、灯籠の夜から御不便くはへられて、度度御部屋へ御入有つて、此上の果報、程なく懷姙して、旦那の滿足がり、「四十餘に及ぶ迄子といふもののなかりしに、出來した。隨分身を大事に持ちて、安產をいたすべし」と、殿の御扶持人醫者をかけられ、御祈禱の山伏に、子安の祈を仰付けられ、月重りて玉のやうなる男子を

鼻ひくゝ胴合みじかく、尻ひらたうひょッと出て、耳のちひさき物ぞかし。是一概なる母のいひぶん、世に男子を調法して、其子惡事をなし、夢にも知らぬ親まで難儀に及ぶ事を思へば、取方には惡女の方が增しなるべし。男の子の玉の輿に乘りて、親一門浮みあがりし事を聞かず。中より下の町人は、器量の善惡はかくべつ、娘の子には世話すくなし。郭巨が金の釜よりは、寶をほり出したる鋤鍬の金相といふ所に、日雇取をして其日をやう〳〵に過ぎける中椀の又兵衛とて律儀なる男あり。一人の娘を持ちしが、手入してからがそも妾ものに成るほどの器量にもあらず。是喰つぶしと觀念し、十一二迄なりやひにそだてし所に、本庄の姨が世話にて、さる御大名の御家老の屋敷へ、十三より御奉公に出しけるに、奥樣の御意に入り、野菊と名を呼ばれて、十年餘つとめし内に、奥樣お果てあそばされて、お連合の御家老御歎ふかく、月日たて共今に妻女の事わすれ給はねば、おの〳〵内談して、せめては御思ひばらしにもと、色盛の艶女あまた取寄せ、御寢間のあげおろしに風情つくりて出しけれども、更に御心もかよはず、あたら姿のいたづらに過行きける。殿樣には御江戸詰にて、此御家老御國の御留守をあづかり、

替で金はからせぬ。是非に借らうと思はゞ、我を殺して其上にて借用せい。若い時から命を法花經に奉れば少しもいとはぬ」と、筈にはめた金を借りにやらせぬ親父の、ねちれん宗にはこまり果てける。

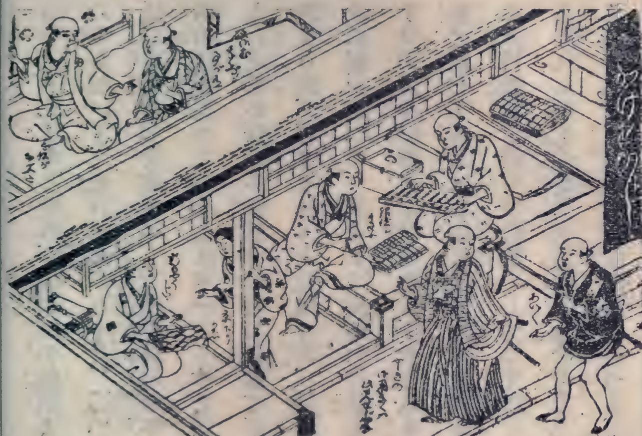
三　老を樂む果報親父

悪女の娘を年子に産みし、母親の述懐ごとを聞くに、十月のくるしみも、生るゝ時取上婆の骨折も、餅も鰹も味噌汁も同じ物入なるに、少しの思入にて、娘の子を悦ぶほど一代の損はなし。我子のかはゆきまゝに、顔付のむつかしい聟のきげんを取り、大分の物を入れ敷金迄付けて、夜のもてあそび物にやりながら、さられぬ樣にとお髭の塵をとり、五節供の祝儀物に氣を張り、臺所賄の口のわるい古き婆に、折々の心付して吉品に取なしをしてもらひ、年中の氣あつかひ、母の親の癪のたねとはなりぬ。せめて人並に生れつきて、當世風俗に色作りて、裸なりともらひたいといふ程なれば仕合なり。必ず男の子はうつくしく、娘の子は大かた顔ふくれ

にてなく、「こりや今もいふ通り、親代々の宗旨の爲にたをれてしまへ。八百兩の金のたらぬ苦よりは、高祖さまの龍の口にての御難を聞かぬか。法の爲に首の座迄になほらせられた此の有がたい御心ざしを思うては、身代分散にして丸裸に成つても、御報恩は謝しがたし。兩替で金からうよりは、又もとの法花宗に改宗して、萬事をすてゝ首題をとなへなば、たちまち空より七字の題目の、極印の打つた新小判が、千兩でも一萬兩でも、望次第にふつて來る事ぢや。身代を苦にせずと珠數を切つて、ひらに親の宗旨になれ」と、彼懐中の守經を出し、いたゞかしにかくれば、至孝の太郎助もむつとし、「啼く子も目をあけといふ事あり。家を立てゝの宗旨なり、此金がとゝのはねば、身代をしまはねばならぬと申すに、心もない題目所でござるか、無間へ落ちてもくるしうござらぬ」と著物きかへ、めいわくながら兩替屋へ自身行かんとする所を、おやぢ引止め、「高祖は一切衆生を憐みて、妙法をすゝめ給へり。我も汝が不便さにすゝむるを、無間に墮ちても苦しうないといふ、その片意地に染込んだ、南無阿彌陀佛の垢をすゝぎ、法花のありがたい宗門にすゝめ込むが親の慈悲ぢや。われらが息の通ふ内は、淨土宗の兩



ると、今からあの念佛門の兩替屋と、念比がさけうと思うて　是程滿足な事はない」と、息子はなげ首して案じてゐるに、親父は勇んでひとり悦び、酒のかんさせ手酌にて引受け呑むを、太郎助見て、「酒をまゐつたら是非兩替屋へござつて下され。御年寄られたれば、宗旨を大事に思召すはことわりながら、こなたをやしなひまする私がつぶれる事ぢや。ひとへに子をすくふと思うて、何事も堪忍なされて、どうぞ金子を請取つて來てくだされ。さなければ眞實明日から家業がつとまりませぬ」と、心には聞えぬとおもひながら、親の事なれば述懷もいはれず、美しうあしらうて賴むに、いかな〳〵親仁行く氣色



れらが參るはやすけれ共、兩替に手を見られては、借りたい時に猶かさぬ物なり。こなた太儀ながら今一度駿河町へござつて、日蓮をたとへ一れん半といふ共、蟲をしなし斷いうて借りてござれ」と頭をかいて申せば、「淨土宗にむかうて手をつかね斷をいふ事は、首足をもがるゝといふてもせぬ。此金が調はずして身代がつぶれたら、それこそ宗旨ゆゑの滅亡本望の至なり。不自惜身命とて、法義の爲には身命を惜まぬが、此方の宗旨の掟なれば、身上つぶしてなり共、宗門を守り、淨土の兩替から金からぬは、日蓮大𦬇への御奉公ぢや。第一つねから他宗と貸借するが聞えぬと思うてゐたに、雨降つて地がたま

のつもりしてゐる所へ、傳馬町の綿屋より、お金を少し借りたいと手代が來て申せば、「節句前の歩を引いて、先百兩渡さう」といへば、「貳百兩お借しなされて下さりませ」と賴む。「しからば二步半の利で渡すべし。後程請取り手形したゝめて來られよ」と手代をかへし、「是は何を駿河町に隙入つてゐらるゝぞ」と、少しは待ちかね欠する時、親父不機嫌にて立歸り、「いまいましい念佛めが所へ金借りに行てのけて、一代にない宗旨の恥辱を取つた。重ねてからあいつが所よりは、たゞくれうと言はう共、借る事は無用ぢや。あんまり日蓮大丼をわるうぬかした故に腹が立つて、借りずに歸つた。是そなたの手形ぢや」と指出せば、太郎助化轉し、「今金がすりの最中に漸々と斷いうて、七恩八恩にきて借る金を、借らずに歸つたとは興のさめたる詮索。惣じて商人は手廻しひとつにて利を得るものなるに、筈にはめたる八百兩を、役にもたゝぬ宗旨詮索で借らずに歸らしやつては、どうも太郎助が身代の尾が見えて、世間の人に内かぶとを見られ、大分身上の障りと成ります。人の内證は張物提灯、たゝんだ樣につぶれた時には、こなた迄が難儀ぢや。此金が參らねば、義定した所へ不埒に成つて、明日より商ひがならぬ。わ

らくさい。上行𦬇の再誕とは慥な證文があるか。こちは兩替證文のない事は胡亂に思ふ。日蓮坊が我身を慢じて自身上行𦬇の再來といひなば、自稱顯他は人倫の法にあらず、我慢強狂にして他宗をそしり、餘經をないがしろに言ひなす謗法の賊と、取りやりせん事穢はし。手形はかへす、手代共向後絹屋の太郎助とかしかり無用。小判表へ持つて行け」と、色を變へてのゝしれば、「おのれが貸りてくれよと頼んでも、無間の業人が金はたゞでもいやぢや。いまいましい借りはせぬ」と、證文引取り亭主をねめつけて、「題目をきらふは追付分散にあふべき前表。南無妙法蓮華經」と高らかに唱へて歸れば、亭主耳をふさぎ、「題目で家内がけがるゝ、手代共箒で掃出せ」といかれば、若い者共見世にあつまり、「今日は法問諍の相場が立つた。法花宗が二リンがたも弱かつた」と、手を打つて笑ひぬ。

二　經を樂む信心親父

親の心子知らずとは是なるべし。息子の太郎助かく共知らずして、十露盤ひかへ諸所へ渡す金

はござらぬ。金子請取つて早々かへりて下され」といへば、「おろかや無間の業人、今でも閻魔王から迎に來らば、商賣がいそがしいとて行かずに居られうか。一切諸佛祕藏の法、但し丼の爲にその實事を演ぶ、我しかも斯眞要を說くとあれば、早く其念佛無間の宗旨を改め、題目をとなへて、寂光淨土に至り給へ」と、ふところの中より守經のちひさき八軸を出し、亭主があたまをたゝき、「今身より佛身に至る此經をよくたもつべし。南無妙法蓮華經」と無理にいたゞかして勸めければ、亭主以ての外に腹立して、「おしつけ業なおやぢがある。そちが尊がる日蓮坊こそ、念佛をきらへり、諸宗の名僧古今念佛を信用したまふ事、諸書に顯然たり。されば法花經の所々に、以深心念佛と說き給へる事を知らずや。親父其方達は、謗法邪道の癖者といふものぞ。いまくしいに早くかへつて吳れられよ」と、にがくしう言へば、親父大きに腹をたて、「忝くも上行丼の御再誕なる大事の祖師を、おのれ如きの大凡夫の口から、日蓮坊とはするさんな。ま一言いうてみよ、頭をばり碎いてのけん」と、氣色してかゝれば、亭主も片意地ばつたる淨土宗の宏才者、貸借のせんさくはわきにして、居だけ高に成つて、「しや

ござつて、金八百兩請取つて來て下され」と證文を渡せば、おやぢ呑み込み、下男をつれて兩替屋へ行かれ、表の手代共に、太郎助口上をいはるれば、手代共承りて、「只今旦那內用ござれば、しばらくの內御待ちなされて下され」と、見世の次なる立關へ通して待たせ置く內に、亭主看經すると見えて、鉦の音しきりに、願以此功德申納めて罷出で、「こなたには太郎助殿の御親父とや、以來は太郎助殿御同意に御心安うかたり申さん」と、初對面の挨拶濟んで、手形請取り、手代共金子八百兩包みたてゝ渡す時、親父兩替屋の亭主に向ひ、「只今待つて居る內に承れば、念佛の音がいたしたが、こなたの御宗旨は淨土宗でござるか。忰太郎助と御念比とあるによつて笑止さに申す。無間業因の念佛をやめられ、うかみ難い女人迄成佛いたす題目となへ給へ。忝くも日蓮大丼下化の衆生をすくひ、成佛せん事をさまぐ〵に苦勞なされ、法花經をえらび出し給ふ。此御經こそ、釋尊一代顯教の中の經王なる事うたがひなし。されば信解品に曰く」と、いそがしい中に押直つて、經文を引いてむしやうに法花宗にすゝめ入れんとするを聞いて、「是々親父殿、それは何を仰せらるゝ。御覽の通り商賣殊の外いそがしく、宗門所で

主人の法にまかり成り申したれば、拙者が事は自今以後、淨土宗ぢやと思召して下さるべし。こなたの儀は御恩もない主人の宗門に、改宗なされうやうなければ、佛壇は別になされて、代代ねがひ入れられたる題目をとなへ給へ。佛壇の拵料はいかほども進ずべし」といへば、おやぢ頭をかいて、「不便や我主人から無間に落ちてゐられうが、何と旦那の妻子方へ我等をあはしてくれまいか。法花の有がたい事を申聞かせて、此方の宗旨をすゝめん」とあれば、太郎助親仁の堅法花を知つてゐるゆゑ、木をりにならぬというては、わせてから間もなきに、親子喧嘩に成つては、家來の思はく外聞わろしと、「成程そろ〳〵と御すゝめなされて下されと、さからはず挨拶して、別に法花の持佛堂を拵へてあてがひ、親の心をやぶらざる孝心の程を、聞く人感じあへり。ある時太郎助、二大名の御息女御婚禮の絹布一色請取り、縫箔鹿子染物類、其外唐織の類、京大坂へ手代共をのぼせ買ひあつめさするに、大分の金子入用によつて、駿河町の兩替より、小判八百兩かり請くる契約して手形したゝめ、「金子請取りにつかはすべき手代共も、諸方へ出でて宿にゐず、近比御太儀ながら、おやぢ樣駿河町の兩替屋へ此手形を持つて

枕して、よい夢見たる心地にて、野でも山でも持つべき物は子なりけりと、古い事をいうて悦び、うれしさのまゝに難波で立ちしなに看經したるまゝと、心の落著くにつきて後世の事を思出し、朝とく起きて手水をつかひ、御燈をあげんと持佛堂を開きて、大きに肝をつぶして、寢てゐる太郎助をけうとく起して、「今佛壇を開いて見れば、阿彌陀如來がゐらるゝが、汝は何者にすゝめこまれて、代々の經宗を改宗して、無間の業と日蓮大井のきらはせられた、念佛宗には成りけるぞ。我等先祖代々法花宗にて、他宗の物さへ遠慮して、むざとは請けず來りしに、勿體ない宗旨をかゆるといふ事があるものか。早々あの佛壇を打碎き、此方の有りがたい多寶如來にうつしかへ奉れ」と、眼色かはつて申さるれば、太郎助聞いて、「樣子を知らせ給はぬゆゑ、法を替へたる御とがめ御尤千萬ながら、私事はすでにお前に見かぎられ、御勘當をうけ、一門一家まで寄せ付けざるによつて、乞食同前になつて御當地へくだりし所に、本町の旦那不便をくはへてやしなはれ、大分の望姓迄を賜はり、今日五千兩ぢかい身上に成りしは、皆もつて主の御影、その御厚恩の旦那の問弔を、親方の宗旨でない題目では弔ひがたく、御恩送に

義になるが道と、主人の寺を旦那寺にたのみ、念佛申して朝暮親方の位牌を拜みける。段々仕合能くて本町の店を居成に買取り、萬心のまゝになつて、大坂の親に勘當のねがひを、手代を以てなげき遣せしに、親太郎右衛門は次男太郎八に跡をゆづりしに、兄とはちがひ色狂はみぢんせざれども、その替りに智恵うとく、商賣に無情にして、手代共に盗まれてはたし、二三年の間にばたばたと身代つぶれ、太郎八も是を氣にして相果て、おや太郎右衛門一人、松や町通にわづかなる裏借屋借りて、片目のない小女童一人つかうて、悲しいくらしの所へ、勘當ねがひ申來れば、太郎右衛門はひとへに、七世の孫から便宜せし心地にて、「勘氣許すの許さぬのといふ所にはあらず、あつぱれ手柄者なり。然らば爰を仕舞ひて、太郎介が方へ行きたいが、いかゞせん」と談合あれば、「それは猶以て旦那祝著いたすべし」と、早速に旅立ち、身代の小さうなつたもこんな火急な思立には調寶、疊四疊鍋釜三つ、明半櫃にやぶれ夜著一つ、壹年半の宿代の滯の方に家主へ渡して、古鄕なれどもみぢん難波に心とまらず、江戸に行きて太郎助に對面すれば、泪をこぼして悅び、隨分孝行をつくして安樂に養ひける。太郎右衛門は邯鄲の

夜見世を二三度見て、少しもめられたる恩もあれば、心やすく受込み、つとめゐる主人に、太郎助親の身上向をかたり、「當分のこらしめと存ずれば、勘氣ゆるさるゝまで奉公人分にめし置かれて、さりとは役に立つ生れつき、種性よければ、他人の金銀など取つて走るやうな者にはあらず」と、取つくろうて申せば、「さいはひ手代共も一兩人さはり有りて隙を出し、人もない時なれば、汝さへ呑込んだらば、先五年の年を切つて、只今より召抱へ」と、早速に埓明き此家につとめて、奉公にゆだんなく、古參の手代共よりは、旦那に大分金銀まうけてあてがへば、主人悦び、太郎助といふ名はいはずして、白鼠々々と呼ばれ、十年無事につとめしゆゑ、親方近所に店を借りてあてがひ、望姓二百兩とらせ、同じ絹布屋をさせられしに、年五年立ぬ中に、貳百貫目といふ銀をのばし、手代四五人つかひて、次第に家さかえける。旦那死なれてから忌日忌日に主人の家に行き、持佛堂に一禮して、年忌々々の弔にも、主人淨土宗なれば念佛の中で題目も唱へてゐられずと、代々の法花宗なれ共、先後の世をたすけ給ふ日蓮上人よりは、今日かやうの有徳の身となるも、皆是旦那上人のお影なれば、親方の宗旨に改宗して、主人の法

一　獨樂む偏屈親父

人の行衞と水のながれは知れぬ物なり。王城を去つて津輕に世帶して、妻子をはごくむ者もあれば、奧丹波の猿と跡をさして寢た山家者が、花の都の室町に家を求めて、壺の口切とて人を招き、しほらしき手前にて、茶を立てゝたのしむ人も有りける。爰に難波の本町に、古手屋の太郎右衞門とて、貳百貫目あまりの身上とは、人の指さすにちがひもなく、ゆたかなるくらし、兄弟二人の男子成人して、惣領太郎助は智慧才覺なる替りに、色の道に目が見えず、晝夜新町がよひに、親の身代半分明けて、舊離きられて此家を追出され、諸親類へもよせ付けられぬやうに、親父からきびしきいひ渡し、立寄る蔭もなくて、惡性友達中間へ奉加帳を廻し、金子貳兩二分の合力を得て、これを腰に引つけ、終に見もせぬ江戶へ下り、親の手前に有りし時、古手を賣りし本町の絹屋の手代をたづねて、身の不首尾を打あけ、「御當地に何奉公してなり共、足をとめたき」とねがへば、此手代一年大坂へ行きて、古手を買ひし節、太郎助案内にて、新町の

宗旨より主の恩の重い事秤にかけてはね題目
預り手形に印判押付けて頂かす八軸の妙典
三尊よりは五百兩の御來迎待つてる心當

第三　老を樂む果報親父

氏なうて玉のこしに乘つて來る仕合娘
日雇中間の茶椀酒一いきに俄長者
八十八の升かけはかりとる知行の新米

浮世親仁形氣

付り　年々の始末に花の咲いた老後の世盛

五之卷　目錄

第一　獨樂む偏屈親父
一門は水くさい鹽踏にやる吾妻の暇乞
手代が倒した旦那はにぶい三歩の分散
身代はたゞみ提灯老足ではる〴〵の旅掛

第二　經を樂む信心親父

にしかられても、まじ〳〵して聞いてゐる心になりぬ。とかく人の心は、棺桶へ入る迄は定めがたき浮世〳〵。

外の代とはちがひ、お侍の魂を拵へて進ぜた刀脇指の錺代、しばらくも待ちませうと申す了簡はいたさぬ」と、言葉をあらせば、此女氣の毒がり、「隣あたりへ聞えては、兄様の御一分もすたります。御了簡がなくば、此著物を其代に取て下さりませ。仕立てゝから昨日今日、二日ならでは肌につけず、これで御不足ならば帶も添へて進ぜませう」と、ぐる〳〵と解いて投出し、「指あたつて銀子もなければ、是にて御堪忍」と涙ぐみて、丸裸に成つて、紅の二布計に成りし其身のうるはしさ、しろ〴〵と肥えもせず痩せもせず、灸の跡さへなくて脂ぎつたる有様を見て、白髪金時からつり取るやうな親父も、じた〳〵とふるひ出して、「そもやそも是が取つて歸らるゝ物か。風がな引かうと思うて」と、かの著る物を取つて著せしなに、思ひの外老をうかして、尻をちよつとつめり、「御浪人とあれば諸事御不自由にござらう。是で正月の拵なされ」と、前巾著から壹歩二つ出して、「是には限りますまい」と女に渡して立歸り、是よりなづみ出して、兵法稽古に行くよしにて宿は立出で、此浪人方の仕掛者にはまつて、刀屋の燒がむねへ廻り、七十古來稀なる好色に身を持ちそこなひ、侍行儀も綿のやうに成つて、今は息子

なるものか。首をおさへてなりとも、取つてうせぬは臆病からなり。若い奴等につよい所を見すべし。その浪人が拵代を取つてかへらずば、ふたゝび息子共に面をあはすまじ」と、渡邊の綱が羅生門へ行きたる時も、あれ程にはあるまじきと思ふほどなるいきほひ、日比腰をはなさぬ鮫鞘の大脇指、白髮あたまに天卷して、裾引きつまげ飛出づるを、内儀すがつて、「怪我でもあつては、外聞共に宜しからず」と、さまぐ〵とゞむる袖をふり切り、本郷の浪人方にかけ行き内へ入れば、浪人は留守にて、女房か娘かは知らず、二十四五なるよい器量な女が、更にさわぐ氣色もなく、「刀屋さまか、扨々わづかな事に度々遠い所をあゆませまして、めいわくに存じます。兄樣も一門衆の取持にて、來春は古主へ歸參いたされます筈にて、昨今はその相談に、一家衆へ參られ、留守でござります。正月には相違なうすまされませう程に、御不承ながら今少しの間お待ちなされてくださりませ」と、しとやかにことわりいへば、おやぢ眼に角をたて、「有りつかれてから代銀取らうといふ約束はいたさぬ。留守ならば釜でもぬいてかへる。出世も望んでござる浪人衆ならば、町人に鍋釜ぬかれたとあつては、御一分が立ちますまい。

日比身どもが兵法稽古を、町人のいらぬ事と、わいらをはじめ女房共迄無分別者のやうに云ひしが、其米屋の親父が、われら程に兵法の心がけあれば、五斗俵を取はづした時さそくを利かし、受身を以て胸へこたゆる程にはあてぬ事なり。兵法知らぬゆゑに、俵と打死したる親父は、よいたわけ者。是を思へば汝等も向後兵法を心懸けよ。米屋の亭主がやうなもろい死はせぬ事ぞ」と、いよ〳〵一腰を大事にかけて、立居にも兵法の心がけを第一にして、和尚の教化も無になりて、法體の事はおいて、白髮が見ぐるしいと和尚のいはれたと、それより鬢髭を墨に染め、侍行儀をやめざれば、此後は異見する人もなくて、其年も暮になりて、息子かけ共を集めけるに、跡月賣つたる本鄕の浪人者が、刀脇指の拵代三百六十五匁、今に留守とて一文も渡さぬゆゑ、家來を度々つかはせ共、不埒なる返事。治五平聞きかね、「自身行きて說破し、鎺代なりとも取つて來ん」とかけて行きしが、程なく立歸り、「かさねて浪人へかけ商は無用にせん。何をいうても暖簾にもたれかゝるやうな、春に成つてせめて百目内上すればよいが」といふを、親父聞くより表へかけ出で、「なまぬるい忰がいひぶん、武士の浪人におぢて此商賣が

ござつて、今臨終をすゝめて參つたが、日比達者な亭主にて、米商賣は力業が第一ぢやと、よい比な息子のあるに押しのけて置き、年寄りて俵物を持ちなやみ、七十に成つても力の落ちぬ所を、悴共も見ておけと、五斗俵の中繩つかんで、持上ぐるとて取はづし、胸をうたれ、それが病の元と成つて、胸痛と云ふ煩で三日三夜うめき死にめされた。人間も其身の年の程をかんがへて、六十過ぎなば萬事子にわたし、法體をして後の世をいのる心がけが肝要でござる。米屋の親父も達者をたのみにして、不斷力業のみにて、佛共法とも知らずに死なれ、臨終の時もむしやうに空をつかまれしが、笑止や地獄へ參られう。人事ではござらぬ、若いとても賴みない浮世に、殊更年寄つて名聞計にさまぐ〳〵の事をなして、一大事の臨終に空をつかまぬ樣になされ。こなたももはや六十七なれば、高が知れてある。萬の事を御子息にまかせて、ちと談義參でもなされ。わづかにある白髮を結せらるゝも、何とやら浮世に心が殘るやうで見苦しう見えます。よい法體時分ぢや、皆死んで行きますぞや。かまへて遠い事と思召すな」と、しみじみと敎化せられければ、親父聞いて、息子の治五平に向ひ、「今和尙樣の御物語をきいたか、

込まねば、「それは不了簡といふ物、しからば酒屋の亭主は大酒して醉狂し、傾城屋の親方は婬亂にして腎虛して死ぬべきや。刀を賣つて過ぐればとて、その刃物の切れあぢをためさんとて、人を切つて見らるゝか。町人は町人のやうに、隣ありきは丸腰にても、人の笑はぬ事なれば、向後侍形氣をやめらるべし。下細工する職人共もそなたをおそれて、ま一度問ひかへしたき細工の物も、きめつけらるゝをこはがつて、そのまゝ受取り歸るゆゑに、好みとはちがうて、又仕直させ、互につひえなる事おほき」とて、むすこの治五平や、內儀などのきのどくがり尤に思へば、詞つきもなよらかに、「かりそめの事にも、一腰を取まはさぬ樣にいたさるべし。且は家業のためなり」と、段々道理をいひ聞かせど、いかな〳〵耳に入れず。木馬にて手綱の稽古をし、小砂をついて城取の形をなし、兵法居合を習ひに行き、女房に品柄〔竹刀〕を持せ、やつとうとの稽古しきりなれば、むすこ治五平難儀がり、夜中思案して、朝むく起に牛込の旦那寺へ參り和尙を賴み、「後世にもとづき急に法體せらるゝやうに、御すゝめ下され」といへば、和尙もつともと同心有つて、其あけの日刀屋へ行かれ、親父に對面して、「今日は御近所の米屋に往生人が

三　兵法を樂む陽氣親父

親の代から武家方へ出入りて、まうけ溜めたる白かね町の、刀屋治五右衛門とて、富貴にして子供三人持ちける。いづれも利發者にて、渡世にゆだんなく精を出しけるに、親父治五衛門幼少より御屋敷方へ出入り、武家の行儀を見て、男ならば武士なり、さりとは商賣人といふものは表裏をもつて世をわたり、殊に平生の行儀じだらくにて、人たるものの身持とはいはれずと、その身も腹からの町人にて有りながら、町人を疎み、惣領治五平を跡目に殘し、次男三男を足輕奉公に屋敷方へ出し、我も不斷侍行儀に、一腰をはなさず。水風呂へ入るには湯殿に脇指を立てかけ置いて、敵持同前の行跡、行儀がたうて町人の付合たえて、商賣のためには宜しからぬ身持と、女房きのどくがりて、念比なる相口の人を賴みて異見をすれども聞かず。「刃物を賣りて過ぐるものが、武士をまねるが僻事か。書物屋の亭主が文盲なるは、兩替屋の十露盤知らぬにひとし。その道にて今日を送るものが、其職に心をはめぬは本意ならぬ事」と、更に聞

先の寺社にて、毛氈敷かせ幕もはらずに、わざと諸參詣に見せるやうに構へ、花なき時にも古歌など短册にかゝせて、木の枝にかけさし、色も香もある娘ぞと、人に好もしがらする一ぱいの樂、酒の上にて琴三味線一節切まで吹かせて、尺八ほどな涎をながして、親仁自慢に眼も見えず、後世も渡世もわすれ果てて、娘をつれてひけらかす事を、又もなき樂にして、つひに身代棒にふつて、通町の屋敷をはらひ、後は芝の神明あたりに、わづかなる小家を借り、娘は三十二になれども、そのまゝ白歯に細眉、脇さへつめさせずして、二文が糊買ひにやるにも跡からついて行き、むかしの如く人が見るかと氣を付けしに、其時とは立止る人の見やうがちがひて、夜鷹にしてはつまはづれが尋常な、品川邊のおじやれくかと、遊女よりは一段おろして見る事は知らずして、「布子著せても美人には人が目を付くる、くさつても鯛とはよういうた物ぢや」と、此身に成つても一ついうて二つめには、こちの娘くと娘自慢で、身代仕崩したる親父は、ひろいお江戸にも是がはじめと、語りつたへて笑物に成りて果てけり。

りき。内儀をはじめ一家の人々異見をして、「いまだ振袖の中にいづかたへなりとも縁に付けらるべし」としきりにいへ共承引せず。「世界に我娘のやうな美人に、かけあふ聟がなし。あたら美女に男持せて所帯嗅にする事、いかにしても惜しゝ」と、誰がいうても聞入れず。只あけくれ連れて出で、人の見かへすを金銀まうけるよりは滿足がりて、次第に娘自慢つのり、若い時から行かぬ三野〔谷山〕に行きて、今の花紫が道中を見て歸り、小袖も大夫が著るやうな仕立にしたしとて、廓へ出入するお針をやとひ、腰に綿入れず、すそひろがりに裏をふかせ、しんなしの大幅帶をしどけなくつい結ばせ、緋縮緬の下紐見ゆるやうに步かせ、三つがさねの衣裳ひとつ前に小づまをとらせ、素足に轆轤繩ほどな二つなひの鼻緒の大夫雪駄をはかし、八文字の足どりを教へさせて、祭のねり物のごとく先に立てゝあゆませ、親父跡から編笠にてついてまはり、歷々人が立どまりて、「あれは上方の傾城か、三野では目なれぬ女郎、何にもせよ美しいものぢや」とながめ入れば、おやぢ跡より、「おつやに、しづかに行け、爺が追付きかねるといへ」と、腰元共を呼びかへしていひ付くるは、我等娘といふ事を見る人に知らすべき僭上。扨行

うかうかついて來るを世になきたのしみに思ひ、少しも人立のある所へは、風俗を作らせ年中つれて歩行き、人にひけらかす事を悦びて、十六七八の盛過ぎぬれ共、いかなかな緣に付ける合點にあらず。堺町木挽町の芝居を見せては、京くだりの女形の風俗のよいを見ては、あの如くに姿をうつせと、毎日座敷をよい物著せて歩かせて見て、今少し腰をひねりて、足どりこせらず大樣にあゆみて見よと、野郎屋の親方が、新部子に女形の風を敎ゆるごとく、萬事を捨てて娘の所體を指南し、菱川がすがた繪を買うてあてがひ、おのが娘を賣物のごとく、身嗜みにかゝらせ、縫物綿つむなどいふ女の藝は、みぢんもならはせずして、上つ方の御息女の御慰になさるゝ花車事の藝に、師匠を取つてならはせければ、歌の道もおぼえ、手もつたなからず書いて、聞傳に短册に歌を書いてもらひたいと所望に來れば、親仁悅び、隨分結構に拵へたる色紙に歌を書かせ、こちの娘は器量計でござらぬ、手跡も是程には見しらしますと、後は寺社の繪馬に、むすめが細工にせし衣裳繪に歌をかゝせ、「通町綿屋角兵衛實子の娘つや筆」とあらはし、世間の人のお目にかけ奉る。御寶前參詣の男共是を見て、いよいよ戀忍ぶものおほか

にほしきと、時分とて母の親の返答に迷惑せらるゝほど、仲人を以ていひ入れければ、申來りし中にて、すぐれし身代宜しき先々を、十六軒書付け、親角兵衞に、「おつや緣付の事、此内いづれへやらるべきぞ」と內談有りしに、角兵衞かぶりを振つて、「我娘ながら、今の世の美人といふはおつやが事なり。それを外へつかはし、荒男の慰ものにさすべきいはれなし。いつ迄も大事にして内におかれよ」といへば、「しからば手前へ養子聟をとりて、此跡をゆづる合點か」と、母親かさねて尋ねらるれば、「美人に大分の家財を添へて、何聟にやる物ぞ。跡めは仙臺に居る甥の木工三郎を呼寄せてする合點なれ共、おつやを女房などにはもつたいない事、持する事にはあらず。さあ又あんな娘を、ま一人產んで見ようと思やつても成るまじ。世界にない物を、人手に渡さうとは、心のない事をいふ人ぢや」と、中々緣付の相談には取のらず。たゞ外へつかはす事を惜み、ずゐぶん姿をかざらせ、世にはやるといふ程の模樣衣裳を、一番にとゝのへ、是を著せて品をやらせ、今日は上野の花見につれて出で、明日は淺草の觀音へ伴ひ參り、下向の浮氣男共にこれはと肝をつぶさせ、立止りてうつゝをぬかし、扨もよい娘と魂を失ひ、

十年の年をかさね、三十三にてはじめて宿ばいり、親方より望姓として銀二貫匁もらひ、家業にゆだんなく晝夜拵出して、六十に及びて大分の身代と成り、通町に大屋敷を求め、今老樂に節季のねざめも氣づかひなしに、明けゆく春をいはひぬ。殊更ひとりの娘美形にして、おつやと名付けて夫婦の寵愛、ことわりなるかな鳶が鷹とは此娘、二親の不器量にはみぢん似たる所もなく、其うつくしさは吾妻そだちには稀なる生れつき、わけてよい世に生れあはせて、腰もと使ひはした迄大勢つきそひ、歴々方の息女にかはらず、ゆたかなるそだちなり。母の親の才覺にて、京より御所方の作法心得たる女の諸禮者をよびくだして、おつや十一歳の比より是を付置き、萬事都をうつしけるに、物ごし迄やさしく、かりにも訛らず、風俗花車に、見し人思ひの種とは成りぬ。嬰兒あげまきの程過ぎて、當流のなげ島田、女は髮かしらといひ傳へしごとく、此娘十五の秋の盛を見ては、中々角田川の月も及ばぬひかりわたる艶顏、おつやとはよくもつけしぞ。綿屋の角兵衛が四角四面な顏して、あん娘はどうしてまうけしぞ、親に似ぬ子は鬼子といへど、是は鬼の子に天人なるべしと、江戸中に名を知られたる有德人の嫁

寺へ人をつかはされ。こなたの御主人の御身代も千貫目と取沙汰いたせば、それに違はござるまいが、わづか十兩で惜しいと思召し家財を捨て、いとしいと思はるゝ妻子を置いて冥途の初旅、「さぞくらうに御座らう」といへば、藥買に來りしおやぢ共胸にこたへて、「扨當年中に死にさうなと仰せられます者は、此内ではどれでござりますぞ。ちよつと仰聞けられ下さりませ」と、勢のよい親仁共ぐんなりと成つて申せば、「命よりは金を大事に思召すおの〳〵には比興なおたづね、亥の子の餠はくはぬと覺悟なされて、當月來月の中に書置でもなされ。跡に公事みやの無いやうにして置かるゝが肝要」といへば、隨分しわいおやぢ共が、此仕掛にあうて、しかも新金十兩づつ出してつくばひ、禮までいうて、さても命は惜しきものかは。

二　娘を樂む遊山親父

商人の心は、ひろき武藏野の生れ、十一にして親の手をはなれ、傳馬町の綿商賣する人のもとへ、丸年十年切つて奉公に出でしより、主人の爲になりて、年は明きぬれ共此家に惜まれ、又

未然に仰聞されしを疑はれ、御藥代高直なりとて、不調法を申して歸られし所に、御見立の通り、今月始つ方から重病を受けられ、大坂中の名醫達六七人に替へ申せども更にしるしなく、次第に重りて、今は臨終を待つ計の仕合、妻子一家の氣づかひがり御察しくださるべし。然る所に病人おもき枕をあげられ、日外殘溪樣の仰せられし事をうたがひ、一服十兩の藥料ををしみ、今死にとむないに冥途へおもむく事、さりとは殘念千萬、いひ出すも面目ない事ながら、私に參り御詫言を申して、せめて二三年命ののばはりますやうな御藥があらば、百兩貳百兩でも藥代の高き分はかまひませぬ、今此節の命のをしさ、金銀にはかへられぬと申して、血の泪をながして申付けられました。以前の不調法を御免くだされ、十年のびませぬ事ならば、一兩年にてものがれますやうに、延命の御藥を御意にかけられ下さりませ」と、手をついて餘儀なく申せば、殘溪聞いて、「藥代はほしけれ共、もはやさう煩ひつかれては、どうも拙者が手には及ばぬ。近頃殘念の至り、われら當春申したる時、十兩出して一服まゐれば、十年が間は風をひとつひかるゝ事ではないに、何をいうても歸らぬ事、此方へ叶はぬ事をねがひに御座らうより、

金十兩づつ」と申出す。いづれも肝をつぶすを、「さのみおどろき給ふな、六十目小判にして六百目、十年の日數凡三千六百日を小割にして、一日いくらに當るぞ、算用をして見給へ。一日の命壹分七厘五毛づつに當れり。おの〳〵の家の紙屑の錢にて、一萬兩にもかへられぬ一口の命をのぶる事、いやならば御勝手次第、此方から外の賣物のやうに強ひはいたさぬ。病の床について、俄に命がたすかりたいとて、一度に五百目一貫匁の獨參湯を飲んで、苦痛して死んで仕舞ふ無分別者世に多し。只今も申すごとく、此内に一人は追付たふとい所へござる人あり。かならず其時命がをしいとて、私などを當になされて呼になど下されな。其時節に成つては、藥師如來が御來臨あつても叶はぬ。さあ身代の尾が見えては、銀が借りたうても貸手のないと同じ事にて、冥途へ片足ふん込んだ人は、どうも拙者が療治にも及ばぬ。用心は無事なる内なれば、いづれもの無分別次第」といふ時、勝手から人手代と見えたるわかき者が、下袴を著しまかり出で、「今朝も伺候仕りました北濱の熊本屋の手代でござります。今朝ほど申置いて歸りました通り、當春旦那こなたへ御藥申請けに參られました時分、當年中には死病に取りつかるべしと、

ならぬ物なれば、おぼつかなく思ひしが、延命藥にて慥に長生する事なれば、柿に限らず新田の願ひ、又は水つきのあれ地に貸家たてゝ、末々繁昌の時に至りて、高家賃取るやうなまうけの道のもくろみに、大分益の有る事なり。いざ是から其殘溪とやらいふ醫者の方へ行き、まづ心見に一服づつ買うてのむまいか」と談合を極めて、堺筋の醫者にあうて樣子を聞けば、「若き衆中なれば藥料大分取るに及ばず、命の根つぎに手間をとらず、津液燥いて元手のすくない老人達には、元をたすに大分の藥味入るなり。おの〳〵がたのやうなる銀を持つたる人は、何商賣に取りつかれう共さのみ手間も入らず、氣骨も折れまじ。元手のないものはその取つきに隙の入る事、面々今日の世渡りにてなぞらへ知るべし。今十年早く仰せらるれば、金壹兩づつにて調合いたし進ずれ共、元手すくなく、しかも此内に當年中にいきつく老人も見えわたれば、おぼろげにては成りがたし」と、氣にかゝるやうに申せば、此内に今年中に死ぬる老人もといふにつけ、面々おれが身の上かも知らずと、闇の夜に鐵砲の音を聞くごとく、どれにあたらうぞと互に顏を見合せ、むしやうに氣づかひに成つて、「少々高き分はくるしからず」と申せば、「一服

なる事ぞかし。いづくも欲に目の見えぬ銀持の親仁どもあつまり、諸國の大名衆へ御用銀の借入の内談を、酒宴遊興よりは増したる世の慰と思ひさだめて、寄會座敷もいろ近き所を去つて、下寺町の客庵をかりて、毎月銀まうけの僉議にくれて、命の入日かたぶく老體共、後世の事はわすれ、たゞ利銀のかさなり、富貴になるを樂みけるに、一人の親仁が此壽命藥の事を聞出し、「いづれも御歴々への預け銀、十年符の斷を聞届けて、慥なる證文は持ちながら、七十八十に成つて、今十年の皆濟迄の命心もとなし。是を飲んでいま四五十年も生延びなば、高利にして二十年符の、あたまからなしくづしの借しやうに、魂鍛の有るべき事」と申出せば、「それは慥に藥の蔭にて、命をのぶるに極つたる事ならば、五匁や拾匁の銀はをしまじ。去年さるお大名樣から、稀なるものの由にて、西瓜の大きさに見增すばかりの御所柿五ついたゞき、その核を鹽町の下屋敷の庭に植ゑさせ置きぬるが、昔より桃栗三年柿八年といへば、八年過ぎなば其柿のなるを見て、彌もらひし如くに出來なば、一ッは御門跡樣へ指上げ、殘りは大坂のない物くはうといふ榮耀人に、一ッ三歩づつで賣らうと思ふ胸算用なれ共、命の程は始末しても私

一　藥を樂む壽命親父

世の中に身に應ぜぬ願をするものは、却つて災をまねくものなり。殊更人間限ある一命を、いづれの神に頼みをかけたればとて、それは〳〵一日も生延ぶる物にては有るまじ。人は四十より内にて世をかせぎ、五十からたのしみ、世を隙になすほど、壽命ぐすりは外になし。何ほどに御多賀大明神を祈り、はる〴〵の江州に歩をはこびても、世の業に心をくるしめ、分けて借錢乞に命をせつかれては、祈りてもをがんでも、其願成就せずして、あらたなる多賀大明神を、虚言つきにしてのける事ぞかし。爰に水音殘溪といふ鹿毛頭のなでつけ醫者、常にかはりしもえぎの十德の前を合せて、きらめく金物にて胸元をしめつけ、さながら姿は唐と日本の堺筋に、長崎より來りしとて、立闢がまへの家をかりて、名苗字を筆ぶとに張札門柱にあらはし、壽命長遠の靈藥を調合して、いのちを惜む人々にあたへけるとて、よしあしいはずに難波中に此評判、一服にて十年づつの延命、十服のめば百歳の壽命を保つ由、證文書いての賣買、是慥

花見の幕はり肘で見せる自慢の器量
傾城の風俗移りにけりないたづらむすめ
姿は替れど歩行振は其儘に尻を古布子

第三　兵法を樂む陽氣親父

武士を學ぶ刀屋は水風呂でも離さぬ一腰
節季の斷いひやぶる紙子浪人
借錢乞も姫にあうては角を折り鬼の目に涙

浮世親仁形氣

付り 娘に甘い地黄煎付いて離れぬ花見の宰領

四之卷 目錄

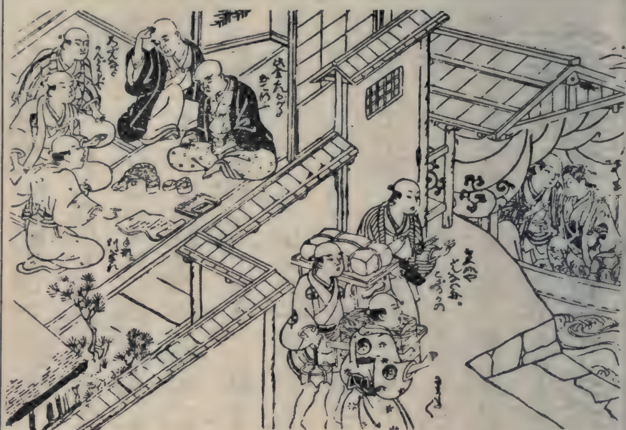
第一 藥を樂む壽命親父

始末の寄合氣骨のをれる精進食
聞く程與のさめた明日も知れぬ命の請合
百兩の小判耳を揃へて聞込む長生の藥拵へ

第二 娘を樂む遊山親父

親仁を勘當してのけ、家を無事にかためける。前代ためしなき浮氣親仁と、笑うたもむかしむかし。

今より思ひ切つたる色遊して、世を心のまゝにさわぐべしと思ひつめたり」とあれば、富田屋の禪門うなづき、「我等も其通りに思案きはめてござる」と、たがひに此年までかためたる身を忘れ、兩法師いひ合せ俄に色狂の思立ち、面々の内儀達肝をつぶして、「成人の子供の前も恥ぢ給へ」と、あたまから古格な意見、「是では氣がひけて思ひのまゝなる色遊は成るまじ。とかく婦妻は戀の邪魔なるぞ」と、いひもあへず三十四五年添ひたる女房に、いとまの狀添へて、皆々親里へ歸しぬ。定めがたき世や、二人の内儀は白髮いたゞいて去られて歸り、又外へ緣付する年にもあらねば、すぐに尼に成りて墨染の身となられぬ。諸白髮迄馴染み、然も世帶を大事にかけて子細もなき女房を去る事、道を背きし奢の初ぞかし。今迄は夢に見し事もない新町通ひ、是六十の手習、半太夫かをる此二人を毎日の續酒、役日も常も外へやらず、前より逢馴れし男を淋しがらせける。兩法師のむすこ共、親仁が金をほつく故、何程まうけても尻も結ばぬ絲にて、針を藏に積んでもたまらぬと、二人の子供申合せて、町内の年寄組中へ斷り、むすこが形見分として、金子千兩づつ親仁にくれて、親でない子でないとの證文取つて、二人の



身をかへりみれば、今迄の作り賢人のたのしみは、ひとへに氣ちがひの沙汰なり。世間に金をほしがるは、宵に見しやうな榮耀をせうが爲なるに、我等金銀事缺かぬ身にて、七賢人とそやされ、名聞にしばられ子細な顔して、をかしからぬ無色の酒にくれて、此儘死なん事、人間に生れたる甲斐はなし」と、そろそろ六十の筵をやぶりかゝられし時、伊丹屋の法師がほつと息をついで、「今もしれぬは人の身、月雪花は假令のたのしみ、歌をよみ詩を作りて、我人子細らしい顔はすれど、根をおしてから臍より三寸下の無分別に極る所、人間の榮花此外になし。拙者は今宵悟道いたしした。明日から此七賢中間をのがれて、



し。したらば此君をおか様といはして、大黒柱にもたれかゝらして、わきから見るやうな」といへばいづれも、「その仕合を、此上ながらねがひ奉る」といさめける。いづくも金持の威勢にて、かゝる浮世のおもしろい事にあひぬ。七賢人も餘所の亂酒につれて、手前の酒もいつよりは染み、燗鍋で通ふ事もとけしなく、後は七りん取寄せ、五升樽も大形にかたぶく月の須磨の山の端に、今少しと見しまでのみ遊びしが、詞ではどうもならぬ此風景、世のたのしみとは是なるべしといへ共、眞實心には、皆の舟遊の色まじりの酒ほどの、半分も身に染みておもしろうないには極れり。富田屋の親父つく〴〵世を觀じて、「此

いかにもとつなる口から酒を讃めたる詩を引出し、辯にまかせて申しければ、兩禪門聞込み、「いかにも七賢人を學ぶからは、下戸にてはすまぬ事」と、先保命酒の甘きより呑初め、師匠なしに次第に左あがりて、後は生酒の辛口なるを好みて、中椀が茶碗と成り、下地からの上戸より增に呑出し、是よりしばらくも酒なくては、精がつきるといひ出して、いつもの川岸に毛氈しかせて、素酒をたのしむ折から、川舟に紫の帽子かけたる野郎あまた乘りて、詰囃子の役者まじりに、都の大臣を夜もすがら、佐太の天神迄送るよしにて、のみかけ引かけ、しやみせん四挺でをどり歌ひ、水主迄も顏の色入日にうつろひ、猶てりて赤き頭を振つて、義太夫ぶしをうなる。此酒きげん潯陽の江の心地ぞかし。又少し跡より、小御座の幕をしぼらせ、いかにも大臣顏して北國者と見えたる奴が眞中に坐し、ゆんでめてには、新町のわけらしき女郞禿取廻して、伊丹屋の四季延命酒、春桃花夏は菖蒲、秋は菊花冬見ぞれ酒、さま〲呑みさわぎて、あたりに人もなげにあれける。心を付けて見るに、根引して行く女郞を、新町の揚屋遣手末社、是迄送ると聞えける。挨拶は、「國もとの母親も、ながう取つて今年來年の内には極樂か地獄へやるべ

しみ、兩人共によいころな子息あれば、我におとらぬ棟たかき方より嫁を取つて、おもやを渡し、商賣は律儀なる伴頭の手代に後見させければ、此身代鬼に金持せたるごとく、根づよき門柱うごかぬ家と、所がらうらやみぬ。伊丹富田の兩親父は、隣町に隱居屋敷をしつらひ、二人共にいひ合せての法體、夏は殊更涼しく川岸に竹の腰かけをなほさせて、按摩取の座頭、はやらぬやぶ醫者、儒者に成りそこなひのなでつけ、彼是心まかせの目下なる友をあつめて、いつとても七人唐樣にかまへて、あたまは中がりにして髭剃らず、朱骨の扇に風をまねき、しゆろ竹の杖つきて、居士衣の紐を高くむすび、茶瓶に面々天目を手にふれ、言葉に子細をこめて、古文めきたる顏つきして、法體の後十年餘りもくらされしが、世の人此心ざしを恥ぢて、しばる遊興の咄さへふかく遠慮して、是ぞ和朝の七賢組とて、物がたく見えしに、ちくら儒者が申すは、「我々が事日の本の七賢人と知らぬものなく名をとりしが、晉の七人親仁どもは、酒を友として不斷たのしみしに、伊丹富田の二先生は天性の下戸、是唐土の七賢と相違せり。とても七賢人をうつさるゝからは、向後餅菓子をやめられ、酒をまるり習ひて樂となしたまへ」と、ひ

かはつたせんさくと、今に咄のたねとは成りぬ。されば此元徳、若き時より俳諧をこのみて、其名ひろく手鑑にもしるして、表徳號を社樂齋と申しぬれば、及ばぬ事をする者をば、しやらくさい事と、世話にいひしは此因緣ぞかし。

三　酒を樂む賢人親父

何事も其人によりて、風俗のかはりたるも一興あり。むかし連歌師の牡丹花は、牛の角を金銀の箔にだみて、紅の引綱付けて、心の行く所へ乘廻られしも、人がらそれに備り、世の人指はさゝざりき。津田休甫が紅鹿子の女小袖著て、白晝に大坂の町を通りしも、其身道者の德あらはれ、目にかくる人もなし。此人々はその心より發らずしては、まねてならぬ事ぞかし。見ぬもろこしの親仁共、竹の林に遊んで、浮世を實は見かぎり、肴もない酒をたのしみけるとかや。和朝の難波津や、八間屋といふ所に家榮えたる伊丹屋の何某、富田屋の何某とて、同じ心の友二人住みける。その身世に有る程の事にかしこく、しかも若い時に挊置きて、今老のたの

にならぬ身なれば、明くれ此道に氣をこめ、その心になりぬ。されば唐土の玄宗皇帝は音律の名人にて、二月の初に花の咲かぬ事を遅しと、樓臺にのぼり羯鼓を打ち給へば、餘寒拂つて梢の花開色見せけるとなり、又鄒燕は 篳 に妙を得て、六月に冬の調子を吹いて、霜をふらせし事も語り傳へり、我も仙術の心見にとて、ある時身をきよめ、秋の夜の月くもりなく、堺の南北一目に見わたし、三階藏の屋根へつぎ階子さして、七十にあまりて達者にもない足をつまだて、漸う屋根へあがりて、住吉の方に向ひ、觀念の眼をふさぎ、一代の大願此時なり、今心ざす所は生駒山迄の飛行ぞと、兩の手をさしのべて飛びければ、棒樫の枝をこすり、捨石のたゞ中に落ちかゝりて、そのまゝ腰をぬかし、「やれ仙術が生贄にて、まだよく熟めもせぬに飛んで、腰骨を打折つたは。こりや目が眩ふは。出合へ〱」と呼ばはる聲に、家内の者共おどろき、手燭ともしつれ庭に出で、是は〱とさわぎたち、母屋へ人を走らせ、醫者よ針立よ、へうたんの黑藥よと、隱居と母屋の大さわぎ、町内迄も家々に行燈出して、元德仙人が輕業の仕そこなひなされて、腰の骨が折れたげなと、堺中に此沙汰ひろまり、それより大坂につたへて、是は



と見えて、人間界のわざをはなれて、自在の術あきらかに載せて有り。それより俄に茯苓を呑み、兎絲子茅根を求めて朝夕の菜になして喰ひ、髭おのづからのばし、身に唐織をまとひ、人のつきあひをやめて、我宿ながら諸木しげれる奥座敷に取籠り、專ら仙術を行ふとて、三年あまり氣をすまし、大かたは春秋の時節もわすれて、只惘然として夢のごとし。此心ざし軒ちかき雀も見馴れ、梢の鳥もちかより、夕の飯をわくれば手よりすぐに食みける。扨は仙家も爰になりぬ、諸鳥我をおそれぬ事是ためしなり、いよ〳〵學びて、異見せし悴手代共をはじめ、一門一家、扨は知音ちかづきに日をさまさせんと、身上苦



ゐらうと約束をして、仙術の祕傳を書きし一卷をもらうた由にて、今に伯父が所持して居りますれば、旦那の御所望ぢやに、我等にさづけてくだされと申さば、いやとは申されぬでござりませう」と、見た樣にうまう咄せば、元德悅び、「誠に學ぶ門に書來るとは是なるべし。我久しく仙術の願ふかければ、念願とゞいてはからずも、汝さいはひ咄出せり。かゝる大切の祕書を、たゞ披見せうと思ふ邪の心有つては、あたまから仙人の心にたがふべし。是を以て借りて來れ」と、百兩を惜しけもなく渡しければ、手代うけとり其翌の日、伯父の所より取つて參りしと、古き一卷を渡せば、元德是を見るに、いかにも仙書

つ由、ばゞかりながら御自身千年萬年御工夫なされたればとて、何とて御一人其術を知得たまはん。萬の事も其通りなれども、別して師匠なしに此道は行じがたし。昔も此道に心をよせて學ばれし人々、皆々深山幽谷に分入りて、それ〴〵の師匠を取り、又は祕書を得てよく見きはめて、仙人に成りたる衆中、日本にも多く見えたり。役の行者久米の仙人、宇治山の喜撰法師、扨は現に私母方の伯父が、江戸の三井店にしばらく奉公いたして居りし時分、心願有つて富士禪定いたせし砌、常陸坊海尊にあひ申し、判官殿の惡性咄、辨慶が女房嫌ひの噂、伊勢三郎が道中で護摩の灰に成つてゐて、熊坂の長範が方へ上米はかりし昔物語聞くにあかず、しばらく足をとめて聞いたる間が、我しらずに五日立つたと、去年の春伯父がのぼつて咄をいたしました。その時分拙者に、仙人の手代にもならば、海尊方へ肝煎りてつかはすべし、今入の新米仙人は、霞を喰ふ事が日向くさうて食はれぬ物ぢやと、常陸坊が語られしゆゑ、私伯父が申せしは、只今は年を切つて主取いたしてゐる身なれば、重ねていとまをもらひ、瘦世帶でも持つた時分、大晦日に借銀乞が來てせがむ折、世帶道具を腰に付け、鶴に乘つてこなたの方へま

つ、三十年も洗濯せず、襟垢つけず、そでぶくりんも紅皮にして、編笠も破れを内より厚紙の反古にてつゞくり、幾夏か是をかづきて、灰よせの時もあたらしきを著る事にあらず。女も又嫁入著物そのまゝ娘にゆづり、孫子迄もつたへて折目も違はず、費をわきまへ、鼻紙も二枚かさねて、幾度も火にあぶり、重さ百目に成る迄は、紙屑籠へ入れぬほどに、萬事に氣をつけて、元日より大年迄を一度につもり付けて、其外は一錢もあだにつかはず。諸事の物年々に拵へて、慥なる世帶なれば、身代の事さりとは苦もなく、奢がましき遊興もなければ、不斷宿に在りて物の本見て、心をなぐさむる人多き中に、藤井元德といへる有德人の親父、つねに列仙傳を見て、仙人の身持は第一世帶に物がいらず、好色をはなれ、美食をくらはず、世路に氣をつひやさず、松の葉などの麁食を喰ひ、正月著る物も木の葉のつゞれにてすまし、髭月代も剃らざれば、髮結賃を出さず、行きたい所へ、物のいらぬ雲に乘つて飛行する事自由なれば、仙術を行うてたのしみにせんと、風與思ひこまれしを、手代のうちに目のさやの拔けたる由斷のならぬ男が聞きつけ、さいはひの事と罷出で申しけるは、「旦那には兼て仙術を學ばんとおほしめした

りして、町中の日をおどろかせ」と、みづから臺所にかけてある棕櫚帚取つて來て、我子にかたげさせ、尻もつまげてとらし、「隨分あぢをやつて親の名まであげてくれよ」と、ふらして出し、おやぢは扇拍子取つて、齒のない口をうごかし、しほからい聲をはりあげ、「長い刀をさしたはおさき」と、地をつけてうたひ出すこそをかしけれ。息子は爰を大事と片肱いからしをどりけるを、心ある町衆は笑止がりて、側からさへ汗をかゝるゝに、親仁は餘念のない顏にて、「ま一つかへしてふれさッさ」と、白髮頭打振つて、子故の闇にねもせで迷うたヤツ・サ。

二　飛行を樂む仙人親父

攝泉の堺は、千代の松原萬歲の浦浪しづかに、人の住みなしも表向よりは內證奧ぶかにして、京に增れる樂人あり。物每內端にかまへ、身持しとやかにして、十露盤現にもわすれず、諸事こまかに、見かけ綺麗に萬の義理をたて、隨分花車に世智がしこく、始末を第一にして身の養生よく、澤山なる鰒を喰はず、大酒を好まず、色遊に錢をつかはず。男は紬縞の綿入羽織一

むすこの徳三郎を見習ふな。我年ばへで我程に手を書き、物をよむ子供も、此津にては稀なぞ。精出して自慢せい」と、左扇子をつかへば、徳左衛門腹を立て、「身共が忰を見習ふなとは、大事の子に疵を付けるいひぶん、物よみならはせて末々では人だちの所へ出し、太平記の講釋さする思案であらうが、一文二文の編笠錢ははかどらぬ物ぞ」と笑へば、淨閑腹にすゑかね、「身が祕藏の子を太平記よみの物もらひにするか」と、して居たる木枕取つてなげ付ければ、徳左衛門も煙管おつとり、淨閑が法體あたまをみしらし、後はよい年をして兩方つかみ合ふを、町衆中へ押し入つて、是は一興としづめらるれ共、たがひに片意地のはつたるおやぢども、中々聞かぬと角めだつを、年寄制して漸うになだめ、又改めて盃を出し、雙方の子供も呼びよせ、「町内の事なれば、互に子孫まで念比になされねばならぬ間、向後魚と水とのごとく中能くいたさるべし」と、徳左淨閑中なほしの盃事、「めでたう十助肴に小謡うたへ」と、淨閑指圖すれば、忰畏つて四海浪を獨吟にうたひをさむれば、年寄きげんよく、「どうでも十助は器用な、第一聲がようて」とほめられければ、徳左衛門せいいて來て、「徳三郎十助に負けな。肴に鎗をど

器用な子をもたれたらば、どのやうな人中で自慢めされうも知れず。そちの子が物讀すれば、こちの子はならはずに鐵輪の手づま、まくらがへしの祕曲、それは〳〵はなれ切つたるせんさく、荒神拂にわせる無學院といふ山伏が、此比も來て徳三が鐵輪の手品を見て、あの子は飯綱つかひではござらぬかと、錫杖捨てて横手をうたれぬ。此間も道頓堀の小見世物する仲間から、三十日を銀五百目でやとはかしてくれと、御池通の池田屋のおやぢを賴んで、度々申來れど、一〆匁ならば談合もせうというてやりしが、今年十三ではや壹〆匁ぢかい銀になる悴、おそらく廣い大坂にはござるまい。自慢はいたさぬが、正眞の子寶と申すは悴が事」と、鼻脂をおしのごいて言はるゝを、淨閑聞きかね、「是々〳〵徳左どの、子を芝居ものにして、銀をまうける分別は、今日を過ぎかぬるものの、せう事なさの思案なり、町内にても銀持と指さゝる身代をして、徳三郎が惡遊の枕がへし鐵輪の曲で、銀をとらうとの心がけ、さりとはあさましい所存。こりや十助、あれをかまへてよい事とおもふな。町人は讀書十露盤に達し、親から仕にせの商賣をゆだんなくつとめ、金銀をまうけ溜めるを人の中の人といふぞ。かならず徳左

とめさする、披露目の祝儀に、樽肴を出され、さいはひにかるい夜食を拵へ、能い加減に酒のみ、座中打くつろいで世間咄をせられし中に、亭主分の淨閑、少し酒も廻りて心よい機嫌にまかせ、忰十助が自慢咄、「あいつはかつかう大體にござれども、當年うそなしに十一に成りますれ共、おとな役をいたし、帳相算用萬事引受けいたすゆゑに、我等は表の事を構ひ申さず、參り下向にかゝつて居るが、見事見世商も仕り、その透には御宿老殿の裏座敷を借つてゐらるゝ、兒醫者の得庵老方へ參り、四書を讀習ひ、論語孟子を中でやりますを、此中も齋に參られた旦那等の宿坊聞かれて、肝をつぶされ、今文珠とほめられました。是から文選とやらいふ物をよむ程に、灸するゐた賃に六臣註を買うてくれよとねだりまする」と、涎をながして申さるれば、いづれも今宵の馳走にめでて、「ひとりもひとりからと發明なる生れつき、子寶と申すは御子息十助殿事、淨閑老にはあやかり物」と、座なりの挨拶を、寐てゐたる德左衛門聞くよりむつとし、むく〳〵と起直り、「是淨閑老、いかに心安い出合なればとて、親の口から我子をほめるはたはけの內也。いうても爰は町の會所、人もなげなる息子自慢、此德左衛門が忰の德三郎程な

一　踊を樂む子自慢の親父

繁昌の難波津や、入江も次第に埋れて、水串も見えずなりにき。水鳥は陸にまどひ、蜆とる濱も抄菜の畠とは成りぬ。むかし棹さして舟ならでは行かれぬ所も、瓦葺の軒高く、白壁づくりの家建てつゞき、色めきたる町も見えわたりて、ながれを立つるも、いにしへ川にてありし緣によれるにや、今に粹をはめる商賣の地とは成りける。抑〳〵新地始れる地ならしの時、三間口の家をたてて、荒物見世を出して、次第に金をまうけ溜め、萬屋の德左衞門とて、所にても古き人とてもてはやされ、少し殘れる髮さへ黑き筋なく、年もはや家に杖つきの、乃の字をだに知らず、一生文盲にてくらせど、金銀といふ諸藝をさす、調寶な物を持ちしゆゑに、此親父が詞を用ひて、町にても口を利きて通りしが、本卦がへりにはじめて男子をまうけ、世にないものを我ひとり持つたる心地して、寵愛ふかく我儘にそだてて十三歳に成りける。ある時町衆二日寄會に、借屋中の判をとりて仕舞ひ、組頭の立花屋の淨閑隱居して、悴十助に向後町儀をつ

噂に聞く常陸坊海尊がむかし咄は判官贔負
身代よしの內證は暖い懷の中は鳥の寢所
一筋にのぼりつめて我を折つた腰の骨

第三　酒を樂む賢人親父

智惠有顏に世間の人を一呑にする盃
浮にうく遊山舟引いて來る四挺三味線
女房は戀の妨いとまの狀をかいて出る御駕籠

浮世親仁形氣

付り　六十の手習色派の手本揚屋の筵破

三之卷　目錄

第一　踊を樂む子自慢の親父

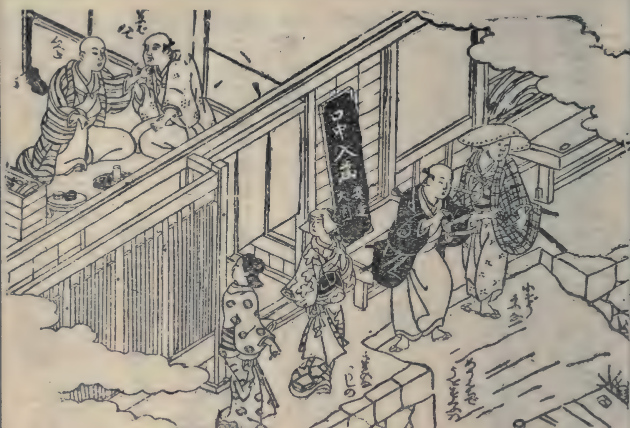
人の子の器用なに胸を燃す鐵輪の曲

中直しの盃はのみ込まぬ雙方の心の底

おとなげないと町衆に諷はるゝ肴の小謡

第二　飛行を樂む仙人親父

でたり、身どもが今金銀を寺道場へなげうつは、未來でわいらを大福長者にしてやらうためなり、かさねて惜む心はなはだしくならば、是我罪業のいまだふかき故とおもうて、隨分有りたけの物を出して、三寶にほどこせとて、毎日錢銀米を持出で蒔きちらさるゝによつて、今晩より息子と談合をして、座數籠へ入れて寺參せられぬやうにいたす筈」との話に、皆々我を折り、是は佛の道をねがひ過ぎられて、妻子の難儀と、妙覺親子は此元西の次第を聞きて、こちのおやぢが殺生の方がましと、よろこばれしは理ぞかし。



へ御奉公申したと悦び、むすこが心あてにしておく金銀を取出しては、寺がたへ持行き、こちの旦那寺でもある事か、行方も知れぬ田舎からわせた、みせ出しの開帳の奉加に打込み、悴が精出しまうけためて置く錢銀を、いつの間にやら取つて出て、佛の事に皆仕果てらるゝ故に、どうも是では身代がつゞかぬと異見をすれば、汝等財寶を惜んで、三寶にほどこす事をとゞむるは、是慳貪愚癡とて、佛仲間にきらはせらるゝ事なり、西天の貧女は、夫婦の中に一衣ならでなき衣裳をぬいで、その身は丸裸に成つて、僧にほどこせし功德によつて、釋尊世にましますに時、舍衛國の大長者と、夫婦共に生れしと、賢愚經に出



爲に僞りかざるは、佛も無間の業といましめ給ふ、あさましいかな歎かしいかな、利を貪りて地獄の種を拵ゆる、汝貪欲の心ふかく、商ばかりに精を出して、ありがたい經説を知らぬ故とはいひながら、一字を學ばずとも、其一心まことなる時は是佛體なり、調達が六萬藏の經を誦せしも、奈落をまぬかれず、慈童が一念の悲願を發して、兜率に生れたりとあれば、學德あらずしても、心さへまことなれば、佛になる事は疑なし、たゞねがふべきは後世の一大事、觀念をこらして商をする共、みぢん嘘をつかず、一錢にても利を取る事なかれと、貧僧を見ては、昨日折角洗濯してきせた布子をぬいでとらせ、今日も佛

ひ過ぎられて、身代のさはりとなり、今日の家業がつとまらぬからは、親元西を勘當致して追ひはらふと、悴藤兵衛腹を立て、親子いさかひ息子が道理なり、いづれも〳〵御聞きなされて下さりませ、こちのおやぢが五百戒とやらたもたるゝ律僧衆の敎を聞きこまれ、此春から持齋をするとて、曉の明星と共に起きて、正食を燒かせ晝前に齋をさせて、しかも女の拵へたるは喰ふ事がならぬとて、わしにも下女にもかまはせずに、いらぬ雇男をして煮燒をさせて、毎日齋詰に五文取の餠二十づつしてやられ、商買の事はわきへして、朝から晩迄佛の事にかゝつてゐられ、たま〳〵見世に出て所作くりてゐらるゝ所へ、見世の道具を買ひに來る人が、此たばこ盆いくらと問へば、むすこ藤兵衛、それは三つ道具揃ひて八匁五分といふを、親父目かほに皺を寄せ、やい藤兵衛、あれは本直が五匁なるに、三匁五分の僞をいふ事もつたいなし、五戒の内にもわけて妄語戒を佛も禁め給へば、假にも虛言を申すな、八匁五分と悴申すは僞り、五匁でござります、南無あみだ佛といはるゝ故に、藤兵衛腹をたて、商人はそらねをいうて利をとらずして、何を以て今日を送る物ぞ、商の邪魔をなさるゝと叱れば、扨も凡夫かはいや、利慾の

れず、是を異見すれば、四十五年添うてゐる此婆に出て行けとのあいそづかし、今日は内方の常覺樣を賴んで、異見いたしてもらはうか、明日は御寺の御上人樣に、しかりてもらひませうかと思ひしに、世はさま〴〵の思あり」と、しを〳〵として語らるれば、組頭の内儀笑ひ出して、「こちの親父のたはけは、よい年して芝居を好みて、歸りてはそれ〴〵の役者の物まね、思ふやうにうつらぬとて、此比は吉川三郎兵衞といふ物まね師の所へ稽古に行き、戻つては藏の二階にあがつて、高聲にて山本かもんが濡のせりふ、柴崎が聲色、あの卷舌の所が今少しゆかぬは、齒のぬけてある加減ぞと、大圓を賴んで物まね稽古の爲ばかりに、俄に入齒をして狂れます。是が七十二になる慰と申さるべきや。異見をたのまうも人樣にいふもはづかしさに、一向だまつて居りますが、こちらの所のおやぢに合しては、常覺樣のは實體なる御遊興、是をとやかく仰せらるゝは奢の沙汰」と申せば、宿老脇の伊丹屋元西老の内儀、すゝみ出でて申されけるは、「こなたの親父樣は後の世の事をわきまへ給はず、お年よられて殺生をお好みなさるるとの御歎き、まゝならぬ浮世と申す事を、今よく合點致しました。此方の親父は佛の道を願

法體あたまを振りたて、網うたるゝ事、世の人の笑ぐさといひ、第一は先立ちたりし子供が、未來の罪をおもくせらるゝか」と、内方泪をこぼして教訓あれば、禪門却つて腹立し、「我世帶を悴に渡し、浮世を樂に、したい事してあそばんために法體せしを、出家同前に思ふは、其方共があやまりなり。川狩したる罪によつて地獄におつる共、そち達がやつかいには成るまじきに、重ねて異見無用」と、それからは内へ遠慮なくおし出しての殺生、是より上の世にたのしみは有るまじ、たとへ來世は無間の底におちてもと、釜が淵に網をうち、若い時より血氣まして、今本卦にかへつて、いよ〳〵罪をつくれ共、此家の大旦那誰あつておしつける者もなくて、内儀と息子未來の事より、先は當前の世間の聞えを氣の毒がり、町内の年寄五人組の内儀達を、おやぢ川狩の留守にまねき、酒などすゝめて、「常覺禪門へおつれあひ樣方の御異見で、向後殺生をとまらるゝやうに」と、泣きしみづいて賴まれければ、宿老の内儀泪ぐみ、「こなたの殺生は世間の人のするわざ、おなぐさみとも申すべきが、私の夫は今年六十七にて、年寄役を持ちながら、町内の若い息子たちをそゝのはかし、毎夜茶屋狂ひの太鼓を持つて、内に一夜もいら

しがり、裾引からげて川を渡り、ちかづきならぬ彼釣手に、「さうした釣やうにては中々かゝるまじ、我にその竿かしたまへ、おそらく釣りて、御目にかけん」と、むりに竿をかりて、時の間に五六十釣りてやられしより、罪もむくいも世間の思はくもわすれはてて面白く、燒いて捨てられし釣竿戀しく、寺參金の内からひそかに釣一通りの道具を求め、さすが内へは取つてかへられず、墓守の方に預け置いて、毎日談義參というて宿を立出で、久三も口たゝけばと供さへつれず、墓守に水向の手桶さげさせ、小僧そゝのかして伴ひ、荒神川原の上手に魚の溜るころを見すまし、是に針をおろすに、何程となくかゝりて、是よりむしやうに面白く、念佛講中の同じ年比の禪門を、二三人も殺生の道に引導して、極樂への同道を地獄へつれだつ下拵へ、惡緣の友とは是なるべし。小僧は才覺出して、鐃鉢かくして持來り、是で魚をすくふ事、一宛釣るよりはかゆきと、墓守に川上から追はして、數取る事を悅びぬ。それより此あそびつのりて、纙から大綱になりて、殺生いとまなく日毎に出づれば、誰いふともなく此沙汰内へ聞えて、內儀の妙覺むすこの三郎四郎興をさまし、「五重相傳をしながら、又本の殺生のあそびに、

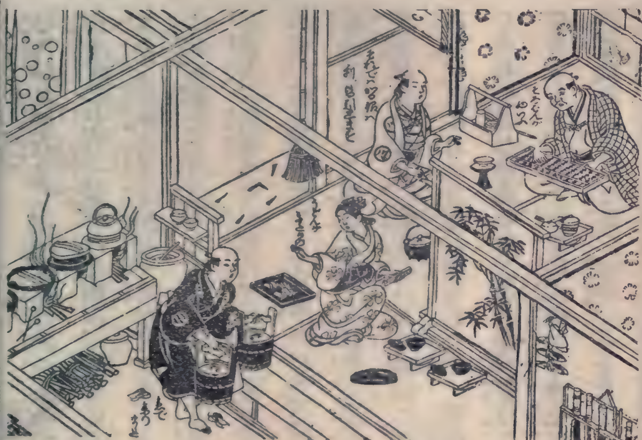
三　殺生を樂む佛嫌ひの親父

室町通に御所染の絹商賣して、大菱屋といへる身代よし、子供を多く先立て、度々の愁に無常を觀じ、一人取殘せし大切の一子、三郎四郎に跡敷をゆづり、我若き時に小鳥狩蠅頭の釣をたのしみ、大分の殺生せし報にて、子を失ひしとおもひ合せて、吹筒打破り釣竿へし折りて、大釜の下へ燒いて捨て、夫婦もろ共にあたまゝろめて、夫は常覺、内儀は妙覺と名をあらため、毎日の寺まゐり、さりとは殊勝なる取置、先立たれし子供衆は善知識といふものなりと、此仕舞をうらやましがらぬ者はなかりしに、ある時姨の娘果てられて、七條への野送の供して、歸りには此身になつても死ぬる事は忌みて、一家衆とわかれ道をかへて戻るとて、東川原へ廻つてかへられけるに、案山子のごとく編笠かづき、川中に立つて蠅頭をおろして、鯉鱗鯑などを釣る事、見る内に五六疋も、その心地よさ、好の道とて法體の節佛に誓ひし事をわすれ、しばらく立つて見られしが、いまだ功者のなき釣手と見えて、抓む程ある魚の僅にかゝるをもどか

一門衆へかけ廻り、「母過ぎゆかれて親父夜のさびしさに、組手共にたはぶれらるゝゆゑ、それを鼻にかけて、私の申付くる仕事をいたさず、商の勝手あしく家業のさはり。何卒氣にさはらぬやうに御異見を賴み入る」と申せば、一門衆横手を打つて我ををられ、皆々打寄り親父をよびよせて、異見せられければ、「それは曲もない御異見、妻なしなれば道理ぢやとこそ、いうて下さるべき筈なるに、息子が肩をもたれ、重ねては女共に手を指すなとは、人間のたのしみは是より外はなし。しからば向後組手共に手ざしはいたすまじ、その替りに、いづれも一門がひには、急に二十四五計な究竟の女房を御肝煎なされて、私方へ入れて下され」との願ひ。「是は尤も、もはや四十に近きむすこなれば、嫁をとられてよい筈、いかにも我々宜しき娘を聞立て、近日に肝煎らん」と一同に申さるれば、「いや〳〵悴が段ではござらぬ、先我等が女房持たねば、組手がたまりませぬ」とあたまには白髪絲をいたゞき、扨もつよい糸屋のおやぢと、一門衆も興をさまして、笑はれもせぬ老のふるまひ。



鑑すれば、此月が產月なれば、腹がつゝばつて仕事がならぬとの斷。「おのれ奉公をしながら主をふみつけ、不義をはたらく段不屆の至り、請人へ預ける」と大きにいかれば、「不義の相手はおやぢ樣、若い身で年寄男が何が面白うていたづらをいたさう、毎夜毎夜むたいな事とは思ひながら、主と病には勝たれず、負けて此通り」といへば、かたはしには七月ぢやとて、福島の雀鮨見るやうになつてゐれば、青梅このむ女もあり、惡阻の最中にて嘔吐するも有り。六人の組手共に霞のかゝらぬはなくて、詮議する程相手かはれど主かはらずと、皆親父が細工なり。律義なる息子あきれはてて、とかくは家の破滅と歎き、



ぬ商の指圖、邪魔にはなれど見世の爲にはひとつもならず。是のみ甚介氣の毒がりて、題目講の相口なる禪門を頼み、世話をやめて隱居せらるゝやうに異見をさすれば、「親を嫌うて追出すか」と、たつた一口の返答にぜひなく、そののちは隱居の沙汰をいひ出す人もなくて、おのが身代ねぢなほしたる顏して、我儘をふるまひ、家の作法もみだれ絲の、組手の女どもも存在になつて、晝も引籠み寐ふしして、仕事は假令のやうにすれば、請取る物の日限ちがひ、屋敷方からは柄絲下緒をせがみに來る、寺方よりは修多羅の延引せりたて、是では商不繁昌の基と、甚介以ての外に腹を立て、組手の女共の不奉公を折

繁昌の糸やありしが、中比内證の糸もつれて身代みだれ、分散にもなるべき所を、息子の甚介發明者にて、一家町内を頼み、年符の斷、負せかた聞届けて、つゝがなく家を立てけるに、いよ〳〵甚介商買の絲を一筋にはげみ、十年もたゝぬ内に、以前よりは格別身代仕上げ、同じ町に大屋敷三ヶ所迄もとめ、中々商手廣く、江戸に新店を出し、世の讃種となりて、娘持つたる有德人、聞傳へに乞聟にすれ共、此むすこいかなる心入にや、今年卅五になれ共いまだ妻を迎へず、都に住みながら、島原といふ所は、西陣と同じ島を織出す織物屋と心得、祇園八坂の茶屋共は、宇治からの出見世ぞと合點して、つひにあだ錢一文もつかはず、常住革足袋に雪駄で得意方をかけ廻り、商買の外なる事はたゞ見る辻放下にも目をやらず、晝夜油斷もなう拵ぎけるに、世には目のあかぬ親もありて、是程までに身代を立てなほし、始の百層倍商も仕出して、しかも性よしの息子なるを、まだ覺束ながりて、隱居屋敷を悴が建てて渡せしに、それへは引籠まずして、七十有餘迄法體もせず見世に出て、目がねをかけ鋏を持つて絲の節を取つて、若い時にかはらぬ有樣、近所からそしるもかまはず、四十に近き息子をしかり廻して、當世にあは

事ぞ」と腹をたつれば、おやぢ不審がほにて、「十露盤が物を申す。不算な人を相手にすれば呑込がわるい」と、つぶやきて歸りぬ。さりとは借らぬのみならず、氣ぼねを折りて、此比兩度の振舞くはれ損に成つて濟みけり。

二　色を樂む血氣の親父

京も田舍も親父といへば、滿更別の世界からも渡つた人間のやうに、若き人は忌おそれて、仕懸けたる浮世咄をやめて、それ毛蟲よと自墮落なる居住なほして、俄に智惠有顏にするこそ、しんぞ年寄の身にしてはめいわくなる事ぞかし。人の親の心は鬼にあらね共、子を思ふ故に我とてもすかぬ孔子面して、いやながら不斷行儀かたく、嚊にざれ言いひたいさへ口を閉ぢて、息子にこはがらする看板世上へひろまり、ちとくつろいで色噂の仲間に入れてくれても苦しうない、他人の若い奴等まで除け居るこそ恨なれ。形は替り行けど、百年立つても人の心にちがひはなし。むかし伽羅の油にていため付けたる、頭も白き烏丸通に、組糸屋の甚五兵衛とて、

ますが、合點でござるか」といへば、迷惑ながらいやといはゞ、元からやめにもし居らうかと、「どうぞ御了簡が成りませう事ならば、利足は霜月に元利ともに、一所に御取なされて下さりませ」と賴めど、情といふ事を隨分知らぬ親父なれば、「いかなく〳〵ならぬ事、十露盤持つてござれ、算用して、迚もの事にはやう役に立つて進ぜう」といふ。「是はかたじけなし。すべて役者は不算なる者なれば、いかやう共宜しきやうに賴み奉る」と、十露盤を渡せば、おやぢ引取り置きたてて、借手の役者に呑込ませ、「先利足は小判壹兩に付六匁づつと合點なさるべし、金壹兩六十匁がへにして、元銀三百目、此利壹ヶ月に卅匁づつ、是に一割口錢卅目、只今元銀の内へ引落しつかはせば、高貳百七拾匁といふもの。それに二ヶ月に一度づつをどりをかけて、霜月迄の月數十ヶ月なれば、一ヶ月の利分卅匁づつ、合せて利足高三百目を、あたまで引いて渡す約束なれ共、元銀貳百七十匁なればどうも引かれず、まだ銀卅匁足りませぬほどに、其方から只今卅目の不足銀お渡しなされ」と、十露盤置きたてて見せける。貸手の役者肝をつぶし、「一文も貸らぬさきに卅目たらぬとて、此方から出しましては、今何をお借しなされて下さる

「我等死ぬると皆おのれにとらすれば、冥加の爲に盆正月の禮に、錢百づつ持つて來れ」と、中中何一つ存命のうちにやる氣はなくて、仕著でるる丁稚の物迄せぶりぬ。ある時旅役者の立物、此親仁に金子五兩の無心いはんため、何かなしに呼込み、そばきり振舞うて追從のある程いひての上句に、五兩のねがひを申出しければ、親仁盃持ちながら、呑みもきらず嚙みも切らずの返答。「此金とゝのはずしては、舞臺衣裳の質を出す事なりがたく、さすれば抱へられし旅芝居へ行く事ならず」と、朋輩の役者頼みて、又々親仁へいひ込みければ、晩程參りて談合せうとの返事。のみ込まぬ事に參らうとはいはぬ筈、今宵はすこし馳走に氣をはり、いたみ入らして嫌といいはせぬ仕掛の網にかけて、鯉の吸物小づけ食に、鱠の燒物、筍に串貝の煮物など取合せ、御出なさるゝと、お主あしらひにしてもてなし、あたまから盞替へて強ひつけ、「御肴には先日申せし五兩の事、ひとへに御取立と思召し、是非おかしなされて下され」と、手をついて頼めば、旅役者衆には貸したる事はなけれ共、先度から餘儀ないおたのみ、かしても進ぜうが、こなたのいはせらるゝ霜月切にしては、當五月より七ヶ月の利足を、あたまで引いて渡し

たけの合はぬ絹物をかりて、其家から身拵して、鼻紙迄もらひ行き、歸りにはすぐに又爰に來りて、元の古布子に著替へて戻り、たゞ利銀取る事を、世の色人の傾城狂する程におもしろく思ひこみて、橋東の茶屋役者に、五割の利を取り、しかも三ケ月づつの切に極めて、其切に返辨せぬものには、盆でなうても利足を一踊づつをどらせ、一年十二ケ月に十七ケ月の利を取つて、たゞ金銀の溜る事のみを悅び、頭には雪をいたゞき、都の富士の廿にたらぬ若いものより氣丈に、毎日借付と催促にかけ廻り、念佛講の同行の死なれたる、葬禮の輿あつらへに行くにも、一割の口錢はねて、鬼の目をもくぢり、佛の箔でもはがして成りとも、たゞは通さぬ慾人なり。世間の人の金銀ほしきねがひは、身を安かに相應の遊山遊興に心をなぐさみ、身の樂を思うての慾なるに、此男第一妻子は世帶のつひえと見かぎり、女房持たねば子もなく、誰にとらすべきとて金をためけるぞ。とても死ぬるとき持つては行かぬものを、「養子をしてなき跡の問弔をせらるゝ思案あれかし。死ぬれば他人の物に成るが」と、旦那寺の和尙の敎化に、少し心つきけるにや、甥を養子と極めながら、それも內へは入れず、そのまゝ外に丁稚奉公させて、

分別者とばかり合點し、近い隣殿なれども、一代公事訴訟いたさねば、貞徳を頼み俳諧書いてくだされいと、御無心申す事もなしと、花の都に住みながら、かゝる親仁もあれば、まして田舎人は、たとへ衛士籠を雛の綿の塵よる物かといふ共笑ふまじ。此親仁年の寄るにしたがひ、身は干鮭のぬけ目のない男、後生よりは始末を第一に心がけ、若い時からたどるせず、めげたるきせるの皿をたゝいて百錢のたしとなし、捨つる塵塚迄も錢ざしにこしらへ、年來錢をつなぎ溜め、今都にて大名借する、上から二番目の銀持、世間から三萬貫目の身代とさすにちがひはなし。かゝる分限に成りても、そのまゝ親からゆづり受けたる、取葺屋根の二間口の家を建直さず、今にちいさい小者と、いたづらに氣づかひげのない、六十にちかき下女とをつかひ、常住香の物菜の外には、いかな〳〵三月の鯛壹枚、松だけ十本三分する時も、目に見るばかり。咽がかわけば白湯にこがし、油火も眞中に一つともして、是をねさまに消して、鼠のあるゝをかまはず、絹の下帶さへせずに、不斷古布子で暮し、町振舞大名借の相談の有德人と、二菜講の付會には、此心にても少しは世間を思ひて、銀をかしたる古手屋にて、權づけにゆき

一　金を樂む高利の親父

都の繁昌清水の西門より詠め廻せば、立つゞきたる軒端かゞやき、内藏の氣色朝日にうつりて、夏ながら雪の明ぼのかと思はれ、豐なる御代の例、松に音なく千年鳥は雲にあそび、かぎりもなく打開き、九萬八千軒といへる家かずは、とつとむかしの事にして、今は土手の竹藪も洛中になりぬ。それ〴〵の家職つとめて、其透をたのしみ、遊山遊藝に年をよらせぬ事にして、是家業の御蔭にて、相應に金銀をまうけるゆゑに、妻子も樂にやしなひ、其身も心をなぐさみて、よろづに自由なる京に住めば、何をならはうと諸藝の達人多き中に、たゞ無藝にして金ためる事ばかりを樂みに、其生れつき堅き事、巖に根をあらはせし、松永貞德花咲町に、年久しく住まれし其隣に、小石屋又右衛門といふ錢見世出して、身過大事と心得たる親父あり、春みる櫻きらひにて、身は花色布子のつよきを考へ、明暮のもてあそびに、二十五桁の十露盤を枕にして、四十年以來同町にゐながら、貞德の俳諧せらるゝとは、諸國の目安の談合いたさるゝ

いつの間にやら契を結ぶ糸屋の組手
大きな腹から知れて來る夜毎の盗喰
孝行は仕盡されぬ數の多い繼母の寄合

第三　殺生を樂む佛嫌ひの親父

釣の糸一筋に好いた方へはまる川狩
頰の皮の厚壁藏の内は物まねの稽古場
菩提心は商のさまたげ資本をへらす鐘木の先

浮世親仁形氣

付り　願ひ入れた五升樽打明しの後世友達

二之卷　目錄

第一　金を樂む高利の親父

金銀は萬能者諸藝を押文盲な旦那殿

銀借仲間をはぢかれた算盤の細い男

かさぬ銀に印判押付業な手形の文言

第二　色を樂む血氣親父

してゐぬ。商買が是計か、總體われが常の行儀からがわるい、來る程の者に追從輕薄いうて面をかざるは、人たる者のせぬ事だ。言を巧し色を令するものは仁鮮しと、孔子も仰置かれた。向後人が來たと媚諂ふ事は無用にせい。脇から見てゐて見ぐるしい」と、眞黒に成つて女夫をしかれば、亭主手を打つて、「こりやならぬ、茶屋にあの如くのかたいわろを置くは、酒屋に人かみ犬を飼うて置くと同じ事、買手が來ねば我等が口がひる。こりや嗅、浦島の親父どのが餘所にはない、親父の蔭で身代がつぶれさうな」と苦笑して、親の置所にこまり果てけり。



仕付千萬な、抱付くとは法を知らぬお人ぢや。嫁も又不行儀な、あんな事するものを其儘だまつて居らるゝは、つねとは見おとした心底、武家なれば生けては置かぬ所ぢや」と、客共をねめつければ、浮氣大盡共肝をつぶし、二言もつがず立歸れば、亭主是はと走出て、色々とめても歸られず、「すてても今宵百日のもうけを、おやぢ殿のりきみで取りそこなうた。是が商買ぢやほどに、重ねては何事も見ぬかほして御座れ」といへば、親父氣色をかへて、「やい人でなし。女房をあのごとく他人のなぶり物にせられて堪忍してゐるか。身どもは若い時から武家の食を喰うて來たゆゑ、あの様な不行儀な事は見て堪忍は



からおやぢ様の拂はなされぬ、損せられたと此方には存ぜぬ」と、亭主に斷り引立てて歸りぬ。扨もひろい世界かな、子は三界の首械といふに、親を三階の藏へ追上げ、それから後は此茶屋へも見えざりき。是は親ゆゑにむすこが身代たふすといふものと、女夫我ををりて咄する所へ、山もどりのお客二三人ばたばたとおはいり有つて、「是は花車久しう、お目にかゝらぬ内に、仕合につれて大分女房仕上げられ、白癩どうもたまりませぬは」と後抱にするを、折節亭主がおやぢ膳棚の下に居ねぶりして居たりしが、客のどやめきに目をさまし、此體を見て、やがて客を取つてつきのけ、「人體に似合はぬ、人の女房に不

ね是にござりますか、昨日から内かたは上を下へとかへして、おまへの行くへを尋ねまはります。中々若旦那のきげんが惡しうて御笑止に存じます。五兩でも十兩でも御入用ならば、なぜ私共にひそかに仰せられませぬ。どうしてなり共あげませうに、生田屋からもどつた五十兩の金を、若旦那の用事にお立ちなされた間に、つい引きかけてかいくれお見えなされぬゆゑ、昨日は島原から鐘木町をさがし、今日は四しばゐを僉議いたし、それから祇園八坂を尋ね、歸りがけに此門でお聲を聞付け入りましたが、第一は御年に恥ぢられませい。世間には御子息ゆゑに親御の御世話をなさるゝが習ひなるに、おまへのは裏腹にて、三十にお成りなさるゝ若旦那の御異見を用ひられず、毎日の惡所狂ひ、大勢の手代共の手前へおはづかしうは御座りませぬか。よい年して御子息の銀をぬすんで、金の有る間は五日でも十日でも内かたへはお歸りなされず、たはけを盡してござる。昨日と今日と間もないほどに、さのみ金子は減りますまい、五十兩の金の殘りをお出しなされ」と、ふところへ手を入れ財布を引出し、小判をよんで見て、「はや二日に十一兩のつかひ、さりとは興のさめるおやぢね、かさねて客にせられても、若旦那

ませうが、あの親父様と兄弟分とは迷惑でござる。たゞもさへ町方では子供は年をかくして、舞臺では十四五に見ゆれど、あれももはや三十であらうと、まことの年を申しても合點なされぬ客衆の多いに、七十にちかいおやぢ様を兄分にたのむと書きては、わしが年をむしやうにふけたやうに沙汰せらるゝも氣の毒、爰はおまへおとり持なされまして、私と祖父孫のかたき契約いたしたとの起請ならば、書いて上げませうほどに、是で御機嫌のなほるやうに」と、至極なる事を申出せば、亭主もをかしさは止みて、自然と尤とうなづき、座敷へ罷出て、「なるほど若衆誓紙を書いて旦那へ奉らうとあれ共、ちと好みが御座りまして、拙者への内證あり」と申せば、「皆迄いふな、其かはりには地衣裳五重、金拵の脇指一腰進上いたす。今時かやうな大臣は稀にあらうが、すさまじき儀か」と、酒きげんにまかせむしやうに聲高に申しける時、表の戸を明け手代らしい男が二人づれでずつとはいり、二瀬をまねき、「二階の聲は浦島と替名のおやぢ様ではないか」と問へば、「なるほどさうで御座りまするが、おつれ様なら是からおあがりなされませ」と階子をゆびさす。「いかにも連ぢや」と二人ながら二階へかけあがり、「おやぢ

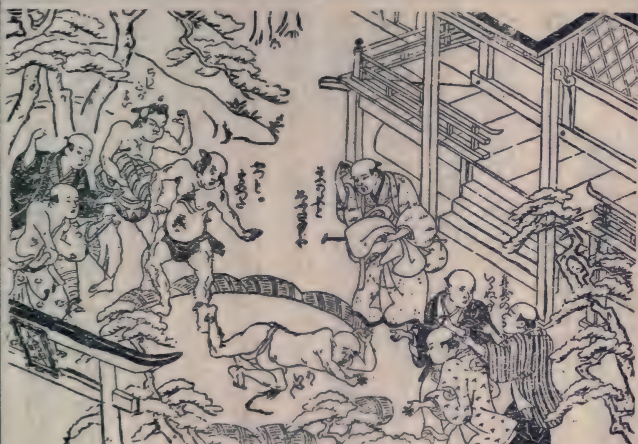
花村一客に、浦島ぶとて六十計にして子供好の親仁大臣、小歌の勘六といふ歌うたひの抱に、ちひさい若衆を門十郎とて當年十三になるに、みぢんそらねのない小人島の野郎みるやうな、白き鼻毛をのばして、大臣の爲には彥というても苦しからぬものに、不便がられ、毎夜爰に呼びてたはぶれ、膝の上にのせて悦ばれしが、しかも此おやぢ悋氣つよく、中々外の座敷へかす事もせず、以ての外の大くぜつ、何者か此親父の耳へ吹込み、笛吹の吉太郎と此若衆念比してゐると聞いて、役者に手をもにぎらせまじ、亭主女夫罷出でてさまぐ取扱ひしに、「しからば勤の外には、いつ迄も我等を兄分にたのみ、大切にいたすべきとの起請かゝせてくれよ」と、鬢鬚白髮たる口から、おとなげないといふは大抵の事、是は見事なうまい親父とは思ひながら、御客なれば笑はれもせず、畏つて門十郎を勝手へ呼び、「大臣樣御望なれば、眞の兄弟のごとく大切に思ふとの起請を書いて進ぜられよ。しからばその替りに何にても、そなたの欲しきと思ふ物を旦那からもらうてやるべし」と、公界はすれど、年のゆかぬ若衆なれば、正眞の童たらすやうに言葉をつくしいひ聞すれば、門十郎笑ひ出し、「誓紙を是非書けならば書きもいたし

に入る宿ばいりして間もなき新茶屋なれど、門前に白人野郎の駕籠絶えず、名題の茶屋よりは繁昌し、軒ならびの同商賈そねむ位に客しげく、女夫心よき世帯を經てきげんよく、いよく大臣達へのあしらひよければ、招かぬに人集りて、二年たゝぬ内に卅貫目生きた銀をまうけ、もはや身上かたまりしと夫婦談合して、川西の裏屋にひとり住してゐる爺親を呼びとり、心のまゝにやしなひ、孝行をつくしける。抑此亭主が親は、若き時分西國方に武士奉公つとめしが、主人江戸くだりの供をせし刻、鈴鹿峠にて落馬し、右の腕を打折りしより、侍奉公ならず、都に少ししるべの有りしゆゑに、西の京御前通の邊に引籠り、腕を養生せし内に、今此の粮つき、女房が心得として、此亭主が七ッの年、道頓堀の奴十内と云ふ金剛所へ金三兩取つて野郎の下地につかはし、其後女房も果てければ、なほく今日をくらしかねて、無念ながら北野の御縁日に出でて太平記をよみ、又は楊枝耳かきのつきつけ賣して、喰はぬ日も多かりしに、子といふものの蔭にて、今日樂にやしなはれ、晝の内は臺所の邪魔とて花車が氣をつけ、懐辨當などこしらへてあてがひ、西山かぎりに毎日の遊行、老の果報とは是なるべし。此茶屋の

らに立添ひ、「いたみますか」と尋ぬれば、痛い所を抱へながらまだ口はへらず、「おれほどな者をかう投げた立石めは、あつぱれな手取めぢや」と、中々いたみは苦にせざれど、さすがは年の上とて、療治しても果敢どらず、次第におもく成りて、今ぞ臨終と御上人すゝめに來られしが、導師ほど有りて、此親父が日比の形氣を知つて、枕もとへ寄り、「是休老、もはや此世のお手が見えた」といはれければ、おやぢ目をひらき、「西の方はソレハ極樂、いざござれ」と、相撲の手にて落入られぬ。

三　野郎を樂む男色親父

世界に身過ほどかなしき物はなし。萬につけておろかなる事もなく、見えわたりたる中にも、殊更色茶屋の亭主、心永う物ごと堪忍づよきがもとでなるべし。悋氣ふかき男の此商賣はなるまじ、大かた女房は客のなぶりものと了簡して、「是は旦那、我等みだい所の付ざしを召あげらるゝは、ちよつと三百目かい」と笑ひにしてすまし、近比氣のかるい亭主めと、多くの客の氣



にもつて參れど、いかな〳〵若い女と物をいへば力が落ちるとて、目に角立てて白眼つけ、そばあたりへ寄せつけず、あたら妾二人共に脇に寢させてさびしがらせ、我ひとり寢間の戸の、明くれ相撲より外にたのしみなしと、毎日修行つのりて、五十計の時よりは少し力も出て益悅び、白髮金時と名乘りて、松尾の神事相撲に出て、あつぱれ手柄をあらはさんと、都の名取の上手共の中にうち交り、肘をはつて前相撲を見物し、三番うちせし上久世の立石といふものと、此親父相手に成つて、物の見事になげられ、肋骨くだかれてやう〳〵駕にかき入れられ、うき事にあうて宿に歸れば、妻子かなしみ跡やまく

られぬからは、怪我のないやうに相手の久七に負けてくるゝやうにと、給分増して内證にてたのみけるが、是却つて爲にならず、年若な屈竟の久七めさへ、幾度取つても我には及ばず、此位にては勸進相撲に出でたり共、さのみ不覺は取るまじと、彌増に盛に成つて、力の爲の肉食、朝夕五器で水を呑み、年寄にはためしなき身持、何卒あの氣力の落ちるやうな藥もあらばと、出入の醫者と相談すれば、醫者分別を出し、「藥よりは若い妾を二三人置いて進ぜられ、晝夜御側はなれぬやうに致さば、めつきりと弱り參るべし」と、さすが醫者程有つて尤なる思案と、お袋世話をやいて、丈夫な妾を二人まで召抱へ、隱居へつかはし、おやぢ様の寢道具のあげおろしに、お心安くつかはせらるゝやうにと、二人の女にいひふくめて遣せば、それに馴れたる女共、「心得ました」とうなづき、心の中に、そんな年寄男は、此方のあしらひ一ツなり、緣有つて季をかさねて居るならば、透間を見て脇に男をこしらへ、むづかしう成りなば、其親父様の子にかつけて、御隱居の跡を我物に書置させまして、ゐながら丸取にと、二人はいはずに同じ思いれにて隱居へ參り、太股の白き所を、歩き品にわざと見せかけ、おやぢに心をうかさす様

さめらるれば、一座同音に感聲を出し讃めければ、是休も人に肴をせられて、だまつてゐるは無藝なものぢやと、一家の出合に見立てらるゝは無念の至りと、「さらば拙者もお肴に、若い時みがいて置いた、取つておきの藝をお目にかけん」と、その儘著たる小袖を脱いで眞裸に成つて、蕎麥切色の越中ふんどし、遠慮もなく手を振つて眞中へおしなほり、「昔は相撲に四十八手と申せ共、今程はさま〲の新法の手をあみたて、凡そ八十八手の餘覺えぬいたる此男、なげに取つても負投かけなげはりま投」と、永々とのいひたて。其後手あひして一人相撲に、皿鉢八寸島臺おさへを踏みくだき、小胯取つたる身ぶり、「なんといづれも、見事か〲」と、ようする顏を見て、むすこはその儘消えたい心、舅方にもしつぽりと汗をかいて、「御年の上に御風をお引きなさるればわるい、著物めしませ。久五郎殿には御果報な、おやぢ様は中々御氣力がつようござる」と座成にいへば、おやぢ悦び、「悴がやうな卑弱い奴は片手でも樂でござる」と。さる程に持あましたる親父どの、異見すれば逆に成つて、なほ〲力業をやめず。不斷の慰が、下男の久七を相手に相撲の稽古、どういうてもきかぬに極まれば、悴と母が内談して、迚もやめ

い事にあはれぬによつて、是程の小疵に大ぶんの御さわぎ、此前矢橋の船頭と船賃の事に付いて、是此額の疵の跡は櫂で打わられしを、引抱へて船頭を物の見事に湖水へ取つてなげた、其時の血などは此やうな物ではござらぬ」と、疵の口へ煙草付けて少もひるまぬ顔つき、座中しらけて興をさましぬ。

二　相撲を樂む强力親父

「まづ是休老是へおなほり」と上座に直せば、蹌跛引きながら何の仕宜もなく上へなほれば、程なく膳出でてさまぐ\の料理、亭主自慢の初物にも氣がつかず、大汁の鶴もわけを知らねばその儘に打食ひ、「是は何鳥でござるか存ぜね共、身ども等が口には斗鯨ほどには存ぜぬ。御馳走の鯯鱠より、九萬疋にあさつきあしらうたがよい物」と、むかしの立をあらはせし客ぶり、一家衆も我を折つてよい程にあしらひ、親類むすびの盃事すんで後、略の酒事興に乘じ醉に和して、亭主御肴にと、若い時喜多七太夫に習ひ置かれし仕舞しほらしく、熊野の曲を舞ひを

の由、慰み鼓にはなか〳〵「承り事」といへば、それからむしやうに至り咄、十種香の噂、連俳茶湯鞠楊弓の沙汰をして、しつぽりとそゝけず、人がらを作つてゐる。一間あなたの上座に、親の是休は舅太夫、諸一門の禪門達を相手にして、「身共も若い時は貳升の食に疵は付けませなんだが、無念にござるは年の加減で、此頃は汁椀に一盃程はたべ殘します」と、喰自慢を高聲にはなさるゝ。一座の人々亭主の手前を笑止がりて、「いざ碁にいたさうか」と碁盤取寄せ、野卑なる咄を碁にうつして、「是休老ちと碁をあそばさぬか、淨入老は石丸門弟程ござつて、碁立が三左でござる。いざ先日の也阿彌の意趣をはらしませうか」と、盤へかゝるを、是休さし出で、「我等も血氣な時分に碁盤の角を持つて、十四五づつは苦もなうさしました。今とてもさのみ力は落ちますまい。何れもの目ざましにさしてお目にかけう」と、片肌ぬいで碁盤の力持、老武者のかなしさは取落して、盤の角にて膝頭を打破り、今日の晴に表替をせられし疊の上へ、瀧のごとく血ながれ出づれば、「やれ聟様の親御さまが力持あそばして、御怪我をなされた。石の綿よ血止よ」とさわぐを、是休少もさわがず、わろびれたる體もなく、「いづれもは血ぐさ



が、あのさくら咲く遠山どりのしだりをのと申す御歌は、自讃歌の巻頭 後鳥羽院の御製かと覺えましたが、先以て御掛物も數々ござらう所に、私親共が壽命をお祝ひなされて、此御歌をかけらるゝ御亭主方の御心づかひ淺からぬ御事、俊成入道釋阿の九十の賀を御いはひなされた御歌とやら承りましたが、手前の親共は無骨物にて、此御挨拶も定めていたすまい、慮外ながら御親父樣へ御心付けられし所の御禮申したと、仰せられてくださりませ」と座馴れたる挨拶。舅方のむす子共も、始めての付合、面々ないもせぬ腹の中の店をかざり、年老の次でに、「昨日東山の稽古能に、檜垣の鼓をうたれしは幸清の弟子



うと存ずる」と、いな事を餘情にしたるが親父を、色色宥めて旦那寺の御上人ぐるみに、往生ずくめにして漸うと入ほくろを灸にて燒き消させ、「是からはとかく世間の銀持の禪門達の、立行跡を見ならひ給へ」と、不食の病人に白粥すゝむるやうに、氣にあたらぬやうに言ひきかし、かねて行儀をなほすもをかしかりき。扨祝言首尾よく調ひて後、舅殿方へ聟殿親子を招待して、歴々の親類と立交り、亭主爰を晴と持ちつたへし道具共を出しての饗應、聟の久五郎は萬事にわたつて心がけある若い者なれば、掛物に氣をつけ、嫁の兄弟始め、若き一家のむすこ共と一所に居ならび、「今日のお掛物の御筆は存じませぬ

のみのしるし遣し、近々婚禮有るはず、むすめの親もとは大名方の呉服所にて、根生のよい衆と申し、歴々の一家ひろきと承れば、祝言振舞等の一門づき合の節、親どもが兩の腕に、命入叶八幡大菩薩などの入黒痣、いかにしても見ぐるしうぞんじ、灸にてもすゑられ消して給はれと、母諸共に樣々申せども、中々聞入なく、去りとては人の思はく迷惑千萬、おの〳〵樣仰合され、入黒痣を消さるゝやうに御異見たのむと、息子がいふ所いづれも尤に存ぜられ、親是休にあうて、「そなたの兩の腕に、傘の印見るやうな入ぼくろは、今の身代がらと年ばへには不相應なれば、是非に消されよ」と、むす子が世間思うてめいわくがる段々をいひて教訓すれば、おやぢ少も同心せず、「身共は此度悴が祝言のはれに、今三ツ四ツも新に入ぼくろを致さうと存ずる所に、思ひの外なる御異見、拙者は一ツとして其意得ませぬ。今度取むすぶ嫁の親は、根生の歴々の由、手前の悴を俄分限と見あなどらせまい爲に、われらは腕中にすさまじき入ぼくろして、おやぢは男をたてる強い奴ぢやと、新規の新類どもに見せて置けば、此方を悾氣にいたさぬ。悴にも膝なほし振舞の用意に、藤巻柄の人斬脇差こしらへさせ、緣者共に手をおかせ

ほどの身上、一子久五郎利發者なれば世帶をわたし、その身は法體して是休と改め、布の十徳は著れども、むかしぬき入れし額、角大師を見るがごとく、今に角の跡すさまじく、眉間尺の法師になれる體相、心も此ごとく、世の人に銀持とあがめられて、都のよい衆と參會すれ共、若い時からの男伊達形氣はやまず、折ふしは端手なる物いひ、むす子の久五郎はよい時に生れ出て、若旦那ともてはやされ、世間ひろく公儀をつとむるにしたがひ、年に似合はぬ親父が力自慢うたてく、內證で異見すれどいかな〳〵聞入れず。久五郎が大鼓稽古して、指の先を打破つて血の出るを見て、親父大きに腹立し、「同じ疵を蒙るならば、いさぎよい口論をしてこそなれ、役にもたゝぬ鼓に打負けて、親のまんぞくに產付けし身に、疵を付くるは無分別の第一、鼓の皮を買ふ手間で、筋鐵の入つた樫木の杖か、鼻搯を求めて置けば、町所の喧嘩の爲にもよいに」と、七十にあまつて子供への教訓。是にかはつて息子は、都の分限者共につき合ふ程に、疊ざはり格別に諸藝を嗜み、それにつれておのづから心も優美に、花車なる事を好む程、親父の不斷の心ばへを氣の毒がり、「題目講中を賴み、親共私へ嫁をむかへてくれらるゝ相談極り、則ちた

一　食を樂む達者親父

善游者は溺れ、善騎者は墮つ、おのおの其好する所を以て、反つて自ら禍をなすといへり。誠に川だちは川で果つるといふ世話のごとく、己が好ける道によつて身を果すは、人間のならひぞかし。出所は江州守山の物作りの纔なる草の屋にそだち、後家親をあなどり我儘にくらし、小力あるにまかせて農業の透には、隣鄕の若いものと度々の喧嘩、所のさわぎと一人ある母に疎まれて、都の姨をたのみに、夜ぬけにして京へのぼり、荒働の奉公をのぞむも、生れつき堅くして、岩神通りの米屋にありつき、年をかさねて奉公にわたくしなく、年來の給銀のばし溜めた八百目を望姓に宿ばいり、色氣の爲にはあらで、挊の便に、我にひとしき深山木のやうなる身にかまはぬ手達者なる女房を、仲人なしにつれて來て、夫婦もろかせぎに身代を踏みかためたるからうすの拍子よく、商ひ事に幸有りて、米は夜の中にあがり、夢みたやうなる分限に成りて、次第に吹きつける仕合の風、相場物に利を得て、六十八の年今長者といはるゝ

大食の咄はむさし碁盤のちから持一指の舞扇
振舞の晴に拵へた下帯かき初のいろは四十八手
死ぬる迄力自慢往生は西の方やへいざござれ

第三　野郎を樂む好色親父

宮川町への忍び駕籠かよする起請文
盜賊をとらへてみれば親父さまの仕過し
商買の邪魔になる茶屋の亭主の武士形氣

浮世親仁形氣

付り　若い時の無分別脱にくい腕の入黒痣

一之巻　目録

第一　食を樂む達者親父

吹付ける風空の買置立身の早い雲の脚

親の身の脂で燈たてたむすこが晴小袖

行儀に仕付けぬ客振畏られぬ膝直の振舞

第二　相撲を樂む強力親父

序

年々花は替らず、歳々人同じ姿にあらず。昨日は厚鬢の駒といはれ、今日は天窓に毛のない親仁と呼ばれて、壯年人におそろしがられ、色ある身に憎まれて、せう事なさの談義まゐりに、をかしからぬ日を渡るは、年寄の心のとりおき鈍なる故なり。形は變るとも、心さへ古めかしう持たずば、誰かおやぢとて蚰蜒のやうに、拂ひのける人はあらじ。世は次第送り、異見きく息子が、異見する親仁になるは、今の間の事ぞかし。爰に一變かはりたる親仁どもの形氣を聞き傳へて、すぐに題號として五册に集めて、世の老人達に示す而已。

鶯のはつ子の日

作者　江嶋其磧
　　　八文字自笑

達……五八八

過去の悪業身に積る雪の夜の酒機嫌……四四四
正直の頭にやどる紙屋の仕合……四五〇
卷之五
川流れの道具に目を掛くる熊手性……四六一
銀まうけの勢の大水より出てくる思案……四六八
繁昌の盛り花の都に二代の長者……四七四

鎌倉 諸藝袖日記　四八一—五九三

卷之一
一 座頭は杖より三味線を引事過ぎた儒學……四八五
二 腐儒の智惠自慢校合の違うた身代……四九二
三 和尚の相撲好は四十八願の手取……四九八
卷之二
一 茶人の俄慇懃丸躶の亭主……五〇七
二 能囃子を好額の若衆盛……五一三
三 無に落つる見識は色の水上……五一九
卷之三
一 比丘の五百戒は芝居の看板……五二七
二 陰陽師の律義は見物の妨……五三四
三 劍術の達者二流のあらそひ……五四一
卷之四
一 淨瑠璃物眞似も年功のいひ立……五五三
二 醫者は療治より詞の匕加減……五五九
三 細工の上手自慢を謂ひ勝ちの座敷……五六七
卷之五
一 山伏の墨色を見事な賴人……五七九
二 繪師の下手は襖に恥をかく山……五八三
三 連歌師の櫛商賣ひいてみる友

不器量に身を嘆く抹香屋の娘……二七三
物好の染小袖心の英は咲分けた兄弟の娘……二八二
器量に打込む聟の内證調べて見る鼓屋の娘……二九一
四之巻
胸の火に伽羅の油解けて來る心中娘……二九八
身の惡を我口から白人となる浮氣娘……三〇九
五之巻
嫁入小袖つまを重ぬる山雀娘……三一九
傍輩の惡性うつりにけりな徒娘……三二七
六之巻
心底は操的段々に替る仕掛娘……三三七
貞女の道を守り刀切先のよい出世娘……三四七

商人軍配團

三五七—四八〇
巻之一
貧福二つ車廻り持の金銀……三五九
揚屋へはかり出す米屋の仕果……三六四
貧苦を切替へるかるたの繪書……三七三
巻之二
悦び積つて十露盤の粒程な涙……三八七
商人の刃物目利は大疵の基……三九五
金銀を藏に詰込の酒屋後家……四〇三
巻之三
渡世の品玉見せぬ所が智惠の種……四一三
利の有る事を推する梅干からの工夫……四二三
取附は細き針が積つて金の山……四二八
巻之四
貧福の花咲分の兄弟が身代……四三九

異見はきかぬ藥心を直さぬ醫者形氣……一二九
內證は知らぬが佛有難い出家形氣……一三四
大力は身の疵身代なげた相撲取形氣……一四一
三之卷
世間の人に鼻毛を讀まるゝ歌人形氣……一五一
正直な親父を一呑にする上戸形氣……一五五
勘略は世帶藥効き過ぎた始末形氣……一六一
四之卷
女郎の噓に附廻る大臣形氣……一六五
末子が智惠は上々箱入の銀持形氣……一四七
欲故に禍は身に引懸る虎落形氣……一八〇
五之卷
妒に燒れて火にくばる大名形氣……一九一
遊興に草臥れて養生に引込む隱者形氣……一九五
福人に成る世悴が身の上知らぬ占形氣……一九九

世間娘容氣　二〇五―三五五

一之卷
男を尻に敷金の威光娘……二〇九
世間にかくれのない寬濶な驕娘……二一八
百の錢よみ兼ねる歌好の娘……二二六
二之卷
世帶持つても錢銀より命を惜まぬ侍の娘……二三九
小袖箪笥引出していはれぬ惡性娘……二四八
哀れなる瑠璃に節のない材木屋の娘……二五七
三之卷
悋氣はするどい心の劒白歯の娘……二六七

八文字舍本五種　目錄

浮世親仁形氣　一—一〇三

一之卷

一　食を樂む達者親父……五

二　相撲を樂む强力親父……一一

三　野郎を樂む男色親父……一五

二之卷

一　金を樂む高利の親父……二五

二　色を樂む血氣の親父……三〇

三　殺生を樂む佛嫌の親父……三五

三之卷

一　踊を樂む子自慢の親父……四五

二　飛行を樂む仙人親父……四九

三　酒を樂む賢人親父……五五

四之卷

一　藥を樂む壽命親父……六五

二　娠を樂む遊山親父……七〇

三　兵法を樂む陽氣親父……七六

五之卷

一　獨樂む偏屈親父……八五

二　經を樂む信心親父……九二

三　老を樂む果報親父……九七

世間子息氣質　一〇五—二〇三

一之卷

木賊賣は心を磨く正直な百姓形氣……一〇九

勘當は請太刀親の家を𢏨走る侍形氣……一一四

取附世帶は表向を張つて居る太鼓形氣……一二〇

二之卷

今以上の五種を本文庫に收錄するに當り、親仁、子息、袖日記の三種は初刻原本により、軍配團は新版繪入五冊本、娘容氣は同六冊本を底本として、假名遣を統一し、會話に鉤識を施す等、他の本文庫本と同一方針によりて嚴密に校訂せり。思ふに娘容氣の原版本は五冊にして、新版本の第六冊目は後人の增補に係る所なるべし。
本書の校訂校正には專ら椿强祐氏と石井晴信氏とを煩はしたり。

大正四年七月　　　　校訂者　塚本哲三

自ら其名を作品に掲げざりしかば、今其何れが彼の作なるかは確言し難し。但、本文庫に收めたる「鎌倉諸藝袖日記」の如きは、慥に南嶺の筆として世に知られたるものの一也。作者としての南嶺は元より其磧の下風に立つべきものにして、格別水際立ちたる傑作もなく、殊に自笑の歿して後は、其子孫其笑瑞笑の徒が纔に家名を存續して自作又は代作を世に公にしたるに過ぎねば、八文字舍本は事實上自笑其磧と其終始を共にせるものと稱するも、敢て過言にあらざらんか。

八文字舍本と稱するもの、其數元より甚だ多し。然して本書に採錄する所は僅に「世間子息氣質」(正德五年)、「世間娘容氣」(正德六年)、「商人軍配團」(享保十八年)、「浮世親仁形氣」(享保二十一年)、「鎌倉諸藝袖日記」(寬保三年)の五種に過ぎず、然れども以てよく八文字舍本の全豹を窺ふに難からざるべし。因に、文化年間江陵山人が序を附して刊行し、今專ら坊間に流布せる「出世早合點商人軍配記」と稱する書は、「商人軍配團」の改題にして、內容は全然彼と同一の物也。

八文字舍の出版に係るものは、其署名の自笑一人なると其磧自笑の連名たるとに論なく、元祿十二年より正德三年迄と享保四年以後其歿年に至る迄との作は、概ね其磧の作品と認むべき也。殊に享保の中頃よりは其磧の名隆々として一代に高く、書肆爭うて其稿を求め、其磧亦昔日の如く八文字舍の抱へつけにもあらねば、八文字舍以外の有數なる書肆よりも、多くその作品を出版せしめたり。本書所錄の「浮世親仁形氣」と「商人軍配團」とは此得意時代の述作に係れり。其磧の作品は西鶴に出でたるものなるべく、而して西鶴に見るが如き簡潔遒勁の文致と奇警尖鋭なる觀察とは、彼の作品に於て多く之を認むるを得ざれども、暢達輕妙なる文藻と、複雜斬新なる構想とに至りては、却て彼に優れる所尠なからざるを見る。要するに彼の述作は、かの好色本と、後の合卷又は讀本類との連鎖をなせるものと稱すべからん。

其磧の歿後、之に代りて八文字舍の作者たりしは多田南嶺なりき。南嶺は鶴翁門下の國學者なりしが、性豪放不羈、所謂學者肌の人にあらずして、好んで筆を戲作に染めたれども、

大佛餅を賣出し、一時富巨萬を重ねたりし者の子孫にして、青年時代身を遊蕩に持崩し、祖先より傳へし多少の資產も全く棒に振りしものの如し。彼が始めて八文字舍に聘せられて「役者口三味線」と稱する評判記を述作せるは元祿十二年三月にして、其三十三歲の時に屬し、初めて浮世草紙の作を出したるは、同十四年版の「傾城色三味線」是也。斯くて八文字舍の爲に筆を執ること十三年、正德四年に至り、故ありて八文字舍と分離し、其子をして江島屋市郎左衞門を襲名せしめて獨立出版をなし、其正月「役者目利講」を出して、八文字舍自笑を攻擊し、且從來の八文字舍本が悉く自己の作に係る事を公開したれども、多年流行の惰力は依然八文字舍に向ひて思はしき利益もなく、菊屋谷村さては山本鶴屋などと協同して八文字舍と對抗したりしが、六年を經て享保四年に至り、遂に再び和睦して元の鞘に納まる事となりたり。本文庫に收めたる「世間子息氣質」と「世間娘容氣」とは、此分離の間に江島屋が板行せるものにて、其前者は所謂「かたぎもの」の最初の作として尊重せらる。斯くて和解後の八文字舍本には自笑其磧と連署する事となりたり。されば

緒言

「八文字舍本」又「八文字舍もの」と稱するは、元祿時代の西鶴本に對し、享保時代を中心として行はれたる浮世草紙を概括していふ稱呼にして、其名は之が出版者中の隨一たりし書肆八文字舍の屋號に出づる也。

八文字舍は京都麩屋町通の一小書肆なりしが、當時の店主安藤八右衞門號は自笑（延享二年歿、八十歲）、文才と商才とを兼ね有し、よく世の好尙の趨く所を洞察して、在來出版せられたる遊廓の細見に、西鶴浮世草紙風の短篇小說を附錄として添へたるものと、開口と稱する小說的構造の小序を附したる役者評判記とを出版して、大いに世の好評を博しぬ。然して其特に八文字舍の名を高からしめしものは、作者として江島其磧、畫家として西川祐信一派を買收し、巧に之を操縱して、其縱橫の筆を振はしめ、而して其述作に署するに自己の名を以てしたるの一事也。

其磧（元文元年歿、七十歲）は通稱を江島屋市郎左衞門といふ。京都京極通り誓願寺門前に


LIBRARY
MAR 24 1969
UNIVERSITY OF TORONTO

八文字舍本五種

全



